序　文

平成20（2008）年度から広島大学と庄原市が進めてきた佐田谷・佐田峠墳墓群の発掘調査事業であるが、ようやく発掘調査に関する研究報告として本書を上梓することができた。本書を広島大学大学院文学研究科考古学研究室調査報告第４冊としたい。

庄原市は平成17年に周辺町村（比婆郡西城町・東城町・口和町・高野町・比和町・甲奴郡総領町）との大合併を実現した。中国地方で最大の行政区域をもつこととなり、「さとやま文化都市」としてあらたな行政施策が打ち出されていくこととなった。これまで、広島大学考古学研究室では帝釈峡遺跡群の調査研究の一環として、旧東城町帝釈東山岩陰遺跡の発掘調査を行ってきており、縄文時代におけるキャンプサイトの性格を探ってきた。聞くところによると、帝釈東山岩陰遺跡の発掘調査終了と旧東城町の庄原市への合併時期が重なり、旧庄原市内において調査対象地が模索されることとなったようである。このため、佐田谷墳墓群の周辺において確認されていた佐田峠墳墓群の実態解明を目的とした調査研究を開始することとなった。

平成20（2008）年度から平成24（2012）年度まで毎年野外実習授業の一環として佐田峠墳墓群の発掘調査を行い、調査成果の発信を継続してきた。共同研究事業の推進は、考古学研究室（文学研究科地表圏システム学講座考古学分野）に在籍する大学院生・学部生にとっては考古学野外実習の格好の研究教材ともなり、貴重な調査経験を重ねることができた。

その後、発掘調査に参加してくれた学生諸氏が巣立ち、九州や中国地方を中心に各県で文化財保護行政職に奉職されたことはうれしい限りであったが、弥生墳丘墓に関わる研究を継続してくれた卒業生達の研究成果をここに集約できたことも望外の喜びである。

本研究報告に示したように、広島大学考古学研究室で研鑽を積んでくれた若い研究者達の地道な調査研究から弥生時代の墳丘墓の発達に関する重要な知見を得ることができた。本事業の成果が、庄原市の古代文化のすばらしさについて庄原市民の皆さんに伝えることにつながればと願うばかりである。

本書の刊行に当たっては庄原市当局ならびに教育委員会、その他関係各位の格別のご支援に感謝の意を表したい。

平成30年３月

広島大学大学院文学研究科
野島　永

序　　文

平成17年３月31日、庄原市と比婆郡５町、甲奴郡１町が合併し、広大な市域をもつ新生庄原市が誕生し、13年目を迎えました。尾道松江線も全線開通し、本市へのアクセスも向上している中ではありますが、本市は、中山間地域特有の人口の減少、少子高齢化の進行などの問題を抱えているのも現状です。

この問題からの脱却や課題解決をはかり、活力のある庄原の実現に向け、人材育成を基盤とする庄原市教育振興基本計画を策定し、ふるさと庄原の学びや体験をとおして「庄原で学んで良かったと思える教育」を市民が一緒になって創ってきており、本市の素晴らしさが実感できるよう教育活動を推進しているところです。

さて、本市は史跡「寄倉岩陰遺跡」をはじめとして、多くの文化財が集中している地域であり、旧比婆郡東城町時代から続く「帝釈峡遺跡群」の調査も50年を越え、文化財の宝庫として全国的にも注目されているところです。

また、本市の重要遺跡である、佐田谷・佐田峠墳墓群の史跡指定を目指し、平成20年度から広島大学と共同研究により、遺跡の調査を本格的に実施してまいりました。こうした遺跡群の調査結果から、弥生時代中期から後期にかけての、この地域特有の「四隅突出型墳丘墓」を中心とした弥生墳墓群の存在が明らかになりました。この「四隅突出型墳丘墓」は後に出雲の西谷墳墓群に影響を与えたとされる重要なものであり、その初源的形態並びに多様な墓の形態が庄原地域でみつかったことは大変意義深いものであると考えております。

この発掘調査で明らかになったことが、市民の皆様に驚きと感動を与えることができ、本書が、本市の歴史を垣間見ることのできる資料となれば幸いであります。

終わりになりましたが、発掘調査から報告書作成までお世話になりました、広島大学や関係者の皆様、また地元の方々に対しまして、厚く御礼を申し上げます。

平成30年３月

庄原市教育委員会
教育長　牧原明人

例　　言

1　本書は広島県庄原市宮内町佐田谷・佐田峠ほかに所在する佐田谷・佐田峠墳墓群発掘調査報告書〈研究編〉である。国立大学法人広島大学（広島大学大学院文学研究科）と庄原市教育委員会の共同研究による調査研究成果の一部である。

2　佐田谷・佐田峠墳墓群は㈶広島県埋蔵文化財センターおよび庄原市教育委員会、広島大学によって現地発掘調査が行われた。調査担当者と調査区・調査期間は以下のとおりである。

庄原市の位置

広島県教育委員会・㈶広島県埋蔵文化財センターによる佐田谷墳墓群の発掘調査

調査担当者　広島県教育委員会　桑原隆博
　　㈶広島県埋蔵文化財センター　妹尾周三・岩本芳幸
調　査　区　佐田谷１・２・３号墓
調 査 期 間　昭和61年４月７日～６月20日

広島県教育委員会・庄原市教育委員会による佐田峠墳墓群の試掘調査

調査担当者　広島県教育委員会　辻　満久・桑原隆博・大上裕士・加藤　謙
　　庄原市教育委員会　谷本　寛・稲垣寿彦・今西隆行
調　査　区　佐田峠墳墓群Ａ～Ｃ地区
調 査 期 間　平成９年７月14日～７月24日

広島大学大学院文学研究科考古学研究室による測量調査

第１次調査　調査担当者　広島大学大学院文学研究科　野島　永
　　調　査　区　佐田峠墳墓群Ａ・Ｃ地区（地形測量）
　　調 査 期 間　平成19年８月５日～８月31日

広島大学大学院文学研究科考古学研究室と庄原市教育委員会の連携による共同調査

第２次調査　調査担当者　広島大学大学院文学研究科　野島　永
　　庄原市教育委員会生涯学習課　今西隆行
　　調　査　区　佐田峠墳墓群Ｃ地区（３号墓）
　　調 査 期 間　平成20年８月４日～９月14日
第３次調査　調査担当者　広島大学大学院文学研究科　野島　永
　　庄原市教育委員会生涯学習課　荒平　悠
　　調　査　区　佐田峠墳墓群Ｃ地区（３・４・５号墓）
　　調 査 期 間　平成21年８月４日～９月18日
第４次調査　調査担当者　広島大学大学院文学研究科　野島　永
　　庄原市教育委員会生涯学習課　荒平　悠
　　調　査　区　佐田峠墳墓群Ｃ地区（４号墓）
　　調 査 期 間　平成22年８月25日～９月18日
第５次調査　調査担当者　広島大学大学院文学研究科　野島　永
　　庄原市教育委員会生涯学習課　辻村哲農
　　調　査　区　佐田峠墳墓群Ａ地区（１・２号墓）
　　調 査 期 間　平成23年８月24日～９月18日
第６次調査　調査担当者　広島大学大学院文学研究科　野島　永

庄原市教育委員会生涯学習課　辻村哲農
調　査　区　佐田谷２・３号墓、佐田峠墳墓群Ａ地区（１・２号墓）
調 査 期 間　平成24年８月24日～９月17日

庄原市教育委員会による発掘調査

第７次調査　調査担当者　庄原市教育委員会生涯学習課　辻村哲農
調　査　区　佐田谷２・３号墓
調 査 期 間　平成26年３月10日～３月19日

第８次調査　調査担当者　庄原市教育委員会生涯学習課　辻村哲農
調　査　区　佐田谷３号墓
調 査 期 間　平成27年３月12日～３月24日

第９次調査　調査担当者　庄原市教育委員会生涯学習課　今西隆行
調　査　区　佐田谷３号墓
調 査 期 間　平成28年８月23日～平成29年３月16日

3　本報告書〈研究編〉の執筆分担を以下に示す。

第Ⅰ章…… 野島　永（広島大学大学院文学研究科）
第Ⅱ章第１・３節…… 村田　晋（広島県教育委員会）
第Ⅱ章第２節…… 真木大空（広島大学大学院文学研究科）
第Ⅲ章第１節……野島　永
第Ⅲ章第２節……村田　晋
第Ⅳ章……野島　永
第Ⅴ章…… 今福拓哉（島根県江津市役所）
第Ⅵ章……野島　永・村田　晋・真木大空・今福拓哉
第Ⅶ章…… 今西隆行（庄原市教育委員会）
註・参考文献等……野島　永・村田　晋・真木大空・今福拓哉
英文要約…… 野島　永・シュタインハウス ウェルナー

4　本報告書〈研究編〉は既刊報告書〈調査編（1)・(2)〉の内容を踏襲した。しかし、佐田谷３号墓出土遺物の所属時期について訂正した部分がある。

5　本報告書〈研究編〉は『四隅突出型墳丘墓の発達に関する考古学的研究』と題する科学研究費補助金（基盤研究（C)、課題番号23520922〈研究代表者：野島　永〉）による調査研究の成果を掲載した。印刷にかかる経費については、庄原市教育委員会が負担した。

6　本報告書〈研究編〉はこれまで広島大学大学院文学研究科考古学研究室紀要等に掲載した研究成果をもととした。野島永と村田晋が編集にあたり、補遺を行った。広島大学大学院文学研究科博士課程前期生真木大空がこれを補佐した。

7　本報告書〈研究編〉の第Ⅱ・Ⅲ章に掲載した中国・四国地方の各遺物（脚付鉢、長頸壺）・遺構（標石、土器供献）に関わる分布図の遺跡位置記号に付した番号はそれぞれの挿表左端の番号に対応する。また、第Ⅱ章第２節の第９～11図の土器番号は、第２表の集成一覧に対応する。および、第３節第16～20図の土器番号は、第３表の集成一覧に対応する。なお、本報告書〈研究編〉の中国地方の地図（第８・15・21・22・28・67）は広島大学大学院文学研究科考古学研究室修了生加藤徹氏（現在、宮崎県教育委員会）が作成したものを改変して使用した。

8　本報告書〈研究編〉の作成にあたっては、以下の機関、諸氏からご教示・ご協力を賜った。記して感謝したい。

青谷上寺地展示館　奥出雲町教育委員会　倉吉博物館　岡山県古代吉備文化財センター
総社市教育委員会　総社市埋蔵文化財学習の館　津山市弥生の里文化財センター

鳥取県埋蔵文化財センター　鳥取県むきばんだ史跡公園　南部町教育委員会　新見市教育委員会
ノートルダム清心女子大学　広島県教育委員会　広島県教育事業団埋蔵文化財調査室
広島県立歴史民俗資料館　広島市文化財団　東広島市出土文化財管理センター　三次市教育委員会
米子市教育委員会　米子市文化財団

池淵俊一　市川伯博　植田千佳穂　大川泰広　大室謙二　尾上元規　小田芳弘　加藤　徹　兼藤英明
河合　忍　君嶋俊行　久保穰二朗　桑原隆博　紺谷亮一　佐伯純也　佐藤伸之　實盛良彦　島田朋之
順田千織　妹尾周三　髙尾浩司　高橋浩樹　豊島雪絵　中山　学　中山寧人　根鈴輝雄　葉杖哲也
濱田延充　平井典子　藤井翔平　藤井雅大　藤原摩耶　松本岩雄　向田裕始　森本直人　山崎明日香
若林邦彦

目　　次

序　　文…… i
序　　文…… ii
例　　言…… iii
目　　次…… vi
挿図目次…… ix
挿表目次…… xi
図版目次…… xii

Ⅰ．はじめに …… 1

Ⅱ．佐田谷・佐田峠墳墓群出土土器の様相 …… 3
第１節　佐田谷・佐田峠墳墓群出土土器と墳墓の変遷…… 3
(1) 各墳丘墓の土器様相…… 3
(2) 主要器種の特徴と変遷…… 4
(3) 土器の系統的特徴…… 7
(4) 供献時期が降る土器群の解釈…… 8
(5) 土器からみた墳墓群の造営イメージ…… 10
第２節　中国地方における注口付脚付鉢の類例と変遷…… 10
(1) 脚付鉢の研究略史…… 10
(2) 注口付脚付鉢の分類とその紹介…… 11
(3) 脚付鉢の製作方法と用途…… 21
(4) 脚付鉢の系譜と交流の諸相…… 25
第３節　中国地方における脚付長頸壺の類例と変遷…… 28
(1) 脚付長頸壺の分布状況…… 28
(2) 出土遺跡・遺構の性格…… 29
(3) 型式学的特徴からみた地域色・地域間関係…… 31
(4) 脚付長頸壺からみた備後北部地域の交流…… 37

Ⅲ．中国地方の弥生墳丘墓における標石と土器供献 …… 38
第１節　標石の発展と墳墓造営…… 38
(1) 中国地方における標石の分類とその源流…… 38
(2) 被覆機能の形骸化と佐田谷・佐田峠墳墓群…… 44
(3) 配石の衰退と葬送儀礼の変容…… 47
第２節　土器供献の諸相とその評価…… 48

(1) 周辺地域における土器供献のあり方…… 48
(2) 佐田谷・佐田峠墳墓群における変化の評価…… 56

Ⅳ. 佐田谷・佐田峠墳墓群からみた埋葬施設の構造変化 …… 59
第１節　佐田谷・佐田峠墳墓群の墳丘構築方法と埋葬施設…… 59
(1) 両墳墓群の時期…… 59
(2) 墳丘構築方法と埋葬施設…… 59
(3) 墳墓群間の格差…… 60
第２節　佐田谷・佐田峠墳墓群の墳丘構造の変化と葬送…… 61
(1) 墳丘墓の遡源と墳丘構築方法…… 61
(2) 葬送儀礼の変容…… 64
(3) 後期初頭における弥生墳丘墓の変革…… 65

Ⅴ. 中国地方の弥生墳丘墓の構築方法とその展開 …… 66
第１節　三次地域における弥生時代中期の墳丘墓の事例 －四拾貫小原墳墓群の概要－
…… 66
(1) 弥生時代墳丘墓に関わる遺構…… 66
(2) その他の遺構…… 71
(3) 出土遺物…… 72
(4) 想定される墳丘構造について…… 73
(5) 四拾貫小原墳丘墓の系譜…… 74
第２節　中国地方における弥生時代中期後半の墳丘墓…… 75
(1) 佐田谷・佐田峠墳墓群における墓壙の様態…… 75
(2) 中期後半の墳丘墓とその特徴…… 78
(3) 中期墳丘墓の性格…… 83
第３節　備後北部地域における弥生時代後期前半の墳丘墓…… 84
(1) 後期前半の墳丘墓とその特徴…… 84
(2) 墳丘墓にみる機能の変容…… 87

Ⅵ. 総　　括 …… 89
第１節　佐田谷・佐田峠墳墓群の様相…… 89
(1) 各墳丘墓の様相…… 89
(2) 土器からみた特殊性…… 89
(3) 墓壙上の葬送儀礼へ…… 91
第２節　墳丘墓の画期と社会変容…… 92
(1) 墳丘墓の画期…… 92

(2) 葬送儀礼創出の意義…… 92

Ⅶ. 庄原市教育委員会による保存・活用方針…… 93
第１節　調査研究の経緯と周辺の歴史環境…… 93
(1) これまでの経緯…… 93
(2) 佐田谷・佐田峠墳墓群周辺の主要遺跡…… 93
第２節　佐田谷・佐田峠墳墓群の保存・活用について…… 94
(1) 周辺遺跡群との連携活用…… 94
(2) 周辺遺跡群の史跡整備方針…… 94

註…… 96
挿図出典…… 100
挿表・付表出典…… 101
写真図版出典…… 101
引用・参考文献…… 102
英文要旨…… 115
付表１　中期後半から後期前半の墓壙一覧（広島県）…… 117
付表２　中期後半から後期前半の墓壙一覧（岡山県）…… 121
付表３　中期後半から後期前半の墓壙一覧（島根県）…… 127
付表４　中期後半から後期前半の墓壙一覧（鳥取県）…… 128
付表５　中期後半から後期前半の墓壙一覧（山口県）…… 132

挿　図　目　次

第１図　佐田谷・佐田峠墳墓群周辺の主要遺跡分布図（1/50,000）…… 1
第２図　佐田谷・佐田峠墳墓群墳丘位置図…… 2
第３図　佐田谷・佐田峠墳墓群出土土器変遷図（1）…… 5
第４図　佐田谷・佐田峠墳墓群出土土器変遷図（2）…… 6
第５図　佐田谷・佐田峠墳墓群の造営イメージ…… 9
第６図　佐田谷３号墓墓壙 SK14上から出土した脚付鉢 …… 11
第７図　脚付鉢の類型模式図と部位名称…… 12
第８図　注口付脚付鉢の分布図…… 13
第９図　注口付脚付鉢（1）（1/6）…… 16
第10図　注口付脚付鉢（2）（1/6）…… 18
第11図　注口付脚付鉢（3）（1/6）…… 20
第12図　小型脚付鉢（1/6）…… 22
第13図　脚付鉢の注口取り付け角度…… 23
第14図　佐田峠２号墓墓壙 ST06上から出土した脚付長頸壺 …… 28
第15図　脚付長頸壺の分布図…… 29
第16図　脚付長頸壺（1）（1/4）…… 32
第17図　脚付長頸壺（2）（1/4）…… 33
第18図　脚付長頸壺（3）（1/4）…… 34
第19図　脚付長頸壺（4）（1/4）…… 35
第20図　岡山県域における脚付長頸壺の変遷（1/4）…… 36
第21図　類似する脚付長頸壺の例…… 37
第22図　標石検出墳墓の分布図…… 39
第23図　標　石（1）（1/60）…… 42
第24図　標　石（2）（1/60）…… 43
第25図　標　石（3）（1/60）…… 44
第26図　標　石（4）（1/60）…… 45
第27図　標　石（5）（1/60）…… 47
第28図　土器供献関連遺跡の分布図…… 49
第29図　土器供献と墳丘墓の変化模式図…… 57
第30図　佐田峠３号墓と佐田谷１号墓の墳丘構築方法の差異
（佐田峠３号墓１/40、佐田谷１号墓1/160）…… 60
第31図　佐田谷・佐田峠墳墓群の墳丘構築方法比較模式図（1）（弥生時代中期段階）… 61
第32図　佐田谷・佐田峠墳墓群の墳丘構築方法比較模式図（2）（弥生時代後期段階）… 62
第33図　江の川流域における墳丘構築の類例（弥生時代前期から中期）…… 63

第34図　墳丘構築方法と葬送儀礼（弥生時代中期から後期へ）…… 64
第35図　中心墓壙に重複する周辺墓壙（佐田谷２号墓〈左〉と三坂神社３号墓〈右〉）… 65
第36図　三次市四拾貫小原遺跡検出遺構 (1/600) …… 66
第37図　弥生時代墳墓関連遺構配置図（潮見編1969）…… 67
第38図　四拾貫小原墳丘墓貼石検出状況（1967年）…… 67
第39図　四拾貫小原墳丘墓想定復元図 (1/80) …… 68
第40図　四拾貫小原墳丘墓第２号墓平面図・断面図…… 69
第41図　四拾貫小原墳丘墓第４号墓平面図・断面図…… 69
第42図　四拾貫小原墳丘墓第５号墓平面図・断面図…… 70
第43図　四拾貫小原墳丘墓第６号墓平面図・断面図…… 70
第44図　四拾貫小原遺跡第１号墓平面図・断面図…… 70
第45図　四拾貫小原墳丘墓出土土器（1/3）…… 72
第46図　四拾貫小原墳丘墓構築過程の復元…… 73
第47図　弥生墳丘墓墳丘構築方法の分類…… 74
第48図　弥生時代中期後半の墳丘墓（1）…… 77
第49図　弥生時代中期後半の墳丘墓（2）…… 79
第50図　中期後半の墳丘墓の埋葬施設数…… 80
第51図　中期後半の墓壙規模分布図…… 80
第52図　中期後半の埋葬施設数と墓壙規模…… 80
第53図　墓壙配置模式図…… 81
第54図　中期後半の墓壙配置…… 82
第55図　中期後半の墓壙配置と埋葬施設数…… 82
第56図　中期後半の墳丘主軸と墓壙配置…… 82
第57図　中期後半の墳丘構築方法…… 83
第58図　中期後半の墳丘構築方法と墓壙配置…… 83
第59図　中期後半の並列型墓壙配置の墳丘構築…… 83
第60図　備後北部地域における後期前半の墳丘墓…… 85
第61図　後期前半の墓壙規模分布図…… 86
第62図　後期前半の墓壙配置…… 86
第63図　後期前半の墳丘主軸と墓壙配置…… 86
第64図　後期前半の墳丘構築方法…… 87
第65図　後期前半の墳丘構築方法と墓壙配置…… 87
第66図　弥生墳丘墓の変遷模式図…… 88
第67図　中国地方の弥生墳墓にみられる遺構・遺物の時期別分布…… 90
第68図　祭祀用土器の変化…… 91
第69図　佐田谷・佐田峠墳墓群と周辺遺跡の史跡整備構想…… 95

挿　表　目　次

第１表　佐田谷・佐田峠墳墓群出土土器の様相…… 4
第２表　注口付脚付鉢一覧…… 14
第３表　脚付長頸壺一覧…… 30
第４表　標石をもつ墳墓一覧…… 40
第５表　土器供献を行う墳墓一覧（広島県）…… 50
第６表　土器供献を行う墳墓一覧（岡山県）…… 52
第７表　土器供献を行う墳墓一覧（島根県）…… 55
第８表　弥生時代中期後半の墳丘墓一覧…… 76
第９表　分析に用いた墳丘墓一覧…… 84
第10表　佐田谷・佐田峠墳墓群周辺の主要前方後円墳…… 94

図　版　目　次

図版第１　佐田谷・佐田峠墳墓群周辺の地図…… 137
図版第２（1）　山根屋遺跡出土脚付鉢…… 138
図版第２（2）　佐久良遺跡出土脚付鉢…… 138
図版第３（1）　西東子遺跡出土脚付鉢…… 139
図版第３（2）　塩町遺跡出土脚付鉢…… 139
図版第４（1）　塩町遺跡出土脚付鉢…… 140
図版第４（2）　矢原遺跡出土脚付鉢…… 140
図版第５（1）　殿山38号墓出土脚付鉢…… 141
図版第５（2）　御領遺跡出土脚付鉢…… 141
図版第６（1）　戸宇大仙山遺跡出土脚付鉢…… 142
図版第６（2）　佐田峠３号墓出土脚付鉢…… 142
図版第７（1）　三吉密ケ垰山遺跡出土脚付鉢…… 143
図版第７（2）　国竹遺跡出土脚付鉢…… 143
図版第８（1）　梅田萱峯遺跡出土脚付鉢…… 144
図版第８（2）　佐田谷１号墓出土脚付鉢…… 144
図版第９（1）　佐田谷３号墓出土脚付鉢…… 145
図版第９（2）　佐田谷３号墓出土脚付鉢…… 145
図版第10（1）　横田遺跡出土脚付鉢…… 146
図版第10（2）　西江遺跡出土脚付鉢…… 146
図版第11（1）　御領遺跡出土脚付鉢文様細部…… 147
図版第11（2）　佐田峠３号墓出土脚付鉢文様細部…… 147
図版第11（3）　佐田峠３号墓出土脚付鉢文様細部…… 147
図版第12（1）　三吉密ケ垰山遺跡出土脚付鉢文様細部…… 148
図版第12（2）　野田畝遺跡出土脚付鉢文様細部…… 148
図版第12（3）　野田畝遺跡出土脚付鉢文様細部…… 148

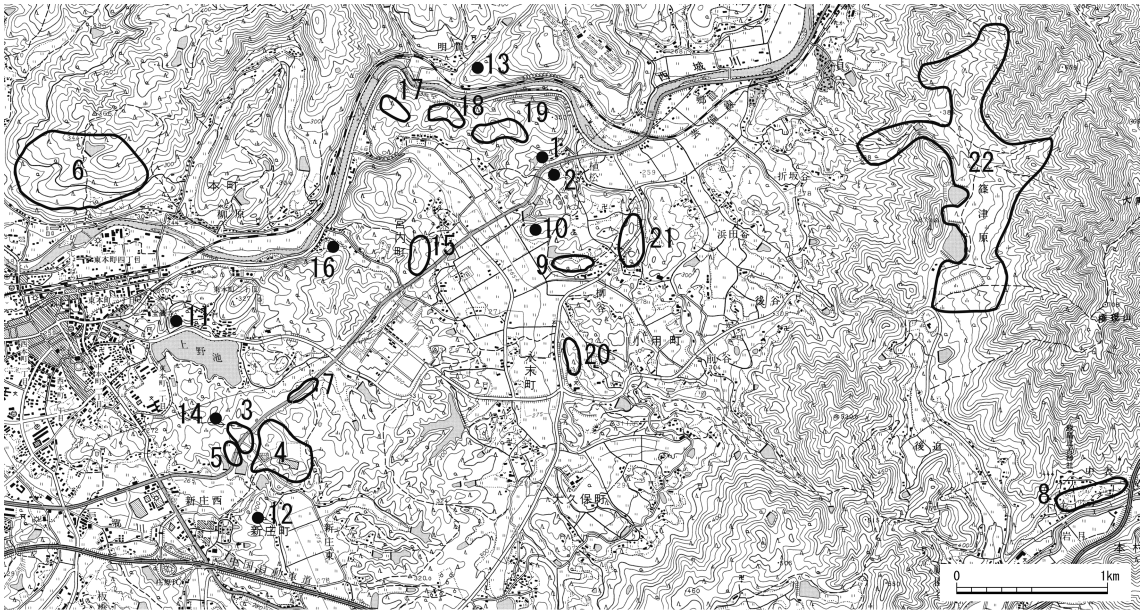
Ⅰ．は　じ　め　に

佐田谷・佐田峠墳墓群は広島県の北東、庄原市街地東郊にある弥生時代中期後葉から後期前葉に営まれた弥生墳墓群である。広島県北部、とくに江の川、馬洗川、西城川が合流する三次盆地は弥生時代中期にすでに墳丘墓が造営され始めた地域として注目されるが、本報告はその三次盆地から北東にあたる西城川左岸、庄原市街地周辺における墳丘墓に関わる調査研究成果である。

佐田谷・佐田峠墳墓群は庄原市街地からの地域高規格道路などの建設によってしばしば破壊の危機にさらされてきたが、開発当事者と文化財関係諸機関の協議によってそのたびごとに保存が図られてきた経緯がある。

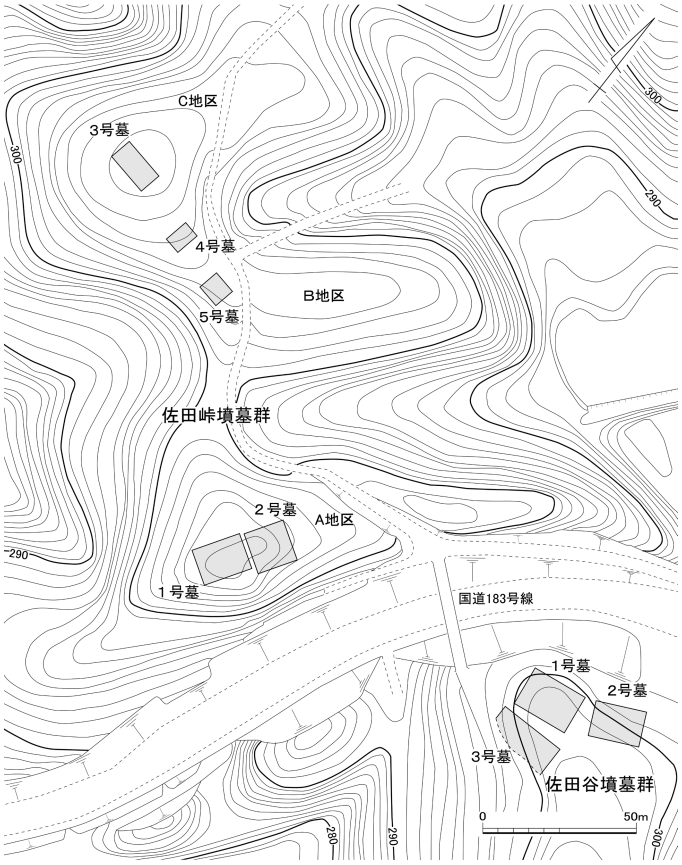
今回、庄原市教育委員会がこの佐田谷・佐田峠墳墓群の保存・活用のために史跡指定を行うこととなった。平成19年度から平成24年度まで広島大学大学院文学研究科考古学研究室が佐田峠墳墓群の発掘調査を実施し、引き続き平成24年度から平成28年度まで庄原市教育委員会が佐田谷墳墓群の発掘調査を実施した。

この間、両墳墓群では弥生時代中期後葉から後期前葉にかけて、多様な墳墓が共存していたことがわかってきた。いずれも方形の墳丘をもちながらも、佐田谷３号墓や佐田峠１・２号墓は方形台状墓、佐田谷１号墓と佐田峠３号墓は四隅突出型墳丘墓、佐田峠４号墓は四隅突出型墳丘墓が改変された方形貼石墓であることが確定した。発掘調査の進展の結果、弥生時代後期後葉に大型化する墳丘墓が作り出される前段階、大型墳丘墓造営の試行的な状況を



第１図　佐田谷・佐田峠墳墓群周辺の主要遺跡分布図（1/50,000）

1．佐田峠墳墓群　2．佐田谷墳墓群　3．小和田遺跡　4．和田原遺跡群　5．西山遺跡　6．御神田山遺跡群
7．永宗遺跡　8．鍬寄遺跡　9．広政古墳群　10．矢崎古墳　11．瓢山古墳　12．地王神社古墳
13．唐櫃古墳　14．牛塚古墳　15．陰地古墳群　16．殿畠山古墳　17．大歳古墳群　18．山根古墳群
19．寄藤山古墳群　20．永末古墳群　21．柳谷古墳群　22．篠津原遺跡群



第２図　佐田谷・佐田峠墳墓群墳丘位置図

示しているとも考えられるようになってきた。

広島大学考古学研究室が行ってきたこの佐田峠墳墓群の発掘調査に参加し、弥生墳丘墓に関心をもってくれる学生達が現れた。弥生時代の墳丘墓やそれに関連する専門的研究を継続し、現在、文化財保護に活躍している今福拓哉（現在、島根県江津市役所）と村田晋（現在、広島県教育委員会）が日頃の研究成果を開陳してくれた。彼らが墳丘墓の成立と墳丘墓出土土器に関する調査研究を行ってくれたおかげで、本報告書〈研究編〉の根幹をなすことができた。

また、注口をもち脚台が付く大型の鉢形土器[1)]を卒業論文の研究テーマとして扱ってくれた真木大空（現在、広島大学文学研究科博士課程前期生）の研究成果も収めることができた。本報告書〈研究編〉ではその一部として未発表資料もふくめ、真木が中心となって撮影した注口付脚付鉢の写真図版を掲載することができた。これまで公表資料が少なく、あまり注目されてこなかったこの注口付脚付鉢が弥生墳丘墓発達の起点にあることを示す良い機会になったといえる。

これまでに刊行した２冊の発掘調査報告書〈調査編〉(1)・(2) に加え、本報告書〈研究編〉が弥生墳丘墓の研究にさらなる展望を与えるものとなったといえる。ひいては広島県北部、庄原地域の古代地域文化を垣間見ることのできる遺跡として、佐田谷・佐田峠墳墓群がひろく市民に公開され、活用していただける契機となれば、大変ありがたいと思う。

Ⅱ．佐田谷・佐田峠墳墓群出土土器の様相

第１節　佐田谷・佐田峠墳墓群出土土器と墳墓の変遷

佐田谷・佐田峠墳墓群ではこれまで計８基の墳丘墓が調査され、それらの形態、墓壙配置、墳丘構築方法など諸属性の多様なあり方が判明した（妹尾編1987、野島ほか2013、野島編2016、今西・辻村編2017ほか）。すべての墳丘墓から土器が出土したことにより、墳墓群の造営が弥生時代中期後葉から後期前葉に行われたことがわかっている。ここでは、墳丘墓にみられる諸要素の変遷を検討する基礎作業として、これまでに報告された出土土器の所属時期や地域性に関わる特徴を確認しておきたい。

(1) 各墳丘墓の土器様相

佐田谷１号墓　土器は墳頂平坦部、墓壙 SK1・2・4上および周溝内から出土している。器種は甕・鉢・壺・高杯・脚付鉢・器台など多岐にわたり、とくに高杯の多さは注目される。完形のもの、破砕されたものの両方を含んでいる。吉備系土器[2] が主体となるが、甕や鉢では肩部に帯状文様を施す在地的なものがみられる。赤色顔料の塗布が一部にみとめられる。中心時期は後期初頭である。

佐田谷２号墓　土器は墓壙 SK11上および周溝内から出土している。器種には甕・壺・器台がある。周溝内出土のものは吉備系、墓壙上出土の甕は在地系の特徴をそれぞれ有する。時期は後期前葉である。

佐田谷３号墓　土器は墓壙 SK14上および周溝内から出土している。器種には甕・鉢・壺・高杯・注口付脚付鉢・器台があり、墓壙上出土の注口付脚付鉢はほぼ完形に復元されている。赤色顔料（「広義のベンガラ」（今西・辻村編2017、32〜42頁））の塗布が一部にみとめられる。周溝から出土した中期末葉の在地系土器、墓壙上から出土した後期前葉[3] の吉備系土器群に大別可能である。

佐田峠１号墓　土器は墳頂平坦部および墓壙 ST08上のほか、周溝内からも出土している。周溝出土の土器は墳頂から転落したと考えられる[4]。器種には甕・鉢・壺・高杯・脚付鉢がある。意図的に破砕され集積されたと考えられ、高杯には打ち欠きの痕跡が確認されている（野島編2016、25頁）。土器は吉備系・在地系の両方がある。赤色顔料の塗布が一部にみとめられる。時期は後期初頭である。

佐田峠２号墓　土器は墓壙 ST06上および南西周溝内から出土しており、後者は墳頂から転落したと考えられる。器種には甕・鉢・脚付長頸壺があり、脚付長頸壺は完形で供献されていた。土器の特徴は脚付長頸壺が吉備系、甕が在地系の特徴を有する。時期は後期前葉である。

佐田峠３号墓　土器は墳頂平坦部中央を中心とする墳丘上から出土している。器種には甕・鉢・壺・高杯・注口付脚付鉢がある。土器はおもに在地系であるが、備後南部から搬入され

第１表　佐田谷・佐田峠墳墓群出土土器の様相

墳墓名	中心時期	器種構成	顔料塗彩	土器系統	土器供献位置	供献状態
佐田谷１号墓	後期初頭	甕・鉢・壺・高杯・脚付鉢・器台	有	在地系・吉備系	墓壙上・周溝	完形・破砕
佐田谷２号墓	後期前葉	甕・壺・器台	不明	在地系・吉備系	墓壙上・周溝	不明
佐田谷３号墓	中期末葉・後期前葉	甕・鉢・壺・高杯・脚付鉢・器台	有	在地系・吉備系	墓壙上・周溝	完形・破砕か
佐田峠１号墓	後期初頭	甕・鉢・壺・高杯・脚付鉢	有	在地系・吉備系	墓壙上	破砕
佐田峠２号墓	後期前葉	甕・鉢・長頸壺	不明	在地系・吉備系	墓壙上	完形
佐田峠３号墓	中期末葉～後期初頭	甕・鉢・壺・高杯・脚付鉢	有	在地系・備後南部系	墳頂	不明
佐田峠４号墓	中期末葉	甕	不明	在地系	周溝	完形
佐田峠５号墓	中期末葉	甕	不明	在地系	周溝か	不明

た高杯１点を含む。赤色顔料の塗布が一部にみとめられる。時期は中期末葉から後期初頭である。

佐田峠４号墓　土器は周溝内から出土している。器種は在地系の甕のみであり、実測もできないほどに細片化し風化していたが完形で供献されたと考えられる。土器のほかにも鉄鏃が周溝内から出土している。時期は中期末葉である。

佐田峠５号墓　土器は周溝を破壊する攪乱坑から出土しており、原位置は判断できない。器種は在地系の甕のみであり、破片で出土している。時期は中期末葉である。

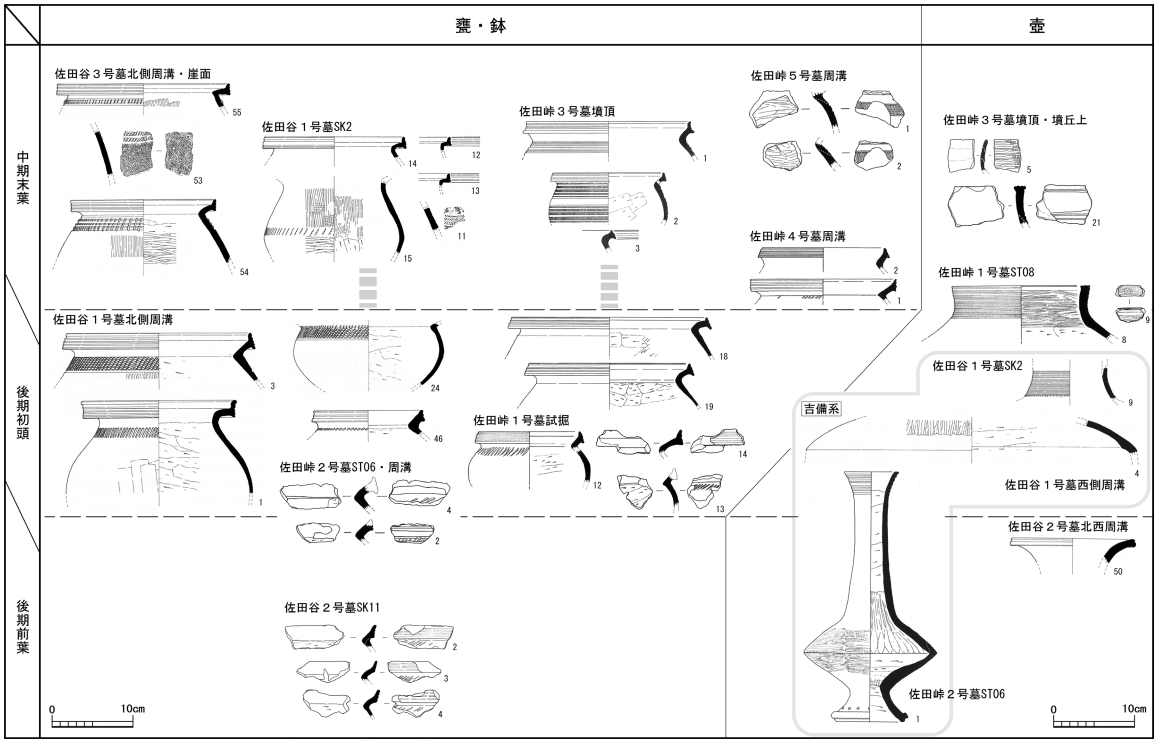
その他全体として、土器の出土数にも次のような傾向がある。中期末葉の墳丘墓では、器種としては甕のみで個体数も１、２点であるが、後期初頭以降の墳丘墓では、甕に加えて壺・高杯・脚付鉢・器台など器種が豊富となり、同時に個体数も増加する。佐田谷１号墓や佐田峠１号墓のように、意図的に破砕されたものが出現するのも後期からである。

(2) 主要器種の特徴と変遷

佐田谷･佐田峠墳墓群で出土した器種には、甕･鉢･壺･高杯･脚付鉢･器台がある（第１表）。吉備系の土器が目立って出土しているため、広島県域に加え、岡山県域を中心とした先学の研究成果（正岡・松本編1992、妹尾1992a、平井2002、河合2015、平井2017など）を参照しながら土器を検討した。形態や器面調整、文様のあり方から、ほぼ同時期とされる個体の間にも多少の時期差が想定できた。器種ごとに先後関係を判断し、共伴関係をもとに並べたものが第３・４図である[5)]。以下、甕・壺・高杯・注口付脚付鉢について述べる。

甕　地域を問わず最も一般的にみられる器種で、両墳墓群でもすべての墳墓から出土しているが、ほとんどが破片であり、土器全体のプロポーションが推測できるものは少ない。それを踏まえて、とくに時期的変化の指標としたものは、①内面ヘラケズリの観察位置、②口縁部形態、③肩部・胴部文様の３点である。

指標①の内面ヘラケズリは中国地方においては中期後半以降、一般的に観察されるようになり、諸先学の研究成果から、中部瀬戸内、とくに備前・備中南部が起点と想定することができる（都出1982、平井1992、岸本1998、西谷1999)。中期後葉においては底部から胴部半ば程まで掻き上げるやり方で盛行するが、後期になるとヘラケズリが内面全体にみられるようになり、頸部に横方向のヘラケズリが顕著になる、というのが中国地方全体で共通する変化である（正岡・松本編1992)。備後北部地域でも同様の状況が指摘されており（加藤・桑



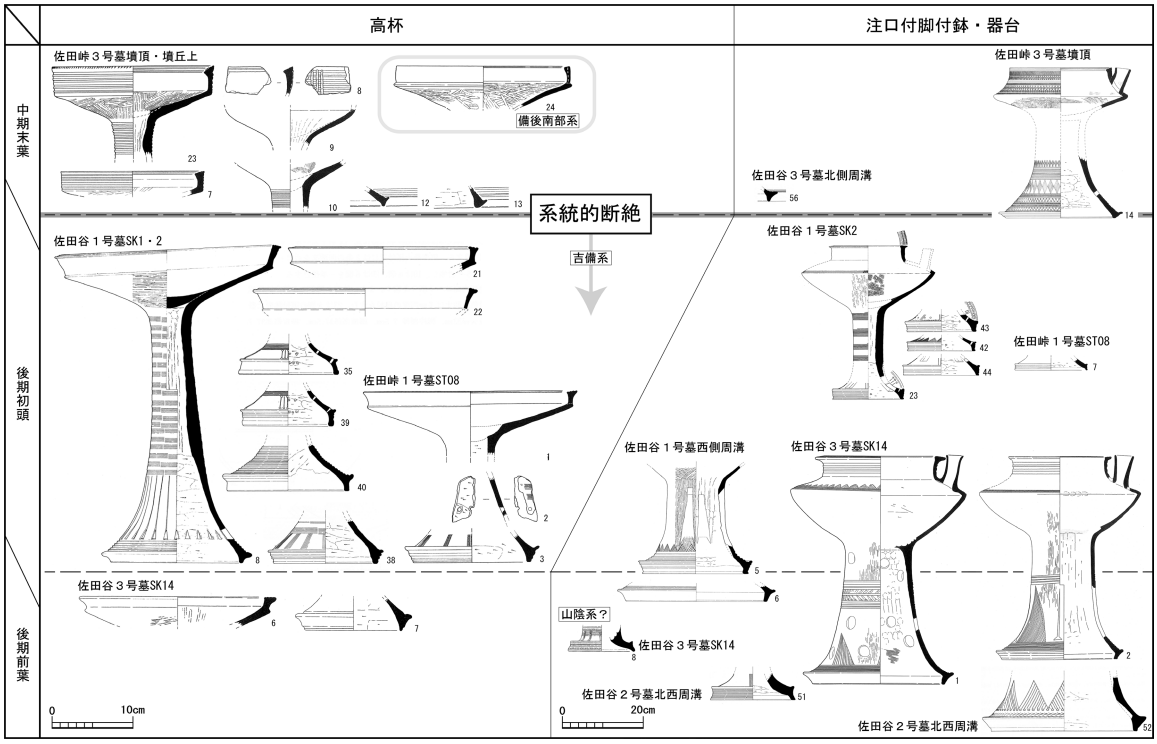
第３図　佐田谷・佐田峠墳墓群出土土器変遷図（1）

原・山田1985、妹尾1992a ほか)、時期的変化の指標として明快かつ最も確からしいといえる。両墳墓群でも、内面ヘラケズリの観察位置が胴部から肩部付近のものを中期後葉から末葉段階、頸部直下までみられるものを後期段階と捉えることが可能である。この変化を念頭に置いて、指標②・③もみていこう。

指標②の口縁部形態はおおむね、口縁端部を上下方向に拡張することで端面の施文帯を確保する〈拡張口縁〉、口縁部を全体的に厚めに作ることで端面の施文帯を確保する〈肥厚口縁〉の二者に大別できる。拡張口縁は中期段階の主体であり、後期初頭にも存在する。肥厚口縁は中期末葉にもごく少数存在するが、数が増えるのは後期初頭以降である。後期前葉になると肥厚口縁を基本として、さらに端部を上方に拡張する形態のものが現れる。

指標③の文様については、中期から後期にかけて簡素化する傾向がある。肩部文様の変化は、中期後葉段階「塩町式」土器（潮見1964）の特徴とされる、凹線文と刻目文・刺突文の組み合わさった「重層刻目文」（伊藤2005）から、後期段階には凹線文がなくなって刻目文・刺突文のみが残る、という変化である（妹尾1992a ほか)。後期初頭の段階では、凹線文が消滅しないまでも、条数が少なくなった過渡期的様相を示す個体がみとめられる。胴部文様は、残存率の高い個体は少ないながら、中期段階に最大径付近に施されていた列点文や凹線文などの帯状文様が、後期になると施されなくなり無文化する、という変化をみとめることができる。

壺　数は少ないが、直口壺・長頸壺・広口壺・大型壺など多様な型式がある。甕のように細かく型式変化を追うことは難しいが、完形の個体やヘラケズリの観察される個体を基準に共



第４図　佐田谷・佐田峠墳墓群出土土器変遷図（2）

伴する甕に追従させるかたちで先後関係を判断した。中期末葉から後期初頭までは口縁部外面に多条の凹線文を施す直口壺が基本となるが、後期初頭以降は非在地系で、とくに吉備南部系の意匠をもつ壺が出土している。

高　杯　そのほとんどが佐田谷１号墓と佐田峠３号墓からの出土である。中期末葉段階では、箱形の杯部で内側に傾く口縁部の端面と外面のほか、脚柱部外面の広い範囲に多条の凹線文を施し、脚端部は外方に拡張する個体が主体となっている。この時期、備後北部地域から山陰地方にかけて広くみられる高杯である（加藤・桑原・山田1985、正岡・松本編1992）。搬入品として備後南部系の個体が１点出土しており、在地系高杯との違いが際立っている。

後期になると在地系高杯はみられなくなり、外面が無文で外傾気味の口縁部をもつ吉備系高杯のみとなる。後期初頭から前葉にかけて、口縁部の短縮、口縁部端面の外方拡張傾向が指摘できる。脚部は端部が外方だけでなく下方へも拡張する、あるいは肥厚して下方へ張り出す形態のものがある。佐田谷１号墓では脚柱部が異様に長く、外面に赤色顔料を塗った祭祀仕様の個体が出土している。

注口付脚付鉢　備後北部地域ではとくに集落出土例が少ない非日常用器種である（妹尾1992a）。佐田峠３号墓で出土した個体は、形態的には庄原市東城町の戸宇大仙山遺跡Ｄ地点出土の脚付鉢が最も近い（松村1979）。文様は凹線文や刻目文を盛んに施す在地系土器と共通する特徴をもつが、金属などの鋭利な施文原体の使用が想定され、これは備後北部地域では例がない（野島編2016）。また、菱形文に刻目を充填する文様は備後北部地域では一般的でないものの、北接する奥出雲町国竹遺跡に類例をみることができる（田中・石田2000）。

国竹遺跡出土例周辺で出土している甕は頸部内面にヘラケズリが観察され、後期的な様相であるが、戸宇大仙山遺跡Ｄ地点出土例周辺で出土している甕は内面のヘラケズリが明瞭ではない。以上のことから、佐田峠３号墓出土の注口付脚付鉢は中期末葉から後期初頭前後に位置付けられるが、戸宇大仙山遺跡Ｄ地点出土例に形態がより近いことを考慮し、中期的な様相が強い個体と捉えておきたい。

佐田谷１・３号墓で出土した注口付脚付鉢は、直接の類例が備中北部地域にみられる吉備系の個体である。後期初頭から前葉にかけて変化する点としては、鉢部内面の調整がミガキ・ハケからヘラケズリ主体に移行するほか、高杯と同調した口縁端部の外方拡張傾向、脚端部の下方拡張傾向、大型化傾向、複合鋸歯文の盛行などが指摘でき、複数の属性が併行して移り変わる様子を窺うことができる。

(3) 土器の系統的特徴

佐田谷・佐田峠墳墓群の営まれた庄原盆地は、備後北部地域、日本海に注ぐ江の川流域の一端にある。そのため、地縁的には山陰地方とのつながりが強く、山陽地方に属しながらも、瀬戸内側とは異なる文化圏にある。山陰地方で広く分布する貼石墓を築く点や、山陰地方の土器に比較的近い意匠をもつ塩町式土器が盛行することはそれをよく示している。旧国備後地域に属するとはいえ、備前・備中・備後南部地域とは土器の意匠が明確に異なっており、同方面からの搬入品も少ない。両墳墓群でも、中期末葉には凹線文や刻目文を多用する在地系土器が主体を占めており、佐田峠３号墓で出土している注口付脚付鉢をみると、明確な類例は吉備地域ではなく、中国地方山間部に分布している。

中期末葉までは搬入品を含め、他地域系土器はほとんどみられないが、後期初頭以降になると吉備系の土器が多く出土するようになる。器種ごとにみると、甕は後期でも在地系の範疇で捉えられる意匠であるが、他の器種、とくに高杯・脚付鉢については、完全に吉備系にすり替わっており、中期の土器との系統的断絶がみとめられる。佐田峠２号墓出土の脚付長頸壺は、高梁川流域以東、とくに岡山平野周辺に分布が集中するもので、搬入品と考えられる（村田2016)。佐田谷１・３号墓、佐田峠１号墓で出土している高杯も吉備系であるが、下方へ張り出す脚端部の形態は、吉備地域でも備中高梁川以西の地域や備後南部地域にみられる（間壁1968、正岡・田仲・二宮1977、平井2017ほか)。佐田谷１・３号墓出土の注口付脚付鉢は、備中北部地域の新見市西江遺跡、横田遺跡に類例がある（正岡・田仲・二宮1977、岡田ほか1978)。これら吉備系土器のうち、佐田谷１号墓と佐田峠１号墓出土の高杯、佐田谷３号墓の注口付脚付鉢（今西・辻村編2017）などには、在地系のそれに比べると黄色味が弱く、褐色味の強い胎土で作られたものがある。これは高梁川流域の土器に比較的近い特徴の胎土であり、同方面からの搬入品である可能性が高い。両墳墓群のように、明確な他地域系土器がまとまって出土している遺跡は、同時期の備後北部地域では他にみられず、特異な様相といえる。

(4) 供献時期が降る土器群の解釈

佐田谷・佐田峠墳墓群において同一の墳丘墓から出土した土器の間には、供献した時期がそれほど隔たると想定されるものは少ない。しかし、佐田谷１・３号墓では、墳丘築造時の供献土器群と時期が離れると考えられる土器が出土している。ここでは、出土土器をもとにこれら２基の墳丘墓の造営について考えてみたい。

佐田谷１号墓　佐田谷１号墓の墳頂平坦部の墓壙 SK2上を中心に出土している土器群については、中期末葉のものも混じっているが、後期初頭のものと一括出土であるため、墳丘の築造・埋葬祭祀の時期としては後期初頭と判断できる。ただし、西側周溝内から出土している土器は周溝底面に若干土が堆積した後に供献されており、墳頂平坦部や北側周溝出土の土器と比べると時期が降ることが想定されている（妹尾編1987）。西側周溝出土の器台は、脚端部の形態や文様が、後期前葉の佐田谷３号墓出土の注口付脚付鉢と類似している。つまり、その出土状況だけでなく、土器自体の特徴からも時期が降ると判断でき、後期前葉に位置付けることができる。

西側周溝出土土器の評価については、調査当時、墳丘築造完了後に追祭祀が行われた痕跡と推測された（妹尾編1987）。現在では、隣接する佐田谷３号墓の墳頂平坦部において、先述のように時期的に近接する土器の出土が確認されているため、佐田谷３号墓に供献された土器が何らかの理由で佐田谷１号墓の西側周溝の位置まで移動した可能性も一応想定しておくべきであろう。

佐田谷３号墓　佐田谷３号墓の出土遺物は、周溝内から出土した中期末葉の土器、墳頂平坦部墓壙 SK14上から出土した後期前葉の土器群に分かれるが、この状況を後述のように、墳丘構築のあり方と合わせて考えると非常に重要であることがわかる。

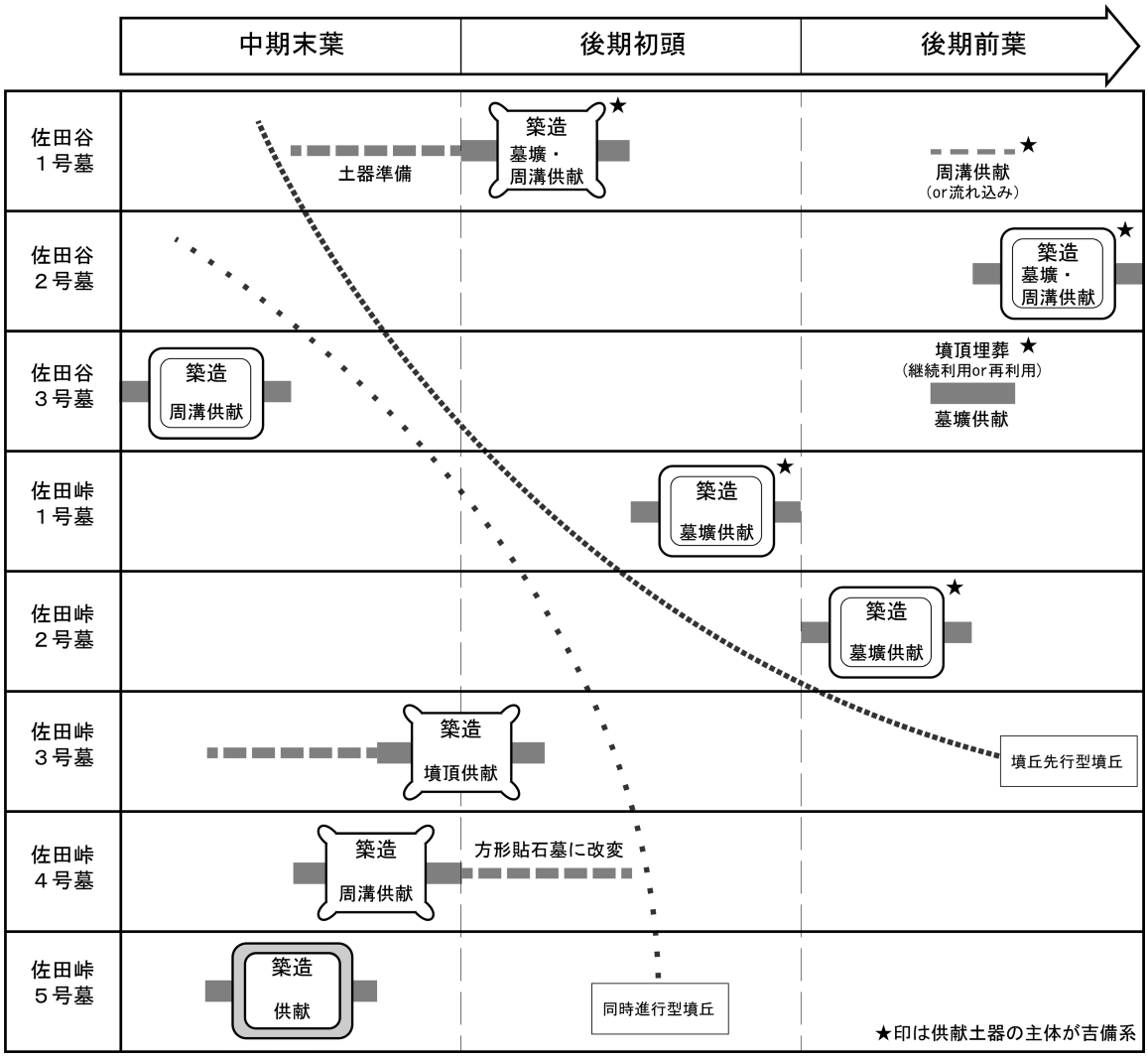
両墳墓群では、埋葬・封土を繰り返して墳丘が形成されていく中期の「同時進行型」墳丘から、墳丘形成後、墳頂平坦部直下に墓壙を設ける後期の「墳丘先行型」墳丘へという墳丘構築方法の変化が指摘[6]された（今福2012・2016a、野島2015、野島編2016）。

佐田谷３号墓で確認されている埋葬施設は、墳丘下位から墓壙が掘り込まれるグループ（下層埋葬群 SK08・09・10）と、墳頂平坦部直下の同一面から墓壙が掘り込まれるグループ（上層埋葬群 SK05・06・07・14・15）に分けられる（今西・辻村編2017）。佐田谷３号墓の下層埋葬群は、同時進行型の構築方法によって築かれていたが、断面をみる限り、卓越した大型墓壙は確認されず、墓壙は並列に配置されていることが推測できる。すなわち、佐田峠３号墓などの中期にみられる墳丘墓と同じ様相である。一方、上層埋葬群のあり方は、中心的な大型墓壙を囲うように周辺墓壙が配置される墓壙配置（野島・野々口1999・2000、池淵2007、今福2012・2016a）であることが判明した（今西・辻村編2017）。

両墳墓群では、同時進行型は先出的（中期的）な、墳丘先行型は後出的（後期的）な墳丘構築方法と捉えることが可能である。しかし、佐田谷３号墓のように同時進行型と墳丘先行型の両方の特徴を備えた墳丘墓は、備後北部地域全体でも例外的な存在である。先述したように、佐田谷３号墓の出土土器は中期末葉と後期前葉の２時期に分かれるが、中期末葉の土

器は下層埋葬群にともなうもの、後期前葉の土器群は上層埋葬群にともなうものという見方ができる。

佐田谷３号墓の造営について、今二つを想定してみたい。一つは、中期末葉に築造開始し、後期前葉まで継続利用される過程で、最終的に後期初頭のような墳丘墓利用の仕方に変化したとする想定であり、中期と後期の要素を兼ね備えた折衷的な、あるいは過渡期的な墳丘墓とする理解である。もう一つは、中期末葉頃に一度築造が完了した墳丘を、一定期間を経て後期的な埋葬を行うことで再利用したとする想定である。同時進行型墳丘と墳丘先行型墳丘は、中心墓壙の有無や埋葬プランの企画性などから、墳丘構築の原理や機能が根本的に異なる可能性が指摘されている（今福2016a）。出土土器群が時期幅をもつというよりは２時期に分かれている状況と、墳丘構築方法の性格の違いを評価すれば、佐田谷３号墓の下層埋葬群と上層埋葬群は一連のものではなく、結果的に墳丘を共有しただけの、ある種別の遺構群という捉え方もできるであろう。



第５図　佐田谷・佐田峠墳墓群の造営イメージ

(5) 土器からみた墳墓群の造営イメージ

土器の変遷をもとに、墳墓群の造営イメージを整理したものが第５図である。中期末葉に佐田谷３号墓（方形台状墓)、佐田峠４号墓（四隅突出型墳丘墓のち方形貼石墓に改変)、佐田峠５号墓（方形周溝墓）が、中期末葉から後期初頭にかけて佐田峠３号墓（四隅突出型墳丘墓）が、後期初頭に佐田谷１号墓（四隅突出型墳丘墓)、佐田峠１号墓（方形台状墓）が、後期前葉に佐田峠２号墓（方形台状墓)、佐田谷２号墓（方形台状墓）が順次築造される。各丘陵で併行的に造墓活動が展開する中、中期の同時進行型墳丘から後期の墳丘先行型墳丘へという墳丘構築方法の変化が墳墓群内で画一的に起こっており、共通の葬送観念をもつ造墓集団によって墓域となる丘陵地が管理されたことが推測できる。

佐田谷１・３号墓について、土器からみた遺構の時期は、佐田谷３号墓下層埋葬群（中期末葉）→佐田谷１号墓（後期初頭）→佐田谷３号墓上層埋葬群（後期前葉）の順と考えられる。全容が明らかでないため可能性を指摘するに留まったが、いずれにしても、佐田谷３号墓の造営は隣接する佐田谷１号墓の築造に強く刺激を受けていると考えられる。佐田谷１号墓には、墳丘先行型の墳丘構築方法、中心墓壙の顕現と「囲繞型」墓壙配置（今福2012・2016a)、墓壙上土器供献など、中期末葉まではみられなかった要素が多く採用されており、後期初頭における墳墓群内の変化を象徴するような存在である。「一般に墓制は伝統墨守の傾向が強く、とくに原始社会ほど外来の墓制を模倣して自集団の伝統を簡単に変えることは少ない」（都出1984、118頁）といわれるが、佐田谷１号墓は非保守的な革新性をもった墓である。そして、同じ時期であれば、これほどの厚葬墓は中国地方を俯瞰しても存在しない。佐田谷３号墓にみられる特異な様相には、佐田谷１号墓に続いて、被葬者集団が墳墓祭祀に革新性を求めた結果が表れていると考えられる。

第２節　中国地方における注口付脚付鉢の類例と変遷

佐田谷・佐田峠墳墓群では、周溝や墳丘上、墓壙直上から多くの土器が出土している。その中には脚付鉢が含まれており、両墳墓群で注目すべき土器のひとつとなっている（第６図)。脚付鉢は弥生時代中期後葉に備後北部地域で出現し、後期前葉まで製作され、当該時期・地域を特徴付ける塩町式土器とともに検討されてきた。また、同様の形態を呈する土器が中四国地方の各地に分布し、広い地域間交流の一端を示していることがわかっている（妹尾1992a、石田2008、真木2017)。ここでは、備後北部地域周辺における脚付鉢の分析を通して、両墳墓群で脚付鉢が使用された意義を考察していきたい。

(1) 脚付鉢の研究略史

脚付鉢は広島県三次市に所在する塩町遺跡の発掘調査で存在が知られるようになった。塩町遺跡では弥生時代中期後半を中心とする竪穴住居跡10基以上と大量の土器を投棄した土坑

などが発見され（松崎1955)、脚付鉢もこの土坑から２点出土している。

その後類例が増加し、妹尾周三によって集成と編年が行われた（妹尾1992a)。妹尾はその成立を江の川上流域とし、加飾性が高く大型のものから、加飾性に乏しいものへと変化し、最後は口縁部が直立して壺形を呈するものが現れることを明らかにした。また、墳丘墓や岩盤前面のほか、集落内でも住居に直接ともなうものがみられず、土坑などから出土すること、意図的に破砕された例があること、土器表面に丁寧な丹塗りがみられることなどから、脚付鉢を祭器と考えた。

続いて、石田爲成によって脚付鉢の分類案が示され、その分布や型式学的な変遷をより細かく把握することが可能となった。また、脚付鉢は広域にわたって器形･用途が共通するが、個々の文様など細部では地域的な差異が認められることも指摘された（石田2008)。

以上を受けて、中四国地方を対象に中期中葉から後期前葉の注口をもつ土器を集成し、全体像の把握と地域間交流の検討を行った（真木2017)。その結果、注口をもつ土器は広く分布しており、備後北部地域、因幡地域、阿波地域における出土例が類似することなどから、当該時期の交流圏の拡大を反映していると考えることができた。その一方で、妹尾が指摘したような祭器としての性格が想定できる類例は、備後北部地域とその周辺に集中してみられることがわかった。

(2) 注口付脚付鉢の分類とその紹介

本節では、佐田谷・佐田峠墳墓群が所在する備後北部地域とその周辺の脚付鉢を対象に検

第６図　佐田谷３号墓墓壙 SK14上から出土した脚付鉢

討を行う（第８～11図）[7]。ある程度対象地域が限られているとはいえ、口縁部形態・文様などが一様ではなく、１個体につき１類型が与えられるような状況である。よって、詳細な分類はかえって分析を煩雑にするため、ここでは胴部の形状で以下の４類型に分ける（第７図）[8]。

Ａ　類　胴部上半が直線的に内傾するか、もしくはやや内湾し、胴部が算盤玉状を呈するもの。

Ｂ　類　胴部上半が内傾しつつ口縁部付近で立ち上がるため、「八」の字状を呈するもの。

Ｃ　類　胴部上半から口縁部が直立する、もしくは外傾するもの。

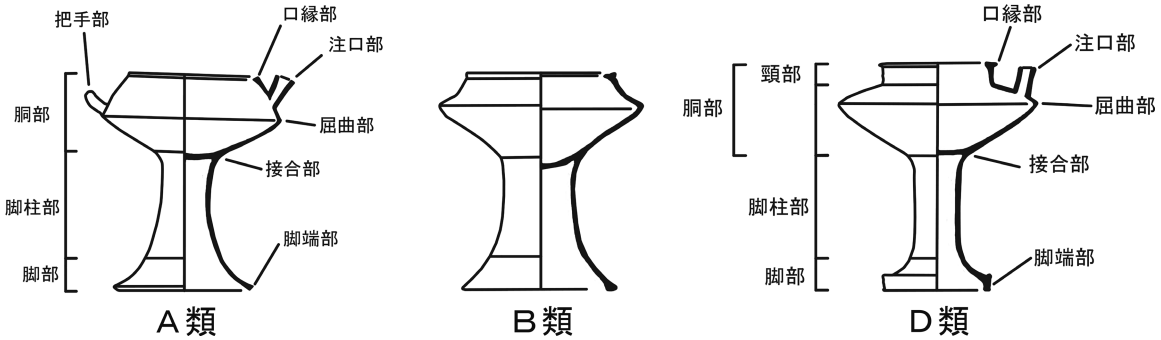
Ｄ　類　口縁部が直立し、胴部が直口壺形を呈するもの。

Ａ　類　７例確認できる。備後北部地域に集中するが、安芸南部地域や備中北部地域など各地に分布し、もっとも広範囲に広がる。

第９図１は新見市山根屋遺跡（竹田・岡本1977）の包含層出土である。高梁川水系の神代川左岸に位置する集落遺跡で、住居跡や溝状遺構から塩町式土器の甕（以下、塩町甕）が数個体出土している。文様は刻目文、同心円文、波状文が施される。外面調整は胴部下半ハケ後ミガキ、内面調整は胴部下半ハケ後ミガキ、胴部上半ナデである。胎土は１㎜以下の白色・黒色造岩鉱物を多く含む。色調は灰白色を呈し、外面には赤色顔料が残る。注口は差し込みによって取り付けられる。

２は広島市佐久良遺跡（阿部編1984）の包含層出土である。太田川水系の栄堂川左岸丘陵上に位置し、箱形石棺を主体とする墳墓群である。２は明確な遺構にともなわないものの、これら墳墓群に関係したものと考えられる。文様は凹線文、貼付突帯文、３条一組の棒状浮文が施される。調整は内外面ともにナデである。胎土は２㎜程度の無色・白色造岩鉱物を含み、色調は淡橙色を呈する。注口は貼り付けによると思われるが欠損している。

３は東広島市西東子遺跡（石井1996）の流路跡出土である。黒瀬川右岸の谷縁に位置し、周囲の拠点集落であったと考えられている。文様は凹線文、刻目文、列点文が施されているが、器面の摩耗が激しくかろうじて確認できる程度である。調整は内外面ともにナデと思われるが不明瞭である。報告書では注口は貼り付けによるとしているが、実見では明らかに差

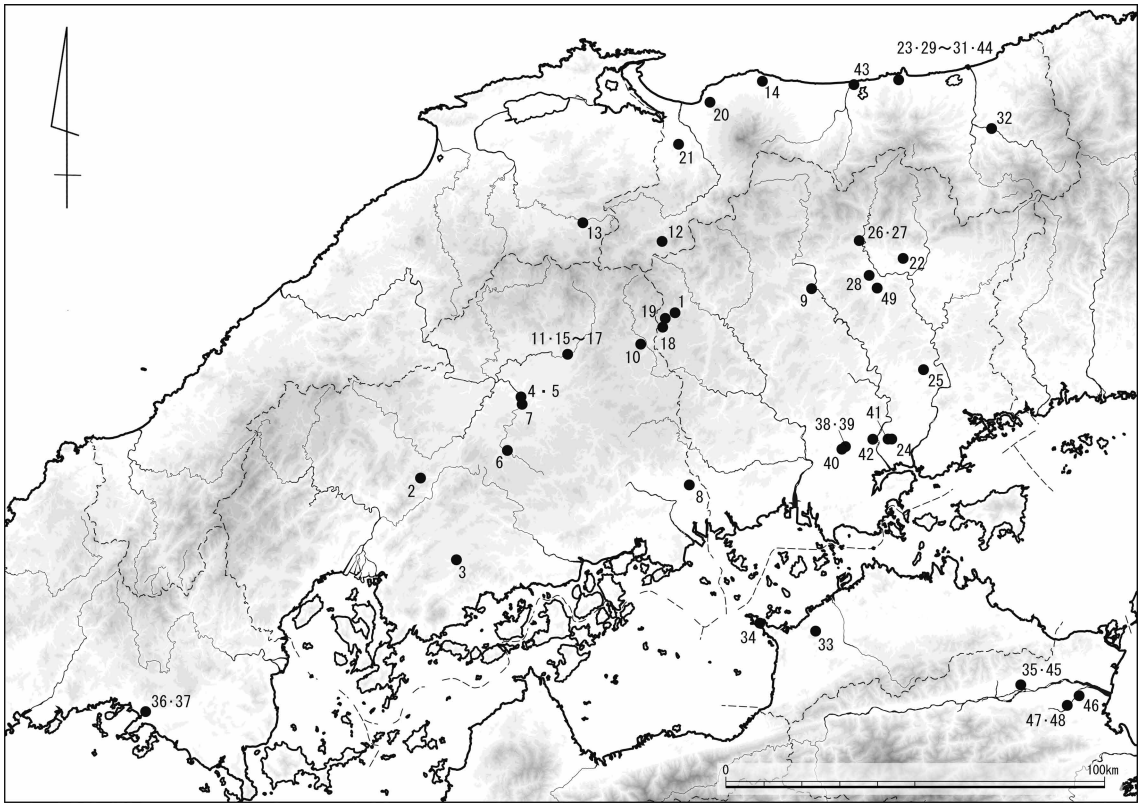


第７図　脚付鉢の類型模式図と部位名称

し込みによるもので、基部と補強粘土が残存している。胎土は２㎜以下の白色造岩鉱物を多く含み、色調は黄灰色を呈する。

４は三次市塩町遺跡（松崎1955、潮見1964）の土坑出土である。江の川水系の馬洗川左岸丘陵上に位置する集落遺跡で、10基以上の住居跡が検出されている。文様は凹線文、重層刻目文、竹管文、扇状文、円形浮文が施され、透孔は三角形である。外面調整は脚部縦位ハケ後横位ナデ、胴部下半ミガキで、内面調整は脚部横位ナデ、脚柱部ケズリ、胴部ミガキである。胎土は１㎜以下の黒色造岩鉱物を大量に含む。色調は全体的に黄灰色を呈し、赤色顔料が一部に残る。脚柱部内面には薄い粘土を貼り、その上からケズリを加えている。胴部と脚柱部の接合は円板充填をした後に下方から粘土で補強している。注口は差し込みによって取り付けられる。

５は４とともに出土した。残存率が低く注口は確認できないが、４などの類例からおそらく注口をもつと考えられる。文様構成は４とほぼ同じで、外面調整は胴部下半横位ミガキ、内面調整は脚柱部ナデ、胴部下半横位ミガキ、胴部上半オサエ・ナデである。胎土は１㎜以下の白色・黒色造岩鉱物を多く含む。色調は暗灰色を呈し、外面全体には赤色顔料が良く残



第８図　注口付脚付鉢の分布図

1．山根屋　2．佐久良　3．西東子　4・5．塩町　6．矢原　7．殿山38号墓　8．御領　9．下市瀬
10．戸宇大仙山　11・15～17．佐田谷・佐田峠　12．三吉密ヶ埒山　13．国竹　14．梅田萱峯
18．横田　19．西江　20．妻木晩田　21．浅井土居敷　22．大田茶屋　23・29～31・44．青谷上寺地
24・41．百間川今谷　25．才地　26・27．久田堀ノ内　28．法事坊　32．上野　33．旧練兵場
34．紫雲出山　35・45．北原～大法寺　36・37．垣外　38・39．津寺　40．黒住・雲山　41．百間川兼基
42．上伊福九坪　43．長瀬和助北　46．南庄　47・48．矢野　49．曾根田

第２表　注口付脚付鉢一覧

本表は中四国地方の注口を持つ土器を集めたものであり、表中の番号は第８図と対応している。
なお、「Ⅱ　第２節」では佐田谷・佐田峠墳墓群周辺の脚付鉢に限り図示および言及を行っている。

番号	遺跡名	所在地	遺跡種別	出土遺構	遺構性格	時　期	類型	法　量（cm）［　］復元値				文　献
								器高	口径	胴部径	底径	
1	山根屋	岡山県新見市	集落	包含層	不明	中期後葉	A	－	[34.4]	[40.8]	－	竹田・岡本1977
2	佐久良	広島県広島市	墓	不明	埋葬	中期後葉	A	－	[30.6]	[36.9]	－	阿部編1984
3	西東子	広島県東広島市	集落	SD1	自然流路	中期後葉	A	－	[28.5]	[33.3]	－	石井1996
4	塩町	広島県三次市	集落	土坑	祭祀か	中期後葉	A	41.5	26.0	34.6	25.3	潮見1964
5	塩町	広島県三次市	集落	土坑	祭祀か	中期後葉	A	－	[21.6]	[30.5]	－	広島大学考古学研究室蔵
6	矢原	広島県世羅郡	不明	土坑	祭祀か	中期後葉	A	43.9	31.4	42.3	30.2	潮見1974
7	殿山38号墓	広島県三次市	墓	周溝	埋葬	中期後葉	A	[47.7]	[34.1]	[43.2]	[29.2]	道上1987
8	御領	広島県福山市	集落	SD1	取水路	中期末葉～後期初頭	B	－	[30.3]	[36.6]	－	曽根編2013
9	下市瀬	岡山県真庭市	集落	採集	不明	中期末葉～後期初頭	B	－	－	－	－	新東・田仲1973
10	戸宇大仙山Ｄ地点	広島県庄原市	墓	不明	埋葬	中期末葉～後期初頭	B	－	[25.8]	[36.9]	－	松村1979
11	佐田峠３号墓	広島県庄原市	墳墓	墳丘上	墳墓覆土	中期末葉～後期初頭	B	－	[24.2]	[34.4]	[25.0]	野島ほか2009
12	三吉密ケ垰山	鳥取県日野郡	不明	丘陵斜面	祭祀か	中期末葉～後期初頭	B	32.1	21.7	31.0	17.5	井田直起氏蔵
13	国竹	島根県仁多郡	集落	土器溜まり	祭祀か	中期末葉～後期初頭	B	－	[22.5]	[36.3]	－	田中・石田2000
14	梅田萱峯	鳥取県東伯郡	集落・墓	墳丘墓	埋葬	中期後葉	C	－	[30.0]	[34.8]	－	湯村・濱本編2009
15	佐田谷１号墓	広島県庄原市	墳墓	SK2上	埋葬	後期初頭	D	[37.7]	[15.8]	[32.7]	16.0	妹尾編1987
16	佐田谷３号墓	広島県庄原市	墳墓	SK14上	埋葬	後期前葉	D	55.2	26.8	43.2	31.0	今西・辻村編2017
17	佐田谷３号墓	広島県庄原市	墳墓	SK14上	埋葬	後期前葉	D	[49.0]	[22.0]	39.5	26.5	今西・辻村編2017
18	横田	岡山県新見市	集落・墓	１号土壙墓	埋葬	後期前葉	D	－	[17.8]	[30.6]	－	岡田ほか1978
19	西江安信丘陵部	岡山県新見市	集落	露岩前面	祭祀	後期前葉	D	－	16.2	29.8	－	正岡・田仲・二宮1977
20	妻木晩田遺跡洞ノ原１号墓	鳥取県西伯郡	集落・墓	DH1号墓	埋葬	後期前葉	D	－	[10.0]	[17.6]	－	岩田文・岩田珠・植野編2000
21	浅井土居敷	鳥取県西伯郡	集落・墓か	住居跡内土坑	祭祀か	中期後葉	D	43.0	18.0	34.0	17.0	間壁1999
22	大田茶屋	岡山県津山市	集落・墓	河道１	自然流路	中期後葉	A	－	[29.6]	[35.6]	－	岡本編1998
23	青谷上寺地	鳥取県鳥取市	集落	包含層	不明	中期後葉	A	－	[29.0]	[35.0]	－	湯村編2002
24	百間川今谷	岡山県岡山市	集落	土坑27	不明	中期中葉	A	27.5	28.4	32.8	15.8	高畑編1982
25	才地	岡山県和気郡	集落・墓	竪穴住居32	住居	中期後葉	A	－	[26.0]	[36.4]	－	下澤編2004
26	久田堀ノ内	岡山県苫田郡	集落	包含層	不明	中期後葉	A	－	[21.2]	[30.6]	－	弘田編2005
27	久田堀ノ内	岡山県苫田郡	集落	住居跡周辺	不明	中期後葉	A	－	－	[30.0]	－	弘田編2005
28	法事坊	岡山市津山市	集落	不明	不明	中期後葉	A	[37.7]	[29.8]	[39.0]	[25.4]	橋本1979
29	青谷上寺地	鳥取県鳥取市	集落	包含層	不明	中期後葉	A	[39.7]	18.5	35.3	25.2	湯村編2002
30	青谷上寺地	鳥取県鳥取市	集落	包含層	不明	中期後葉	A	－	[24.6]	[33.2]	－	湯村編2002
31	青谷上寺地	鳥取県鳥取市	集落	SK25	不明	中期後葉	A	[29.4]	[17.6]	[22.4]	15.6	湯村編2002
32	上野	鳥取県八頭郡	集落	SI03	祭祀	中期末葉～後期初頭	A	－	[15.2]	[24.8]	－	久富・入江・東編2011
33	旧練兵場	香川県善通寺市	集落	SD005	自然流路	中期後葉	A	－	－	[33.2]	－	狭川編2001
34	紫雲出山	香川県三豊市	集落	不明	不明	中期後葉	A	－	[26.4]	[34.4]	－	小林・佐原編1964
35	北原大法寺	徳島県阿波市	集落	SK1006	不明	中期後葉	A	－	[27.3]	[45.6]	－	久保脇1994
36	垣外	山口県周南市	集落	SD1	祭祀か	中期末葉～後期初頭	A	－	[26.8]	[34.0]	－	清水編2016
37	垣外	山口県周南市	集落	SD1	祭祀か	中期末葉～後期初頭	A	－	[26.0]	[35.2]	[19.6]	清水編2016
38	津寺	岡山県岡山市	集落	包含層	不明	後期前葉	A	29.2	[20.0]	[30.0]	15.2	大橋・澤山・中野編1995
39	津寺	岡山県岡山市	集落	土器溜まり1	不明	後期前葉	A	－	[21.2]	[32.0]	－	亀山編1996
40	黒住・雲山	岡山県岡山市	集落	土器溜まり	不明	中期後葉	A	－	[27.6]	[35.6]	－	正岡・柴田・澤山1994
41	百間川兼基	岡山県岡山市	集落	溝５	取水路	中期後葉	A	－	－	[24.8]	12.8	高田編2007
42	上伊福九坪	岡山県岡山市	集落	不明	不明	中期後葉	A	28.8	23.0	31.1	14.7	ノートルダム清心女子大学蔵
43	長瀬和助北	鳥取県東伯郡	不明	採集	不明	後期前葉	A	35.3	24.3	36.9	18.8	倉吉博物館蔵
44	青谷上寺地	鳥取県鳥取市	集落	SD27	河道	中期後葉	A	[26.8]	19.5	32.1	[19.0]	北浦編2001
45	北原大法寺	徳島県阿波市	集落	SK1010	祭祀か	中期末葉～後期初頭	A	46.2	[29.8]	[44.9]	23.5	久保脇編1994
46	南庄	徳島県徳島市	集落	19号土坑	祭祀か	中期末葉～後期初頭	A	[35.6]	[27.2]	[38.0]	[16.8]	妹尾1992a
47	矢野	徳島県徳島市	集落	SX2017	不明	中期後葉	A	34.2	[18.0]	[32.4]	14.8	近藤・谷川編2006
48	矢野	徳島県徳島市	集落	SX2017	不明	中期後葉	A	－	[22.0]	[34.6]	－	近藤・谷川編2006
49	曽根田	岡山市津山市	集落	溝１	環濠か	中期後葉	C	－	27.2	30.4	－	仁木2005

る。胴部と脚柱部の接合は、４と同じく円板充填をした後に下方から粘土で補強している。円板の半分が欠損し、そこからみえる脚柱部端面には刺突痕が残っており、円板の密着性を高めることを意図したものと思われる。一括して出土した４を含む土器群の中で明らかに胎土・色調が異なっているが、形態や文様構成、製作方法の類似性からみると同一の製作環境であった可能性が高い。

６は三次市矢原遺跡（潮見1974）の「竪穴状遺構」（潮見1974）や「埋納遺構」（伊藤2005）などといわれる遺構から単独で出土した。江の川水系の美波羅川左岸丘陵先端部に位置する遺跡である。文様は凹線文、貼付突帯文、一段ごとに向きを違える重層刻目文、刻目文、斜格子文、鋸歯文、棒状浮文、６個一組の円形浮文が施される。透孔は矢羽根形で、脚部と胴部上半には全周にわたって線刻文様が施される。外面調整は脚部から脚柱部にかけてミガキ、胴部下半ミガキ、注口部ナデで、内面調整は脚部ナデ、脚柱部ケズリ、胴部下半ミガキ、胴部上半横位ケズリ後横位ミガキである。胎土は２㎜前後の黒色・赤色・白色造岩鉱物を多量に含む。色調は淡黄褐色を呈し、外面の一部には赤色顔料が残る。胴部上半には貼付突帯がみられ、古い様相を残している。注口は貼り付けによって取り付けられる。

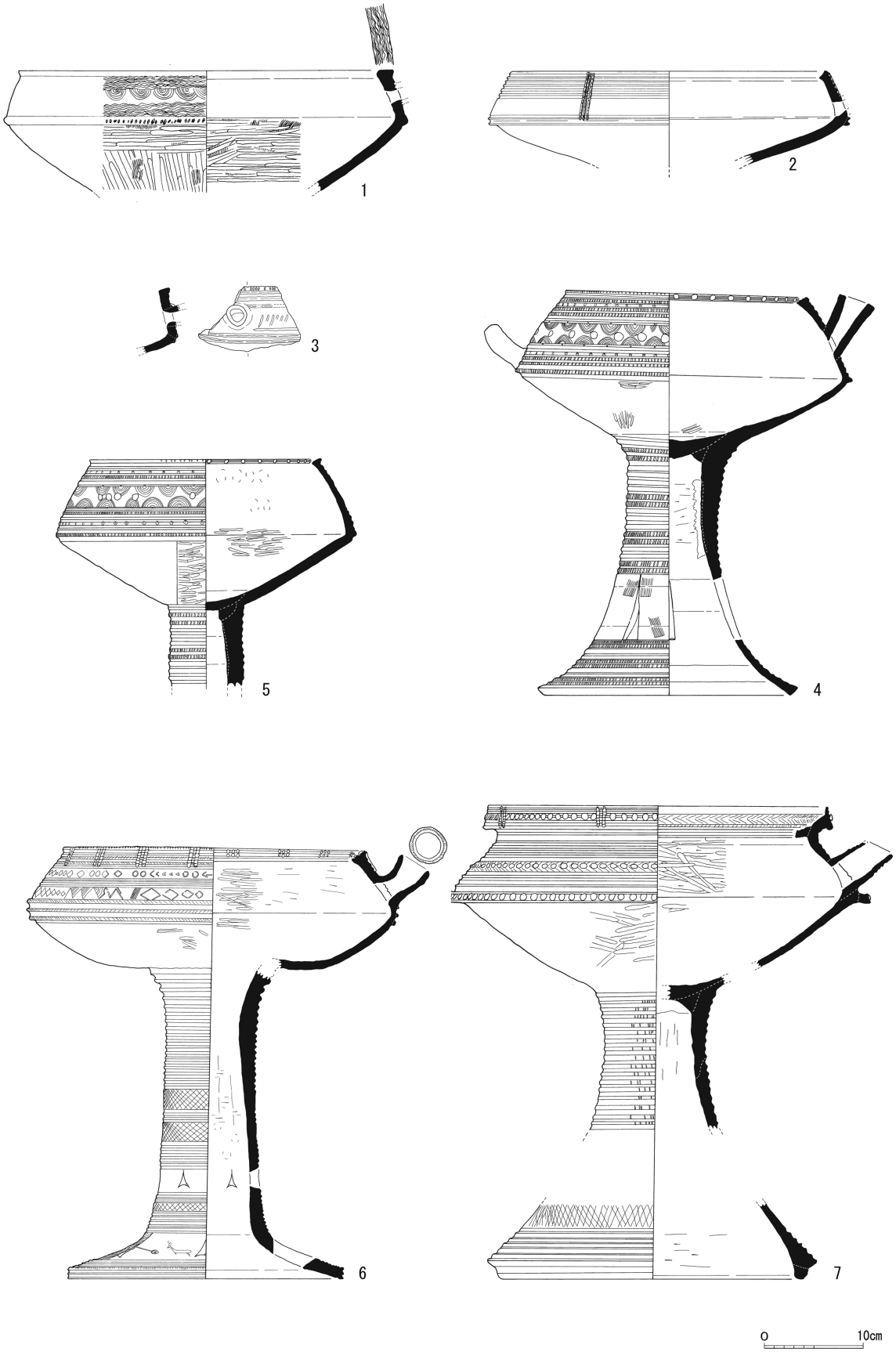
７は三次市殿山38号墓（道上1987）出土である。殿山38号墓は江の川水系の美波羅川右岸丘陵上に位置する四隅突出型墳丘墓である。７は周溝底から30㎝程度上面で塩町式土器とともに出土した。文様は凹線文、重層刻目文、斜格子文、綾杉文、円形浮文、棒状浮文が施され、外面調整は胴部下半ミガキで、内面調整は脚端部ナデ、脚部ケズリ、胴部下半ミガキ、胴部上半軽いケズリ後横位ミガキ、注口部ナデである。胎土は１㎜以下の白色造岩鉱物を少し含む。色調は明るい黄褐色を呈し、外面の一部には赤色顔料が残る。屈曲部と口縁部内面には貼り付けによる文様帯が巡る。胴部と脚柱部の接合は、４・５と同じく円板充填をした後に下方から粘土で補強している。注口は差し込みによって取り付けられる。

Ｂ　類　６例確認できる。備後南部地域から伯耆西部地域までの一帯に分布し、山間部での出土が目立つ。

第10図８は福山市御領遺跡（曽根編2013）の溝状遺構出土である。芦田川とその支流によって形成された神辺平野に位置し、県内最大級の集落遺跡としても知られる。残存率が低く注口は確認できない。文様は凹線文、刻目文、中を斜線で埋めた菱形文が施され、外面調整は胴部下半横位ミガキ、口縁部ナデで、内面調整は胴部下半横位ミガキ、上半ナデである。胴部上半の菱形文は、凹線文を境に上下で中の斜線の向きが異なっている。胎土は１㎜以下の白色・黒色造岩鉱物を含む。色調は淡黄灰褐色を呈し、外面の一部には赤色顔料が残る。

９は真庭市下市瀬遺跡（大本1952、新東・田仲1973）出土である。畑の開墾中に出土したもので、出土状況やその所在は現在不明となっている。文様は凹線文、刻目文、波状文、スタンプ文が施される。スタンプ文は同心円文を斜線で連結するＣ類スタンプ文（名越・甲斐1973）と呼ばれるものである。実見できていないため、調整・胎土・色調は不明である。

10は庄原市戸宇大仙山遺跡（松村1979）Ｄ地点出土である。高梁川水系の戸宇川右岸丘陵上に位置し、土壙墓を主体とする墳墓群が検出されている。10は明確な遺構にともなわない



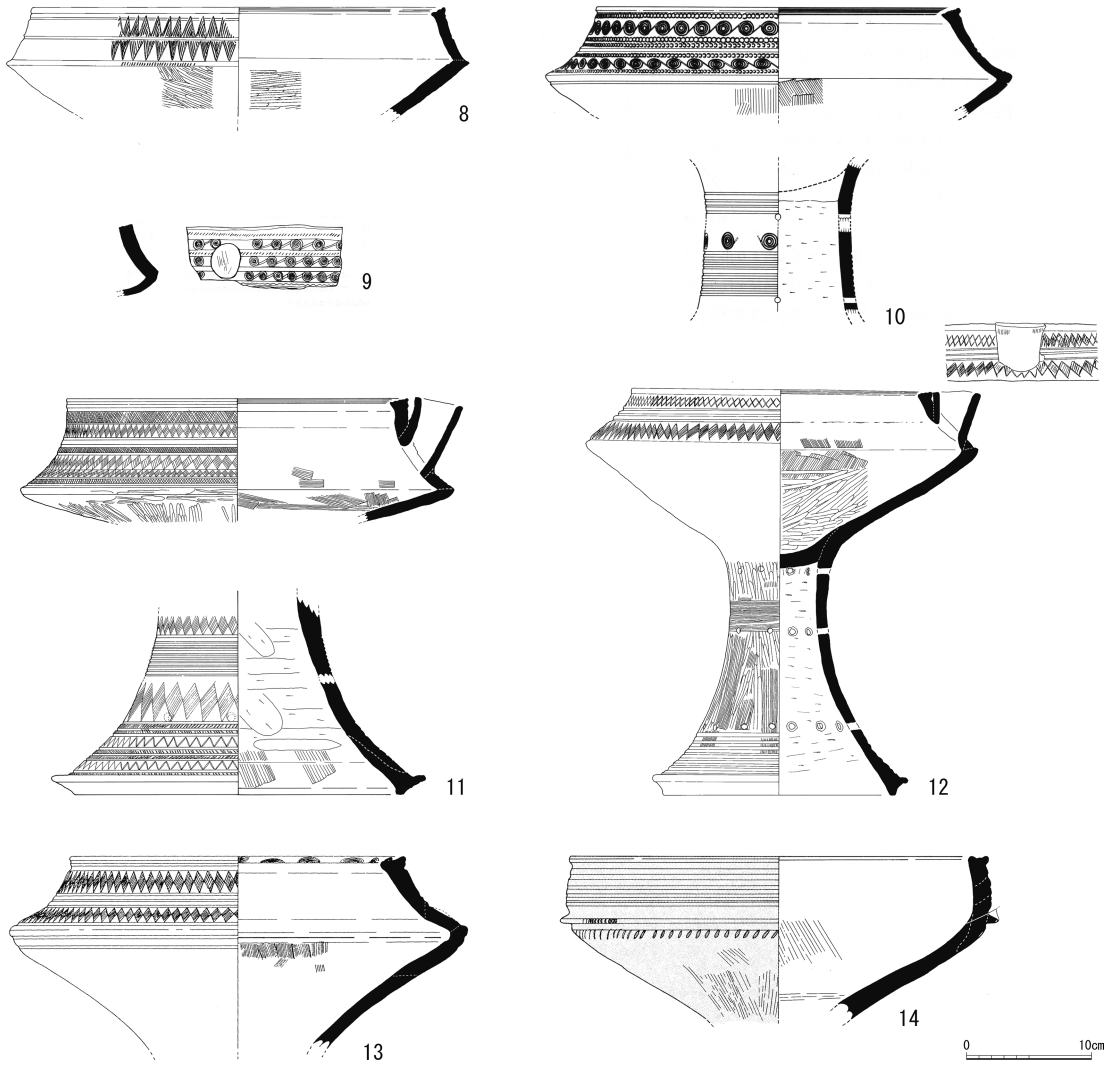
第９図　注口付脚付鉢（1）（1/6）

が、これら墳墓群と関係したものと考えられる。破片のため注口は確認できない。文様は凹線文、スタンプ文、半裁竹管文が施され、透孔は円形である。スタンプ文は同心円文を斜線で連結するＣ類スタンプ文と呼ばれるものである。外面調整は胴部下半縦位ハケで、内面調整は脚柱部ケズリ、胴部下半強いハケ、胴部上半ハケ後ナデである。胎土は１㎜以下の白色・黒色造岩鉱物、１㎜程度の長石を含む。色調は胴部片が淡灰褐色、脚柱部片が暗褐色を呈し、外面の一部には赤色顔料が残る。屈曲部に接合痕がみられ、外側には段を作って半裁竹管文を施している。

11は佐田峠３号墓（四隅突出型墳丘墓）の墓壙上面から約60㎝上面で甕や高杯とともに出土した。文様は凹線文、一段ごとに向きを違える重層刻目文、鋸歯文、内部を斜線で埋めた菱形文、斜格子文が施され、透孔は円形である。外面調整は脚端部ナデ、胴部下半縦位ミガキ後上端のみ横位ミガキで、内面調整は脚端部ナデ、その上方に斜位ハケ後ナデ、その上方に横位・斜位ケズリ、胴部下半横位・斜位ハケ、胴部上半横位ハケ後横位ナデである。胎土は３㎜以下の石英・長石を少し含む。色調は胴部外面が橙色、脚部がにぶい橙色を呈し、外面の一部には赤色顔料が残る。注口は差し込みにより取り付けられており、外側に補強粘土が遺存している。脚部の粘土接合痕に対応する内面には圧着のための指ナデ痕が一条残っている。胴部上半最下段の菱形文を埋める斜線は、現状で一部のみ右上がりの方向に施されている。

12は日野郡三吉密ケ垰山遺跡（佐伯2016、湯村2017a）出土である。日野川水系の九塚川と石見川が合流する付近のやや奥まった丘陵斜面から発見された。文様は凹線文、擬凹線文、菱形文が施され、透孔は円形である。外面調整は脚端部ナデ、脚柱部縦位ハケ後縦位ミガキ、胴部下半荒い縦位ナデ上端のみ横位ナデ、胴部上半横位ナデで、内面調整は脚端部横位ナデ、脚部横位ケズリ後上端のみナデ、胴部下半強い縦位ハケ後ミガキ、胴部上半縦位ハケ後ナデ、口縁部ナデ、注口部ハケ後ナデである。胎土は１㎜以下の黒色造岩鉱物、石英・長石を多く含む。色調は明褐色を呈し、外面と内面の一部に赤色顔料が残る。胴部内面上半中位と屈曲部に明瞭な接合痕が確認できる。注口は差し込みによって取り付けられる。胴部上半下段の菱形文はすべて中を斜線で埋めるのに対し、上段は注口向かって右側の７個分のみ斜線で埋めている。また、下段の斜線は注口向かって右側に施された１つのみ右下がりで、あとはすべて右上がりであるが、上から振り下ろすように施文した部分と下から振り上げるように施文した部分がある。接合は円板充填で、その後脚部外側から円形透孔、脚部下方からのケズリという順序で調整される。

13は仁多郡国竹遺跡（田中・石田2000）の土器溜まり出土である。斐伊川と下横田川が合流する地点の丘陵上に位置する集落遺跡である。13は甕、壺、高杯などの土器群や鉄斧とともに出土した。破片であるが、わずかに注口の痕跡が確認できる。文様は凹線文、菱形文、扇状文が施されている。外面調整は不明瞭で、内面調整は胴部下半縦位ハケ、屈曲部・胴部上半ナデである。胎土は１㎜程度の長石を多く含み、色調は淡橙褐色を呈する。胴部上半外面の菱形文はＢ類の他の類例と比較してやや粗雑化している。



第10図　注口付脚付鉢（2）（1/6）

C　類　１例のみが確認できる。高杯に注口が付いたような形態であるが、一般的な高杯よりも大型である。

14は東伯郡梅田萱峯遺跡（湯村・濱本編2009）出土である。大山山麓から北へ延びる低丘陵上の先端に位置する集落遺跡で、同丘陵上に墓域も確認されている。14は遺跡内で方形貼石墓の墳丘裾部から出土した。補強粘土の存在から注口をもつことは確実である。文様は凹線文、ハケ状工具による列点文、貼付突帯に刻目文が施され、外面調整は胴部下半斜位ハケ、口縁部ナデで、内面調整は接合部付近横位ハケ、胴部下半斜位ハケ、胴部上半ナデである。外面の一部には赤色顔料が残る。胎土は２㎜以下の白色造岩鉱物を少し含み、色調は淡黄褐色を呈する。注口は差し込みによって取り付けられる。

D　類　６例確認できる。備後北部地域から備中北部地域にかけて集中的に出土している。伯耆地域に分布する「脚台付壺形土器」（以下、脚付壺）の影響が想定されている類型である（妹尾1992a）。

第11図15は佐田谷１号墓（四隅突出型墳丘墓）出土である。甕、壺、高杯などとともに中

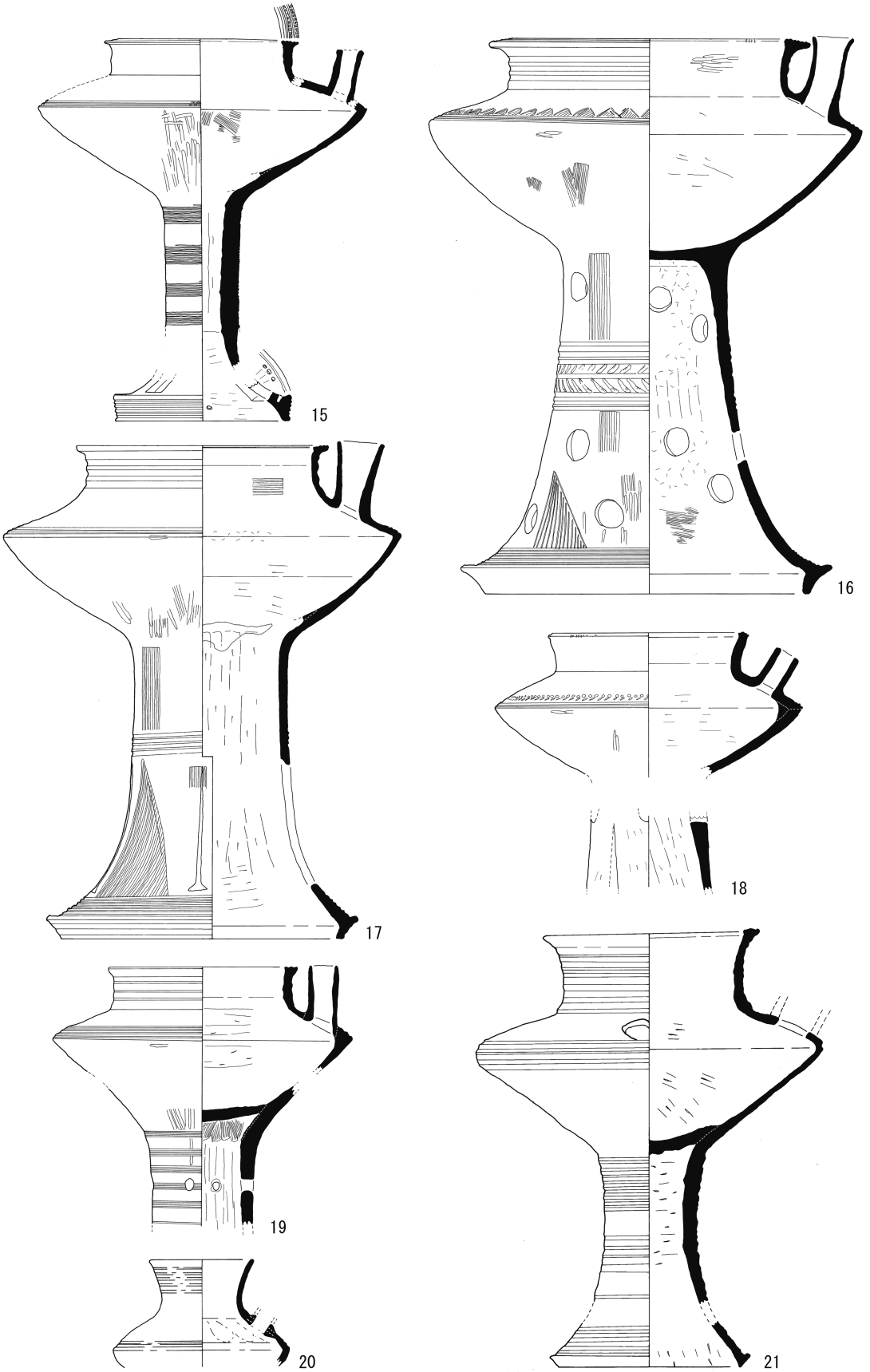
心墓壙直上に供献された状態で出土した。文様は凹線文、擬凹線文、沈線文、竹管文が施され、透孔は長方形と円形である。外面調整は脚部横位ナデ、胴部下半ミガキ、口縁部ナデ、内面調整は脚部ケズリ、胴部下半ハケ、口縁部ナデである。胎土は１㎜以下の黒色・赤色・白色造岩鉱物を多く含む。色調は明黄褐色を呈し、外面の一部には赤色顔料が残る。脚柱部の沈線文は鋭利な工具により螺旋状に施されている。

16は佐田谷３号墓（方形台状墓）の中心墓壙直上に供献された状態で出土した。文様は凹線文、山形文、列点文、鋸歯文、刻目文が施され、円形透孔が上段６カ所・中段６カ所・下段７カ所に配される。外面調整は脚端部ナデ、脚部縦位ハケ後縦位ミガキ、脚柱部縦位ハケ、胴部下半縦位ハケ後屈曲部のみ横位ミガキ、口縁端部ナデで、内面調整は脚端部ナデ、その上方にハケナデがみられる。脚柱部はシボリと指頭圧痕が良く残る。胴部は全体的にケズリで、口縁部にミガキがみられる。胎土は４㎜以下の白色造岩鉱物、１㎜以下の長石、２㎜以下の黒色造岩鉱物などを含む。色調は褐色を呈し、外面には赤色顔料が良く残る。脚部の４カ所に配された山形文のうち、現状では１つのみが右下がり方向の斜線によって充填されている。胴部と脚柱部の接合は円板充填による。

17は16とともに出土した。文様は凹線文、擬凹線文、山形文、沈線文が施され、透孔は下端が開く細長い三角形である。外面調整は脚部から脚柱部にかけて縦位・斜位ハケ、胴部下半縦位ハケ後縦位ミガキ、上端のみ横位ミガキ、口縁端部ナデ、注口部ナデで、内面調整は脚端部ナデ、その上方に工具による横位ナデ、脚部から脚柱部にかけて縦位ケズリ、胴部下半ケズリ後ナデ、口縁部横位ハケ、注口部ナデである。胎土は２㎜程度の白色造岩鉱物、角閃石を含む。色調は褐色を呈し、外面には赤色顔料が良く残る。胴部と脚柱部の接合部内面には黒色有機物が付着している[9)]。注口はおそらく差し込みによって取り付けられており、外側に補強粘土が遺存している。

18は新見市横田遺跡（岡田ほか1978）の出土である。高梁川水系の神代川左岸丘陵上に位置する墳墓群で、18は１号土壙墓上から壺、器台などとともに供献された状態で出土した。文様は凹線文、ヘラ描刺突文、竹管文、刻目文が施され、透孔はおそらく三角形である。外面調整は脚柱部縦位ケズリ後縦位ミガキ、胴部下半縦位ミガキ後上端のみ横位ミガキ、口縁部ナデで、内面調整は脚柱部縦位ケズリ、胴部下半横位ケズリ後ナデ、口縁部ナデである。胎土は２㎜以下の長石や角閃石を多く含む。色調は明橙色を呈し、外面の一部には赤色顔料が残る。屈曲部に粘土接合痕があり、内面から粘土で補強している。

19は新見市西江遺跡（正岡・田仲・二宮1977）出土である。高梁川水系の神代川左岸丘陵上に位置する集落遺跡であり、同丘陵から墳墓群も検出されている。19は丘陵上に露出した岩盤の前面から甕、壺、器台などとともに出土した。文様は凹線文、櫛描文が施され、透孔は円形である。外面調整は胴部下半縦位ミガキ、屈曲部横位ミガキ、内面調整は脚柱部上端ハケ、胴部下半ケズリ、口縁部横位ナデである。胎土は１㎜以下の細かい黒色造岩鉱物を含み、色調は暗灰褐色を呈する。比較的近距離で出土した18とは明らかに胎土･色調が異なる。外面には赤色顔料が良く残る。注口は差し込みにより取り付けられ、胴部と脚柱部の接合は



第11図　注口付脚付鉢（3）（1/6）

0　10cm

円板充填による。円板を充填する前に粘土で接合部を補強し、その上から強いハケを施しているため、その部分が盛り上がった状態で残っている。

20は西伯郡妻木晩田遺跡（岩田文・岩田珠・植野編2000）の洞ノ原１号墓（四隅突出型墳丘墓）出土である。考霊山から北西に伸びる丘陵先端部に位置し、同丘陵上に集落と墳墓群がある。20の詳しい出土位置は不明であるが、この遺構にともなうことは確実である。文様は凹線文のみがみられ、外面調整は内外面ともにナデである。実見していないため、胎土・色調は不明である。

21は西伯郡浅井土居敷遺跡（会見町教育委員会1981、岡田1992）の出土である。日野川水系の小松谷川左岸の台地上に位置する集落遺跡で、掘立柱建物内の土坑から約50個体の祭祀土器とともに出土した。文様は凹線文のみで、外面調整は不明瞭、内面調整は脚部縦位ケズリ、脚柱部横位ケズリ、胴部下半縦位ハケ後ナデと思われる。注口は胴部上半に付けられていたようであるが欠損している。接合は円板充填による。伯耆西部地域に分布する脚付壺の中で唯一注口が確認できるものである。実見できていないため、胎土・色調は不明である。

各類型の時期と分布　脚付鉢の時期は、まず備後北部地域において共伴する甕などの器種を用いて時期比定を行った。単独で出土したものについては、時期が比較的明確な脚付鉢と型式学的特徴を比較することによって比定した。それ以外の地域については、各地域編年と備後北部地域との併行関係をもとに比定している（正岡・松本編1992、松井1997、伊藤2001、河合2015）。

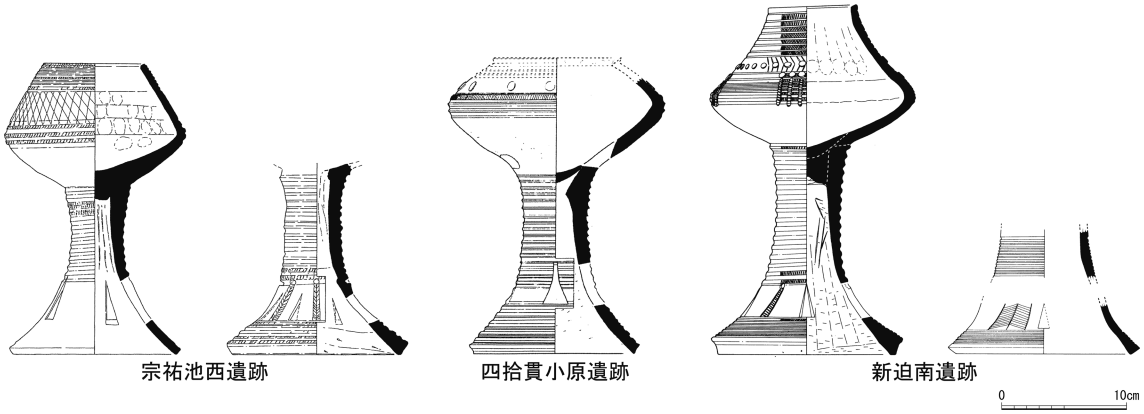
備後北部地域では全時期を通して継続的に脚付鉢が出土し、中期後葉にＡ類、中期末葉から後期初頭にＢ類、後期前葉にＤ類となり、時期によって類型が変化していることがわかる。その他地域でもＢ類は中期末葉から後期初頭、Ｄ類は後期初頭から前葉に製作され、それぞれの類型はほぼ共時的に出現しており、各時期における製作集団の交流の一端を示していると考えられる。

(3) 脚付鉢の製作方法と用途

ａ．製作方法について

備後北部地域で出土する脚付鉢は、これまで塩町式土器を構成する器種のひとつとして扱われてきた。それは多くの場合、脚付鉢に塩町式土器が共伴すること、両者に塩町式土器を特徴付ける凹線文と刻目文を組み合わせたいわゆる重層刻目文が施されていることによる。ここでは、不可視属性である脚付鉢の製作方法を検討するため、胴部と脚柱部の接合方法、注口の取り付けと施文の順序、胴部内面下半の調整方法に着目する。

接合方法　脚付鉢の基本的な接合方法は共通しており、脚部と胴部を連続して成形し、胴部の底となる円板を充填する円板充填法（小林・佐原編1964）が用いられる。ただ、備後北部地域で出土した塩町遺跡例（第９図４・５）や殿山38号墓例（７）は、円板充填をした後に下方から粘土で補強している。この接合方法は安芸高田市新迫南遺跡など同時期に製作された注口をもたない小型脚付鉢の一部にも採用されている（第12図）。



第12図　小型脚付鉢（1/6）

注口の取り付けと施文の順序　脚付鉢の多くは、注口を別に製作し、胴部上半に差し込み、その外面を粘土で補強、内面をナデによって整形することによって取り付ける。ただ、佐久良遺跡例（第９図２）と矢原遺跡例（６）は注口を外面に貼り付けることによる簡素な取り付けとなっている。

胴部の製作には、おおまかに成形、注口取り付け位置への穿孔、注口取り付け、施文、器面調整という工程がある。この順序が判断できる個体では、多くの場合、注口取り付け位置への穿孔後に凹線文や貼付突帯文など胴部をひと続きに一周する文様を施し、その後注口を取り付けてからその他の施文を行う。これは、土器の乾燥が進む前に比較的短時間で施文でき、かつ注口がない状態の方が施しやすい文様と、時間をかけてひとつずつ施す文様の違いにあると考えられる。こうした製作工程は時期や類型を問わずおおむね共通している。

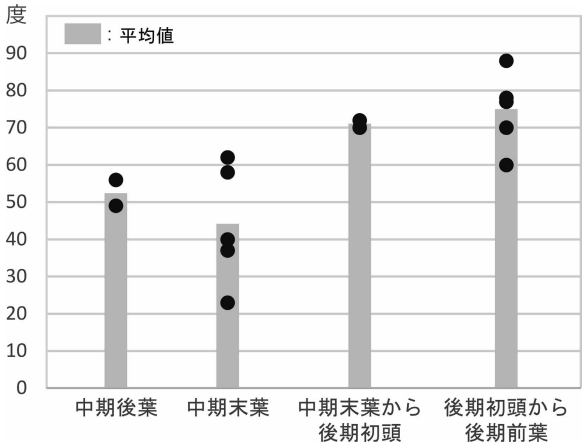
胴部内面下半の調整　備後北部地域では、中期後葉以降内面へラケズリが盛行する（妹尾1992a ほか）。脚付鉢も例外ではなく、Ａ類まではミガキによって丁寧に仕上げられるが、Ｂ類が製作される段階でハケ仕上げの個体がみられはじめ、Ｄ類ではケズリでおおまかに仕上げるという変化が追える。甕の場合はその製作方法と密接に関係していると考えられるが、脚付鉢のような祭祀土器の場合は異なる変化の要因も考えられる。注口の存在から、中に液体を入れることを想定した場合、最もその機能に適した調整はミガキであり、それが次第に粗雑化していく様相を捉えることが可能であろう。

ｂ．用途について

脚付鉢は以前から祭祀土器として捉えられ、備後北部地域から山陰地方を中心に分布する四隅突出型墳丘墓に供献される例があることから、その関係性が注目されてきた（伊藤2005ほか）。近年では、墓域から出土する土器の詳細な検討により、葬送祭祀の具体像を明らかにしようとする研究が盛んに行われている（重松2005・2007、古屋2007ほか）。そこで脚付鉢についても具体的な使用方法を検討していきたい。

注口取り付け角度[10]　後期前葉に製作されるＤ類は注口の取り付け角度が大きく、中にはほぼ真上を向く個体もみられる（第13図）。注口は本来、液体を注ぐためのもので、垂直に近づくほど注ぎにくくなる。そうであれば、この取り付け角度の変化は、壺形を呈することに

よって胴部上半の立ち上がりが弱くなるという器形的制約により生じた可能性もあるが、注口としての機能が形骸化したという捉え方もできる。注口の実用性という観点からみれば使用しにくくなっていることは間違いない。しかし、脚付鉢は大きさに個体差があり、脚付鉢の出土状況も様々であることから、その使用方法に関しては一概に述べることができない。ここで強調しておきたいのは、後述するように比較的短期間の中で胴部形態や文様に激しい変化が生じているにもかかわらず、注口をもつ祭祀土器が製作され続けたという事実であり、こうした様相は中期後葉から後期前葉まで同一系譜上に捉えられる祭祀が継続していたことを示すと考えられる。



第13図　脚付鉢の注口取り付け角度

出土状況　ここでは、出土状況をある程度推定できる脚付鉢について整理する。塩町遺跡例（第９図４・５）が出土した土坑は、「床面に約十糎の灰層がみられ、灰層の上から約三五糎ばかり表土付近まで彌生式土器・土炭片・焼けてぼろぼろになってしまった二・三〇糎の石がぎっしりとつまっていた。」（松崎1955、15頁）とあり、土器焼成遺構の可能性が指摘されている。しかし、４はほぼ完形に復元でき、小片まで遺存している一方で、５は胴部の大半と脚柱部以下を欠損している。また、共伴する甕や壺は口縁部から胴部上半にかけてと底部が遺存している点で共通している。そして、「なかには意図的に打ち欠いたようなものも存在する」（妹尾1992a、11頁）ことから、集落内の祭祀に使用後、破砕して廃棄したものと思われる。

矢原遺跡例（６）は、先述のように土坑状の遺構から単独で出土した。偶然の出土であったため詳細な記録は残っていない。ただ、特殊な線刻文様や外面に赤色顔料が塗布されていること、人為的に破砕された可能性が高いこと（妹尾1992a）、残存率が高いことなどから、何らかの祭祀にともなって一括廃棄もしくは埋納されたものと考えられる。

殿山38号墓例（７）は、先述のように四隅突出型墳丘墓の周溝底面から浮いた状態で出土した。残存率は低く、胴部・脚柱部・脚部がそれぞれ部分的に残るのみである。また、器面の風化が激しく、長期間風雨にさらされていたことがわかり、人為的に破砕された痕跡はみられない。報告書の指摘通り、墳頂平坦部から転落したものと考えられる（道上1987）。

戸宇大仙山遺跡例（第10図10）は、先述のように同遺跡内の土壙墓群にともなうものと考えられる。残存率は低く、胴部と脚柱部が部分的に残るのみである。ただ、器面の風化はそれほど進んでいない。土壙墓群のすぐ上が現表土層であることを考えると、これらの土壙墓上に置かれたものの、比較的短期間のうちに改変を受けた可能性がある。

佐田峠３号墓例（11）は、先述のように四隅突出型墳丘墓の墓壙上面から約60㎝上で出土

した。この墓壙検出トレンチ以外では脚付鉢の破片はみつかっておらず、一括性の高い出土状況といえる。とくに胴部上半の風化が激しく、文様が確認できない部分も多いことから、長期間風雨にさらされていたことがわかる。接合しない小破片も多く、墓壙上に掘り残した畔にも土器片が含まれる可能性が高いことを考えると、報告書の指摘通り、最終埋葬を執り行い、墳丘全体に及ぶ封土で覆った後に墳丘上に置かれたものと思われる（野島編2016）。

三吉密ケ垰山遺跡例（12）は、詳細な出土記録はないものの、「崖崩れで崩壊した斜面の地表面から１～1.5m下の崖面に、全ての土器が口縁部を下に向けた状態」（佐伯2016、３頁）で出土したとされる。出土土器は脚付鉢や吉備系の甕・壺などを含む13点で、１点を除きほぼ完形に復元されている。器面の風化もほとんど進んでいない状態で、出土状況からみても完形のまま置かれたと考えられる。墳墓への供献というよりも土坑などに埋納されたと考えるほうが妥当ではなかろうか。口縁部を下に向けるという出土状況は他の脚付鉢にはみられない特殊なものである。

国竹遺跡例（13）は、先述のように土器群や鉄斧とともに出土した。出土地点の近くに竪穴住居跡があり、中にはこの住居跡出土の土器片と接合する個体もある。いずれも破片であり、おそらく廃棄されたものと思われるが、赤色顔料が塗布された土器や脚付鉢、鉄斧が出土していることから、報告でも指摘された通り、「鉄斧とともに集落内で執り行われたであろう祭祀において使用され、破棄された」（田中・石田2000、141頁）と想定できる。

梅田萱峯遺跡例（14）は、先述のように方形貼石墓の墳丘裾部から出土した。この梅田萱峯墳丘墓にはいくつか特筆すべき点がある。まず、鳥取県内最古級の墳丘墓であり、墳丘中央で検出された埋葬施設を囲むように９基の柱穴がみつかった点である。また、２基の埋葬施設を地山面から掘り込んだ後に盛土のみで墳丘を構築しており、うち１基は墳丘貼石直下で検出された。土器はコンテナ13箱分で、甕・壺・高杯など多岐にわたる（湯村・濵本編2009）。内外面に炭化物が付着した個体も少なからず存在し、赤色顔料を塗布した個体も少数認められる。出土地点は墳丘上や各埋葬施設上、墳丘裾部、盛土内、区画溝内、柱穴内などさまざまである。墳丘上と区画溝内で接合資料がみられ、本来は墳丘上に供献されたものと推定されている（湯村・濵本編2009）。しかし、そのすべてが破片で完形に復元できるものは皆無であること、１点であるが同丘陵上の住居跡出土土器片と接合する個体があることから、居住域で破砕された土器が持ち込まれたものではないかと考えられる。

佐田谷１号墓例（第11図15）は先述のように四隅突出型墳丘墓の中心墓壙直上から甕･鉢･壺・高杯など30個体以上の土器群とともに出土した。別の場所で破砕したものを供献したと推測されている（妹尾編1987）が、これらの土器群の器面は風化がかなり進んでおり、長期間、墓壙上で風雨にさらされたものとみられる。

佐田谷３号墓例（16・17）も、先述のように方形台状墓の中心墓壙直上に供献された状態で出土した。脚付鉢３個体のほか、鉢や高杯、器台が出土した。図示した脚付鉢２個体は残存率も高く、完形のまま墓壙直上に置かれたものと思われる。他の器種については完形に復元できるものはなく、人為的に破砕されたものなのか、単に破片が散逸しているだけなのか

判断しにくい。

横田遺跡例（18）は、先述のように土壙墓上で出土した。脚付鉢のほか、壺や器台などが出土しているが、完形に復元できるものはない。また、器面の風化が激しく、長期間風雨にさらされていたと考えられる。報告では、「当初より破砕したものを供献したのかとも考えられる。」（竹田・岡本1977、430頁）とあるが、遺存状況からは判断しにくい。

西江遺跡例（19）は、先述のように岩盤の前面から赤色顔料が施された土器群とともに出土した。脚付鉢に加え、壺や高杯、器台などが出土し、甕は含まれない。報告では、「すべて胎土も一般の土器と異なって雲母を含み、同時に使用し、破棄されたものであろう。」（正岡・田仲・二宮1977、333頁）としている。その胎土をみると、佐田谷３号墓出土の脚付鉢（16・17）に類似し、器台に施された凹線文と山形文、壺の口縁部形態など類似点が多く、製作地が近い可能性も考えられる。出土土器はすべて破片であり、完形に復元できるものはない。微細な破片がみられないことから、あらかじめ破砕したものを持ち込んだ可能性がある。

洞ノ原１号墓例（20）は、先述のように四隅突出型墳丘墓から出土した。埋葬施設は検出されていないものの、墳丘上や貼石、周溝で土器が出土しており、供献されたものと考えられるが、詳細は不明である。

浅井土居敷遺跡例（21）は、先述のように建物跡内土坑から出土したようである。この住居跡は、「山側にＬ字状の排水溝をもち、内側に御立ち見台（バルコニー）の付く建物跡で、祭器（台付き壺・台付き注口土器・台付き甕 etc）が40～50個体出土した」（岡田1992、33頁）とされるが、正式な報告がないため詳細は不明である。

以上、脚付鉢の出土状況について整理した。備後北部地域では、中期後葉から墳丘墓が築造されるが、脚付鉢は集落内の土坑から出土する。中期末葉には四隅突出型墳丘墓に脚付鉢を供献するようになり、これ以降脚付鉢の出土は墳丘墓に限られる。後期初頭から前葉では、佐田谷・佐田峠墳墓群で脚付鉢が個々の埋葬施設に供献されるようになるが、その供献方法は完形・破砕など一様ではなく、同じ類型のなかでも違いがみられる。

一方で、備後北部地域以外に目を向けると、中期末葉から後期前葉にかけて脚付鉢が出土するが、その出土状況は墳墓に限らずさまざまである。備中北部地域や伯耆西部地域などの山間部では、備後北部地域と共通する類型の脚付鉢（Ｂ類あるいは Ｄ類）が墓域以外の祭祀に用いられるが、その使用方法は一定しない。岩盤前での一括廃棄や完形のまま口縁を下に向けた状態での埋納など、当該地域でも他に類例がない出土状況を示している。こうした習俗の発生源は現状不明であるが、少なくとも各地で器形の共有をしながらも使用方法は選択的であったといえる。

(4) 脚付鉢の系譜と交流の諸相

ａ．各類型の系譜について

塩町式土器は、その加飾性の高さや器種の豊富さから外的な影響、とくに石見・出雲地域などの山陰地方からの影響を受けて成立した可能性が考えられている（伊藤2005）。ただ、

脚付鉢に限ると岡山市の百間川今谷遺跡（高畑1982）で中期中葉の注口付きの高杯が１点出土しているのみで、明確な祖形となりうる土器は現在みつかっていない。現状では、中期後葉に突如として注口付きの胴部に長脚をもつ大型祭祀土器として成立したようにみえる。このため、Ａ類の出現の経緯については今後の課題とし、ここでは各類型の系譜関係について検討したい。

脚付鉢Ｂ類の出現　脚付鉢Ｂ類は注口が付くという点を除き、脚付鉢Ａ類とは胴部形態や文様に大きな変化が認められる。詳述すると、胴部上半が「八」の字状を呈する形態、鋸歯文・斜格子文・内部を斜線で埋める菱形文の多用、施文に鋭利な工具を使用し、整然と割り付けられた文様が施されることなどである（写真図版第11・12）。これらの特徴は、Ａ類にはみられない新出の要素であり、また次段階のＤ類にも引き継がれない。管見では、上記のような文様は山間部では脚付鉢にのみ施されるが、神辺平野や出雲平野などでは壺・高杯・器台など他器種にも施されている[11]。しかし、その出土数は一遺跡から多くても３点程度であり、周辺地域の拠点的集落と考えられる遺跡に限定されている。平野部のこうした土器はすべて包含層からの出土であり、共伴資料から時期を確定することは難しいが、中期後葉から後期前葉と考えられる。塩町式土器が比較的多く出土する江の川下流域では確認できない点に注目でき、ここに交流形態の差異が読み取れるだろう。当該時期は、佐田峠３号墓で備後南部地域の高杯が共伴し、三吉密ケ垰山遺跡で吉備系土器が共伴することから、交流の活発化が読み取れる。施文に使われた鋭利な工具は金属製品の可能性もあり、交流圏が拡大した背景のひとつには金属資源の獲得が考えられる。

脚付鉢Ｂ類は、広範囲で胴部形態や文様構成を共有することを特徴とする。その施文方法や文様構成は脚付鉢Ａ類とは異なる系譜をもつと想定できる。しかし、注口を付ける胴部に長脚をもつという形態は継承しており、また最も文様が緻密な例が佐田峠３号墓から出土していることから、その中心はやはり備後北部地域に求めることができる。弥生時代中期と後期の中間に位置付けられるＢ類は、塩町式土器に特徴的な重層刻目文が衰退しはじめる時期と重なっており、土器製作技術や交流圏の変化を反映していると考えられる。

脚付鉢Ｄ類　脚付鉢Ｄ類は、伯耆西部地域に分布する脚付壺からの影響が指摘されている（妹尾1992a）。その後、西伯郡浅井土居敷遺跡で注口をもつ脚付壺が出土し[12]（第11図21）、妹尾の指摘をさらに補強するものとなった。

ただ、ここでは別の要因を想定したい。Ｄ類は注口が付くという点を除き、胴部形態や脚部・口縁部形態などでＢ類とは大きな変化が認められ、やはりここでも外的な要因を考える必要がある。Ｄ類は胴部径に対して比較的大きな口径をもつ直口壺形を呈し、胴部中位の明瞭な屈曲部には粘土紐接合痕が観察できる。このような壺は備中地域や備後南部地域において少数であるが確認できる。また、15の脚部や脚柱部の文様は吉備南部地域の高杯に類例を求めることができる（妹尾編1987）。15とは全体的な意匠の差異が認められる16・17も、西江遺跡例（19）との類似性の高さや脚端部の形態から、吉備地域の土器との親縁性が高い。よって、伯耆地域とのつながりを否定することはできないが、吉備地域からの影響もＤ類の

意匠に大きく関わっていると考えられる。

以上のように、脚付鉢は備後北部地域の内的要因だけではなく、さまざまな外的要因によって変化していったと考えられる。佐田谷・佐田峠墳墓群ではその様相が顕著で、共伴土器にも他地域からの搬入品がみられ、葬送儀礼に様々な地域の人々が関わったことを示している。隣接して築造され、時期的にも近い佐田谷１号墓と同３号墓において、法量や文様構成などで大きな差異が認められる脚付鉢は、埋葬される被葬者の性格、もしくは葬送儀礼主催者の企図によってその意匠が決定された可能性さえも考えられる。

ｂ．脚付鉢にみる佐田谷・佐田峠墳墓群

これまで検討してきたように、脚付鉢は備後北部地域とその周辺において様々な場面で使用されてきた。瀬戸内地方と山陰地方の中間地点に位置するという地理的環境もあり、脚付鉢の形態や使用方法に外的影響を想定することが多かったが、注口を付設する土器を使用した祭祀はこの時期に限ると当該地域特有の現象といえる[13]。その中で佐田谷１号墓では中国地方でいち早く木槨木棺構造を備える墳丘墓が築造される。また、隣接する佐田谷３号墓では、埋葬施設の調査は行われていないものの、同１号墓を上回る大規模な墓壙掘形が検出されている（今西・辻村編2017）。この３号墓に供献されたＤ類は、集成した脚付鉢の中で器高がもっとも大きいものであり、墓壙掘形の規模とも相関している。これらは明らかに中心埋葬施設の被葬者個人に供献されたものであり、高い社会的地位にある人物の登場を想定させる。こうした社会の変化が、土器の変化にも現れている点は重要であり、Ｂ類からＤ類への変化はとくに大きい。Ｂ類は類似する文様が神辺平野や出雲平野に分布しており、当時の交流圏をある程度反映しているといえよう。佐田峠３号墓で出土したＢ類との共伴土器にもそうした様相がみてとれる。一方、Ｄ類は胴部が壺形に変化し、文様などにも吉備地域の影響が強く現れている。儀礼を主導したのは備後北部地域の人々であったとしても、当該地域の伝統的な祭祀土器である脚付鉢が比較的短期間のうちにさまざまな形態に変化することから、より大きなスケールで脚付鉢の製作環境を考える必要がある。のちの特殊壺・特殊器台の分布状況（宇垣1992）にも似たような交流圏がこの段階にも形成されていたといえよう。ただ、佐田谷・佐田峠墳墓群より後出する墳丘墓では脚付鉢が供献されることはなく、備後北部地域では大型墳丘墓の造営自体が後期後半まで途絶える。また、常用器種もこの時期を境に備後北部地域特有の様相は薄れていく。このことから、佐田谷・佐田峠墳墓群の造営期が最も交流が活発化した時期であり、同時に備後北部地域における葬送儀礼の系譜上で捉えられる最後のかたちであったと考えられる。

ｃ．課題と展望

今回は、備後北部地域とその周辺というおおまかな地域区分の中で検討したが、同じ類型の脚付鉢が水系の異なる地域で点的に出土し、他地域系の土器と共伴することが多い。また、佐田谷・佐田峠墳墓群や西江遺跡、横田遺跡で脚付鉢と器台が共伴する事例があり、器台を新たな祭祀土器として採用し始めた可能性も考えられる。吉備系土器との関係からすれば、後に登場する特殊壺[14]（近藤1983ほか）に繋がるものとして注口付脚付鉢を位置づけること

もできよう。脚付鉢の消長の経緯や器台の大型化に関する諸問題の背景に地域間交流の活発化も想定しつつ、今後も引き続き墳丘墓発展に関わる葬送儀礼の具体的な変化を検討していきたい。

第３節　中国地方における脚付長頸壺の類例と変遷

佐田峠２号墓で出土した脚付長頸壺（第14図）という器種は、甕や壺などに比べると普遍的でなく、それのみに焦点を当てた先行研究はほぼ皆無といってよい。脚付長頸壺は備後北部地域では土器の基本組成に含まれない非常に珍しい器種であり、それ故に、当該地域で出土したとき、即座に他地域との交流を捉える重要な手掛かりとなりうる。中国地方で土器の地域色が顕著になる当該時期にあって、瀬戸内地方と山陰地方に挟まれる内陸部の集団の立ち位置を知るためにも、備後北部とその周辺地域における様相を整理することの意義は大きいと考えられる。

本節では広島・岡山・島根・鳥取の４県域を対象に、中期中葉から後期中葉の脚付長頸壺の分布状況、出土遺跡・遺構の性格、型式学的特徴をもとに、各地域におけるその扱われ方を確認したい。

(1) 脚付長頸壺の分布状況

類似する形態のものを含め、計73点を収集した（第15～19図･第３表）[15]。地域別の内訳は、広島県域８点、岡山県域54点、島根県域６点、鳥取県域５点である。出土数は岡山県域、とくに高梁川中下流域から旭川下流域を中心とした岡山県南部地域において圧倒的な集中をみせ、分布も面的である。一方、他地域では共通して出土数が少なく、河川や盆地単位で漠然としたまとまりは窺えるものの、基本は点的な分布を示している（第15図）。

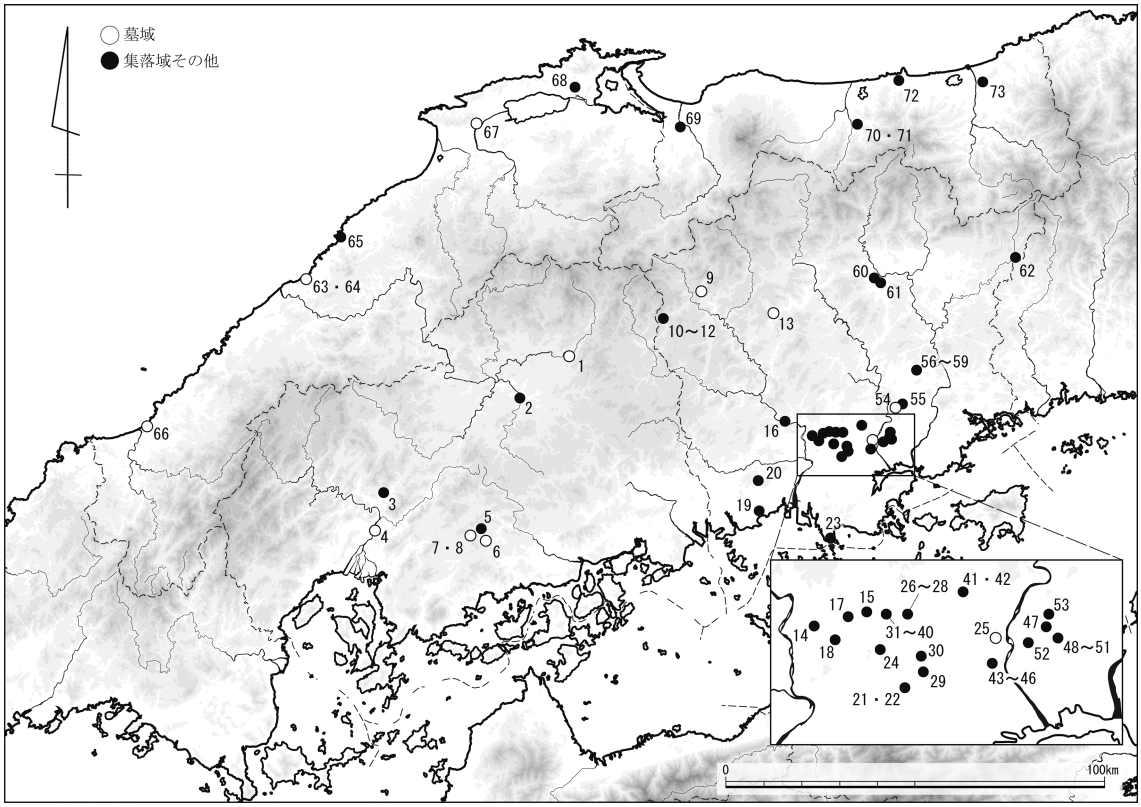
収集範囲を限定したため、当該器種がどの時期まで存続するのかについてまでは調査していない。ただし、どの地域においても中期中葉にはすでに出現し、中期後葉から後期前葉に

第14図　佐田峠２号墓墓壙 ST06上から出土した脚付長頸壺

かけて増加するという傾向はおおむね一致するようである。

(2) 出土遺跡・遺構の性格

出土遺構は集落域か墓域かに大きく分かれる（第15図・第３表）[16]。まず、広島県域・島根県域においては、全体の出土数自体は僅少ながらも、墓域における出土が過半数となることが指摘できる。両県域において脚付長頸壺は常用器種ではなく、墓で用いるために特別に製作された器種であった可能性が高い。これに対し、岡山県域・鳥取県域では集落域における出土がほとんどとなる。とくに岡山県域の状況は広島県域・島根県域とは対照的で、全体の出土数は50例を超えるが、墓域での出土とみなせるものはわずか４例にとどまっており、分布の中心地である岡山県南部地域でもほとんど確認できない。この状況から、少数派の常用器種として定着してはいるものの、特別に選んで墓で用いているとは考えにくい。鳥取県域においては全体数も少なく、集落域からの出土のみという状況である。数量から考えれば、少なくとも常用器種ではないといえそうである。以上のように、広島県域および島根県域と、とくに岡山県域の間には、脚付長頸壺の出土遺跡・遺構の性格と、常用器種か非常用器種か



第15図　脚付長頸壺の分布図

1. 佐田峠　2. 塩町　3. 下町屋　4. 弘住　5. 浄福寺　6. 高屋東　7・8. 西本　9. 横見
10～12. 西江　13. 谷尻　14. 井手村後　15. 窪木　16. 塩田　17. 南溝手　18. 三須畠田　19. 森山
20. 竹林寺天文台　21・22. 上東　23. 城　24. 矢部大坑　25. 南方　26～28. 加茂政所　29. 川入
30. 中撫川　31～40. 津寺　41・42. 田益田中　43～46. 鹿田　47. 赤田東　48～52. 百間川　53. 雄町
54. 四辻　55. 用木山　56～59. 才地　60. 釜田　61. 曾根田　62. 中町　63・64. 波来浜　65. 坂灘
66. 専光寺脇　67. 青木　68. タテチョウ　69. 青木　70・71. 丸山　72. 青谷上寺地　73. 材木町

第３表　脚付長頸壺一覧

番号	遺跡名	所在地	遺跡種別	出土遺構	遺構性格	時　期	法量（cm）[　]は復元値 器高	口径	胴部径	底径	文　献
1	佐田峠２号墓	広島県庄原市	墳墓	ST06上	埋葬施設	後期前葉	30.7	[6.8]	16.4	8.2	野島ほか2013
2	塩町遺跡	広島県三次市	集落	不明	不明	中期～後期	－	－	19.0	－	松崎1955
3	下町屋トンネル付近	広島県広島市	不明	採集	不明	中期中葉～後葉	－	－	16.1	7.2	椙木編2011
4	弘住	広島県広島市	墓	配石遺構	祭祀・埋葬	中期中葉	－	－	－	－	石田編1983
5	浄福寺２号	広島県東広島市	集落・墓	SS8	貯蔵穴	後期中葉	－	－	－	－	佐々木・山田編1992
6	高屋東２号	広島県東広島市	墓	土壙墓32	埋葬	中期中葉～後葉	[12.3]	8.4	－	8.4	植田編2008
7	西本Ａ地点	広島県東広島市	集落・墓	周溝墓状遺構	埋葬	中期中葉	23.0	3.8	17.4	8.6	金井編1976
8	西本Ｂ地点	広島県東広島市	集落・墓	壺蓋土壙墓	埋葬	後期中葉	－	4.5	18.0	8.6	金井編1976
9	横見７号墳墓	岡山県新見市	古墳・墓	土壙６	墳丘下埋葬	後期前葉	[35.0]	[8.0]	18.9	[10.0]	下澤・友成1977
10	西江安信丘陵部	岡山県新見市	集落	３号住居	住居	中期中葉～後葉	25.0	6.2	16.8	11.2	正岡・田仲・二宮1977
11	西江安信丘陵部	岡山県新見市	集落	包含層	不明	後期前葉～中葉	－	－	－	－	正岡・田仲・二宮1977
12	西江安信丘陵部	岡山県新見市	集落	包含層	不明	中期後葉	－	－	[22.2]	－	正岡・田仲・二宮1977
13	谷尻	岡山県真庭市	集落・墓	No.30土壙	埋葬か	後期前葉～中葉	－	－	15.8	7.9	高畑ほか1976
14	井手村後	岡山県総社市	集落	土坑	廃棄穴か	後期前葉	－	7.8	16.2	8.2	平井1996
15	窪木	岡山県総社市	集落	河道６	自然流路	中期後葉～後期前葉	32.4	7.4	16.4	8.6	岡田編1997
16	塩田	岡山県総社市	集落	土坑１	不明	中期中葉～後葉	27.6	6.6	17.4	11.6	谷山・高田1987
17	南溝手	岡山県総社市	集落	竪穴住居26	住居	中期後葉	－	－	15.8	10.0	平井編1996
18	三須畠田	岡山県総社市	集落	土器溜まり	不明	中期後葉～後期前葉	21.0	6.2	15.2	8.6	武田編2003
19	森山	岡山県浅口市	集落・水田	溝29（下層）	排水路か	中期	－	6.2	－	－	水田編2008
20	竹林寺天文台	岡山県浅口市・小田郡	集落	包含層	不明	後期前葉	－	－	[27.7]	－	水田編2009
21	上東	岡山県倉敷市	集落	溝16	区画溝	中期後葉	34.4	7.6	17.8	10.6	小林編2001
22	上東	岡山県倉敷市	集落	包含層	不明	中期中葉～後葉	－	7.8	17.8	－	伊藤ほか1974
23	城第３地点	岡山県倉敷市	集落	東半部北側斜面	不明	中期後葉	－	－	15.4	－	伊藤・山磨編1977
24	矢部大坑	岡山県倉敷市	集落	溝１	自然流路	中期後葉	－	8.0	17.1	－	浅倉編1993
25	南方	岡山県岡山市	墓	不明	不明	中期中葉	22.2	5.4	18.3	7.5	出宮編1971
26	加茂政所	岡山県岡山市	集落	袋状土坑31	貯蔵穴	後期前葉	－	7.5	14.8	－	平井・弘田・柴田編1999
27	加茂政所	岡山県岡山市	集落	袋状土坑37	貯蔵穴	後期前葉	－	7.1	16.0	－	平井・弘田・柴田編1999
28	加茂政所	岡山県岡山市	集落	遺構外	不明	後期前葉	－	－	16.4	－	平井・弘田・柴田編1999
29	川入	岡山県岡山市	集落	住居６	住居	中期中葉～後葉	－	－	16.8	8.2	柳瀬編1977
30	中撫川	岡山県岡山市	集落	溝２	水路	中期中葉～後葉	－	－	20.0	9.6	岡田ほか2004
31	津寺	岡山県岡山市	集落	袋状土坑74	貯蔵穴	後期前葉	－	－	17.6	10.2	大橋・澤山・中野編1995
32	津寺	岡山県岡山市	集落	袋状土坑107	貯蔵穴	後期前葉	－	－	16.0	9.3	大橋・澤山・中野編1995
33	津寺	岡山県岡山市	集落	土坑78	不明	後期前葉	－	7.0	14.9	－	大橋・澤山・中野編1995
34	津寺	岡山県岡山市	集落	土坑87	不明	中期後葉	21.6	7.9	16.0	9.2	亀山編1996
35	津寺	岡山県岡山市	集落	溝３	取水路	中期後葉～後期前葉	7.1	－	14.3	－	亀山編1996
36	津寺	岡山県岡山市	集落	溝３	取水路	中期後葉～後期前葉	7.7	－	16.3	－	亀山編1996
37	津寺	岡山県岡山市	集落	溝３	取水路	中期後葉～後期前葉	8.2	－	16.6	－	亀山編1996
38	津寺	岡山県岡山市	集落	溝３	取水路	中期後葉～後期前葉	－	－	16.4	－	亀山編1996
39	津寺	岡山県岡山市	集落	土坑199	貯蔵穴	後期中葉	－	6.5	－	－	亀山・大橋編1997
40	津寺	岡山県岡山市	集落	土坑218	貯蔵穴	後期前葉	26.4	7.7	17.4	11.4	亀山・大橋編1997
41	田益田中	岡山県岡山市	集落	包含層か	不明	中期か	－	－	16.2	9.6	伊藤・岡田・二宮1998
42	田益田中	岡山県岡山市	集落	包含層か	不明	中期か	－	－	20.4	－	伊藤・岡田・二宮1998
43	鹿田	岡山県岡山市	集落	井戸１	取水孔	中期後葉	24.7	7.3	15.6	10.5	吉留・山本編1988
44	鹿田	岡山県岡山市	集落	井戸１	取水孔	中期後葉	－	－	[18.2]	－	吉留・山本編1988

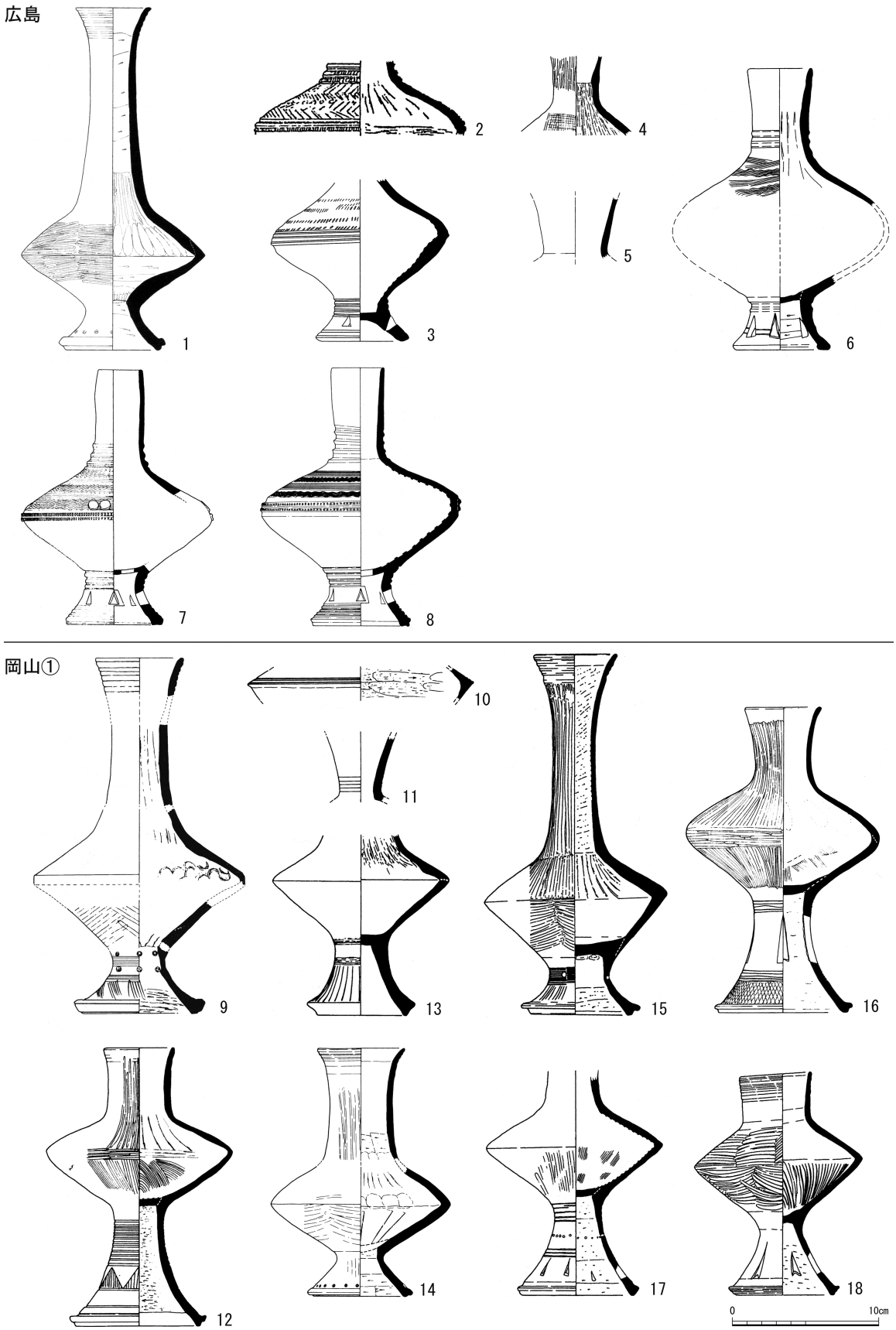
45	鹿田	岡山県岡山市	集落	土坑117	廃棄穴	中期後葉	－	－	14.2	－	吉留・山本編1988
46	鹿田	岡山県岡山市	集落	土坑254	不明	中期後葉	28.9	9.8	21.4	10.5	吉留・山本編1988
47	赤田東	岡山県岡山市	集落	溝16	水田関連	中期中葉～後葉	－	7.4	15.4	－	草原編2005
48	百間川兼基	岡山県岡山市	集落	竪穴住居４	住居	中期後葉	－	－	15.4	－	高田編2007
49	百間川兼基	岡山県岡山市	集落	竪穴住居11	住居	中期後葉	－	[7.1]	－	15.0	高田編2007
50	百間川兼基	岡山県岡山市	集落	竪穴住居11	住居	中期後葉	19.5	[6.8]	－	10.0	高田編2007
51	百間川兼基	岡山県岡山市	集落	溝５	取水路	中期後葉	－	6.1	14.9	－	高田編2007
52	百間川原尾島	岡山県岡山市	集落	島状高まり遺構1a	水田関連	後期前葉		11.3	－	－	正岡編1984
53	雄町	岡山県岡山市	集落	不明	不明	中期後葉～後期前葉	－	－	14.4	－	正岡ほか1972
54	四辻	岡山県赤磐市	墓	土壙30	埋葬	中期中葉～後葉	－	－	12.3	6.6	神原編1973
55	用木山	岡山県赤磐市	集落	土器溜まり	廃棄場	中期後葉	20.0	9.3	17.4	9.1	神原編1977
56	才地	岡山県和気郡	集落・墓	竪穴住居35c	住居	中期後葉	28.8	8.6	18.4	8.8	下澤編2004
57	才地	岡山県和気郡	集落・墓	竪穴住居36b	住居	中期後葉	－	－	16.0	－	下澤編2004
58	才地	岡山県和気郡	集落・墓	竪穴住居39	住居	中期前葉～中葉	－	－	14.8	－	下澤編2004
59	才地	岡山県和気郡	集落・墓	土坑36	不明	中期後葉	20.7	7.8	14.8	10.0	下澤編2004
60	釜田	岡山県津山市	集落	土坑38	貯蔵穴か	後期前葉～中葉	21.6	8.6	16.2	8.7	村上1979
61	曾根田	岡山県津山市	集落	溝１	環濠か	中期後葉	－	－	15.1	9.8	仁木2005
62	中町Ｂ	岡山県美作市	集落	竪穴住居１	住居	後期前葉	－	－	14.5	9.2	岡本・石田2008
63	波来浜Ａ区２号墓	島根県江津市	墳墓	第1埋葬施設横	埋葬	後期	15.8	6.6	14.2	6.9	門脇編1973
64	波来浜	島根県江津市	墳墓	不明	不明	後期	－	－	18.2	5.6	門脇編1973
65	坂灘	島根県大田市	集落・墓	不明	不明	中期後葉	24.6	6.5	18.3	9.6	藤田・柳瀬1987
66	専光寺脇２号墓	島根県益田市	墳墓	第1埋葬施設	埋葬	中期中葉～後葉	－	－	15.4	－	東山編2008
67	青木	島根県出雲市	集落・墓	包含層	不明	中期後葉	－	－	[19.2]	[10.8]	今岡・平石・松尾編2006
68	タテチョウ	島根県松江市	集落	河道４	自然流路	中期	－	6.2	－	－	佐伯・林・瀬古編1992
69	青木Ｆ地区	鳥取県米子市	集落	竪穴住居25	住居	後期前葉	－	－	13.7	－	船越ほか編1976
70	丸山	鳥取県東伯郡	集落	袋状土坑15	貯蔵穴	中期後葉	22.0	7.2	18.0	7.5	伊達編1984
71	丸山	鳥取県東伯郡	集落	袋状土坑32	貯蔵穴	中期中葉～後葉	－	7.2	18.8	－	伊達編1984
72	青谷上寺地	鳥取県鳥取市	集落	SD27	河道	中期中葉～後葉	－	7.8	16.2	－	北浦編2000
73	材木町	鳥取県鳥取市	集落	不明	不明	中期後葉	22.2	6.9	14.6	10.0	久保1990

という面において明瞭な違いが指摘できる。

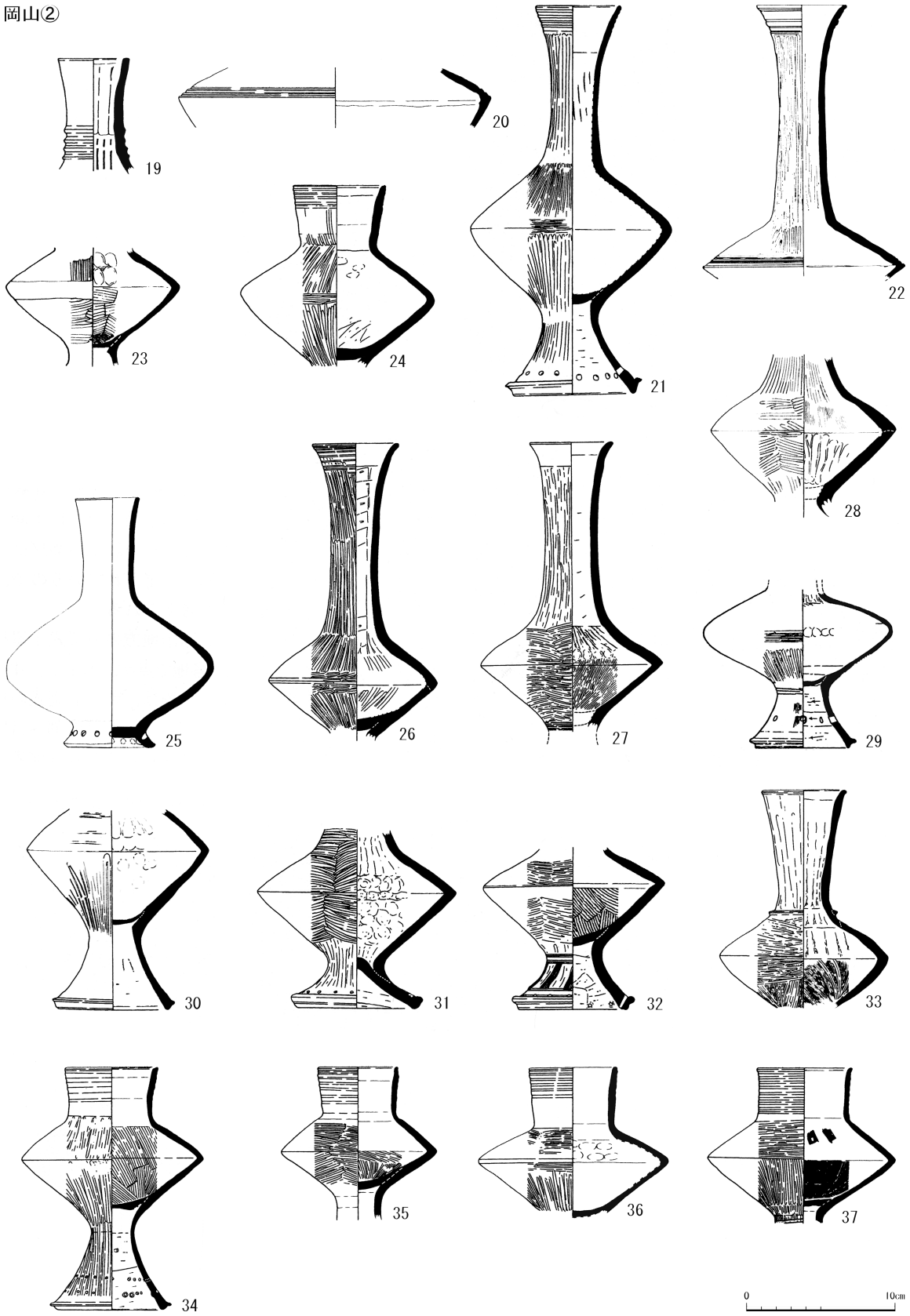
(3) 型式学的特徴からみた地域色・地域間関係

岡山県域　まず、岡山県域では脚付長頸壺の特徴に地域的なまとまりが見受けられる（第16～19図）。岡山県域では、ほとんどのものは胴部中央が算盤玉状に明瞭な稜をもって屈曲する。脚部と口縁部上位以外の部分に施文されることは少なく、他県域と比べて文様は簡素である。外面は丹念なヘラミガキが施される。上半部の作りは、佐田峠２号墓出土例において復元されたような（野島ほか2013）、頸部を絞り出して成形するものが多いと考えられ、そのため、頸部基部外面にも凸帯など接合部の補強を兼ねた装飾や文様をもたない。

岡山県域では、土器の特徴の時期的変化も明確に捉えることができる。まず、中期後葉の個体は長脚長頸で、頸部の絞り込みも弱い。ヘラケズリは脚部内面のみである。これが後期前葉になると、短脚長頸へと変化し、頸部の絞り込みが強まるとともに、胴部の稜も鋭くなる（第20図）。中期後葉ではしばしばみられた脚部の三角形透孔は円孔へと変化し、全体的に文様が簡素となる。内面のヘラケズリは、脚部に加え、胴部や頸部にまで施されるようになる。岡山県域に限らず、各地域とも底部は粘土円板を貼りこむものがほとんどであり、脚

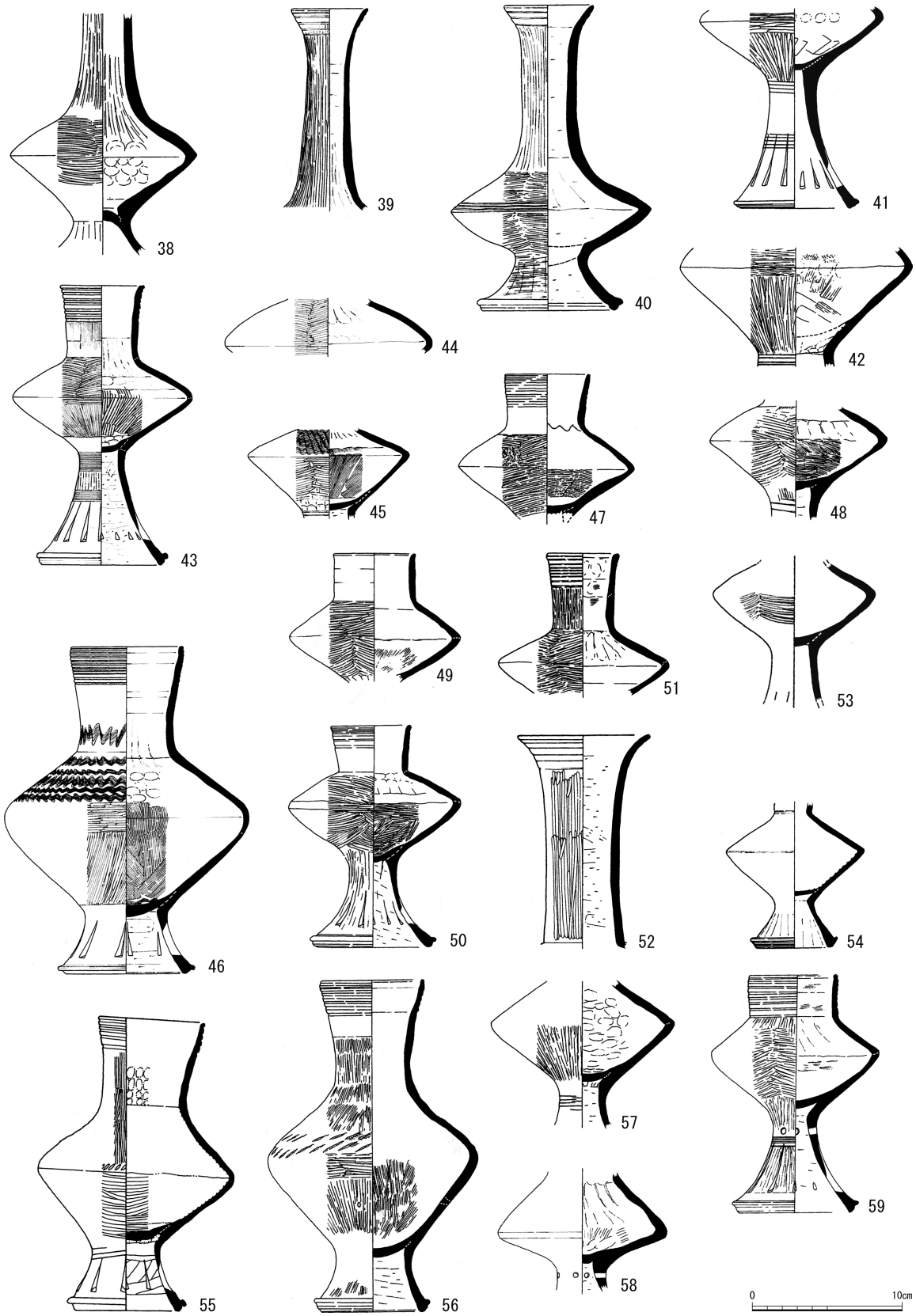


第16図　脚付長頸壺（1）（1/4）

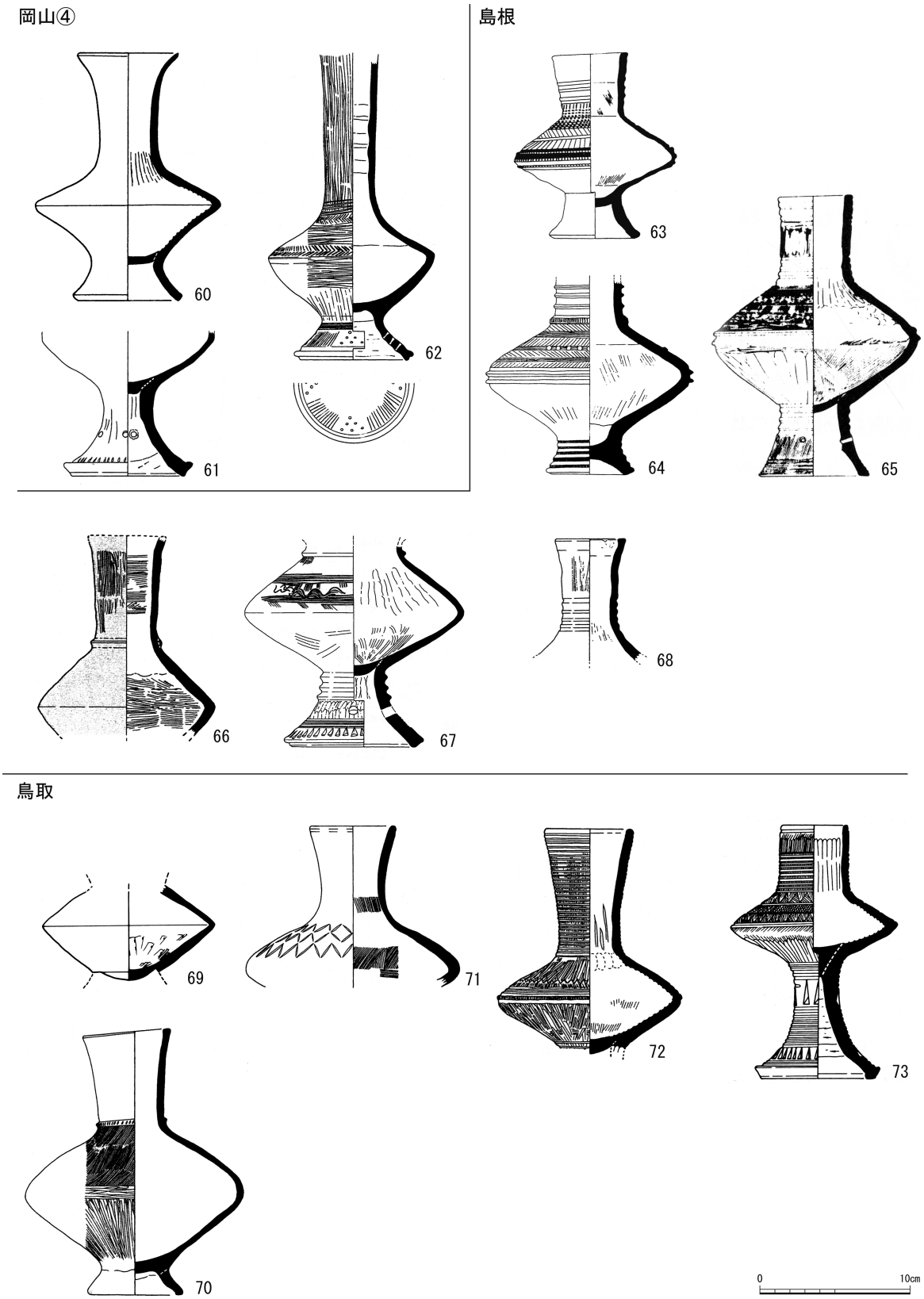


第17図　脚付長頸壺（2）（1/4）

岡山③

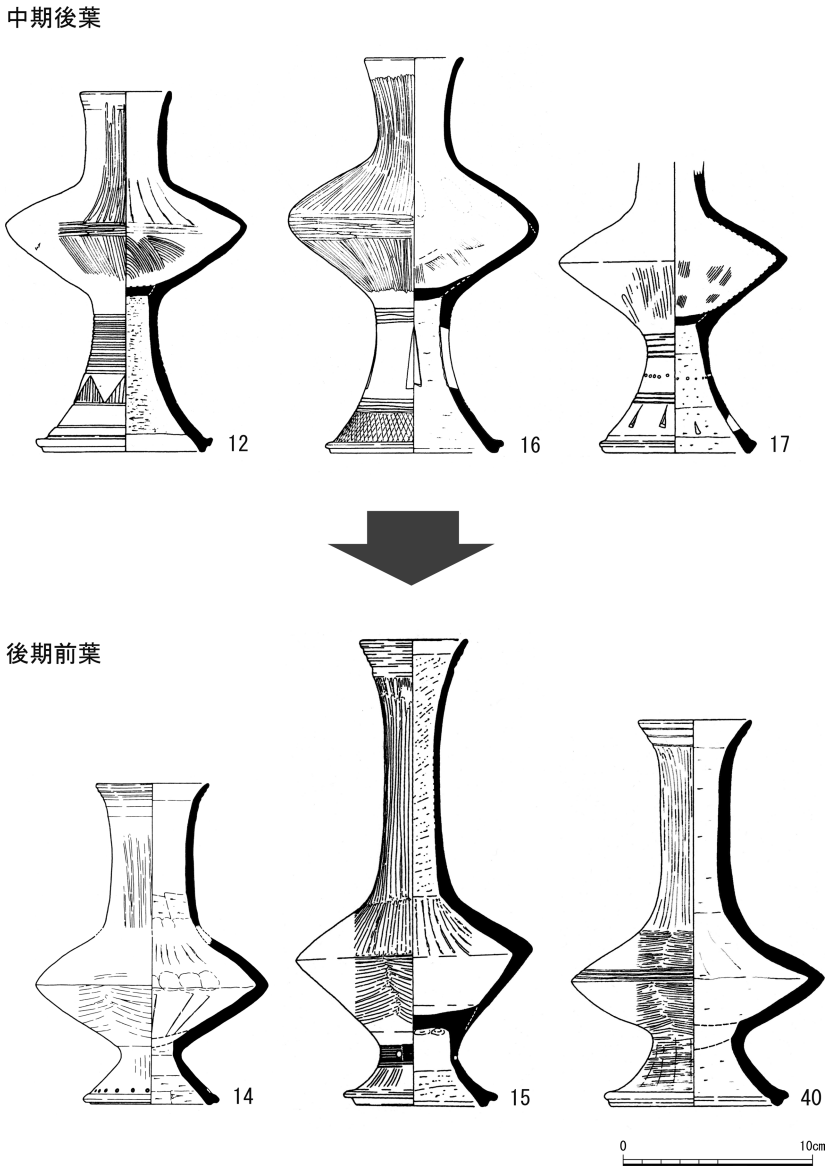


第18図　脚付長頸壺（3）（1/4）



第19図　脚付長頸壺（4）（1/4）

部の意匠とあわせて、基本的に高杯の製作技術が応用されていると考えられる。しかし、後期前葉の岡山県域における脚付長頸壺の一斉短脚化（第20図）は、高杯の形態変化とは関係なく独立して起こっていると考えられるため、出土例が増えて定型化するこの前後の時期に、器種として確立したとみなすことができそうである。



第20図　岡山県域における脚付長頸壺の変遷（1/4）

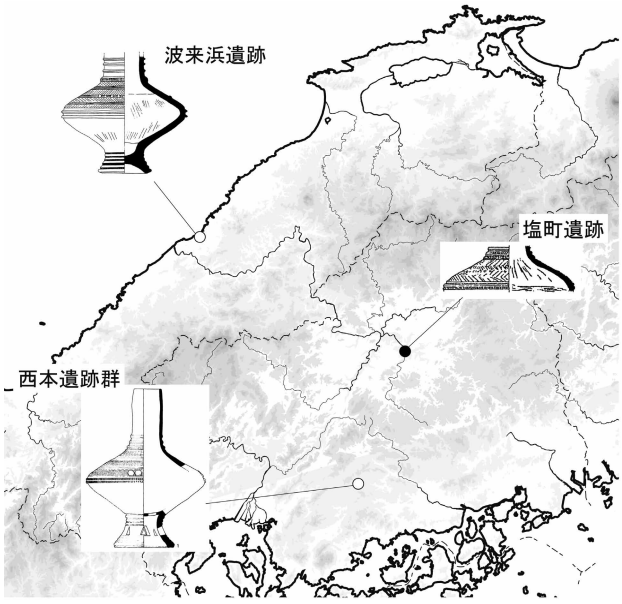
その他の県域　先述したように、脚付長頸壺の特徴については、岡山県域で地域的なまとまりが見受けられた。続いて他県域の脚付長頸壺（第16・19図）、とくに広島県域の事例を中心に型式学的特徴をみていくが、出土数が少なく時期的変化を捉えることは難しいため、ここではおもに地域間関係について述べることにする。

各県域で共通してよくみられるのは、胴部中央が緩やかに屈曲して丸みをもつプロポーションの個体である。文様は脚部と口縁部上位に加えて、胴部中央から上半、口縁基部にまで施されている場合が多く、装飾性は高いといえる。このうち、江津市波来浜遺跡など石見東部地域における出土例（第19図64）、三次市塩町遺跡における出土例（第16図２）、東広島市西本遺跡群など安芸地域における出土例（第16図７）は、プロポーションや施文帯の位置を含めた土器全体の外見的特徴が類似している（第21図）。

塩町遺跡出土の脚付長頸壺は、在地の土器組成にないことからおそらく搬入品であり、諸特徴からみて、同じ江の川流域に属する石見東部地域からもたらされたと考えられる。西本遺跡群出土の脚付長頸壺は、石見東部地域ではみられない三角形透孔が施されているなどの

変化がみとめられ、在地製作の可能性が高い。ただ、やはり周辺では珍しい非常用器種とみなしうるもので、外見上の類似性に加え、墓で用いるところは石見東部地域と共通している。

石見東部地域と安芸地域西条盆地周辺では、互いの直接的交流を裏付ける考古資料は周辺時期において明確でないが、まったく無関係にそれぞれが製作されたとは考えにくい。西本遺跡群から若干北の、東広島市乃美１号遺跡で塩町式土器が出土していることなどから（石垣・吉田編2014)、安芸地域西条盆地周辺と備後北部地域の間に交流があった可能性は十分考えられる。西本遺跡群出土の脚付長頸壺は備後北部地域を介して、石見東部地域からの間接的影響を受けて製作された可能性が指摘できる。さらに踏み込めば、それを墓に供献するまでの行為の一連が、石見東部地域からの思想的影響を受けて行われた可能性も想定しうるであろう。



第21図　類似する脚付長頸壺の例

(4) 脚付長頸壺からみた備後北部地域の交流

ごく限定的にではあるが、脚付長頸壺という器種について、各地域における出土数、出土遺構からみた器種としての扱われ方、型式学的特徴や地域間関係について述べた。岡山県域とその他の県域では、外見をはじめ差異の明瞭な脚付長頸壺が展開していることがわかった。

佐田谷・佐田峠墳墓群は当該時期の備後北部地域では珍しく他地域系の、それも吉備系土器がまとまって出土している遺跡として注目されるが、今回の分析によれば、佐田峠２号墓出土の脚付長頸壺は、吉備でも備後南部地域よりは備中地域にその系譜を求めるべきものであり、墳墓群で起きている変化の影響元をより詳細に絞り込む上でも非常に示唆に富む事例である。また、三次市塩町遺跡の出土例からは、石見東部地域と安芸地域西条盆地周辺の間に、備後北部地域を介した情報の行き来が推測できる（第21図)。

備後北部地域で一括りにされる範囲でも、佐田谷･佐田峠墳墓群と塩町遺跡周辺の人々が、連なる盆地群の中で頻繁に接触しながらも、他方ではそれぞれが盆地の外側に独自の交流網を築いていたことが理解でき、そこからみえてくる地域社会へのイメージは決して閉鎖的なものではない。佐田谷・佐田峠墳墓群の造営母体をはじめ、瀬戸内・山陰両地方に通じる中国山地有数の大型盆地、三次・庄原盆地に暮らす地域集団は、東西南北に情報を伝える重要な役割を果たしていたと考えられる。

Ⅲ．中国地方の弥生墳丘墓における標石と土器供献

第１節　標石の発展と墳墓造営

木棺墓を埋置した墓壙上面に、「標石」と呼ばれる礫を配するものがある。被葬者を埋葬して木棺を埋め戻した後に礫を配置したと考えられている。すべての墓壙にともなうものではないが、中国地方に広く受容された葬送上の行為と想定されている。佐田谷・佐田峠墳墓群でも検出された墓壙上面に標石が多くみられた[17)]。弥生時代前期中葉から後期前葉にかけて、標石が検出された埋葬遺構のおもな調査事例を集成し（第４表)、その変遷を概観していくこととする（第23～27図)。

(1) 中国地方における標石の分類とその源流

標石は木棺墓にともなう場合が大半となる。中期後葉以降、広島県域でも安芸地域以西では箱形石棺が埋置される場合が多く、標石をもつ墳墓の分布域はそれ以東となる（第22図)。このような標石は墓標のひとつとされてはいるが（本間2005)、墓標として成立したわけではない。当初は木棺を被覆する目的をもっていたものの、その機能が形骸化していった過程をみることができる。また、結果的に地表面に配置される場合と、墳丘内部に埋め込まれる場合がある。一般的に墳丘が発達すると、墳丘内に埋め込まれていく傾向にあるといってよい。墳丘に埋め込まれる場合にも、標石の配置時期が異なる場合がある。

梅本健治および本間元樹、徳永隆ら先学の分類（梅本編1994、372～379頁、本間2005、徳永2005）を参考とし、標石の被覆機能の形骸化と墳丘墓の発展を考慮しながら、その配置形態と配石数による分類を試み、標石の変容過程を明らかにしていきたい。

全面被覆型　墓壙の封土を覆うように多数の大きな平石や角礫を配置する。あるいは、20石以上の石を使用して墓壙や木棺上面を被覆する。

周囲・側辺型　墓壙内に埋置された木棺上面の周囲に配石される。長辺のみの場合もあるが、いずれも10石以上の大きな平石や角礫を配置する。四周する場合と長辺付近のみの場合では石数が異なる。

四隅・両端型　墓壙の四隅や短辺、木棺小口部分などに複数の小礫を配置する。四隅あるいは方形区画を意識した配置（４石以上）にする場合や、小口両端を意識した配置（２石以上）にする場合があり、それぞれ四隅配置、両端配置とする。

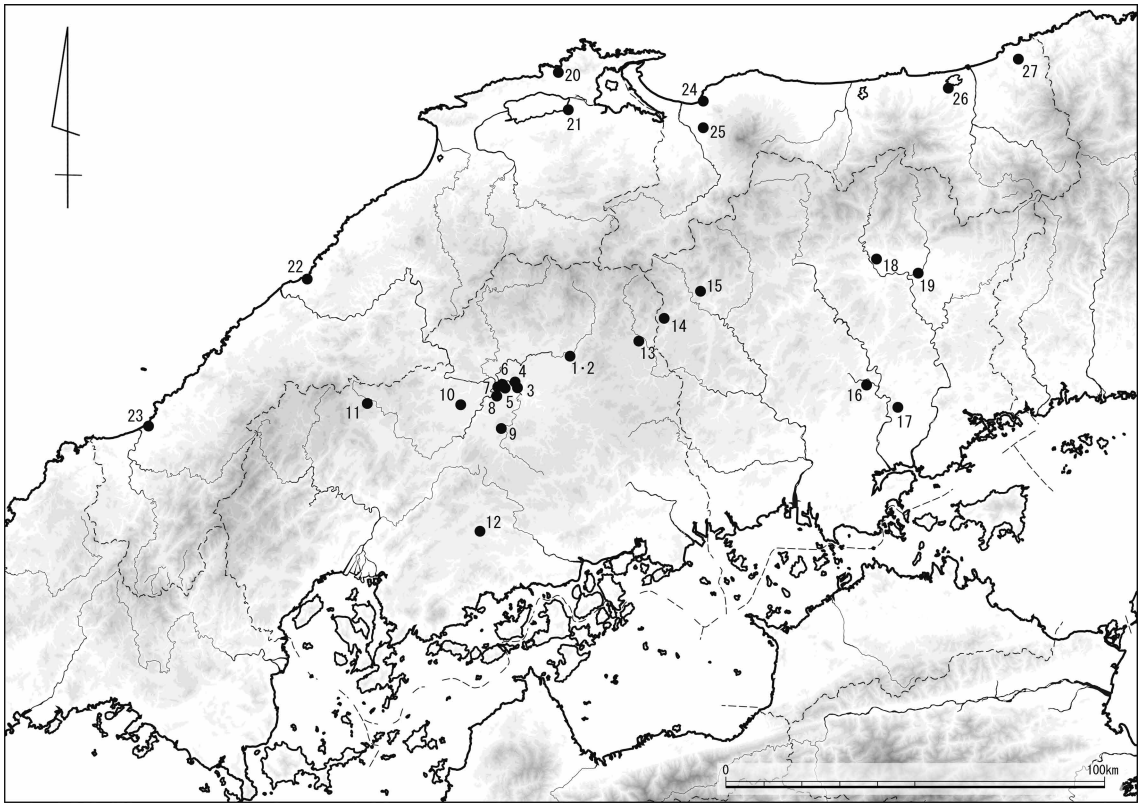
一部集中型　墓壙の一部にのみ、数石を配置する。墓壙掘形あるいは墓壙短辺付近に配置するものには四隅・両端型がさらに形骸化、衰退したとみなすことができるものがある。また、墓壙内側に遺存する場合、木棺が腐朽し落ち込んだ範囲に供献土器とともに遺棄された事例が多くなる。礫の形状

はさまざまであるが、すでに墓標としてではなく、土器の供献に関わる礫の使用と想定される。

ａ．全面被覆型

全面被覆型は、松江市堀部第１遺跡・友田遺跡、あるいは三次市高平遺跡・陣床山遺跡、山県郡岡の段Ｃ遺跡などにある[18]。

堀部第１遺跡（赤澤ほか編2005）　松江市堀部第１遺跡１・２号木棺墓では、人頭大よりもやや大きい石を墓壙上に配していた[19]。１号木棺墓（第23図１）は墓壙全長2.2m、幅90㎝、深さ30㎝程の規模で、墓壙床面に長側板・小口板の設置溝が検出された。墓壙検出面には長さ2.5m、幅1.5mの楕円形に25石の人頭大の角礫が巡らされる。周囲の角礫の内側には、それより大きい扁平な石が木棺上面を覆うように一列に配される。木棺の腐朽により、中央の石列がやや落ち込んだようだが、墓壙掘形から棺底までの深さが30㎝程しかないことから、棺木蓋上の重石として一列に配され、その周囲に角礫が楕円形状に取り囲んでいたと考えられる[20]。この標石の北側から前期中葉の小型壺が出土した。２号木棺墓（第23図２）は墓壙全長2.7m、幅90㎝、深さ20㎝程で、内部に丸木舟を転用したと想定される舟形の木棺痕跡が認められた。棺底からは碧玉製管玉４点と打製石鏃14点が出土したが、それぞれ東西に分



第22図　標石検出墳墓の分布図

1・2. 佐田谷・佐田峠　3. 陣山　4. 四拾貫　5. 宗佑池西　6. 花園　7. 高平　8. 大久保　9. 陣床山　10. 新迫南　11. 岡の段　12. 槇ケ坪　13. 戸宇大仙山　14. 西江　15. 横見　16. みそのお　17. 四辻　18. 竹田　19. 三毛ケ池　20. 堀部　21. 友田　22. 波来浜　23. 専光寺脇　24. 洞ノ原・仙谷　25. 日下　26. 松原　27. 新井三嶋谷

第４表　標石をもつ墳墓一覧

番号	遺跡名	所在地	墳墓形態	墓数	標石主要種別	時　期	文　献
1	佐田谷１号墓	広島県庄原市	四隅突出墓	4	四隅・両端型，一部集中型	後期初頭	妹尾編1987
	佐田谷２号墓	広島県庄原市	方形台状墓	3	一部集中型	後期前葉	妹尾編1987
	佐田谷３号墓	広島県庄原市	方形台状墓	6	四隅・両端型，一部集中型	後期前葉	妹尾編1987
2	佐田峠１号墓	広島県庄原市	方形台状墓	4	四隅・両端型，一部集中型	後期初頭	野島ほか2013
	佐田峠２号墓	広島県庄原市	方形台状墓	2	四隅・両端型，一部集中型	後期前葉	野島ほか2013
	佐田峠３号墓	広島県庄原市	四隅突出墓	5	四隅・両端型（派生）	中期末葉～後期初頭	野島ほか2009
3	陣山２号墓	広島県三次市	方形貼石墓	9	一部集中型	中期後葉	落田編1996
	陣山３号墓	広島県三次市	四隅突出墓	2	一部集中型	中期後葉	落田編1996
4	四拾貫小原	広島県三次市	土壙墓	4	墓壙上に貼石（全面被覆型）	中期後半	潮見編1969
5	宗祐池西１号墓	広島県三次市	四隅突出墓	1	一部集中型	中期後葉	尾本原編2000
6	花園１号墓	広島県三次市	方形貼石墓	215	四隅・両端型，一部集中型	前期後半～古墳初頭	中村・向田編1980
7	高平Ａ号墓	広島県三次市	円形積石墓	3	全面被覆型	前期後半	潮見・川越・河瀬1971ｂ
8	大久保Ｄ地点	広島県三次市	土壙墓他	4	全面被覆型	前期～中期	是光・加藤1979
9	陣床山	広島県三次市	木棺墓他	11	全面被覆型	不明	潮見編1973
10	新迫南円形周溝墓	広島県安芸高田市	土壙墓他	1	一部集中型	中期後葉か	加藤1979
11	岡の段Ｃ	広島県山県郡	木棺墓他	99	全面被覆型，周囲･側辺型，四隅・両端型，一部集中型	前期後半	梅本編1994
12	槇ケ坪２号	広島県東広島市	円形周溝墓	31	周囲・側辺型，四隅・両端型，一部集中型	中期後葉以前	青山・沢元編1990
13	戸宇大仙山Ｃ地点	広島県庄原市	土壙墓他	16	周囲・側辺型，一部集中型	不明	松村1979
14	西江北	岡山県新見市	木棺墓他	90	一部集中型	後期前葉～後葉か	正岡・田仲・二宮1977
	西江南	岡山県新見市	土壙墓他	32	周囲・側辺型，一部集中型	後期前葉～後葉か	正岡・田仲・二宮1977
15	横見墳丘下埋葬	岡山県新見市	木棺墓他	88	一部集中型	後期前葉前後	下澤・友成1977
16	みそのお６号墓	岡山県岡山市	木棺墓他	14	一部集中型	後期初頭	椿編1993
	みそのお８号墓	岡山県岡山市	木棺墓	4	一部集中型	後期初頭	椿編1993
	みそのお９号墓	岡山県岡山市	木棺墓他	10	一部集中型	後期初頭	椿編1993
	みそのお11号墓	岡山県岡山市	木棺墓他	14	一部集中型	後期前葉	椿編1993
	みそのお17号墓	岡山県岡山市	木棺墓他	14	一部集中型	後期前半	椿編1993
	みそのお18号墓	岡山県岡山市	木棺墓他	27	一部集中型	後期初頭～前葉	椿編1993
17	四辻Ａ地区	岡山県赤磐市	土壙墓他	19	一部集中型	中期中葉～後期末葉	神原編1973
	四辻Ｂ地区	岡山県赤磐市	方形台状墓	22	一部集中型	中期後葉～後期初頭	神原編1973
	四辻Ｃ地区	岡山県赤磐市	木棺墓他	31	一部集中型	中期中葉～後期末葉	神原編1973
18	竹田８号墓	岡山県苫田郡	四隅突出墓	18	墓壙上に列石か	後期初頭	今井・安川1984
19	三毛ケ池１号上層墓	岡山県津山市	円形貼石墓	4	一部集中型	後期前葉	小郷編1993
20	堀部第１	島根県松江市	木棺墓他	57	全面被覆型，周囲・側辺型	前期中葉	赤澤ほか編2005
21	友田Ａ区	島根県松江市	土壙墓他	26	全面被覆型，周囲・側辺型	中期前半	岡崎1983
	友田Ｂ区１号墓	島根県松江市	方形貼石墓	7	一部集中型	中期後半	岡崎1983
	友田Ｂ区２号墓	島根県松江市	方形貼石墓	9	一部集中型	中期後半	岡崎1983
	友田Ｂ区６号墓	島根県松江市	方形貼石墓	7	一部集中型	中期後半	岡崎1983
22	波来浜Ａ区２号墓	島根県江津市	方形貼石墓	3	一部集中型	中期中葉	門脇編1973
	波来浜Ｂ区２号墓	島根県江津市	方形貼石墓か	5	一部集中型	後期前半	門脇編1973
	波来浜Ｃ区１号墓	島根県江津市	方形貼石墓	9	一部集中型	後期前半	門脇編1973
23	専光寺脇２号墓周辺	島根県益田市	方形貼石墓	5	一部集中型	中期後半	東山編2008
24	洞ノ原18号墓	鳥取県西伯郡・米子市	土壙墓（木棺墓か）	1	墓壙上に円礫	後期前半	松本編2000ｂ
	洞ノ原19号墓	鳥取県西伯郡・米子市	土壙墓（木棺墓か）	1	一部集中型	後期前半	松本編2000ｂ
	仙谷３号墓	鳥取県西伯郡	木棺墓他（四隅突出墓か）	22	一部集中型	後期中葉～後半	松本編2000ａ
	仙谷５号墓	鳥取県西伯郡	木棺墓他	9	一部集中型	後期前半～中葉	松本編2000ａ
25	日下	鳥取県米子市	木棺墓	31	四隅・両端型，一部集中型	中期後葉	吾郷・小原・藤原編1992
26	松原１号墓	鳥取県鳥取市	方形台状墓	6	一部集中型	後期前葉	谷口編2012
27	新井三嶋谷１号墓	鳥取県岩美郡	方形貼石墓	4	一部集中型	中期後半	中野・松本・中島編2001

かれることから合葬が想定された。木棺の上には、長さ3.3m、幅1.2mの範囲に30石程が置かれていた。１号木棺墓とは若干異なり、２列の石列が配置され、その周囲に若干の角礫が付置されていた。石列北側の扁平な角礫は人頭大を大きく超えるもので、重石として棺木蓋を押さえ込むように入念に配置されていた。１号木棺墓と同じく、前期の小型壺が出土した。堀部第１遺跡では、このほかにも全面被覆型の標石をもつ前期の木棺墓が多数ある。標石は墓壙上に配置されるものの、厳密な配置の手順は見出しえない。しかし、いずれも木棺を埋置するものであることからすれば（徳永2005）、墓標の機能をもつとされる「標石」は木棺の上半部分を覆う礫槨状の施設が源流になると想定することができる。

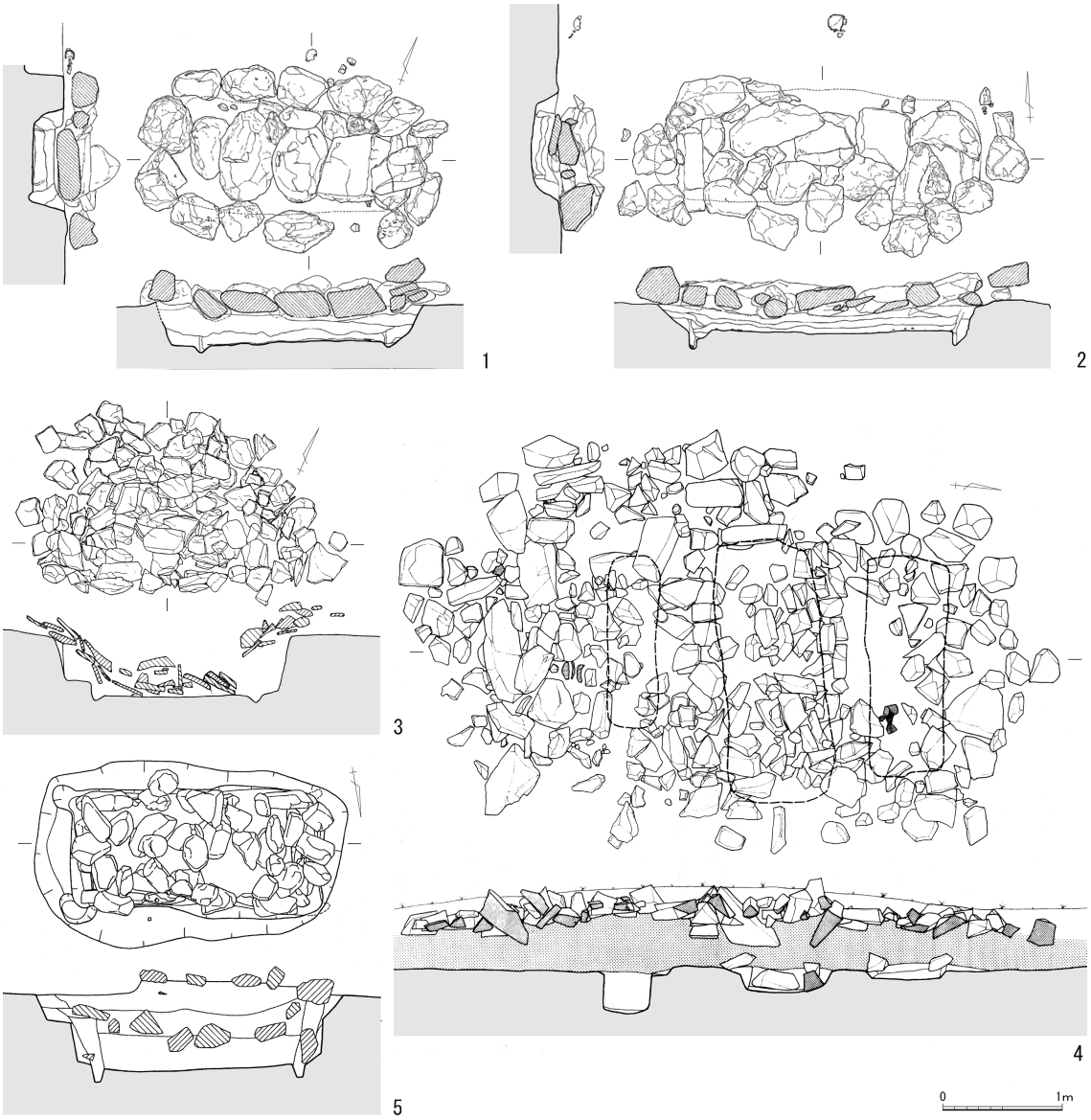
友田遺跡Ａ区（岡崎1983）　松江市友田遺跡Ａ区土壙墓群の方形区画北西で検出された木棺墓 SK04（第23図３）は全長2.0m、幅1.3m程の墓壙に木棺が埋置され、墓壙内棺外に木棺側板を支える裏込め石が埋め込まれていた。おそらく木棺には木蓋があったのであろう。墓壙全面、長さ2.9m、幅1.5m程の範囲を数十石の平石が覆っていたが、木蓋の腐朽とともに木棺内部に陥没した状態で検出された。土壙墓群出土の土器には後期前半のものがあるものの、長頸壺や石鏃の形態からは中期前葉段階から造営されていた木棺墓がかなり含まれている可能性が高い。

高平遺跡Ａ号墓（潮見・川越・河瀬1971b）　三次市高平遺跡Ａ号墓（第23図４）は並列した３基の墓壙の上に「黒フク」の封土が施され、長軸5.5m、短軸3.4mの長楕円形に角礫が積み込まれていた。南から第３・第２・第１主体部がそれぞれ配置されていたが、多数の角礫による封土の被覆は埋葬ごとに施されたもので、合計３回の埋葬の結果、最終的にひとつのまとまり（墳丘）になったと推測されている（妹尾編1987）。３基の墓壙それぞれに配石されていた可能性が高いことから、標石の部類に入るものといえる。木棺を埋置した墓壙を埋め戻し、封土を施した後に角礫で被覆しており、封土の被覆を目的としたとみることができる。出土土器からは前期後葉から中期前葉の段階と考えられている。

岡の段Ｃ地点遺跡（梅本編1994）　山県郡岡の段Ｃ地点遺跡では、墓壙上に河原石を積み込んだ木棺墓 SK47（第23図５）がある。墓壙全長2.5m、幅1.3～1.5mで、長側板を固定するために小ぶりの角礫を裏込め石として使用していた。その上に棺木蓋を押さえるために20～50㎝大の角礫約20石を全面に配置し、墓壙を埋め戻した後にさらに20～30㎝大の亜角礫11石で頭部側となる西側を中心に被覆したようである。出土土器から前期に位置付けられている。

このほかには三次市陣床山遺跡11号土壙墓（潮見編1973）がある。墓壙全長2.0m、幅80～95㎝で、掘形検出レベル付近に16石の角礫を配置する。中央の石がやや落ち込んだ状態にあった。土器の出土をみていないため、不確定ながら中期段階と想定されている。また、第Ⅴ章で詳述するように、四拾貫小原遺跡において確認された土壙墓群（墳丘後行型墳丘墓）の上部にみられた標石も簡略化してはいるものの、全面被覆型の範疇に含まれるものであろう。

全面被覆型となるものは現在のところ、九州北部地域に端を発し、弥生時代前期ごろには山陰地方島根県から江の川上流域の広島県北部地域にまで広がっていたことがわかる。木棺の側板外側に裏込めとなる礫を配置し、木棺や棺木蓋の固定と被覆に多数の石を使用してい



第23図　標　石（1）（1/60）
1．堀部第１遺跡１号木棺墓　2．堀部第１遺跡２号木棺墓　3．友田遺跡Ａ区木棺墓 SK04
4．高平遺跡Ａ号墓　5．岡の段Ｃ遺跡木棺墓 SK47

た。友田遺跡の調査報告でも「一種の石槨」と表現されており（岡崎1983、105頁）、木棺の上半部分を石で被覆することを目的としていたとみてよい。また、岡の段Ｃ地点遺跡木棺墓SK47でもわかるように、全面被覆型の標石をもつ木棺墓は墓壙全長が２ｍを超えるもので、集団墓内でも最大規模の墓壙にみられる標石の一形態として出現したものといえよう。さらには、その一方で墓壙封土上に配石される高平遺跡Ａ号墓のような特異な形態もみることができる。

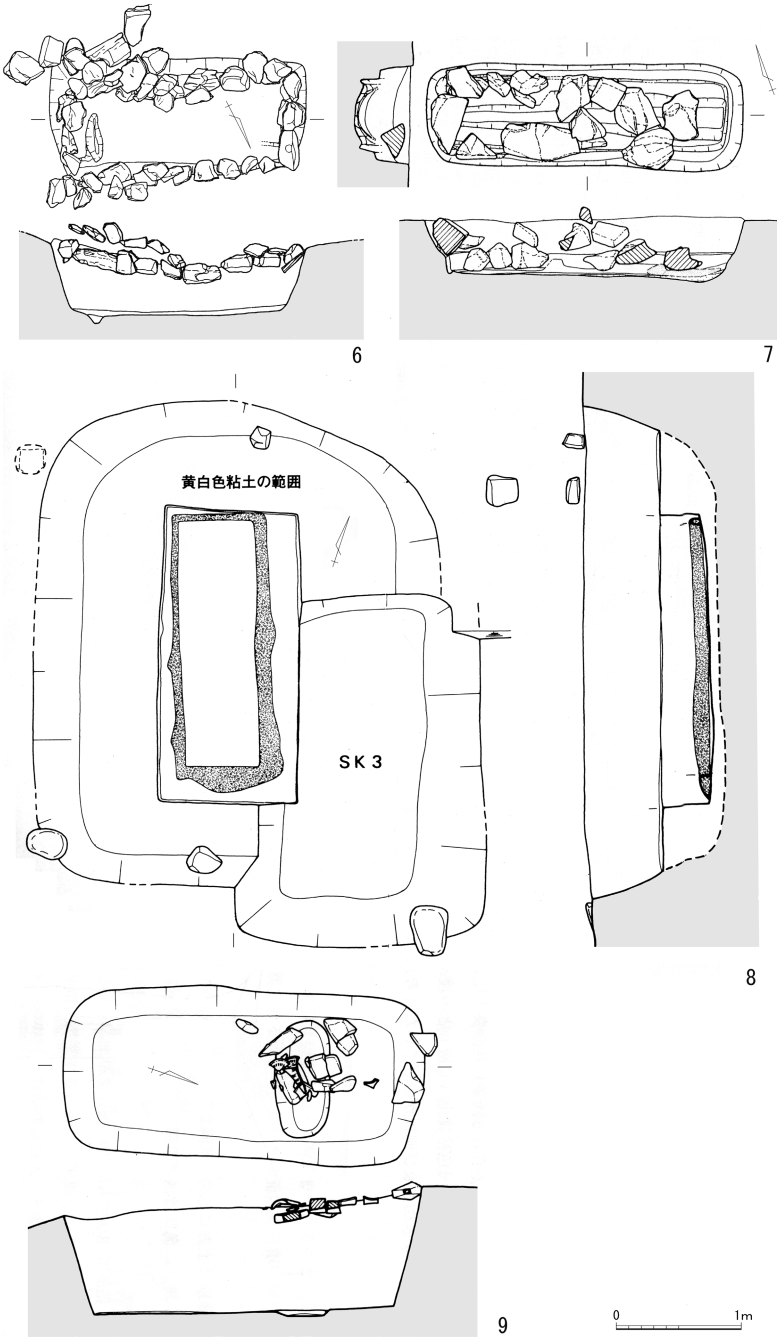
ｂ．周囲・側辺型

墓壙掘形の内側周囲や長辺側に配石されるもので、棺木蓋の被覆や固定のために施されたものと思われる。先述の堀部第１遺跡や友田遺跡のほか、東広島市槇ケ坪２号遺跡などに類

例がある。全面被覆型がみられた堀部第１遺跡や友田遺跡では、周囲・側辺型の標石をもつ墓壙もあるが、やはり全面被覆型と同様に木棺を内包する墓壙にのみ認められる。

友田遺跡Ａ区（岡崎1983）

松江市友田遺跡Ａ区木棺墓 SK05（第24図６）は周囲・側辺型の一例で、墓壙全長が2.05m、幅95cmとなる。木棺内からは緑色凝灰岩製管玉13点が出土した。木棺を設置して埋め戻した後に50石程の角礫が墓壙掘形の内側周囲に配石されており、木棺の上面周囲に配置されていた可能性が高い。あるいは、墓壙そのものを覆う棺木蓋や有機質物質があったと想定した場合、それらを上から固定していたとも考えられる。堀部第１遺跡16号墓でも、木棺上面直上周囲に配石されていたことが土層断面図から推測でき（赤澤ほか編2005、36頁図42)、墓壙上面を押さえ込んでいた可能性が高い。このことから、全面被覆型の簡略化した配石形態と考えることができる。友田遺跡Ａ区木棺墓 SK05は後期前葉となる方形貼石墓の周溝掘削に先立って埋葬されており、出土管玉からも中期後葉以前に遡る可能性が高い。木棺墓 SK05の東側、木棺墓 SK08も同様に周囲・側辺型である。緑色凝灰岩製勾玉10点、翡翠あるいは天河石とされる勾玉１点、緑色凝灰岩製管玉約400点を副葬していた（岡崎1983、深田編2005、71頁)。これらの出土遺物からも中期前葉から中葉段階を中心とした時期を与えることができる（守岡2007)。



第24図　標　石（2）（1/60）
6.　友田遺跡Ａ区木棺墓 SK05　7.　槇ケ坪２号遺跡木棺墓 SK01
8.　佐田谷１号墓墓壙 SK2　9.　佐田谷１号墓墓壙 SK1

槇ケ坪２号遺跡（青山・沢元編1990）　東広島市槇ケ坪２号遺跡には、円形周溝墓の中心に位置する木棺墓 SK01（第24図７）がある。墓壙全長2.5m、幅80㎝の大型二段墓壙に割竹状の底部をもつ組合せ式の木棺が埋置されていた。かなり大きな角礫11石が木棺の腐朽によって沈み込んだ状態で検出されたが、本来墓壙掘形内側の縁辺に連なって配石されていたようである。棺の構造は不明瞭ながら、木棺側板上端に沿って配置されていたとみられ、棺木蓋が存在した場合、その周囲を覆っていたと推測することができる。円形周溝墓の中心埋葬であることや、棺内頭部に朱の散布が認められていることなどから、墓域を造営した集団内における優位性が指摘されている（青山・沢元編1990、264頁）。出土土器の特徴や被葬者に射込まれた打製石鏃から、中期後葉以前を想定することが妥当であろう。

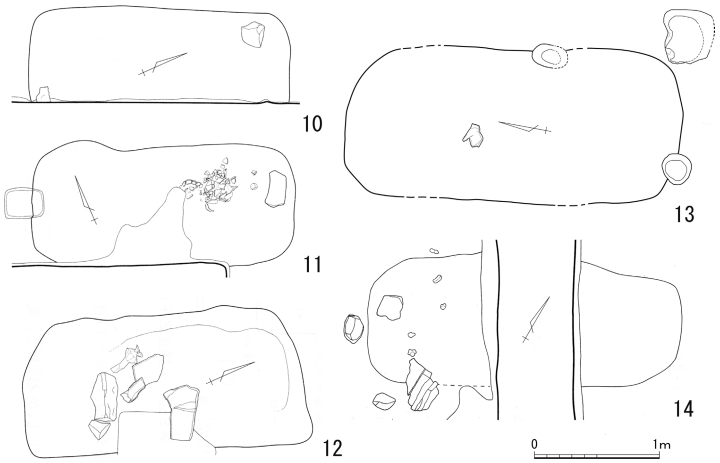
周囲・側辺型は全面被覆型とは異なり、木棺側板や小口板を固定する裏込め石などと共に使用される状況にはなく、石数も少なくなる。しかし、依然として重く大きな角礫を使用すること、墓壙上面や木棺上面に配石されることなどから、やはり木棺の上面部分を固定して覆う機能が継続していたといってよい。また、全面被覆型と同様に、墓群内でも優位性を示す埋葬施設にみられる場合も多く、中期段階であるにも関わらず副葬品が含まれている埋葬施設も少なくない。

(2) 被覆機能の形骸化と佐田谷・佐田峠墳墓群

ａ．四隅・両端型

上述の２タイプ（全面被覆型と周囲・側辺型）は人頭大あるいはそれを超える重い平石や角礫を多数使用し、木棺を保護･被覆する目的で配石されたものであることを指摘してきた。しかし、後述する２タイプ（四隅・両端型と一部集中型）は前二者とは異なる。小さな円礫をわずかに使用するだけとなり、木棺上面部分を保護・被覆する機能をもたなくなる。このようなタイプは中期後葉から後期前葉にかけて顕著になるもので、佐田谷・佐田峠墳墓群においても確認された。以下に両墳墓群における調査事例を示しておく。

佐田谷・佐田峠墳墓群（妹尾編1987、野島ほか2013、野島編2016、今西・辻村編2017）　おもに墓壙短辺付近に数石が配置される。墓壙掘形の四隅あるいは両短辺を意識した配置が多い。佐田谷１号墓（妹尾編1987）は後期初頭に築造された四隅突出型墳丘墓である。その中心墓壙 SK2（第24図８）は



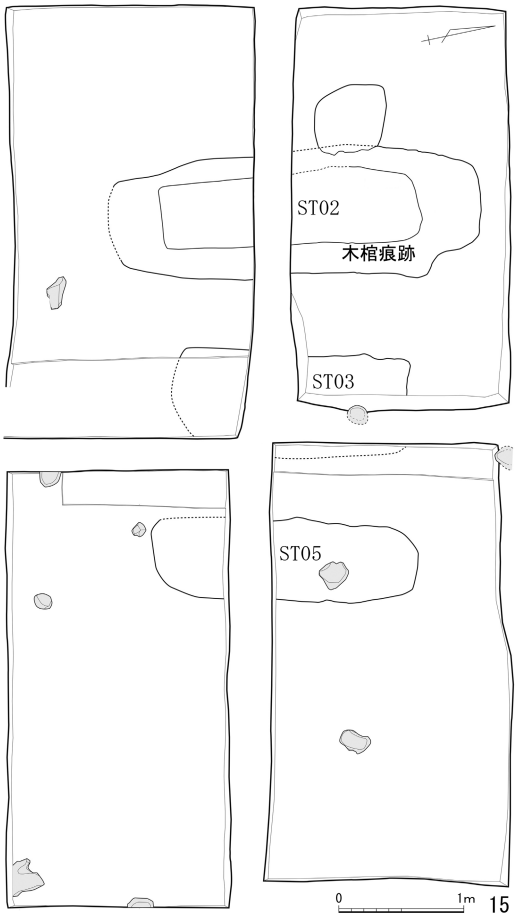
第25図　標　石（3）(1/60)

10．佐田峠２号墓墓壙 ST07　11．佐田峠１号墓墓壙 ST08
12．佐田峠２号墓墓壙 ST06　13．佐田谷３号墓墓壙 SK15
14．佐田谷２号墓墓壙 SK11

重複する墓壙 SK3によって一部破壊されているが、墓壙全長が3.8m、幅3.2m程となる。墓壙の中央には木槨に覆われた木棺を埋置する。調査報告（妹尾編1987）によれば、墓壙の四隅と短辺中央にそれぞれひとつずつ、合計６石の円礫・亜円礫が配置されていたとする[21)]。四隅あるいは方形区画を意識した配置であることから、四隅配置としてよい。しかし一見してわかるように、四隅配置となる配石は、木棺や木槨を被覆するものではない。とくに中心埋葬として大型化した墓壙 SK2の場合、木棺を覆う木槨があり、さらにそれを埋め戻した土によって被覆されているため、標石自体には棺を被覆する機能がなくなってしまっている。このような場合、標石の配置には木棺の被覆行為に潜在していた葬送儀礼上の表象的な意味合いが存続していた可能性があろう。

小型墓壙の場合、たとえば後期前葉に降る佐田峠２号墓の墓壙 ST07（全長2.07m、幅73㎝）（第25図10）においても、その墓壙対角線上の両端に小さな礫２石を検出した（野島ほか2013、野島編2016）。両端配置とすることができる。配石数も最小限にまで減少し、かつ石自体もかなり小さくなっていることがわかる。

同様に後期前葉に降る佐田谷３号墓の墓壙 SK15（第25図13）でも四隅配置の可能性のある標石が検出された（今西・辻村編2017、12頁）。墓壙 SK15は全長2.65m、幅1.25mで、小判形の平面形をもつ。佐田峠墳墓群同様に墓壙検出のみの確認調査であったため、内部の構造については不明なものの、墓壙南側短辺に河原石２石、長辺中央近くに１石が配置されていた。墓壙北半については表土近くの検出であったためか、標石の確認はできなかった。後期初頭となる佐田峠１号墓の墓壙 ST08（第25図11）は全長2.07m、幅95㎝で、両墳墓群では比較的小型の墓壙であるが、墓壙東側短辺に平石を置く。これも表土近くでの検出のため、もう一方の短辺となる西側の標石の有無については明らかにできなかったが、両端配置の可能性もあろう。しかし、木棺上からは破砕された高杯などが出土したことから（野島ほか2013、野島編2016）、これらの土器の供献に関わる平石であった可能性もあるかもしれない。



第26図　標　石（4）（1/60）
15．佐田峠３号墓標石 SX01

佐田峠３号墓標石 SX01の配置時期（野島編2016）　墳丘の発達とともに標石の配置だけでなく、その層位的な位置にも注意せねばならない。木棺の腐朽により、墓壙掘形よりも下位レベルから検出される場合もあるが、多くは墓壙

検出面とほぼ同レベルにある。つまり、基本的には木棺を配置し、墓壙を埋め戻した後に置かれていたと推測することができる。一方で墓壙を埋め戻し、さらに墓壙封土や墳丘盛土を施した後に墓壙上付近に標石が配置される場合もある。

佐田峠３号墓は中期末葉から後期初頭に築造された四隅突出型墳丘墓で、墳丘長辺15.3m、墳丘中央部の南北がおよそ7.05mとなる。標石 SX01（第26図15）は墳頂平坦部直下より検出された河原石の列である。この石列は墳丘長辺に平行してほぼ一直線に２列並んでいた。墓壙の平面的位置からは全体に南東側にずれているものの、佐田谷１号墓の中心埋葬となる墓壙 SK2と同様に、四隅・両端型の派生とみることもできよう。佐田峠３号墓の埋葬施設では、墓壙埋め戻し土の上面にある封土を盛土で覆った後に標石の配置が行われており、一連の埋葬を完了して一定の時間が経た後に配石を行う特異な状況をみることができる。この標石 SX01が配置された段階で墳丘構築の区切りがあったのかもしれない。埋葬に関わる儀礼的な行為が引き延ばされた可能性も捨てきれないといえよう。

なお、三次・庄原地域では埋葬施設（墓壙）に封土を施した後、あるいは墳丘を構築した後に標石を配した事例は連綿と続いていたように思われる。先述したように、三次市高平遺跡Ａ号墓に佐田峠３号墓の先例がある。また、第Ⅴ章第１節においても詳述するように、中期後半の三次市四拾貫小原遺跡（墳丘墓）も先例とすることができる。墳丘構築後に標石が施されたことから、貼石を施す段階に墓壙位置を示す意図があったものともみられ、初源的な貼石の一形態とみることもできる。いずれの事例も埋葬後一定の時間を置いた後でさえ、墓壙（被葬者）の位置に対して特定の意識をもち続けていたことを示している。墓壙に埋置された木棺の被覆から、新たに墳丘に埋設されてしまった墓壙（被葬者）を「想起」する社会行為として標石が配置されていったものとも想像ができ、葬送儀礼上の変化をみることができるだろう。

ｂ．一部集中型

佐田谷・佐田峠墳墓群（妹尾編1987、野島ほか2013、野島編2016、今西・辻村編2017）　墓壙の一部にのみ、数石を配置する。後期初頭の佐田谷１号墓の墓壙 SK1（第24図９）は全長2.72m、幅1.34mで、比較的大型の墓壙である。木棺痕跡も明瞭に観察された（妹尾編1987）。しかし、先述した墓壙 SK2とは異なり、墓壙直上に甕や高杯とともに亜角礫を遺棄していた。一部集中型の典型例とみることができる。調査報告（妹尾編1987、19頁）では、木棺頭部付近に供献された高杯の周りに据え置かれたものと想定されている。

佐田峠２号墓の墓壙 ST06（第25図12）は全長2.20m、幅1.07mとなる。墓壙北側では棺木蓋の腐朽による落ち込み土と想定される土質の異なる部分が検出された。さらにその直上から標石４石と完形の脚付長頸壺が出土した（野島ほか2013、野島編2016）。一部集中型とすることができる。扁平な平石の形状やその検出状況、供献土器との位置関係からみても、佐田谷１号墓 SK1と同様に土器を中心としてその周囲に標石が据え置かれていた可能性が高い。このほか、佐田谷２号墓の中心埋葬と考えられる墓壙 SK11（第25図14）がある。墓壙掘形は周辺埋葬によって破壊されており、その規模は不明ながら、長さ４m以上、幅３m

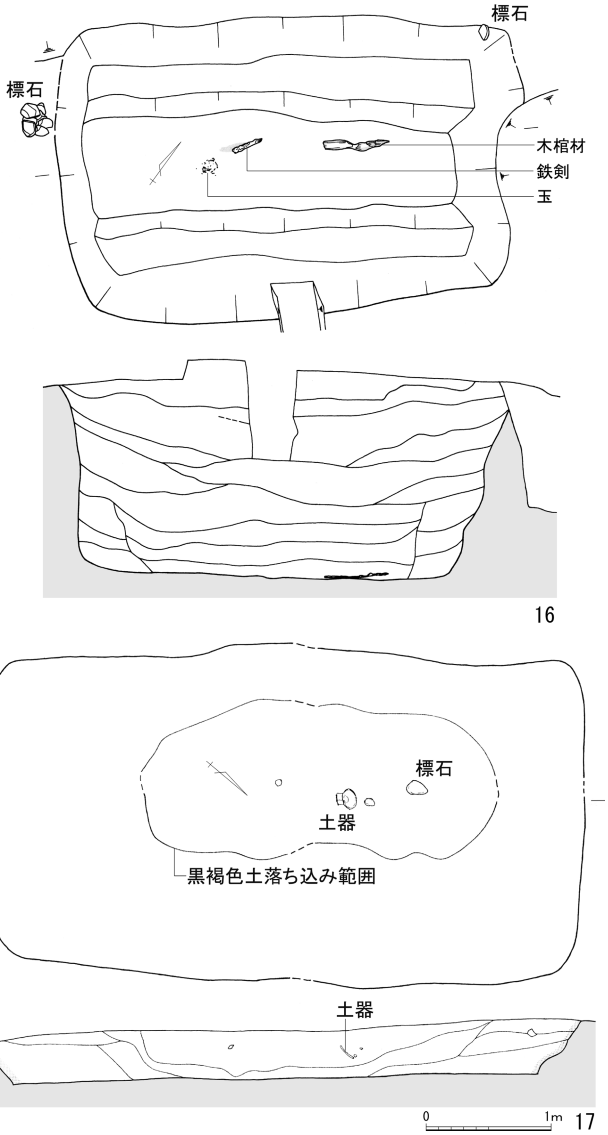
以上の規模をもつと推定される。佐田谷１号墓の中心埋葬である墓壙 SK2と同等あるいはそれ以上の規模と想定できる。墓壙の中心には木棺の腐朽による落ち込みの埋土となる土質の異なった部分（全長2.5m、幅推定1.05m）があり、その落ち込み埋土の検出面直上から甕とともに標石３、４石が出土した。これも一部集中型の可能性がある（野島ほか2013）。

以上の３例はいずれも後期初頭から前葉に属し、木棺の腐朽にともなう落ち込み埋土が確認され、かつ標石が供献土器とともにひとまとめにされた可能性が高い。後期以降の墳丘墓では、木棺の腐朽にともなって落ち込む場所に供献土器とともに遺棄される円礫がみられるようになる。先述した佐田谷１号墓の中心墓壙 SK2でも、標石のほかに木棺腐朽にともなう落ち込みの埋土にも多数の拳大程の円礫が高杯や脚付鉢などとともに出土している。一部集中型の標石は供献土器と共伴する場合が多く、供献土器との関連性をもって配置されていたものが遺棄された状態で検出されたといえる。これらの事例からは、大量の円礫と供献土器が遺棄されていく後期後葉前後の大型墳丘墓の遡源的な状況をみることができる。

(3) 配石の衰退と葬送儀礼の変容

後期前葉以降、標石の検出例はさらに減少していくが、一部集中型となる標石が存続する。

松原１号墓（第27図16）（谷口ほか2012）　後期前葉となる鳥取市松原１号墓の６基の埋葬施設のなかの１基で、中心埋葬と考えられる第１主体部は墓壙全長3.70m、幅2.40m、深さ1.54mとなる大型の二段墓壙である。墓壙内部には全長２mにもなる箱形木棺が埋置されていた。棺内からは鉄剣１点、ガラス製管玉17点、小玉60点が出土した。墓壙上面には南西掘形外側に自然石８石、北西掘形付近に１石が検出された。南西掘形外側に積み上げられた８石は壺や高杯などの供献土器とともに出土したことから一部集中型とみなすことができる。これらの標石は第１主体部墓壙を覆う封土層（53層）



第27図　標　石（5）（1/60）
16. 松原１号墓第１主体部
17. 新井三嶋谷１号墳丘墓第３主体部

（谷口ほか2012、13頁第５図）に含まれる。この土層は墓壙中央で32㎝と深くなることから、箱形木棺の腐朽による落ち込みの埋土と判断でき、標石もこの埋土の堆積とほぼ同じタイミングで遺棄されたと想定することができる。

新井三嶋谷１号墳丘墓（第27図17）（中野・松本・中島編2001）　後期前葉の岩美郡新井三嶋谷１号墳丘墓は大型の方形貼石墳丘をもつ。墳頂平坦部南東側の埋葬施設、第３主体部の墓壙全長は4.8m、幅2.74mにもなる。墓壙は完掘されていないため、その全容は明らかではない。墓壙上面において木棺腐朽にともなう黒褐色の落ち込み埋土が、長さ2.85m、幅1.28mの範囲で検出された。標石３石はこの落ち込み埋土から小型器台とともに出土した。また、このほかにも「玉砂利」とされる10数点の小円礫が確認された。

両墳丘墓はともに後期前葉段階にも関わらず、墓壙の大型化が顕著である。一部集中型の標石は墓壙の埋め戻しを行った後、木棺の腐朽後になされる葬送儀礼の一部に利用された可能性が高い。このような標石の性格変化は、やはり中期後葉から後期前葉にかけての墳丘と墓壙の大型化と同調して起こっていたと考えられる。

中国地方のいわゆる標石はその出現当初、木棺上面部分の保護・被覆あるいは墓壙封土の被覆を直接的な目的とした被葬者のランク表示に関わる重要な施設であり、単なる墓標として成立したわけではなかった。中期には、配石数も急速に少なくなっていき、木棺の保護・被覆といった機能は低減していった。中期末葉から後期初頭には墳丘墓が発達していく過程で埋葬施設の保護・被覆は封土・盛土によって代替され、痕跡的な配石行為だけが存続した。後期前葉には墓壙の大型化と墓壙上における土器供献祭祀の盛行にともない、供献土器とともに円礫が配置されたが、木棺の腐朽後に遺棄されるものとなった。このような、いわゆる標石の機能変化は、後期後葉における出雲市西谷３号墓（渡邊・坂本編2015）や京丹後市赤坂今井墳丘墓（石崎・岡林2001）などにみられるような供献土器と円礫による大規模な葬送祭祀が発達していく契機ともなったといえる。

第２節　土器供献の諸相とその評価

佐田谷・佐田峠墳墓群では、中期末葉から後期前葉にかけて、土器の供献された位置が墳丘外から墳頂平坦部や墓壙上に変化することが判明している（野島編2016）。同時期の周辺地域における土器供献のあり方と比較した場合、この変化はどのように評価できるだろうか。

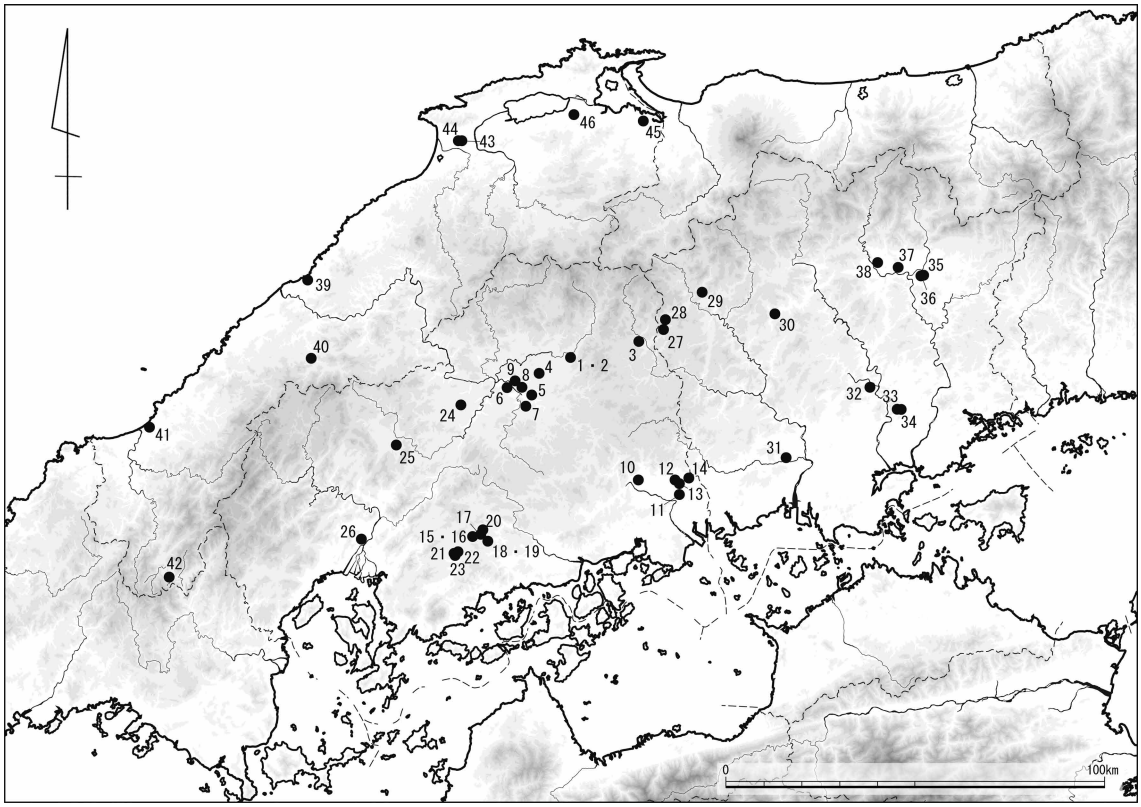
(1) 周辺地域における土器供献のあり方

佐田谷・佐田峠墳墓群で起きている土器供献の変化を考えるために、周辺時期における広島県域、岡山県域、島根県域の状況を照らしてみたい。時期は中期中葉から後期前葉とし、墳丘や周溝による区画をもたない遺構も対象に含めた（第28図、第５～７表）[22]。

ａ．広島県域

備後北部地域　墳丘隅部に微弱な突出を有する出現期の四隅突出型墳丘墓を中心に、配石構造によって墳丘の内と外を区画する方形貼石墓が築かれており、同じく方形貼石墓が分布する山陰地方との繋がりが確認できる。佐田谷・佐田峠墳墓群以外で墳墓の時期と土器の供献位置が明瞭な例としては、三次市陣山墳墓群や宗祐池西１号墓、庄原市田尻山１号方形墓を挙げることができる。これらの墳丘墓では、墳丘裾部や周溝など墳丘外に土器が供献されていることが特徴であり、墳丘裾部が意識されたことがわかる。第Ⅴ章で詳述する三次市四拾貫小原墳丘墓や殿山38号墓では、墳丘上から土器が転落したことが想定される。無区画墓では、土器の供献状況がわかる例は少ないが、三次市大仙大平山22号墳下層の石棺墓SK1では、墓壙縁辺部に在地系甕が少数、完形で供献されていた。また、庄原市戸宇大仙山遺跡Ｄ地点の土壙墓群では墓域内から土器が出土している。直接墓壙にともなうかたちでは出土していないが、本来墓壙上に供献された可能性も否定できない（加藤1989）。

上記してきた遺跡では、土器の多くは完形の状態で供献されたと考えられ、陣山墳墓群では底面穿孔が顕著にみられた。個体数は４個体以下に留まる場合が多いが、田尻山１号方形



第28図　土器供献関連遺跡の分布図

1・2．佐田谷・佐田峠　3．戸宇大仙山　4．田尻山　5．大仙大平山　6．宗祐池西　7．殿山　8．陣山
9．四拾貫小原　10．山の神　11．溝下　12．加茂倉田　13．吹越　14．池之坊　15・16．西本
17．槇ケ坪　18・19．高屋東　20．浄福寺　21．陣が平西　22．狐ケ城跡　23．鏡西谷　24．新迫南
25．歳ノ神　26．長う子　27．横田　28．西江南　29．横見　30．谷尻　31．黒宮大塚　32．みそのお
33．四辻　34．宮山　35．三毛ケ池　36．西吉田　37．下道山　38．竹田　39．波来浜　40．やつおもて
41．専光寺脇　42．前立山　43．小畑　44．白枝荒神　45．宮内　46．友田

第５表　土器供献を行う墳墓一覧（広島県）

番号	遺跡名	所在地	墳墓形態	遺構名	埋葬施設	器　種	出土位置	土器状態	穿　孔	時　期	文　献
1	佐田谷１号墓	庄原市	四隅突出墓	－	－	甕２，壺１，器台２	周溝	完形，破砕	不明	後期初頭	妹尾編1987
	佐田谷１号墓	庄原市	四隅突出墓	SK1	木棺	甕１，高杯１	墓壙上	完形	不明	後期初頭	妹尾編1987
	佐田谷１号墓	庄原市	四隅突出墓	SK2	木棺・木槨	甕，鉢，壺，高杯，脚付鉢等30個体以上	墓壙上	破砕	不明	後期初頭	妹尾編1987
	佐田谷１号墓	庄原市	四隅突出墓	SK4	木棺	高杯１	墓壙上	不明	不明	後期初頭	妹尾編1987
	佐田谷２号墓	庄原市	方形台状墓	－	－	壺１，器台２	周溝	不明	不明	後期前葉	妹尾編1987
	佐田谷２号墓	庄原市	方形台状墓	SK11	木棺	甕３	墓壙上	不明	不明	後期前葉	野島ほか2013，今西・辻村編2017
	佐田谷３号墓	庄原市	方形台状墓	－	－	甕１，器台１	周溝	不明	不明	中期末葉	妹尾編1987
	佐田谷３号墓	庄原市	方形台状墓	SK14	木棺	鉢１，高杯２，脚付鉢３，器台１	墓壙上	完形，破砕か	不明	後期前葉	今西・辻村編2017
2	佐田峠１号墓	庄原市	方形台状墓	ST08	土壙	甕２，鉢２，壺１，高杯２，脚付鉢１	墓壙上	破砕	不明	後期初頭	野島編2016
	佐田峠２号墓	庄原市	方形台状墓	ST06	土壙	甕２，鉢１，壺１	墓壙上	完形	不明	後期前葉	野島編2016
	佐田峠３号墓	庄原市	四隅突出墓	－	－	甕６，壺２，高杯７，脚付鉢１	墳頂	不明	不明	中期末葉～後期初頭	野島編2016
	佐田峠４号墓	庄原市	四隅突出墓	－	－	甕３	周溝	完形	不明	中期末葉	野島編2016
	佐田峠５号墓	庄原市	方形周溝墓	－	－	甕２	周溝か	不明	不明	中期末葉	野島編2016
3	戸宇大仙山Ｄ地点	庄原市	墓群	不明	不明	甕４，鉢１，脚付鉢１，器台２	不明	不明	不明	中期後葉	松村1979
4	田尻山１号墓	庄原市	四隅突出墓	－	－	甕９，鉢１，壺１，高杯１	墳裾	完形	不明	後期初頭	向田1978
5	大仙大平山22号墳下層	三次市	墓群	SK1	石棺	甕３	墓壙肩	完形	不明	後期前葉	落田編2000
6	宗祐池西１号墓	三次市	四隅突出墓	－	－	壺１，脚付鉢２	周溝	完形	胴部穿孔１	中期後葉	尾本原編2000
7	殿山38号墓	三次市	四隅突出墓	－	－	鉢１，高杯２，脚付鉢１	墳丘上	不明	不明	中期後葉	道上1987
8	陣山１号墓	三次市	四隅突出墓か	－	－	壺２	周溝	完形	底面穿孔１	中期後葉	落田編1996
	陣山２号墓	三次市	貼石墓	－	－	甕３，壺１，高杯２	犬走状平坦面，周溝	完形	底面穿孔１	中期後葉	落田編1996
	陣山３号墓	三次市	四隅突出墓	－	－	甕，壺	周溝	完形	底面穿孔１	中期後葉	落田編1996
	陣山４号墓	三次市	四隅突出墓	－	－	鉢，壺	張出状施設，周溝	完形	底面穿孔２	中期後葉	落田編1996
	陣山５号墓	三次市	四隅突出墓	－	－	甕，壺	周溝	完形	不明	中期後葉	落田編1996
9	四拾貫小原	三次市	貼石墓か	－	－	底部３，脚付鉢１	墳丘上か	完形	不明	中期後半	潮見編1969
10	山の神	府中市	墓群	SK20	土壙	高杯２	墓壙上	完形か	杯底穿孔１	中期後葉	小野編1998
	山の神	府中市	墓群	SK25	木棺	高杯	墓壙上	完形	不明	中期後葉	小野編1998
	山の神	府中市	墓群	SK26	木棺	甕	墓壙上	完形	胴部穿孔	中期後葉	小野編1998
11	溝下	福山市	単独	SK1	土壙	甕７，鉢１，脚付鉢か２	墓壙上	破砕か	不明	中期後葉	山岡・江草2015
12	加茂倉田	福山市	墓群	SK1	木棺	鉢１	墓壙上	完形	不明	後期前葉	畑2000
13	吹越	福山市	墓群	２号土壙	木棺	甕，壺，高杯	墓壙上	完形か	不明	中期後葉	高倉編1981
14	池之坊２号墓	福山市	区画墓	第１埋葬施設	土壙	甕１，壺１	墓壙上か	完形	不明	中期後葉	平林2004
15	西本Ａ地点	東広島市	区画墓	周溝内埋葬	土壙	長頸壺１	墓壙上	完形	底部穿孔か	中期後半	金井編1976
16	西本６号	東広島市	不明	SK20	土壙	高杯か，甕か２	墓壙上	破砕か	不明	中期後葉	中山編1996
	西本６号	東広島市	墓群	SK24	土壙	甕か	墓壙上	完形か	不明	不明	篠原ほか編1997
	西本６号	東広島市	墓群	SK31	土壙	鉢	墓壙上	完形か	不明	不明	篠原ほか編1997
	西本６号	東広島市	墓群	SK36	土壙	鉢	不明	不明	不明	後期前葉	篠原ほか編1997
	西本６号	東広島市	墓群	SK43	土壙	鉢	墓壙上	完形か	不明	中期後葉	篠原ほか編1997
	西本６号	東広島市	墓群	SK58	土壙	鉢	墓壙上	完形	不明	中期後葉	篠原ほか編1997
	西本６号	東広島市	墓群	SK77	石棺	壺，高杯	棺内	完形か	不明	後期前葉	篠原ほか編1997
	西本６号	東広島市	墓群	SK97	石棺	鉢	墓壙上	完形	不明	後期前葉	篠原ほか編1997
	西本６号	東広島市	墓群	SK148	木棺	鉢	墓壙上	完形	不明	後期前葉	篠原ほか編1997

	西本６号	東広島市	墓群	SK161	土壙	鉢，壺	棺上か	完形	不明	中期後葉	篠原ほか編1997
17	槇ケ坪３号Ａ地区	東広島市	墓群	SK4	木棺か	壺２	墓壙上か	不明	不明	中期後葉	青山･沢元編1990
	槇ケ坪３号Ｂ地区	東広島市	墓群	SK2	土壙	高杯	墓壙上か	不明	不明	中期後葉	太田編1988
	槇ケ坪３号Ｂ地区	東広島市	墓群	SK6	土壙	甕，鉢	墓壙上	完形	不明	中期後葉	太田編1988
18	高屋東２号	東広島市	墓群	SK3	土壙	鉢	不明	不明	不明	中期後葉	植田編2008
	高屋東２号	東広島市	墓群	SK11	土壙	甕	墓壙上か	完形か	不明	中期後葉	植田編2008
	高屋東２号	東広島市	墓群	SK14	土壙	壺	墓壙上	完形	不明	中期中葉～後葉	植田編2008
	高屋東２号	東広島市	墓群	SK17	土壙	壺	墓壙上	不明	不明	中期後葉	植田編2008
	高屋東２号	東広島市	墓群	SK18	土壙	鉢，壺	墓壙上	完形	不明	中期後葉	植田編2008
	高屋東２号	東広島市	墓群	SK26	土壙	甕２，壺，高杯	不明	不明	不明	中期後葉	植田編2008
	高屋東２号	東広島市	墓群	SK27	土壙	甕２，壺，高杯	不明	不明	不明	中期後葉	植田編2008
	高屋東２号	東広島市	墓群	SK28	土壙	甕２，壺，高杯	不明	不明	不明	中期後葉	植田編2008
	高屋東２号	東広島市	墓群	SK29	土壙	甕２，壺，高杯	不明	不明	不明	中期後葉	植田編2008
	高屋東２号	東広島市	墓群	SK32	土壙	脚付長頸壺	墓壙上	完形か	不明	中期後葉	植田編2008
	高屋東２号	東広島市	墓群	SK35	土壙	壺	墓壙上	完形	不明	中期後葉	植田編2008
19	高屋東３号	東広島市	墓群	SK2	土壙	甕３＋，鉢，壺２＋，高杯か	不明	不明	不明	後期初頭	植田編2008
20	浄福寺２号	東広島市	墓群	SK11	木棺	甕	墓壙上	完形	胴部穿孔	後期前葉	佐々木・山田編1993
21	陣が平西２号	東広島市	貼石墓	－	－	甕２，鉢１，高杯１	周溝か	完形	胴部穿孔１	後期初頭	植田編2015
22	狐ケ城跡	東広島市	墓群	SK02	石棺	甕１，底部１	棺上	完形か		後期前葉	植田1983
23	鏡西谷Ｈ地区	東広島市	墓群	SK01	土壙	甕１，高杯１	墓壙上か	不明	不明	後期前葉	藤野編2003
24	新迫南	安芸高田市	墓群	不明	不明	甕，鉢，壺，高杯，脚付鉢	区画溝	完形	不明	中期後葉	加藤1979
25	歳ノ神１号墓	山県郡	区画墓	SK1-1	土壙	甕	墓壙上	完形	不明	後期前葉	佐々木編1986
26	長う子	広島市	墓群	１号土壙	土壙か	甕５，鉢	墓壙上	不明	不明	後期初頭	桧垣1984

墓のように、後期にかかる時期から多くの土器を供えた例がある。器種としては大多数が甕で、壺や脚付鉢が加わる。脚付鉢には注口のない小型品、注口付きの大型品があるが、両者の間には使途の違いが想定できる。前者については中期の宗祐池西１号墓では墳丘外に供献されたが、後期初頭の佐田谷１号墓では墳頂平坦部で使用されたと考えられる。墳墓からの出土が多いが、出土位置は高杯など他の器種と差がない。後者については墳丘墓では殿山38号墓や佐田谷・佐田峠墳墓群で出土しているが、墳丘外に供献された例はなく、墳頂平坦部で使用された祭祀用器種であることがわかる。

備後南部地域　方形貼石墓などの明確な区画墓はなく、備後北部地域でみられたような、墳丘裾部への意識自体がなかったと考えられる。土壙墓・木棺墓では墓壙上に土器が供献された例が少数確認できる。府中市山の神墳墓群、福山市吹越２号土壙墓などで、甕や壺、高杯が１～３点の少数、完形で供献されていたが、福山市溝下遺跡では甕を中心に10個体程度と、比較的多数の土器が供献されていた。備後南部地域では、甕は胴部、高杯は杯部底面に穿孔された例がみとめられる。

安芸地域　東広島市西本６号遺跡、槇ケ坪３号遺跡、高屋東２号遺跡など、安芸地域でも西条盆地周辺に、土壙墓や木棺墓、そして、少ないが石棺墓の墓壙上に土器が供献された例が集中している。また、西本６号遺跡では、１例のみであるが石棺墓の棺内に壺と高杯が副葬された例が確認できる。区画墓は非常に少ないが、西本遺跡Ａ地点の周溝墓状遺構で、周溝

第６表　土器供献を行う墳墓一覧（岡山県）

番号	遺跡名	所在地	墳墓形態	遺構名	埋葬施設	器　種	出土位置	土器状態	穿　孔	時　期	文　献
27	横田４区	新見市	墓群	１号土壙墓	木棺	壺１，高杯３＋，脚付鉢１，器台２＋	墓壙上	破砕	底面穿孔１	後期前葉	岡田ほか1978
28	西江南土壙墓群	新見市	墓群	113号土壙墓	土壙	甕３，壺７	墓壙上	完形	底面穿孔４	後期前葉	正岡・田仲・二宮1977
29	横見７号墓下層	新見市	墓群	６号土壙墓	土壙	壺	墓壙上	不明	不明	後期前葉	下澤・友成1977
	横見７号墓下層	新見市	墓群	８号土壙墓	土壙	甕	棺内	完形	底面穿孔	後期前葉	下澤・友成1977
	横見東斜面木棺墓群	新見市	墓群	W-７	土壙	高杯	墓壙上	完形	不明	後期前葉	下澤・友成1977
30	谷尻５区	真庭市	墓群	No30.土壙	土壙	甕３，壺２，高杯２	墓壙上	不明	不明	後期前葉	高畑ほか1976
31	黒宮大塚北側墳墓	倉敷市	方形台状墓	前方部(C地点)	土壙	甕，鉢，高杯，脚付鉢	斜面（転落か）	不明	不明	後期前葉※混入あり	間壁忠・間壁葭・藤田1977
32	みそのお６号墓	岡山市	台状墓	第１埋葬施設	土壙	甕１，高杯１	墓壙上	完形	不明	後期前葉	椿編1993
	みそのお６号墓	岡山市	台状墓	第３・４埋葬施設	土壙	甕１，壺１	墓壙上	完形	不明	後期前葉	椿編1993
	みそのお６号墓	岡山市	台状墓	第９埋葬施設	土壙	壺１	墓壙上	完形か	不明	後期前葉	椿編1993
	みそのお８号墓	岡山市	台状墓	第２埋葬施設	土壙	高杯１	墓壙上	完形	不明	後期初頭	椿編1993
	みそのお９号墓	岡山市	台状墓	第２埋葬施設	土壙	甕１，高杯１	墓壙上	完形	不明	後期前葉	椿編1993
	みそのお９号墓	岡山市	台状墓	第４埋葬施設	土壙	甕１	墓壙上	完形	不明	後期前葉	椿編1993
	みそのお９号墓	岡山市	台状墓	第５埋葬施設	土壙	甕１	墓壙上	完形	不明	中期後葉	椿編1993
	みそのお９号墓	岡山市	台状墓	第７埋葬施設	土壙	甕１，高杯１	墓壙上	不明	不明	後期初頭	椿編1993
	みそのお９号墓	岡山市	台状墓	第９埋葬施設	土壙	壺１	墓壙上	不明	不明	後期前葉	椿編1993
	みそのお10号墓	岡山市	台状墓	第１埋葬施設	土壙	甕１，壺１，高杯１	墓壙上	不明	不明	後期前葉	椿編1993
	みそのお10号墓	岡山市	台状墓	第３埋葬施設	土壙	壺１，高杯１	墓壙上	不明	不明	後期前葉	椿編1993
	みそのお10号墓	岡山市	台状墓	第７埋葬施設	土壙	甕１	墓壙上	不明	不明	後期前葉	椿編1993
	みそのお11号墓	岡山市	台状墓	第１埋葬施設	土壙	甕１，高杯１	墓壙上	不明	不明	後期前葉	椿編1993
	みそのお11号墓	岡山市	台状墓	第２埋葬施設	土壙	壺１	墓壙上	不明	不明	中期後葉	椿編1993
	みそのお11号墓	岡山市	台状墓	第６埋葬施設	土壙	甕１	墓壙上	不明	不明	中期後葉	椿編1993
	みそのお11号墓	岡山市	台状墓	第９埋葬施設	土壙	高杯１	墓壙上	完形	不明	後期前葉	椿編1993
	みそのお12号墓	岡山市	台状墓	第１埋葬施設	土壙	甕１	墓壙上	不明	不明	後期前葉	椿編1993
	みそのお12号墓	岡山市	台状墓	第２埋葬施設	土壙	甕１，壺１	墓壙上	完形	不明	後期前葉	椿編1993
	みそのお12号墓	岡山市	台状墓	第３埋葬施設	土壙	甕１	墓壙上	不明	不明	後期前葉	椿編1993
	みそのお12号墓	岡山市	台状墓	第５埋葬施設	土壙	甕１	墓壙上	不明	不明	後期前葉	椿編1993
	みそのお12号墓	岡山市	台状墓	第６埋葬施設	土壙	高杯１	墓壙上	不明	不明	後期初頭	椿編1993
	みそのお18号墓	岡山市	台状墓	第１埋葬施設	土壙	底部１	墓壙上	不明	不明	後期前葉	椿編1993
	みそのお18号墓	岡山市	台状墓	第５埋葬施設	土壙	甕１	墓壙上	不明	不明	後期前葉	椿編1993
	みそのお18号墓	岡山市	台状墓	第６埋葬施設	土壙	壺１	墓壙上	完形	不明	後期前葉	椿編1993
	みそのお18号墓	岡山市	台状墓	第７埋葬施設	土壙	甕１，高杯１	墓壙上	不明	不明	後期前葉	椿編1993
	みそのお18号墓	岡山市	台状墓	第９埋葬施設	土壙	壺１	墓壙上	不明	不明	後期前葉	椿編1993
	みそのお18号墓	岡山市	台状墓	第11埋葬施設	土壙	甕１	墓壙上	不明	不明	後期前葉	椿編1993
	みそのお18号墓	岡山市	台状墓	第13埋葬施設	土壙	甕１	墓壙上	完形	不明	後期前葉	椿編1993

	みそのお18号墓	岡山市	台状墓	第14埋葬施設	土壙	高杯１	墓壙上	不明	不明	後期前葉	椿編1993
	みそのお18号墓	岡山市	台状墓	第18埋葬施設	土壙	底部１，高杯２	墓壙上	完形	不明	後期前葉	椿編1993
	みそのお18号墓	岡山市	台状墓	第21埋葬施設	土壙	甕１	墓壙上	完形	不明	後期前葉	椿編1993
	みそのお18号墓	岡山市	台状墓	第22埋葬施設	土壙	甕１	墓壙上	不明	不明	後期前葉	椿編1993
	みそのお18号墓	岡山市	台状墓	第26埋葬施設	土壙	高杯１	墓壙上	完形	不明	後期前葉	椿編1993
33	四辻	赤磐市	方形台状墓	第15土壙	土壙	不明	埋土中	不明	不明	中期後葉	神原編1973
	四辻	赤磐市	方形台状墓	第24土壙	土壙	不明	埋土中	不明	不明	中期中葉※混入あり	神原編1973
	四辻	赤磐市	方形台状墓	第28土壙	土壙	壺，高杯，坩	墓壙上	不明	不明	中期後葉※混入あり	神原編1973
	四辻	赤磐市	方形台状墓	第30土壙	土壙	脚付壺	墓壙上	完形	不明	中期後葉	神原編1973
	四辻	赤磐市	方形台状墓	第38土壙	土壙	９個体以上	墓壙上	不明	不明	中期後葉	神原編1973
	四辻	赤磐市	方形台状墓	第33土壙	土壙	高杯等５個体以上	墓壙上	不明	不明	中期後葉	神原編1973
	四辻	赤磐市	方形台状墓	第34土壙	土壙	高杯等６個体以上	墓壙上	不明	不明	中期後葉	神原編1973
	四辻	赤磐市	方形台状墓	第35土壙	土壙	高杯４等７個体以上	墓壙上	完形	不明	中期後葉※混入あり	神原編1973
	四辻	赤磐市	方形台状墓	第36土壙	土壙	高杯４等７個体以上	墓壙上	不明	不明	中期後葉	神原編1973
	四辻	赤磐市	方形台状墓	第37土壙	土壙	高杯４等７個体以上	墓壙上	不明	不明	中期中葉か	神原編1973
	四辻	赤磐市	墓群	第52土壙	土壙	高杯１等２個体	墓壙床面	完形	不明	中期中葉	神原編1973
	四辻	赤磐市	墓群	第57土壙	土壙	高杯４等５個体	墓壙上	不明	不明	中期後葉※混入あり	神原編1973
34	宮山	赤磐市	方形台状墓	第５土壙	土壙	甕10，高杯９，脚付坩２等20個体以上	墓壙上	破砕か	不明	後期初頭	神原編1973
35	三毛ケ池下層墓	津山市	台状墓	土壙墓７	土壙	甕	墓壙上	不明	不明	中期中葉	小郷編1993
	三毛ケ池下層墓	津山市	台状墓	土壙墓９	土壙	壺	墓壙上	不明	不明	中期中葉	小郷編1993
	三毛ケ池下層墓	津山市	台状墓	土壙墓12	土壙	高杯	墓壙上	不明	不明	中期中葉	小郷編1993
	三毛ケ池下層墓	津山市	台状墓	土壙墓31	土壙	高杯	墓壙上	不明	不明	中期中葉	小郷編1993
	三毛ケ池下層墓	津山市	台状墓	土壙墓33	土壙	甕，高杯	墓壙上	不明	不明	中期中葉	小郷編1993
	三毛ケ池下層墓	津山市	台状墓	土壙墓35	土壙	甕，壺	墓壙上	不明	不明	中期中葉	小郷編1993
	三毛ケ池下層墓	津山市	貼石墓か	－	－	甕，鉢，壺	斜面（転落か）	不明	不明	後期前葉	小郷編1993
36	西吉田	津山市	墓群	土壙墓４	土壙	甕23，壺６，高杯２，器台３等35個体	墓壙上か	破砕	不明	中期後葉	行田編1985
37	下道山２号墓	津山市	方形台状墓	－	土壙	甕，壺，高杯	墓壙上，斜面・溝（転落か）	不明	不明	後期前葉	栗野1977
38	竹田８号墓	苫田郡	四隅突出墓か	－	－	鉢２，高杯２	墳裾，墳頂	完形	不明	後期前葉	今井・安川1984

内墓壙上に壺１点が供献されていたほか、陣が平西２号遺跡では方形貼石墓が検出されており、確実に共伴するかは不明だが、周溝から甕・鉢・高杯が出土している。当該地域では、土器は墓壙上に完形の状態で供献されたと考えられる例が多い。穿孔は主流でなく、胴部穿孔を２例確認できたにすぎない。個体数は１、２点程度の少数が基本となっている。器種は甕・壺のほか小鉢はとくに顕著で地域的特徴ということができ、高杯は稀である。

西条盆地周辺以外では、広島市長う子遺跡、山県郡歳ノ神１号墓で墓壙上土器供献がみられる。また、安芸高田市新迫南遺跡では、土壙墓群を区画した溝に土器が完形の状態で供献されており、中には原位置でなく、上方の墓域内から流れ込んだ可能性のある土器も含まれている。西条盆地周辺を除いては、分布は非常に散発的で、地域的特徴までは判然としない。

ｂ．岡山県域

備中・備前地域　備中地域では新見市横田遺跡や横見墳墓群、備前地域では岡山市みそのお

遺跡、赤磐市四辻土壙墓群や宮山方形台状墓などが挙げられる。ほとんどの場合、土器は墓壙上や掘形縁辺部から出土し（妹尾編1987・川上1995・重松2005・古屋2007)、確実に墳丘裾部に土器供献を行った例は皆無である。区画墓である台状墓でも、墳丘の大部分が自然地形を利用して形成されるためか、備後北部地域や山陰地方でみられる方形貼石墓と比べて墳丘裾部が明瞭でない場合が多い。墳丘裾部の意識が定着していない可能性が指摘できる。

供献された土器は、甕・壺・高杯を基本として、鉢・脚付鉢などがそれに加わり、器種構成は比較的多彩である。出現頻度は甕が高く、高杯がそれに次ぐ。墳墓形態に関わらず、甕は１個体、高杯は複数個体出土する傾向にある。土器は完形での供献が推定できる例が多いが、破砕供献と考えられる例も少数みられる。穿孔はほとんど確認できないが、備中北部地域では底面穿孔の例がある。

美作地域　区画墓が発達し、台状墓のほかに、津山市三毛ケ池遺跡上層墓、苫田郡竹田８号墓のような貼石墓がみられる点は注目される。なかでも竹田８号墓は四隅突出型墳丘墓とされ（今井・安川1984)、完形の鉢や高杯が墳頂平坦部のほか墳丘裾部にも供献されているなど、山陰地方の影響を強く感じさせる。三毛ケ池遺跡下層台状墓では墓壙上から甕・壺・高杯が１、２点、同上層墓や津山市下道山遺跡２号方形台状墓では、墓壙上あるいは墳丘上から甕・鉢・壺・高杯など少数の土器が出土している。一方で、無区画墓の津山市西吉田遺跡では、墓壙上から甕など35個体もの土器が出土しており、一見普遍的な土壙墓ながら、集中的に土器が供献された特異な様相を示している。狭い範囲に土器片が密集しており、破砕後に集められたものであろう。

ｃ．島根県域

石見地域　区画墓として、方形貼石墓が多くみられる地域である。江津市波来浜遺跡では、中期後半から方形貼石墓が築造されている。土器の多くは墓壙内に副葬されており、そのほか、墓壙上あるいは墳頂平坦部に供献された例が少数みとめられる。どちらの場合も器種としては甕が多く、完形の状態である。後期には個体数が増える傾向がある。浜田市やつおもて遺跡でも同様な状況が確認されており、こちらも甕を主体に墓壙上、墓壙内に土器が完形で供えられていた。

山口県との境に近い内陸部の鹿足郡前立山遺跡では、丘陵斜面を削り出し、区画溝を巡らした墓が確認されており、墓壙上や区画溝から土器が出土している。特異な形態の墳墓で、出土土器も山口県域と共通する特徴をもち、島根県域の他遺跡とは様相が異なる。

出雲地域　出雲市白枝荒神遺跡、安来市宮内遺跡のように、無区画墓では墓壙上への土器供献が確認でき、器種構成は複数の甕が中心となる。出雲市小畑遺跡では、土器棺墓の墓壙内に完形の土器が副葬されていた。松江市友田遺跡では、土壙墓群の中に墓壙上土器供献を行った例があるほか、多数築かれている方形貼石墓では、周溝に完形の土器が複数供献されていた。甕・鉢・壺といった島根県域で通有の器種のほか高杯が供献されたが、高杯は友田遺跡以外では判然としない。

以下に概観してきた各地域の特徴を大まかにまとめておく。

第７表　土器供献を行う墳墓一覧（島根県）

番号	遺跡名	所在地	墳墓形態	遺構名	埋葬施設	器　種	出土位置	土器状態	穿　孔	時　期	文　献
39	波来浜Ａ区２号墓	江津市	貼石墓	第１埋葬施設	土壙	壺１	墓壙肩	完形	不明	中期中葉	門脇編1973
	波来浜Ａ区２号墓	江津市	貼石墓	第２埋葬施設	土壙	甕１	墓壙内	完形	不明	中期中葉	門脇編1973
	波来浜Ａ区２号墓	江津市	貼石墓	第３埋葬施設	土壙	甕１	墓壙内	完形	底面穿孔	中期中葉	門脇編1973
	波来浜Ｂ区１号墓	江津市	貼石墓	第２墓壙	土壙	甕４，鉢４，壺１等12個体	墓壙上	完形	不明	後期前葉※混入あり	門脇編1973
	波来浜Ｂ区２号墓	江津市	貼石墓	第１埋葬施設	土壙	甕５，鉢３	墓壙内	完形	胴部穿孔３	後期前葉	門脇編1973
	波来浜Ｂ区２号墓	江津市	貼石墓	第２埋葬施設	土壙	甕２	墓壙内	完形	不明	後期前葉	門脇編1973
	波来浜Ｂ区２号墓	江津市	貼石墓	第３埋葬施設	土壙	甕２，鉢１	墓壙内，墓壙肩	完形	不明	後期前葉	門脇編1973
	波来浜Ｂ区２号墓	江津市	貼石墓	第４埋葬施設	土壙	甕１	墓壙内	完形	不明	後期前葉	門脇編1973
	波来浜Ｂ区３号墓	江津市	貼石墓	－	－	甕１，鉢３，壺２	墳頂	完形	不明	後期前葉	門脇編1973
40	やつおもて	浜田市	墓群	１号土壙	土壙	甕５，鉢１，壺１	墓壙内，墓壙上	完形	不明	後期前葉	角田1992
41	専光寺脇２号墓	益田市	貼石墓	第１埋葬施設	土壙	壺１	墓壙上	不明	不明	中期中葉	東山編2008
42	前立山	鹿足郡	墓群	SX03	土壙	不明	墓壙上，墓域全体	破砕か	不明	不明	内田ほか1980
	前立山	鹿足郡	墓群	SX05	土壙	壺１	墓壙上，墓域全体	破砕か	不明	中期中葉	内田ほか1980
	前立山	鹿足郡	墓群	SX06	木棺	壺１	墓壙上，墓域全体	破砕か	不明	中期中葉	内田ほか1980
43	小畑	出雲市	墓群か	SK04	土器棺	甕５＋	墓壙内	完形	底面	後期前葉	宮澤・阿部2007
44	白枝荒神	出雲市	単独	SK02	土壙	甕４＋	墓壙上	破砕か	不明	中期後葉	米田・三原編1997
45	宮内	安来市	単独	Ⅰ区 SK-03	土壙	甕１＋，壺２＋	墓壙上か	完形か	不明	中期後葉	宮本・山尾編1993
46	友田Ａ区土壙墓群	松江市	墓群	SK13	土壙	高杯１	墓壙上	不明	不明	中期後葉	岡崎1983
	友田Ｂ区１号墓	松江市	－	－	貼石	甕４，高杯３	周溝	完形	胴部穿孔	中期	岡崎1983
	友田Ｂ区２号墓	松江市	－	－	貼石	甕４，壺１，高杯２	周溝	不明	不明	中期後半	岡崎1983
	友田Ａ区貼石墓	松江市	－	－	貼石	甕４，鉢３	墳丘上，周溝	完形	不明	後期前半	岡崎1983

①　備後北部地域　方形貼石墓が主流で、墳丘裾部など墳丘外に土器が供献される。器種は甕を筆頭に壺・脚付鉢が多く、個体数は４点以下、土器の状態は完形と推定されるものが多い。穿孔は甕や壺の胴部・底面に施された例があるが、三次盆地に集中する。

②　備後南部地域　区画墓は明瞭でなく、土壙墓・木棺墓の墓壙上に土器が供献される。器種は甕・壺・高杯がおもで、個体数は３点以下、状態は完形である。甕の胴部、高杯の杯底部に穿孔された例がある。

③　安芸地域（西条盆地周辺）　区画墓は少なく、土壙墓・木棺墓・石棺墓の墓壙上に土器が供献される。器種は甕・壺のほか小鉢がとくに目立ち、個体数は２点以下が多く、状態は完形である。穿孔は甕や壺の胴部・底面にみられるが、少数である。

④　備中・備前地域　区画墓は台状墓、無区画墓は土壙墓・木棺墓がおもで、石棺墓は発達しない。墳墓形態を問わず墓壙上に土器が供献され、器種は甕・鉢・壺・高杯・脚付鉢など幅広く、甕は少数、高杯は多数出土する傾向がある。個体数は多く、状態は完形が多いが、破砕供献もみられる。穿孔は備中北部地域で甕や鉢の底面に施された例がみられるが、その他では明瞭でない。

⑤　美作地域　区画墓が発達し、貼石墓が存在する。土器の供献位置は墓壙上が多いが、墳丘裾部への供献が１例ある。器種は甕・鉢・壺・高杯・器台があり、個体数は少数の場合が

多い。完形、破砕の両方があるが、穿孔が施された例は明瞭でない。
⑥　石見地域　土壙墓のほか、方形貼石墓が存在する。墳墓形態を問わず墓壙内や墓壙上に土器が副葬・供献された例が確認できる。器種は甕・鉢・壺が主体となるが、甕が卓越する。個体数は１、２点程度の少数が基本であるが、後期には多数の土器をともなう傾向にある。状態は完形の場合が多い。胴部・底面に穿孔された甕が少数みられる。
⑦　出雲地域　方形貼石墓では周溝内に、土壙墓では墓壙上に土器が供献される。器種は比較的少なく、複数の甕のほか壺・高杯が少数みられ、個体数は４点以上の場合が多い。状態は完形がおもである。胴部・底面に穿孔された甕が少数みられる。

(2) 佐田谷・佐田峠墳墓群における変化の評価

土器供献を中心としてみた変化の影響元　佐田谷・佐田峠墳墓群では、中期後葉では佐田谷３号墓、佐田峠４号墓にみられるように供献土器は周溝内から出土するが、後期初頭以降になると佐田谷１・２号墓、佐田峠１・２号墓のように、墓壙上からも土器が出土するようになる。

墓壙上への土器供献は、地域内で発展的に継承されたものとする理解もあり（加藤1989)、加藤は三次市高平遺跡Ａ号墓（潮見・川越・河瀬1971b）や山県郡塚迫遺跡（桑原・伊藤1982）を、周辺地域における前期の類例として挙げている。またこのほか、中期段階にも安芸高田市新迫南遺跡群、庄原市戸宇大仙山遺跡Ｄ地点で墓壙上土器供献が行われた可能性が残されている。ただし、少なくとも貼石墓などの区画墓において墓壙上土器供献は確認されていないため、佐田谷・佐田峠墳墓群におけるそれらについては、外的影響も想定すべきであろう。墓壙上土器供献そのものは、先述してきたように周辺地域では一般的にみられるが、両墳墓群で墓壙上土器供献が確認された墳丘墓には必ず吉備系土器がともなっていることから、吉備地域からの影響が想定されよう（妹尾編1987、古屋2007)。

土器供献の位置に加えて、後期初頭以降の佐田谷１号墓や佐田谷３号墓上層埋葬群、佐田峠１号墓では甕や壺だけでなく、複数の鉢や高杯、器台など供献された器種が多様になっており、甕や壺、小型脚付鉢などを少数供献する、中期以前の伝統的なやり方との違いが窺われる。また、土器を破砕して供献する例があることも、備後北部地域ではみられなかったやり方である。こうした器種構成、そして類例は少ないが土器を破砕する点は、備中・備前・美作地域でもみられた特徴である。

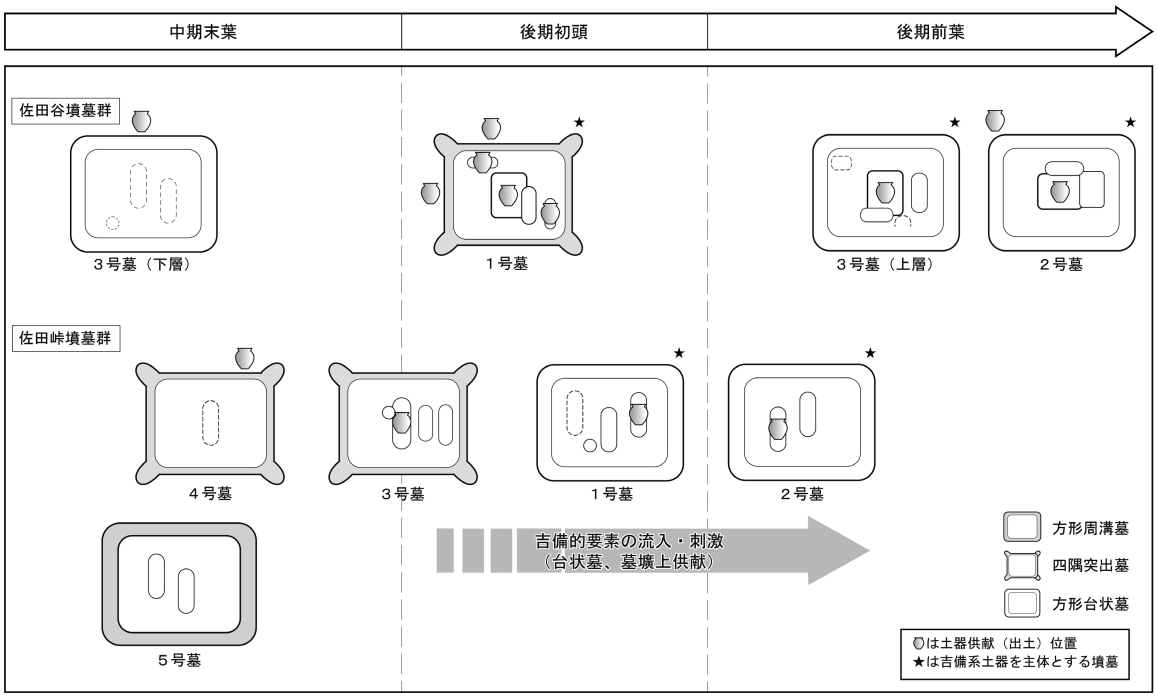
土器供献のあり方に加え、注目されるのは、佐田谷２・３号墓や佐田峠１・２号墓といった方形台状墓の存在である。整理してきたように、同時期の備後北部地域においては、多段に配石を行い、墳丘を周囲と区画する方形貼石墓が主流であるが、備中・備前地域では、地山を削り出して墳丘の大部分を形成する台状墓が区画墓として発達する。

これらの土器供献における特徴と、方形台状墓という墳墓形態は、当該時期の備後北部地域の他の墳墓では確認されていない。吉備系土器が出土している墳墓自体が、現状では佐田谷・佐田峠墳墓群に限られており、吉備系土器と墓壙上土器供献、方形台状墓は両墳墓群内

においても高い確率で組み合わさっている。以上のことから、後期を境にみられる諸要素は、吉備地域からの影響によるものと考えられ、両墳墓群を造営した集団がある程度一体的に墓制を受容したことが想定できる。優れた比較対象として後期初頭の庄原市田尻山１号方形墓がある。佐田谷・佐田峠墳墓群と比べて、中期における貼石墓の分布の中心地である三次盆地に近いここでは、方形貼石墓の墳丘裾部に、完形の在地系甕を主体とする土器が供献されていた。このように、吉備系土器の出土しない墳丘墓では、後期になっても伝統的なあり方が継続する点は注目される。

吉備系要素の受容・変容と墳墓群の意義　中期から後期にかけて、両墳墓群の造営が在地的なものから吉備地域の影響を強く受けたものへと変化していく（第29図）。四隅突出型墳丘墓で、在地系の完形土器を少数周溝内に供献する中期末葉の佐田峠４号墓は在地的な墓の好例、方形台状墓で、吉備系土器を墓壙上に供献する後期初頭から前葉の佐田峠１・２号墓は吉備的な墓の好例と捉えることができる。この対照的な二者は入れ替わるように時期を違えて築かれている。同時に、両者の折衷的な墓も築かれている。佐田谷１号墓は、四隅突出型墳丘墓という在地的な墳墓形態をとりながら、吉備系の土器を主体とした祭祀を行い、墓壙上と周溝の両方に土器を供献している。墓壙上の土器は吉備系、周溝に据え置かれた甕は在地系を主体とする、明瞭な相関性も窺われ、異なる地域に系譜をもつ墳墓祭祀が組み合わさった姿をみせている。

ただし、他地域からの影響だけでは理解できない部分もある。まず、土器供献のあり方は、たしかに吉備地域でもみられる墓壙上土器供献であるものの、少数の甕や脚付鉢、多数の高杯などを中心に、出土個体数は非常に多く、備後北部地域はおろか吉備地域の伝統的な土器



第29図　土器供献と墳丘墓の変化模式図

供献形態からも逸脱している。

このような土器配置について、興味深い考察がある（古屋2007）。古屋は吉備地域の中期後葉以降の土器供献について、赤磐市四辻土壙墓群などを例に挙げ、甕・高杯を主体に少数の鉢･壺などを墓壙上に配置する「四辻型土器配置」として後期中葉以降の様相と区別した。一方の山陰地方および備後北部地域については、中期後半から後期前葉では周溝や墳丘裾部に甕が置かれる事例が主体となるが、後期中葉以降になると中心主体部上に多数の土器を置く「山陰型土器配置」が定着するとする。そして、その初源的な形態は後期初頭の佐田谷１号墓で出現しているとし、出土土器の意匠も合わせて、吉備地域の四辻型土器配置が備後北部地域を介して伝わったことで、山陰型土器配置の成立が促されたと考えている。古屋によれば、山陰型土器配置で供献される土器の数は墓壙規模に比例して多くなる傾向があり、被葬者のステータスと儀礼規模の大小が相関するようである（古屋2007）。佐田谷１号墓の墳墓祭祀において使用された土器が飛躍的に多くなっている状況も、葬送儀礼の規模の大きさと参列者の多さ、ひいては被葬者の社会的地位の高さを想像させる。とくに大容量の注口付脚付鉢や高杯を中心とする多量の供膳具の出土は、参列者たちが被葬者の霊と飲食を実際に共にする、もしくは共食を演じる儀礼が行われた痕跡と捉えうるものであり、佐田谷１号墓が両墳墓群内においても上位の被葬者を葬った墳丘墓であることを強く意識させる。このほか、佐田谷・佐田峠墳墓群では後期初頭以降、墳丘先行型墳丘への移行、中心的大型墓壙とそれを囲繞する墓壙配置の出現といった変化に加えて、佐田谷１号墓では木槨木棺二重構造の採用もみられる。当該時期においては、これらの要素を併せもった厚葬墓は、瀬戸内・山陰の両地方においても他にみられず、佐田谷墳墓群が先駆となっている。

両墳墓群内でみられる吉備的要素について述べてきたが、佐田谷１号墓の墓上祭祀が山陰型土器配置の成立を促したとすれば、葬送には吉備地域のみならず山陰地方からの参列者がいたことも想定でき、被葬者集団はある程度広域な交流網をもっていたことになる。当該期の備後北部地域内では集落も含めて吉備系土器の出土例は他にはほとんどなく、さらに、佐田谷・佐田峠墳墓群のような特徴をもった墳墓が後続する様子も確認できない。墳墓群の造営に吉備地域からの影響があったことは確かでも、恒常的接触や集団的移住があったとは考えにくく、吉備地域との強いつながりは一時的なものだったといえる。それでも、伝統的な葬送儀礼に外来的要素を積極的に取り込み革新された佐田谷墳墓群の墳墓祭祀は、山陰型土器配置の成立との関わりを認めるならば、少なくとも山陰地方からの参列者には強く影響を与えたようで、一時的であっても確かな爪痕を残している。そして、それに至る土壌は、大きくは山陰地方の文化圏にありながらも、吉備地域の文化圏に比較的近い位置にあり、両方の文化と触れうるという地理的特性により育まれたと考えられる。佐田谷・佐田峠墳墓群でみられた変化・発展は、備後北部地域、とくに庄原盆地だからこそ起こりえたものだったのであろう。

Ⅳ．佐田谷・佐田峠墳墓群からみた埋葬施設の構造変化

第１節　佐田谷・佐田峠墳墓群の墳丘構築方法と埋葬施設

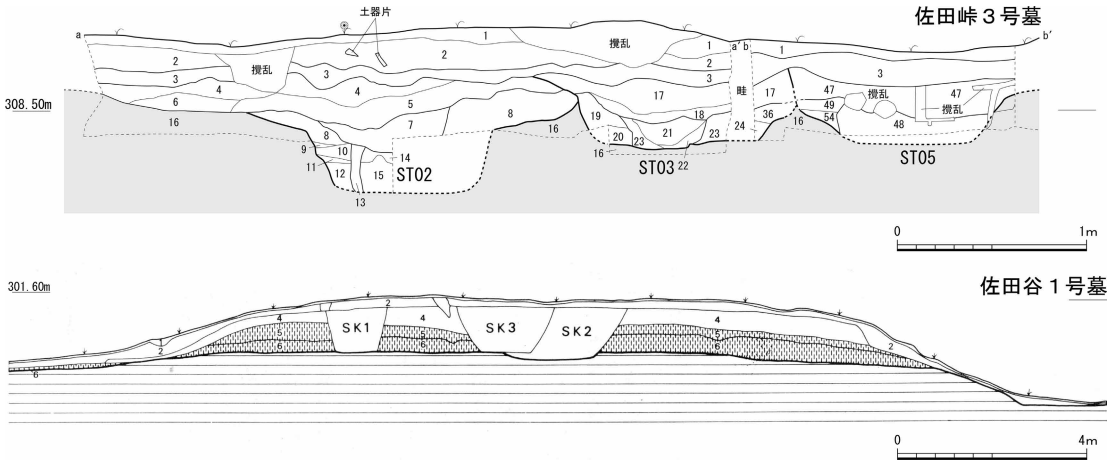
(1) 両墳墓群の時期

一連の発掘調査によって出土した土器を基準としてみれば、周溝から塩町式土器が出土した佐田谷３号墓が弥生時代中期末葉頃に築造され始めたようである。また、佐田峠４・５号墓もほぼ同じ時期に築造され始めた。佐田峠３号墓の墳丘構築は中期末葉から一部後期初頭まで継続した。後期初頭には佐田谷１号墓と佐田峠１号墓が相次いで造営された。後期前葉になると佐田峠２号墓が築造され、佐田谷３号墓の墳頂平坦部の中心埋葬が造営されることとなる。さらには佐田谷２号墓が継続するが、その後、新たな墳丘墓の造営はみられなくなる。両墳墓群ともに中期後葉から末葉までにその造営が開始され、墳丘の構築と埋葬がくり返されたものの、後期前葉にはともに終焉を迎えたことがわかる（第５図）。

(2) 墳丘構築方法と埋葬施設

これまでの発掘調査のなかでも重要な成果のひとつに、両墳墓群内において墳丘構築方法の差異を確認したことが挙げられる。中期末葉から後期初頭に属する佐田峠３号墓は大規模な墳丘構築・整形の前に墓壙の掘削を行い、木棺を埋置し、埋め戻して封土で覆っていた。その後、隣接して数回の墓壙掘削・埋葬・封土をくり返し、盛土によって墳丘が徐々に形成された後に、墓標と考えられる拳大の石が数個配置され、全体を薄い盛土で整形し、墳丘周囲の斜面部に貼石が施されていた（野島ほか2009、野島編2016）（第30図上）。ほぼ同時期となる佐田峠４号墓も埋葬後に墳丘が構築された可能性が高いものであった（野島・矢部2010、野島編2016）。

しかし、後期初頭に属する佐田谷１号墓において確認された墓壙４基は、いずれも墳頂平坦部直下で確認されていた（妹尾編1987）（第30図下）。つまり、両墳墓群には、墓壙掘削と埋葬・封土の一連の行為が墳丘構築過程として数回繰り返して行われる同時進行型の墳丘と、墳丘構築とおおよその整形が行われた後に墓壙が掘削される墳丘先行型の墳丘の二者が存在していたことがわかったわけである。その後、佐田谷３号墓では、墳丘下位に小規模な墓壙が配置され、墳丘を構築しながら埋葬が継続していた状況も明らかとなった（野島ほか2013、今西・辻村編2017）。墳頂平坦部直下からは全長６m近くになる中心埋葬の大型墓壙SK14が検出され、この墓壙に一部重複する周辺埋葬の墓壙SK06が確認された。同時進行型と墳丘先行型の折衷型とも考えられる。あるいは、周溝から出土した塩町式土器と墳頂平坦部直下の墓壙上の祭祀土器群には一定の時間差が見積もられることから、中期末葉に造営された同時進行型の墳丘の再利用ともみられる。佐田谷２号墓でも、中心埋葬と思われる墓壙に一部重複するように周辺墓壙が配置されていたことが判明したが、これは墳丘先行型の構



第30図　佐田峠３号墓と佐田谷１号墓の墳丘構築方法の差異
（佐田峠３号墓1/40、佐田谷１号墓1/160）

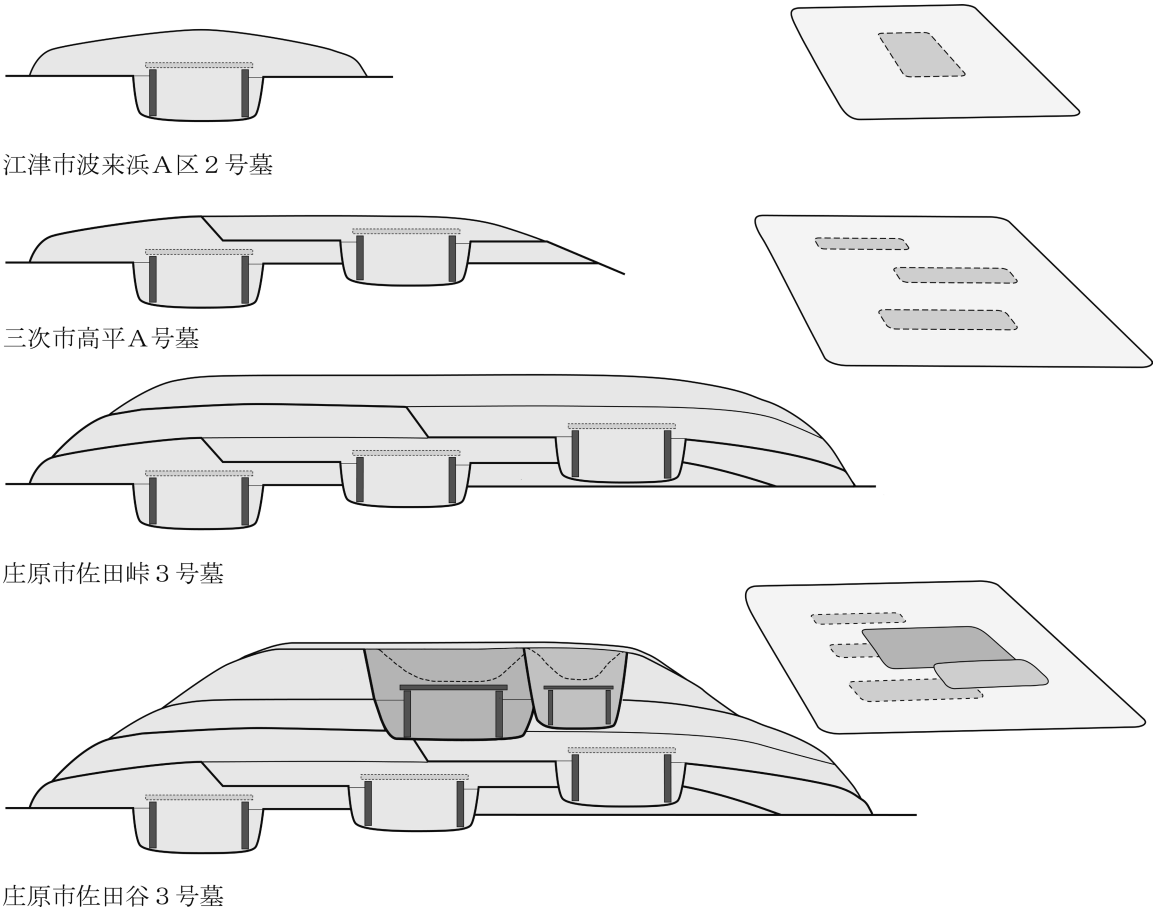
築方法であることが推測できた（野島ほか2013、今西・辻村編2017）。佐田峠１・２号墓でも墳頂平坦部直下に平行して並ぶ墓壙配置が確認されたが、これもまた墳丘先行型の構築方法であることが推測された（野島ほか2013、野島編2016）。

以上の調査成果から、同時進行型と墳丘先行型はどちらの墳墓群にも存在したこと、また、両墳墓群ともに中期末葉までは同時進行型（第31図）であったものが、後期初頭には墳丘先行型に移行あるいは変化していたことが判明した（第32図、第５図）。両墳墓群は中期末葉段階、ともに数回の埋葬をくり返しつつ、墳丘を徐々に形成していく同時進行型の墳丘構築方法を採用していたが、後期初頭から前葉になると、墳丘をほぼ構築した後に、墳頂平坦部直下に数基の墓壙を掘削する墳丘先行型の構築方法へと変化していった。

(3) 墳墓群間の格差

両墳墓群は四隅突出型墳丘墓[23] か方形台状墓かといった墳丘形態に関わりなく、歩調をあわせて墳丘構築方法を変化させていった。しかし一方で、佐田峠墳墓群では後期初頭においても依然として小規模な埋葬施設（墓壙）が数基並置される墓壙配置を変えず、中心埋葬の大型化を実現することはなかった。墳丘全長も20mを超えることはなく、佐田谷墳墓群よりも相対的には小規模な墳丘しか造営できなかった。

これに対して佐田谷墳墓群では、20mを超える墳丘を構築し、中心的な大型埋葬施設を造営した。佐田谷２号墓の中心墓壙は佐田谷１号墓の中心墓壙同様、墓壙規模が４mを超えるだけでなく、木棺木蓋の腐朽にともなう落ち込み埋土がみられたことから、大型木棺が埋置されていたと想定することができる。佐田谷２号墓においては、中心埋葬となる墓壙が大型化するだけでなく、この墓壙の一部を破壊してさらなる墓壙が掘削されており、周辺埋葬が中心埋葬を囲繞するような墓壙配置（第Ⅴ章第２・３節で後述する「囲繞型」）が企図されたことを示していた（第32図上・第35図左）。先述したように佐田谷３号墓においても巨大な中心墓壙 SK14が検出され、その周囲に２基の周辺埋葬（墓壙 SK06・15）がみられたこ



第31図　佐田谷・佐田峠墳墓群の墳丘構築方法比較模式図（1）（弥生時代中期段階）

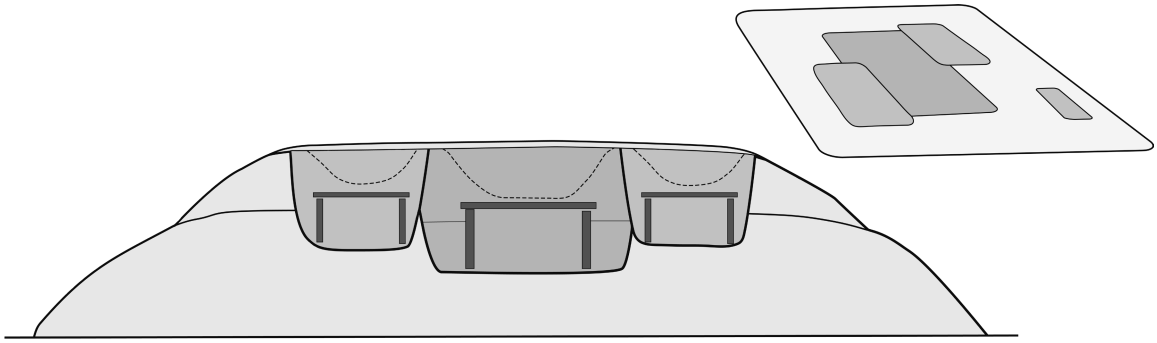
とも重視しておきたい。後期初頭になると、両墳墓群の間には墳丘墓造営に関わる格差が存在していたことが明らかになった。

第２節　佐田谷・佐田峠墳墓群の墳丘構造の変化と葬送

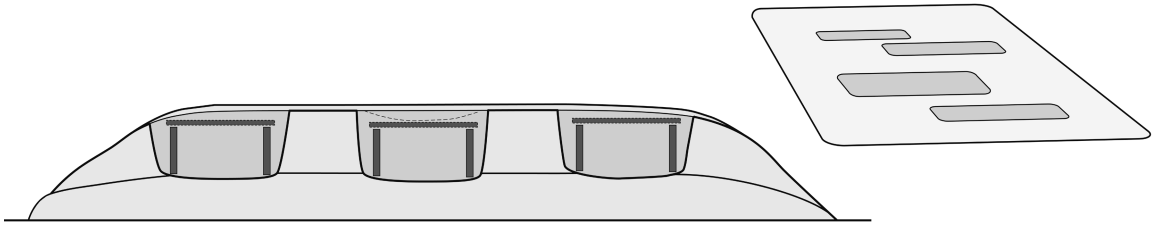
(1) 墳丘墓の遡源と墳丘構築方法

佐田谷・佐田峠墳墓群の発掘調査では、中期段階の墳丘構築方法は同時進行型であった。この点で注目されるのが庄原地域に隣接する三次地域、さらに三次地域を含む江の川流域に分布する弥生時代前期から中期にかけての小規模な墳丘墓である。以下に類例をみてみよう。

江津市波来浜遺跡（門脇編1973）（第33図１・２）　江の川下流域にある江津市波来浜遺跡は石見海岸の砂丘地帯にあり、中期中葉から後期中葉前後の墳丘墓が検出された（門脇編1973)。なかでもＡ調査区では、６基の列石や貼石をもつ墳丘墓が確認されている[24)]。多くが墓壙１基しかもたないものだが、２号墓だけ墳丘内に２基、北側に増設された貼石内部に１基の墓壙が確認された。４号墓（第33図１）は長辺2.5m、短辺2.0m前後の小規模な墳丘



庄原市佐田谷１・２号墓

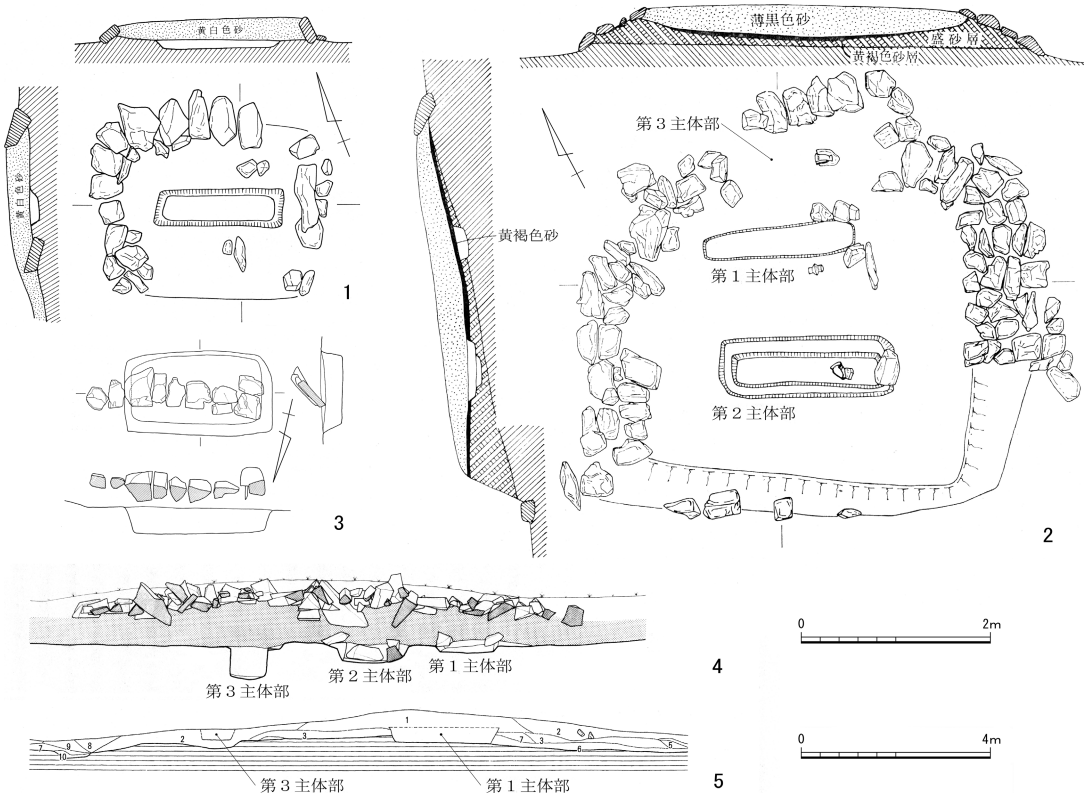


庄原市佐田峠１・２号墓

第32図　佐田谷・佐田峠墳墓群の墳丘構築方法比較模式図（2）（弥生時代後期段階）

をもち、周辺斜面に板石を貼る。墳丘中央部に墓壙を穿ち、直接遺体を埋葬し、埋め戻して側辺両側に標石を設置した後に、20㎝前後の黄白色砂で覆って、その周囲に板石を巡らせたものである。副葬品はなかったが、Ａ調査区の出土土器から弥生時代中期中葉前後に属するものと推測できる。規模は小さいものの、墓壙の掘削の後、墳丘を構築する「墳丘後行型」の墳丘墓（和田2003・今福2012）であることがわかる（第31図上）。Ａ調査区２号墓（第33図２）はやや規模が大きく長辺５ｍ、短辺４ｍ前後である。中期中葉に属する。南側に傾斜する斜面地に砂を盛って高くした土台（盛砂層）を作り上げている。その後、第１主体部を穿ち、埋葬・封土・土器供献を行い、墓壙東側（被葬者の頭部側）に標石を設置して、黄褐色砂で墳丘全体を覆っていた。第２主体部はさらにその黄褐色砂を穿って２段墓壙が造られており、同様に土器供献と頭部付近に標石の配置を行っていた。その後薄黒色砂で墳丘全体を覆い、墳丘の構築を終えている。第３主体部がいつ設置されたかは不明ながら、墳丘周囲を巡る板石状の貼石を改変しているところからすると、薄黒色砂を盛り上げた後である可能性が高い。高平遺跡Ａ号墓同様、小規模な墳丘となる同時進行型であり、埋葬と封土を繰り返す点には共通性がある。

三次市高平遺跡Ａ号墓（第23図４・第33図４）（潮見・川越・河瀬1971b）　三次盆地のほぼ中央、十日市町にある高平遺跡Ａ号墓は出土土器から前期後半から中期前葉に属するとみられる。土壙墓１基と木棺墓２基の上に黒フクの封土が施され、長軸5.5m、短軸3.4mの長楕円形の範囲に角礫が積み込まれていた（潮見・川越・河瀬1971b）。第Ⅲ章第１節においても述べたように、封土と角礫は墓壙ひとつずつに施されたもので、３回の埋葬の結果、最終的にひとつのまとまり（墳丘）になったと推測されている（妹尾編1987）。このことからす

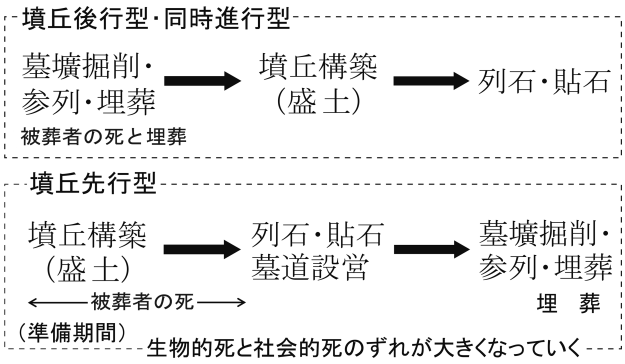


第33図　江の川流域における墳丘構築の類例（弥生時代前期から中期）
（1～4：1/80，5：1/160）
1．江津市波来浜遺跡Ａ調査区４号墓　2．同市波来浜遺跡Ａ調査区２号墓
3．三次市四拾貫小原弥生墳墓２号墓　4．同市高平Ａ号墓　5．同市宗祐池西遺跡１号墓

れば、高平遺跡Ａ号墓は墳丘内の土層分層が不分明ではあったものの、小規模ながらも同時進行型の墳丘構築方法の先駆的な状況を示していると想定できる（第31図上）。

三次市四拾貫小原遺跡（潮見編1969）（第33図３、第37～45図）　四拾貫小原遺跡は三次盆地東部、宗祐池西遺跡の北東にある。1969年に発掘調査の報告がなされており、出土土器（第45図）から弥生時代中期後半に属する（潮見編1969）。実測図などからは墳丘の外表施設と考えられる板石の下部に墓壙が検出された状況を推測することができる。第Ⅴ章第１節にて詳述するように、おそらくは下層において数回墓壙を掘削し、埋葬が行われた後に墓壙群の上に長辺約8.5m、短辺約5.7mの長方形墳丘を構築し、斜面に貼石を並べ、周溝を巡らせたものとみられる（第39図）。初期四隅突出型墳丘墓であった可能性さえ捨てきれない。墳丘周囲の板石直下にしか墓壙が検出できなかったことを考慮すれば、おそらくは先述した波来浜遺跡Ａ調査区４号墓と同様に墳丘後行型の墳丘墓であった可能性があろう。

三次市宗祐池西遺跡１号墓（尾本原編2000）（第33図５、第48図１）　三次盆地東部、四拾貫小原に近い南畑敷町にある。長辺11m、短辺5.4m、高さ50㎝前後の初期四隅突出型墳丘墓である（尾本原編2000）。第１主体部は３層（灰黒色粘質土）と６層（灰黒色土を含む黄褐色土）を盛った後に掘削された墓壙だが、第３主体部は１層（赤褐色土）の後に盛られた２層（暗黄褐色粘質土）を穿って墓壙が形成されていた。明らかに異なる時期に墓壙が穿れた



第34図　墳丘構築方法と葬送儀礼
（弥生時代中期から後期へ）

ことがわかる。墳丘構築を継続しつつ埋葬が繰り返されたようであることから、同時進行型の墳丘構築方法を示しているといえる。

以上の類例からみても、江の川流域の中期以前にみられる小規模な墳丘墓には埋葬後に盛土を施す墳丘後行型墳丘墓と、埋葬・封土・盛土を繰り返す同時進行型墳丘墓が多くみられることが明らかとなった（今福2012）。現状の調査事例からすれば、小規模な墳丘墓は墳丘後行型であり、やや墳丘が大きくなると同時進行型に移行していったものとみられる。地域ごとに跛行性があり時期的な細分はできなかったが、中期以前には墳丘後行型や同時進行型の小型墳丘墓は普遍的に存在していた可能性を重視しておきたい。また、中期段階の墳丘墓（方形区画墓）の多くは長幅比の大きい長方形墳丘をもつものが多いが、この原因としては墓壙数のみではなく、佐田峠３号墓同様、長辺方向に順次埋葬と封土・盛土を繰り返した同時進行型の墳丘が少なからず存在していたからであるとも理解できよう[25]。

(2) 葬送儀礼の変容

中期段階では、波来浜遺跡Ａ調査区４号墓のような墓壙掘削・埋葬の後に封土を施す墳丘後行型や、高平遺跡Ａ号墓から発展し、大型化した同時進行型の墳丘墓がみられたことがわかった。両墳墓群の調査によって、後期初頭には同時進行型から墳丘先行型へと墳丘構築方法が変化し始めることが想定できたわけだが（第31・32図）、この墳丘墓の変容を葬送儀礼の時間軸のなかでどのように解釈したらよいのであろうか。このような墳丘墓の構築方法の変化を墳丘墓に埋葬される被葬者達の社会的地位の変容とともに、その死に際して葬送儀礼が変化し始めたことによるものと考えることができる。

一般に人間社会では、生物的死の後に社会的死を経る。その際、想像的再生を観念するための社会行為として、服喪を中心とした一連の葬儀が長期間にわたって観察される場合が多い（エルツ1980）。とくに社会的地位の高い人々においては、社会的死に至るまでの時間が作為的に引き延ばされることになる。墳丘構築方法の変化も、当時の地域社会にはなくてはならない重要人物の死によって引き起こされた社会不安を軽減するために、葬送により多くの儀礼的措置を組み込まざるをえなくなった結果と想定することができよう。つまりは被葬者の生物的死と社会的死の隔たりを人為的に再構成し、社会を守護する祖先として観念させるための舞台装置となる墳丘を造り上げていく集団意識が醸成されていったと想像することも可能であろう。さらには被葬者の社会的権威の維持や、それによって作り出されたある種の秩序や既存の階層性の社会的再生産を促し、それを機軸とした社会統合を目論むことにも

第35図　中心墓壙に重複する周辺墓壙（佐田谷２号墓〈左〉と三坂神社３号墓〈右〉）

なるはずである（第34図）。

(3) 後期初頭における弥生墳丘墓の変革

佐田谷１号墓における中心墓壙の大型化、墓壙上面での土器供献、標石となる円礫の遺棄・散布、さらには木棺を覆う木槨構造などは、後期後半以降、出雲地域や吉備地域、さらには丹後地域において巨大化する弥生墳丘墓がもつ諸要素の遡源とみられる。佐田谷２号墓において、中心墓壙の周囲に一部重複して周辺墓壙を囲繞させる墓壙配置（周辺埋葬重複形配置（野島2000、野島・野々口2000）、後述する「囲繞型Ⅱ」）が明らかになった。弥生墳丘墓の発展過程のなかでは、佐田谷墳墓群の先駆的性格がさらに明確になったといえるが、後期前葉の段階において、このような墓壙配置を採用した地域はほかに丹後地域しかない（第35図）。この丹後地域と三次・庄原地域ではともに中期から墳丘墓を独自に発展させてきた。丹後地域では中期から後期において、方形貼石墓から尾根上に階段状に立地する、いわゆる卓上墓を経て、方形墳丘をもつ大型台状墓へとその墓制を刷新していくが、同一墳墓群内においてその変化を見出せるわけではなかった。これまでの調査研究から、丹後地域の墳丘墓は対外的交流によって急激に変容していった様相が認められる（野島2000）。しかし、これまでみてきたように、佐田谷・佐田峠墳墓群は、四隅突出型墳丘墓や方形台状墓が混在しつつも、墳丘墓自体の変革がみてとれる遺跡であり、弥生墳丘墓発展の結節点として評価できるといえる。

Ⅴ．中国地方の弥生墳丘墓の構築方法とその展開

第１節　三次地域における弥生時代中期の墳丘墓の事例 －四拾貫小原墳墓群の概要－

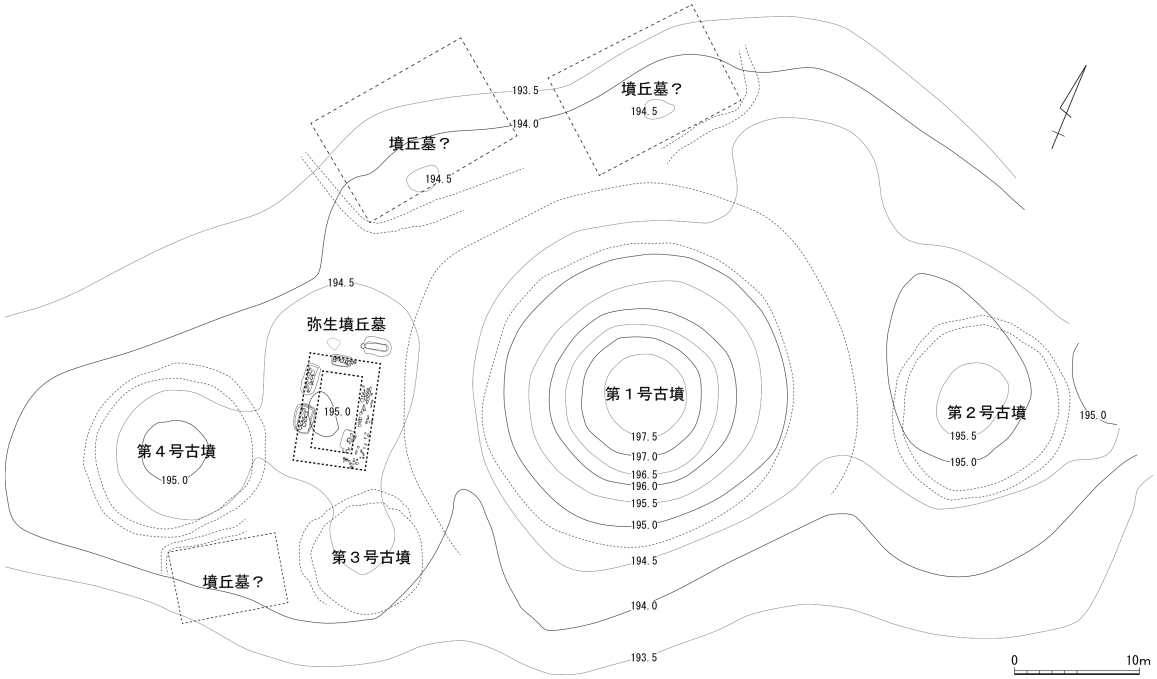
四拾貫小原遺跡は三次市四拾貫町小原に所在し、弥生時代の墳墓群や古墳群などからなる。1968年10月、遺跡の所在する丘陵地帯に三次電機株式会社（現ミヨシ電子）設立のため、三次市土地開発公社による土地造成が行われることとなった。埋蔵文化財に対する行政上の対処もないまま、遺跡が破壊されることが明らかとなったことから、調査団が結成された[26)]。発掘調査は1968年10月25日から11月18日まで実施された。その結果、７基の土壙墓からなる弥生時代の墳墓、４基の古墳、方形区画とこれに付随する土坑、方形区画溝などが検出された（第36図）。

弥生時代の墳墓群については、出土土器から中期後半頃に属する標石をともなう土壙墓群と報告された（潮見編1969）。しかし、我々の一連の調査成果からすれば、この弥生墳墓は墳丘墓である可能性を指摘することができる（今福2017）。本節では、当時の発掘調査の情報を頼りに四拾貫小原墳墓群を方形貼石墓の一種と想定し、その墳丘構造の把握に努めたい。

(1) 弥生時代墳丘墓に関わる遺構

ａ.墓域・外表施設

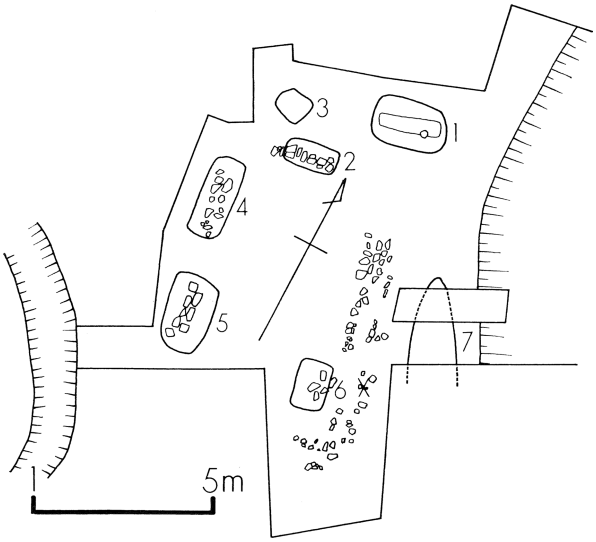
四拾貫小原遺跡第１号古墳西側のわずかな高まりの周囲に墓壙が集中しており、その東側に



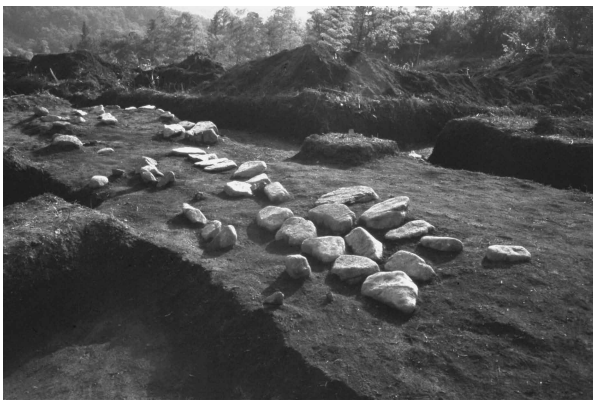
第36図　三次市四拾貫小原遺跡検出遺構（1/600）

は直線的に並ぶ石群などが検出された。

標　石（第36～39図）　土壙墓では墓壙検出面よりも上部に石群が確認された。これについてはその後の調査成果から標石の可能性が想定できる。第６号墓では埋葬後、その上部に標石が施されている状況が推測できる。第２・４・５・８号墓についても第６号墓同様に墓壙の上部に標石が置かれていたとみられる。これらの標石はその多くが板石を使用していた。いずれも概ね20°から45°程度の勾配をもち、墓壙検出面から数十㎝ほど上方に列をなして配石されていた。これらの標石については墓壙上部にしかみられないものだが、墳丘の斜面に施された貼石のようにも思われる。そのようにみた場合、第２・４・５・８号墓上の標石は錐台形の墳丘斜面に貼り込まれたものと想定することができよう（第39図）。



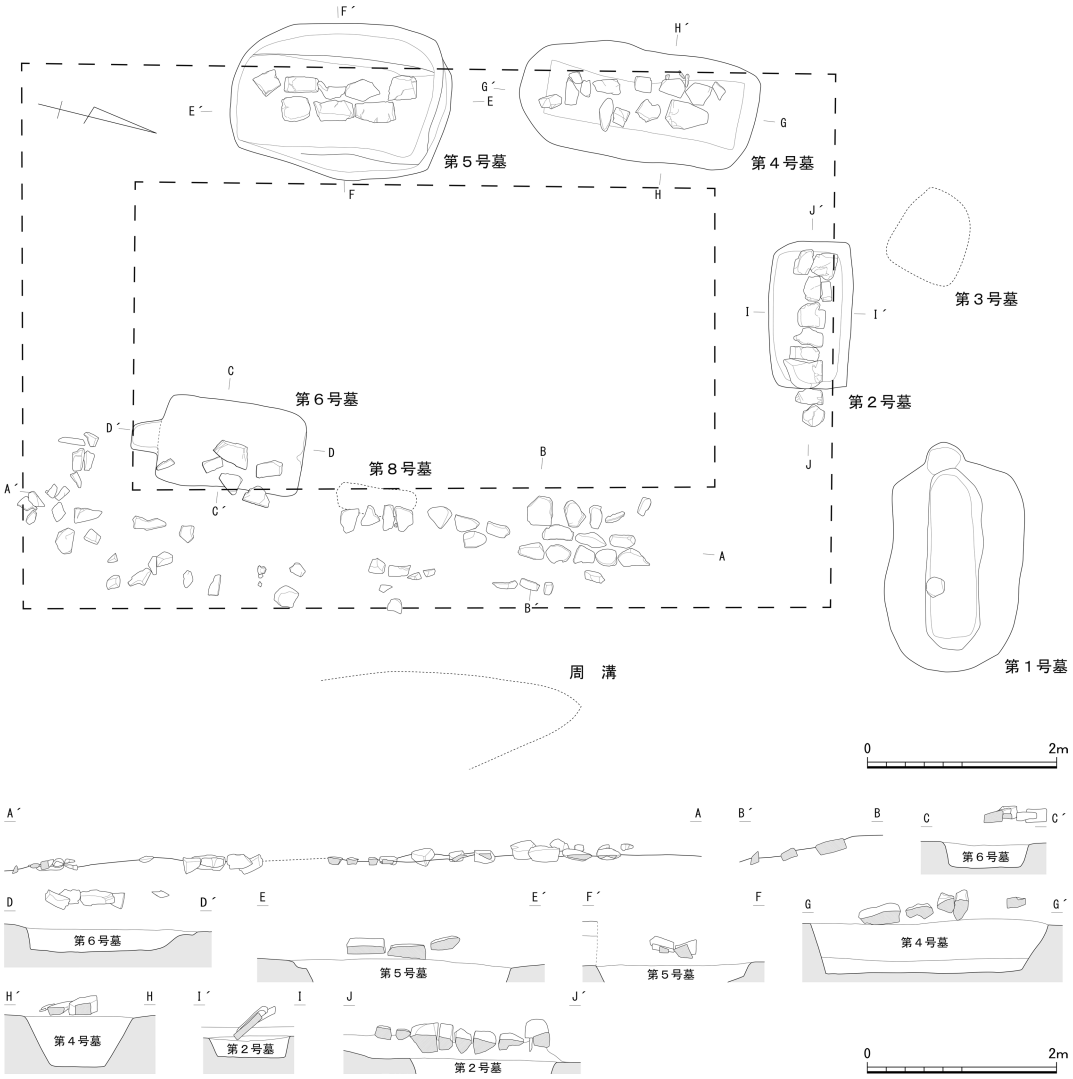
第37図　弥生時代墳墓関連遺構配置図（潮見編1969）


第38図　四拾貫小原墳丘墓貼石検出状況（1967年）

なお、墓壙上部で墳頂平坦部に向かって傾斜する標石については、後述する貼石と石材は同一であるが、比較的大型の礫を使用しており、貼石が東側斜面から南東隅角に向けて部分的に施されていた可能性があるため、貼石と区別している。

石列・貼石（第36～39図）　第39図のように想定した場合、墳丘墓東側斜面にあたる位置で検出された。検出範囲は全長約6.7m、幅約1.1mであり、残存状況が悪いものの、石列と３列の貼石が認められた[27]。貼石に使用された礫については想定した墳丘墓南東側の第３号古墳周溝でも確認されており、墳丘墓にともなう貼石が崩落したものと推測できる。崩落した貼石はこの他にはほとんど確認されていないことから、墳丘の東側斜面にのみ施されていたと考えられる。貼石の勾配は概ね20°から40°であり、石材の大きさや貼り方は均一でない。

周　溝（第37・38図）　第39図のように墳丘を想定すれば、その東側に位置する。第７号墓として報告（潮見編1969）されたもので、第１号古墳の周溝からは１m程離れて接している。墳丘東側中央付近から南側へ続く落ち込みであり、横断面はU字形を呈する。検出長は2.7m、深さ25㎝、最大幅は1.4m程となる。詳細な調査を実施する前に破壊されたため不明瞭ではあるが、周溝の可能性も指摘された（潮見編1969）。第１号古墳の周溝とは別に設けられていたことから、想定した墳丘墓の周囲を巡る溝（墳丘墓周溝）と想定できる。この周



第39図　四拾貫小原墳丘墓想定復元図（1/80）

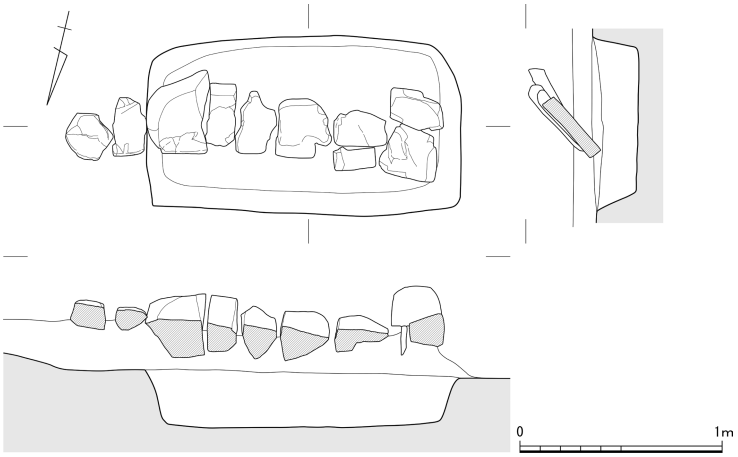
溝の南側は調査区外となっていたため、墳丘墓南東側の第３号古墳周溝との関係は不明である。なお、この墳丘墓の周溝と想定された溝からは礫が検出されていないことから、墳丘墓の構築が完了後、それほど時期を隔てることなく埋没したと推測される。

ｂ.埋葬施設

墳丘墓にともなうと考えられる墓壙は５基（第２・４・５・６・８号墓）検出された。いずれも基盤土層となる赤褐色粘土層から掘り込まれていた。なお、第１号墓は２段墓壙を呈しており、古墳群から検出された墓壙と類似していたことから、弥生時代後期から古墳時代に属する墓壙であると判断された（潮見編1969）。

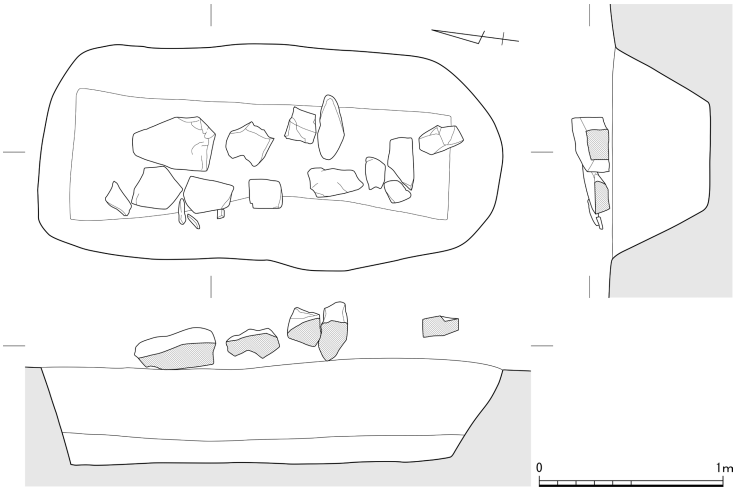
第２号墓（第40図）　第39図のように墳丘を想定した場合、第２号墓は墳丘北側の斜面中央付近で検出したことになる。想定墳丘の東西辺に平行して墓壙が掘り込まれていた。墓壙の一部は墳丘裾部よりも北側に外れていたように復元できる。墓壙上面の検出規模は全長1.56m、最大幅89㎝となり、胴張り気味の長方形プランを呈する。墓壙底の規模は全長1.36m、

最大幅72㎝、深さ29㎝となる。墓壙内から遺物は出土せず、木棺痕跡なども明らかではない。なお、先述したように、墓壙直上では主軸に沿って花崗岩の板石が30°から45°の勾配をもって一列に貼り込まれていた。ただし、墓壙東側で検出した礫は勾配をもたず、ほぼ水平に据えられていた状況が想定できる。



第40図　四拾貫小原墳丘墓第２号墓平面図・断面図

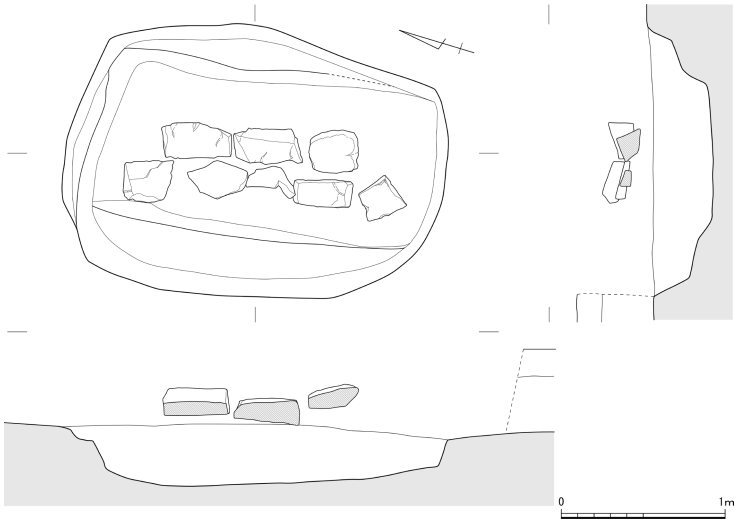
第４号墓（第41図）　同様に第39図のように想定すれば、第４号墓は墳丘西側斜面の北西隅部付近で検出したことになる。墳丘主軸に対して概ね平行して墓壙が掘り込まれており、墓壙の一部は墳丘裾部より西側に外れる。墓壙上面の検出規模は全長2.52m、最大幅1.25mとなり、隅丸長方形のプランを呈する。墓壙底の規模は全長2.05m、最大幅71㎝、深さ52㎝となる。墓壙底面は四隅が明確であり長方形に近いが西側中央付近でくびれている。墓壙内部には赤褐色粘土と黒ボク土が混在して堆積していた。木棺痕跡は確認されていないが、底面の形状からは木棺が埋置されていた可能性もある。墓壙直上に並んだ２列の標石は勾配をもち、第２号墓同様に墳丘斜面に貼り付けられていた状況が想定できる。



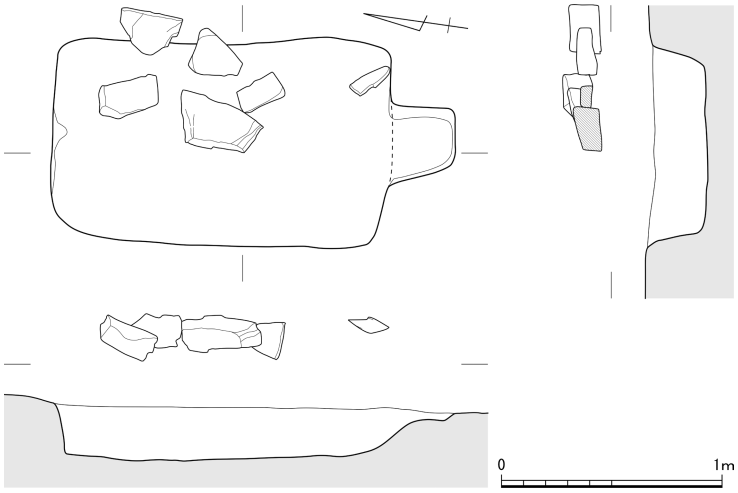
第41図　四拾貫小原墳丘墓第４号墓平面図・断面図

第５号墓（第42図）　第５号墓も墳丘西側斜面の中央から南側付近で検出したことになる。墳丘主軸に対して概ね平行に墓壙が掘り込まれていたようであり、墓壙の一部は墳丘裾部よりも西側に外れていたと想定できる。墓壙上面の検出規模は全長2.32m、最大幅1.65mとなり、隅丸長方形のプランを呈する。墓壙底の規模は全長1.98m、最大幅94㎝、深さ36㎝となる。その形状から木棺が埋置されていた可能性が高い。墓壙検出面付近では黒色土と黄褐色土の混ざった土が堆積しており、墓壙全体を覆う封土があったことが推測できる。先述したように墓壙上部では標石が検出されており、墳頂平坦部から墳丘裾部にむかって勾配をもつことから、墳丘斜面に貼り込まれたものと想定できる。

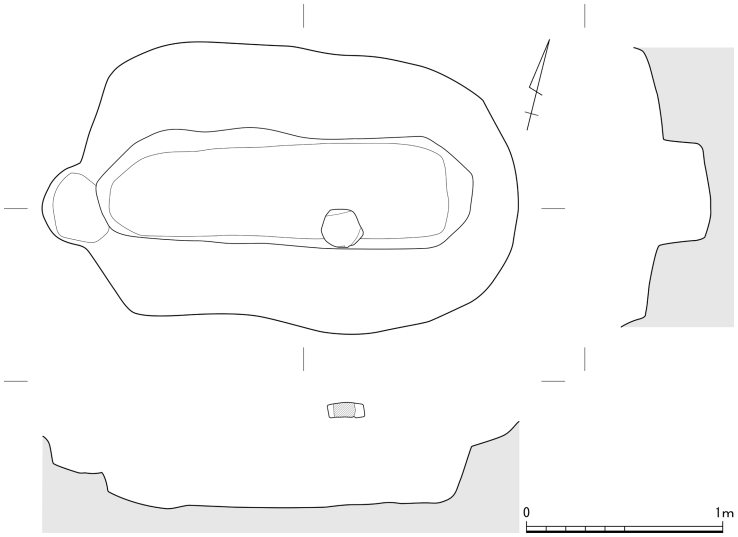
第６号墓（第43図）　第６号墓も墳丘頂部平坦面南東隅付近で検出されたことになる。検出



第42図　四拾貫小原墳丘墓第５号墓平面図・断面図



第43図　四拾貫小原墳丘墓第６号墓平面図・断面図



第44図　四拾貫小原遺跡第１号墓平面図・断面図

面は墳丘構築以前の基盤土層となる赤褐色粘土層であり、墳丘盛土が施される以前に埋葬が完了していたとみてよい。墳丘主軸に対し概ね平行して墓壙が掘り込まれていた。墓壙上面の検出規模は全長1.54m、最大幅96㎝となり、長方形のプランを呈する。墓壙底の規模は全長1.26m、最大幅76㎝、深さ25㎝となる。南側の小口に張り出しが認められたが、その性格は不明である。墓壙内部には黒色土が堆積していたが、木棺痕跡などはみられなかった。墓壙東側上層において標石が検出されたが、墓壙上面から20～35㎝程上方にあり、墳丘盛土完了後に施されたものと考えられる。これらは墳頂平坦部に貼り込まれたために、勾配をもたなかったものと想定することができ、やはり第39図のような平面が長方形となる錐台形状の盛土を施していたと考えることができる。

第８号墓　第６号墳墓北側の墳頂平坦部から墳丘東側斜面にかけて、周辺の貼石よりも落ち込んだ礫群が検出された。墓壙としては報告されてはいないが、棺木蓋の腐朽により標石が落ち込んだものと考えられることから墓壙と判断した。これを第８号墓とし

たい。その場合、落ち込みを中心として全長88㎝、最大幅28㎝程の範囲に墓壙を想定することができる。また、その規模から小児埋葬の可能性が推測できる。

c．墳丘規模

これまで述べてきたように、四拾貫小原弥生墳墓群は石列や貼石、および墓壙上部の標石などの検出状況から墳丘を復元すると、全長8.5m、幅5.7m程となる方形貼石墓と推定することができる（第39図、以下便宜上、四拾貫小原墳丘墓と呼称する）。墳丘斜面および墳頂平坦部に設けられた外表施設（貼石・標石）から、高さ約30～40㎝前後の低い墳丘であったとみられる。墳頂平坦部についても外表施設から復元すると、全長6.1m、幅3.2m程であったと推測できる。墳丘斜面には３列以上の貼石が施されていたということになる。墳頂平坦部でも墓壙の上方30～40㎝程に標石が施されていた。墳丘裾部付近の第２・４・５号墓などについても、その上部に標石が置かれていたわけであり、墳丘斜面の貼石を兼ねていた可能性も想定できる。なお、墳丘裾部の貼石を兼ねる第２号墓の標石は北西隅角に向かって若干ながら湾曲している状況が認められることから、隅部がわずかに突出するような初期の四隅突出型墳丘墓であった可能性もあろう。

墳丘土層堆積状況　検出された墓壙はすべて赤褐色粘土層から掘り込まれていることが確認された。この墳丘基盤土層上面に黒ボク土層が堆積しており、墳丘斜面の石列・貼石および標石、墳頂平坦部の標石はすべて黒ボク土層の上から検出された。このことから、黒ボク土層を主体とした墳丘盛土層があったと考えられる。この盛土と想定できる黒ボク土層と赤褐色粘土層の間には、旧表土層は認められなかった。被葬者の埋葬に際してある程度水平な面を形成するために旧表土層を削り出したものと考えられる。

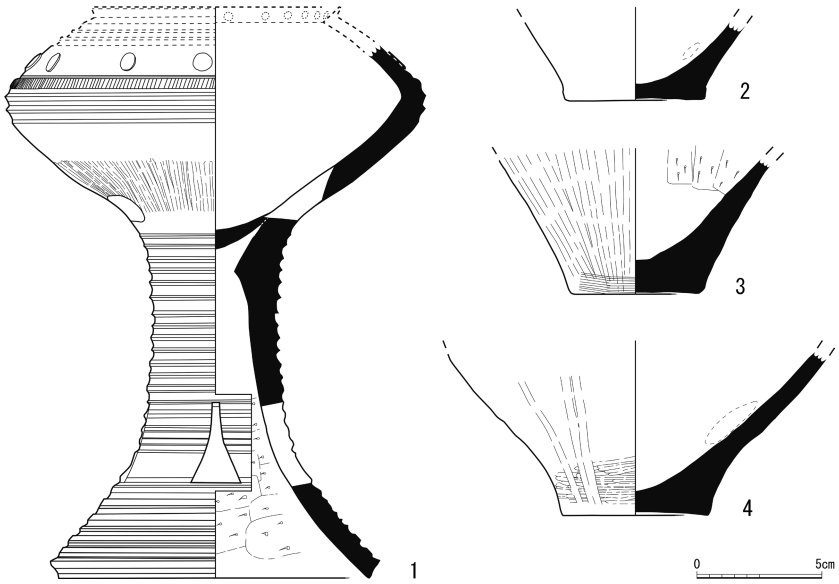
墓壙内部については、基盤土層である赤褐色粘土層と黒ボク土層の混ざった土が堆積しており、基盤土層の掘り込み土と盛土からなる混土を木棺裏込め土や墓壙埋土として利用したものと想定できる。また、第５号墓上面においては黒色土と黄褐色土が墓壙を覆うように楕円形に堆積していた状況から、墓壙を覆う封土が存在したものと推測できる（第46図）。

なお、検出した墓壙すべてに木棺痕跡が明瞭には確認できなかったものの、第８号墓の墓壙上面で黒ボク土層の落ち込みが確認されている。木棺が埋置されていた可能性があり、上面で検出された黒ボク土層は盛土であったと想定することができる。

(2) その他の遺構

第１号墓（第44図）　第１号墓は想定墳丘の北側平坦面で検出された。墓壙上面の検出規模は全長2.40m、最大幅1.42mとなり、２段墓壙をもつ長楕円形に近い土壙墓である。墓壙底面の規模は全長1.72m、最大幅98㎝、深さ42㎝となる。墓壙内部には黒ボク土層と赤褐色粘土層が堆積しており、底面の形状から木棺墓であることが推測できるが、木棺痕跡そのものは確認できなかったようである。近隣の四拾貫古墳群で検出された墓壙と形態的に類似することから、新しい遺構とされた（潮見編1969）。

第３号墓　第３号墓は墳丘北側平坦面で検出した。墓壙上面の検出規模は全長94㎝、最大幅



第45図　四拾貫小原墳丘墓出土土器（1/3）

80cmで長方形に近いプランを呈する。周辺墓壙同様に基盤土層である赤褐色粘土層からの掘り込みであるため、墓壙の可能性が考えられるが、想定された墳丘墓内にみられた墓壙とは異なる様相を示している。

(3) 出土遺物

想定した墳丘墓に関連すると考えられる遺物としては小型の脚付鉢や、底部片３点などがある（第45図）。１は小型脚付鉢で、墳丘墓の南東側に位置する第３号古墳周溝から出土した。口縁部を除いて脚部から胴部にかけてほぼ完形の状態で出土した。残存高約21.0cmである。胴部は丸みをもつ算盤玉形を呈し、最大径16.8cmである。胴部上半には円形浮文を貼り付ける。胴部中位には凹線文が４条施され、上から１条目と２条目の間には刻目文が施される。胴部内外面は風化が著しいが、下半外面には放射状のヘラミガキが確認できる。胴部下半には焼成後に施された外側からの穿孔が１カ所に認められる。脚部は下方に向かって緩やかな弧を描きながら開き、脚部径は13.2cmである。三角形の透孔が４方向に認められる。脚部には透孔付近の間帯を除く全面に凹線文が施される。脚部端面にも１条の凹線文が施される。内面には透孔より下方で横方向のヘラケズリが施され、端部付近はナデで仕上げられる。灰褐色を呈し、焼成は良好である。胎土は径0.5～2.0mmの石英・長石を含むが緻密なものである。

２～４は底部で、墳丘墓東側斜面から出土した。底面がヘラナデされることで若干上げ底となっている。２は底径5.7cmである。内外面ともに風化が著しいが、底部外面にはナデ、内面には指頭圧痕が認められる。３は底径5.4cmである。外面に縦方向のヘラミガキの後に、横方向のハケで仕上げている。内面には縦方向のヘラケズリが施される。４は底径5.9cmである。外面には横方向のヘラミガキの後、縦方向のヘラミガキが施される。内面の調整は風化のため不明であるが、指頭圧痕が認められる。いずれも灰褐色を呈し、焼成は良好である。胎土は径0.5～2.0mmの石英・長石を含むが緻密なものである。

１の小型脚付鉢は出土例が少ない一方で、墳墓で使用されたと考えられる場合が多い。本遺跡出土例にみられる多条の凹線文や刻目文といった特徴は、三次市宗祐池西１号墓（尾本原編2000）や安芸高田市新迫南遺跡（加藤1979）などで出土した個体と類似している。いずれも中期後葉に比定でき、本遺跡出土例もほぼ同じ時期のものと考えられるが、脚端部が拡

張しないため中期後葉でも古い段階のものと判断できよう。

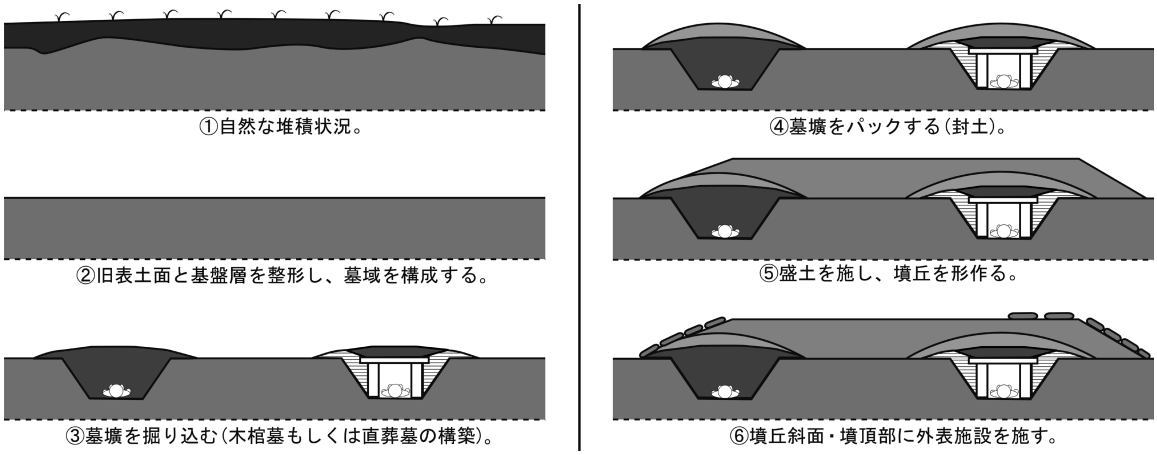
２～４の器種は特定できないが、甕・鉢・壺のいずれかである。第Ⅱ章第１節でも述べたように、中国地方では中期後半から甕や壺の内面にヘラケズリが観察されるようになる。備後北部地域でも中期後葉には確実に内面ヘラケズリが出現しているが、２・４には内面ヘラケズリが施されていない。また、３の内面ヘラケズリも部分的なものに留まり、底面から掻き上げるものではない。内面ヘラケズリが盛行する以前、中期中葉に遡りうる特徴をもつものといえる。土器からみれば、四拾貫小原墳丘墓は築造完了時期こそ中期後葉に降るものの、築造開始時期は中期中葉にあるものと考えることができる。

(4) 想定される墳丘構造について

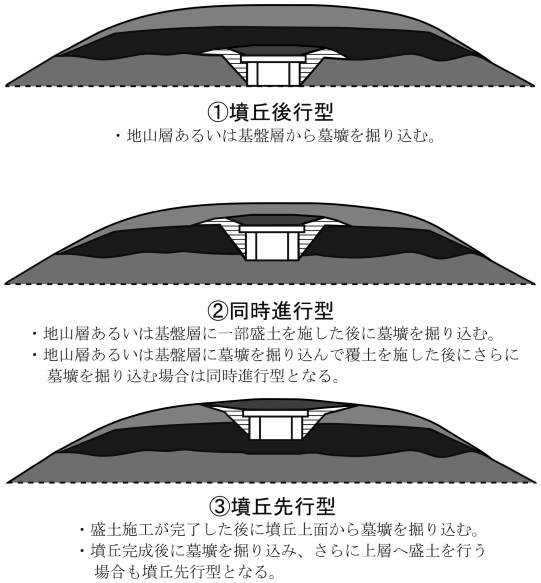
墳丘構築と埋葬過程の復元　先述した内容から、想定した四拾貫小原墳丘墓の構築方法を以下のように復元した（第46図）。まずはじめに周辺も含めて旧表土面を除去し、赤褐色粘土層（基盤土層）を整形することで墓域（墓壙掘り込み作業面）を造り出す。続いて、墓壙を掘り込んで被葬者を安置した後に埋め戻し、上面にはさらに封土を施す。すべての埋葬が終了した後に、墓域全体を覆うように墳丘となる盛土を施す。盛土の後に、墳丘裾部の石列と墳丘斜面の貼石、墓壙上部の標石を備え付け、墳丘構築を終了する。

上述した墳丘構造から、墳丘構築以前に埋葬が行われる墳丘後行型の墳丘構築方法を想定することができる（第47図）。中国地方で墳丘後行型の墳丘構築方法を採用している可能性がある墳丘墓としては、中期中葉の江津市波来浜遺跡Ａ区検出の墳丘墓[28]（第33図１・２）、中期後葉の東伯郡梅田萱峯墳丘墓（第49図８）などがあり、本例も含め中期後半でも古い段階にみられるようである。

長方形墳丘の墳丘構築方法と長幅比率　続いて、墳丘の長幅比についてみていきたい。中期後半の四拾貫小原墳丘墓では約1.5、中期後葉の三次市陣山２号墓（落田編1996）では約2.1、中期末葉から後期初頭の佐田峠３号墓（野島編2016）では約2.2となる。四拾貫小原墳丘墓の長幅比は他の墳丘墓とは異なるが、同時進行型の墳丘構築方法を採用している陣山２号墓



第46図　四拾貫小原墳丘墓構築過程の復元



第47図　弥生墳丘墓墳丘構築方法の分類

と佐田峠３号墓とでは近似した長幅比となっている。このことから、ほぼ同時期となる中期後半段階の墳丘墓の間でも、墳丘構築方法によって長幅比の差異が生じていた可能性が想定されよう。

墓壙配置　四拾貫小原墳丘墓の墳頂平坦部中央付近に墓壙はなく、墳丘縁辺部に沿わせるように墓壙が掘り込まれていたと想定できる。中期後半における墳丘墓の墓壙配置は、後述する「並列型」（第53図）が主体となっており、本遺跡で想定された墳丘縁辺部に墓壙を等しく配置するあり方とは異なる。ただし、どちらも特定の埋葬に中心性を見出せない点では共通しているといえる。

外表施設とその形態的特徴　外表施設としては墳丘裾部の石列や墳丘斜面の貼石、墓壙上部に貼り込まれた標石を想定した。貼石は中期後葉の陣山墳墓群（落田編1996）でみられたような隅角、稜線を意識した貼り方や整然とした配石を呈するものではない。仁木聡の分類（仁木2007）から、Ⅱ類Ａ－１に分類できるが、Ⅰ類とされる中期中葉の波来浜遺跡Ａ区墳丘墓（門脇編1973）とも類似している。いずれにせよ、石列・貼石の初源的なあり方を示す可能性が高いものと考えられる。

標石はすべての墓壙にともなうことが想定できた。墓壙上面に施された墳丘盛土に貼られており、第６号墓では墓壙と標石のレベル差から墳丘盛土高の復元も可能である。斜面貼石と比較して大型の礫を使用しており、丁寧に貼られている印象を受ける。墳丘斜面部にかかる墓壙にともなう標石は、斜面貼石と大きさや勾配が近似しているため、貼石として墳丘斜面に施された可能性も否定できない。しかしながら、配石が墓壙上面付近に限定されること、墳丘東側で確認されたような石列が墓壙上部では認められないこと、第２号墓の標石の一部が水平に貼られていることなどは、標石として認識すべき要素と捉えることができる。あるいは、墓壙上部の標石が貼石としての機能を兼ねていたとも想定できるが、その場合は、後出する方形貼石墓とは異なる、より初源的な形態を有した配石構造であった可能性があるものといえよう。

(5) 四拾貫小原墳丘墓の系譜

四拾貫小原墳丘墓は中期後半の方形貼石墓であったと考えることができた。本遺跡で想定した石列・貼石は、後出する三次市陣山墳墓群や佐田谷・佐田峠墳墓群などの四隅突出型墳丘墓にみられる配石構造と比較すると不定形なものである。標石についても、その一部は貼石の性格を併せもち、後の墳丘墓にはない特徴とみなせるかもしれない。これらの諸要素か

らすれば、四拾貫小原墳丘墓は方形貼石墓の初源的な様相を示すものである可能性が高い。そこで、備後北部地域における方形貼石墓の出現に深く関わる山陰地方の状況をみていく。池淵俊一は中期中葉の江津市波来浜遺跡Ａ区墳丘墓を例として、方形区画墓の貼石を個々の埋葬施設の大きさに合わせて周囲に石を巡らせたものと把握しており、前段階の標石、つまり、第Ⅲ章第１節で述べた全面被覆型にみられた墓壙の周囲を縁取る配石（第23図１・２）がやや規模を拡大して成立したものと指摘している（池淵2007）。最古段階の貼石墓である波来浜遺跡Ａ区墳丘墓にその状況を認めるならば、方形貼石墓がもつ配石構造の系譜は弥生時代前半期に山陰地方沿岸部でみられた標石墓・覆石墓に求められるものと考えることができる。四拾貫小原墳丘墓では標石そのものも想定できたため、山陰地方沿岸部の墓制に影響を受けたものといえる。後述する列状配置の埋葬施設とともに考えれば、強い共同体的規制のなかで「配置」された被葬者を想起するため、その埋葬施設を強調する目的で施された標石の性格を一部受け継ぐものと把握できよう。

続いて墓壙配置についてみていきたい。四拾貫小原墳丘墓では墳頂平坦部中央付近に墓壙はなく、墳丘縁辺部に沿わせるように墓壙が掘り込まれていたと想定でき、特定の埋葬に中心性を見出せないものであった。ここで、ほぼ同じ時期の松江市友田遺跡（岡崎1983）と比較してみたい。友田遺跡Ｂ区墳丘墓群の１・２号墓（第49図４～６）では、複数の墓壙が主軸を揃えて列を成すように配置されていた。微妙に異なる配置ではあるが、四拾貫小原墳丘墓の墓壙配置も墳丘短辺の墓壙を除けば類似するものといえ、特定の埋葬に中心性を見出せない点でも共通している。この墓壙配置は弥生時代前期までに九州北部地方や山口県響灘周辺地域から山陰地方沿岸部に波及した「列状配置」（山田2000、守岡2007）のあり方を継承したと考えられている（池淵2007）。列状墓に認められる強い規制を引き継いでいることが想定でき、共同体的集団内の分節を表す可能性が考えられる。

第２節　中国地方における弥生時代中期後半の墳丘墓

(1) 佐田谷・佐田峠墳墓群における墓壙の様態

第Ⅳ章で詳述したように、佐田谷・佐田峠墳墓群は中期末葉から後期前葉における墳丘墓の墳丘形態、埋葬施設の発達過程を把握できる重要な墳墓群といえる。中期末葉から後期初頭の佐田峠３号墓と後期初頭の佐田谷１号墓を例として、それぞれの墓壙の規模・配置からみていこう。まず、佐田峠３号墓では小児埋葬と考えられる１基を除くと、各墓壙の規模に明確な差異はみられない。墓壙は墳丘長軸に直交しつつ、並列するように配置されている。この墓壙配置は中期段階では少数であるが、後期段階には普遍的にみられるようになることが指摘されており（池淵2007）、佐田峠３号墓が中期から後期への過渡期的様相を示す墳丘墓であることが改めて理解できる。

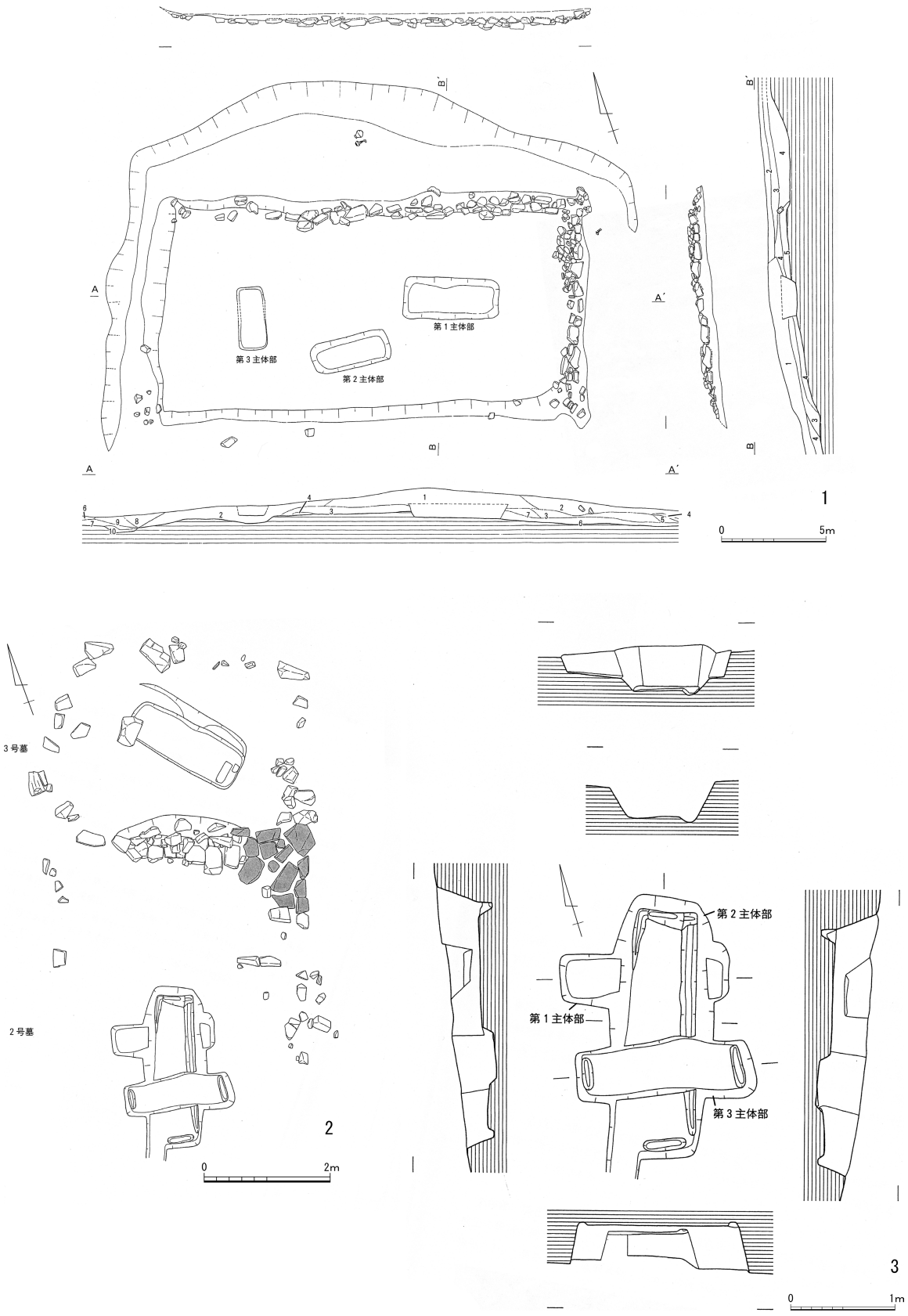
後続する佐田谷１号墓では墳頂平坦部の中心に配置された墓壙 SK2がその他の埋葬と比

第８表　弥生時代中期後半の墳丘墓一覧

遺跡名	所　在	墳墓形態	墳丘規模	墳丘構築方法	墓壙配置	墓壙数	土器出土位置	時　期	文　献
佐田谷３号墓	広島県庄原市	方形台状墓	不明	同時進行型＋墳丘先行型	長軸直交並列型	６基以上	周溝・墓壙上部	中期末葉・後期前葉	野島編2016
佐田峠４号墓	広島県庄原市	四隅突出墓	8.1×不明	不明	不明	不明	周溝	中期末葉	野島編2016
佐田峠５号墓	広島県庄原市	方形周溝墓	8×8	不明	不明	２基か	不明	中期末葉	野島編2016
佐田峠３号墓	広島県庄原市	四隅突出墓	15×7	同時進行型	長軸直交並列型	５基	墓壙上面	中期末葉～後期初頭	野島編2016
宗祐池西１号墓	広島県三次市	四隅突出墓	11×5.4	同時進行型	長軸平行散在型Ⅰ	３基	周溝	中期後葉	尾本原編2000
宗祐池西２号墓	広島県三次市	四隅突出墓	8×4	同時進行型	長軸直交重複型	３基	不明	中期後葉	尾本原編2000
殿山38号墓	広島県三次市	四隅突出墓	13×6.8	不明	長軸平行単独型	１基	周溝	中期後葉	道上1987
殿山39号墓	広島県三次市	四隅突出墓	9×6	不明	不明	不明	墳裾	中期後葉	道上1987
陣山１号墓	広島県三次市	四隅突出墓	5.2×3.5	不明	長軸平行重複型	２基	周溝	中期後葉	落田編1996
陣山２号墓	広島県三次市	四隅突出墓	12.7×6.3	不明	長軸平行散在型Ⅰ	８基以上	周溝	中期後葉	落田編1996
陣山３号墓	広島県三次市	四隅突出墓	6.2×5	不明	長軸直交並列型	２基	周溝	中期後葉	落田編1996
陣山４号墓	広島県三次市	四隅突出墓	9＋×4.7＋	不明	長軸平行散在型Ⅰ	３基以上	周溝・張出状施設	中期後葉	落田編1996
陣山５号墓	広島県三次市	四隅突出墓	4.5×2.9	不明	長軸平行単独型	１基	周溝	中期後葉	落田編1996
四拾貫小原墳丘墓	広島県三次市	方形貼石墓	8×5	墳丘後行型	長軸平行散在型Ⅱ	４基	貼石付近	中期後半	潮見編1969
四辻峠	岡山県赤磐市	方形台状墓	15×12	不明	長軸直交並列型	７基	盛土内	中期後半～後期初頭	神原編1973
四辻	岡山県赤磐市	方形台状墓	11×11	同時進行型	長軸直交並列型	22基	墓壙上面	中期後葉～後期初頭	神原編1973
波来浜Ａ区２号墓	島根県江津市	方形貼石墓	5×4	同時進行型	長軸平行並列型	３基	墓壙	中期中葉	門脇編1973
波来浜Ａ区４号墓	島根県江津市	方形貼石墓	2.6×2.1	墳丘後行型	長軸平行単独型	１基	不明	中期中葉	門脇編1973
専光寺脇１号墓	島根県益田市	方形貼石墓	9.8×8.8	不明	長軸直交単独型	１基	不明	中期中葉	東山編2008
専光寺脇２号墓	島根県益田市	方形貼石墓	10×不明	同時進行型	不明囲繞型	５基(報告では４基)	墓壙上面	中期後半	東山編2008
友田Ｂ区１号墓	島根県松江市	方形貼石墓	12.5×9.8	墳丘後行型	長軸平行散在型Ⅰ	７基	周溝	中期後半	岡崎1983
友田Ｂ区２号墓	島根県松江市	方形貼石墓	12×5.9	同時進行型	長軸平行散在型Ⅱ	９基	盛土内・周溝	中期後半	岡崎1983
友田Ｂ区３号墓	島根県松江市	方形貼石墓	11.3×9.1	墳丘後行型	長軸平行単独型	１基	不明	中期後半	岡崎1983
友田Ｂ区４号墓	島根県松江市	方形貼石墓	12.25×9.25	不明	不明	不明	周溝	中期後半	岡崎1983
友田Ｂ区５号墓	島根県松江市	方形貼石墓	13.15×9.75	同時進行型	長軸平行単独型	１基	旧表土	中期後半	岡崎1983
友田Ｂ区６号墓	島根県松江市	方形貼石墓	11.5×7	不明	長軸直交並列型	７基	周溝	中期後半	岡崎1983
梅田萱峯墳丘墓	鳥取県東伯郡	方形貼石墓	11.3×8.6	墳丘後行型	長軸直交散在型Ⅱ	２基	墳丘全体と第２埋葬施設個別供献	中期後葉	湯村・濱本編2009

べて大型化し、さらに木槨木棺の二重構造をもつなど、前段階と比較すると中心埋葬が隔絶化している。この中心墓壙に重複するように周辺墓壙が配置されているが、これは池淵俊一が指摘する中心埋葬占有型と考えられ（池淵2007）、中心的大型墓壙の出現による墓壙配置の変化を示すものとみられる。

これら佐田谷・佐田峠墳墓群でみられた墓壙規模や墓壙配置、そして墳丘構築方法が中国地方全体でもみられるものかどうかを確認することによって、両墳墓群の様相がより普遍的な弥生墳丘墓の発達過程を示す可能性を検討できるだろう。そのために、まず本節では中期後半における墳丘墓を比較分析し、次節へとつなげたい。



第48図　弥生時代中期後半の墳丘墓（1）
1．宗祐池西１号墓　2・3．宗祐池西２号墓

(2) 中期後半の墳丘墓とその特徴

中期後半における弥生墳丘墓の発達過程の検討は、とくに四隅突出型墳丘墓の突出部形態に注目して行われているが（仁木2007、藤田2010ほか)、すべての墳丘形態に共通する発展様相の把握は不十分である。ここでは以下の視点から埋葬施設の分析を行いたい。

ａ．分析方法

墳丘形態は除外し、埋葬施設のみに焦点を当てて検討することとし、一部後期初頭まで存続するものも対象に含める。着眼点として、おもに墳丘墓の①埋葬施設数、②墓壙規模[29]、③墓壙配置、④墳丘構築方法（墓壙の掘削・埋葬段階）の４点に注目する。

ｂ．対象資料の紹介

中国地方の弥生墳墓のうち対象資料として抽出した墳丘墓は27例であり、埋葬施設のあり方が確認できたものは23例、さらに墳丘構築方法が確認できたのは14例である。各墳丘墓の概要は第８表と付表のとおりである。以下では、墓壙配置や墳丘構築方法が判断できた墳丘墓をいくつか紹介する。

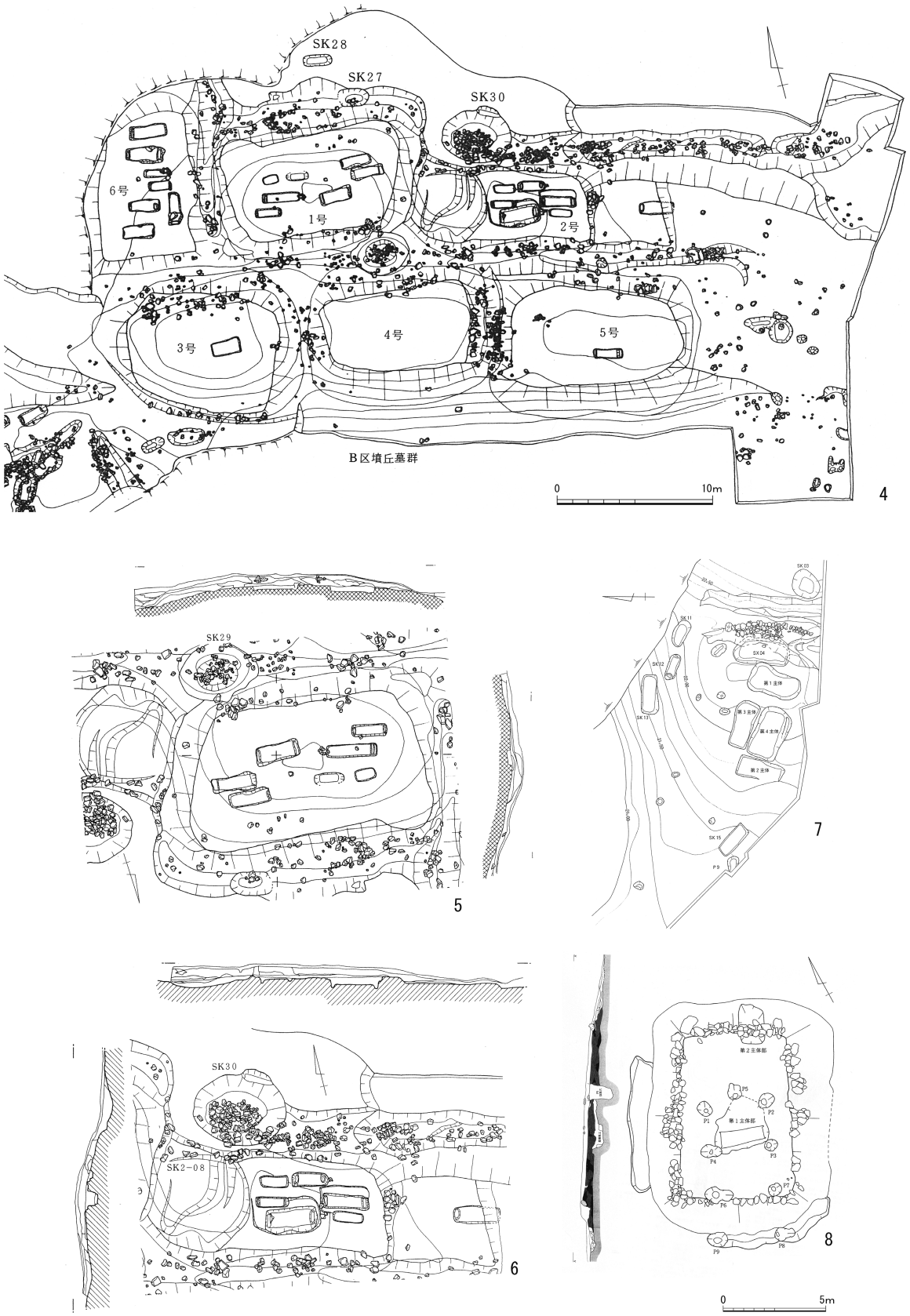
波来浜遺跡Ａ区（門脇編1973)（第33図１・２） 江津市波来浜遺跡Ａ区では６基の墳丘墓が確認されている。明確な時期が判明している２号墓では埋葬施設が３基検出されており、墳丘長軸に平行して並列的に配置されている。報告書の記載と土層断面図によれば、基盤層から掘り込まれた墓壙と上面の盛土層から掘り込まれた墓壙がある。

梅田萱峯遺跡（湯村・濵本編2009)（第49図８） 東伯郡梅田萱峯遺跡では、居住域と異なる地点で墳丘墓が確認されている。埋葬施設は２基検出されており、１基は墳頂平坦部中央付近に、もう１基は貼石直下付近に位置していた。いずれの墓壙も盛土を施す以前に掘り込まれていた。

専光寺脇遺跡（東山編2008)（第49図７） 益田市専光寺脇遺跡では２基の墳丘墓が確認されている。このうち、２号墓では５基の墓壙が検出されている[30]。墳頂平坦部では中心埋葬と考えられる第４主体を囲むようにその他の墓壙が配置されている。これら墓壙の底面レベルには50㎝程の差がみられ、墓壙が掘り込まれた面が異なると判断できる。

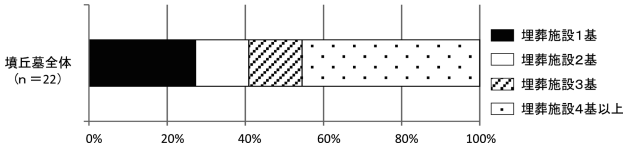
友田遺跡Ｂ・Ｃ区（岡崎1983)（第49図４～６） 松江市友田遺跡は中期から後期にかけての墳墓群で、Ｂ・Ｃ区に存在する６基の墳丘墓群が中期に属すると考えられる。１号墓（第49図５）では７基の墓壙が散在的に配置されていた。断面図をみる限り墓壙は基盤層から掘り込まれていたようである。２号墓（第49図６）では６基の墓壙が主軸をある程度揃えて配置されていた。断面図からは２基の墓壙が基盤層から掘り込まれていることが確認できる。しかし、両者の墓壙底面レベルが異なることに加え、１基は深さ10㎝と被葬者を納めるには浅く、本来はより上層から掘り込まれていた可能性が考えられる。３号墓では１基の墓壙が検出された。墓壙は墳丘基盤層から掘り込まれていた。５号墓で検出された墓壙は１基であり、盛土の途中から掘り込まれていたことが報告されている。６号墓では７基の墓壙が検出されており、うち６基は並列的に配置されている。

宗祐池西遺跡（尾本原編2000)（第48図） 三次市宗祐池西遺跡では、中期後葉と考えられる

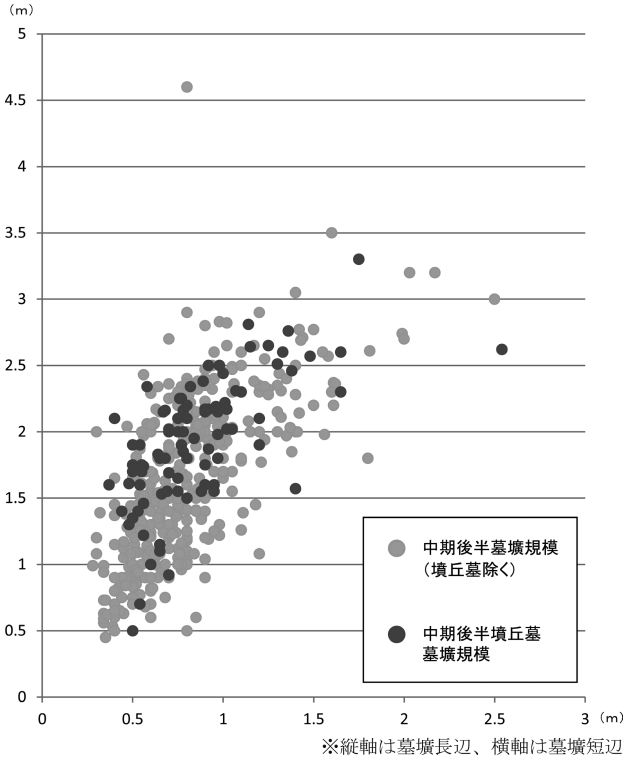


第49図　弥生時代中期後半の墳丘墓（2）

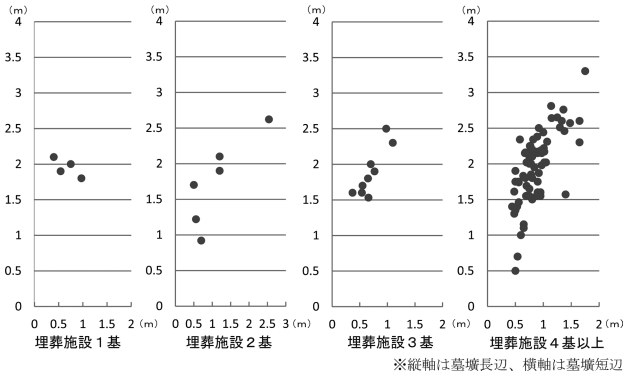
4．友田遺跡Ｂ・Ｃ区　5．友田１号墓　6．友田２号墓　7．専光寺脇２号墓　8．梅田萱峯墳丘墓



第50図　中期後半の墳丘墓の埋葬施設数



第51図　中期後半の墓壙規模分布図



第52図　中期後半の埋葬施設数と墓壙規模

墳丘墓が２基確認された。１号墓（第48図１）では３基の墓壙が検出された。このうち２基は墳丘長軸に平行、１基は直交するように散在的に配置されていた。断面図からは墳丘長軸に平行する墓壙が盛土途中から掘り込まれたことが確認できる。墳丘長軸に直交する墓壙は墳丘上面から掘り込まれたことが想定できる。

１号墓の北に位置する２号墓（第48図２・３）では墓壙３基が検出された。いずれも重複することから、各墓壙が掘り込まれた時期が異なると考えられる。墳丘は検出面よりも高かったことが想定されており、盛土の途中から墓壙が掘り込まれた可能性もあろう。

四拾貫小原遺跡（潮見編1969）（第36～44図）　前節で検討したように、本来は盛土をもつ方形貼石墓であったと考えられる。各墓壙は盛土を施す以前に掘り込まれたと考えることができ、墳丘墓縁辺に沿うような墓壙配置が窺える。

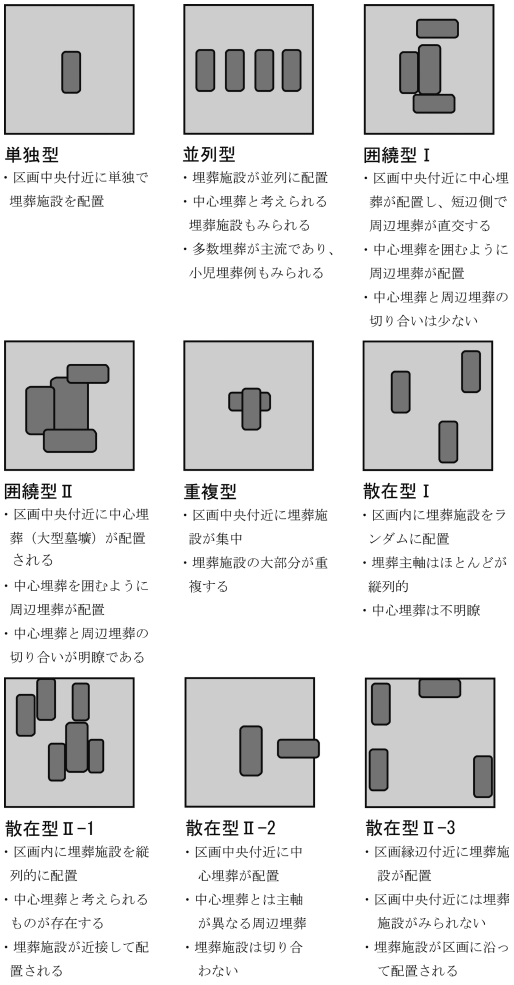
c．分　析

埋葬施設数　埋葬施設数が把握できる事例は22例である。単独埋葬から多数埋葬まで様々である。１基のみを単独埋葬、２・３基を少数埋葬、４基以上を多数埋葬として分析を行った（第50図）。その結果、多数埋葬の墳丘墓がほぼ半数となり、次いで単独埋葬が多く、少数埋葬は少なかった。多数埋葬もしくは単独埋葬が特徴的であることが指摘できる。

墓壙規模　墓壙配置と同様に階層性などの埋葬原理を示す要素であることが指摘されている（会下2002など）。ここでは中期後半の土壙墓なども含めて比較した（第51図）。墓壙規模は長軸平均1.93m、標準偏差±0.48mであり、成人埋葬が多数を占める様相が確認できる。ただし、墓壙長軸平均及び標準偏差に対して明らかに規模が小さく、小児埋葬と考えられる例

も少数確認できる。小児埋葬が想定できる墳丘墓は、佐田峠３号墓、赤磐市の四辻峠台状墓と四辻土壙墓群内台状墓などであり、一部後期まで継続する比較的に時期が新しいものに小児が埋葬されていると考えられる。墓壙長軸2.5～3.0m程と、墓壙長軸の平均値＋標準偏差を超えるやや大型の墓壙も少数存在するが、他の成人埋葬と比べ隔絶化したものとはいえない。

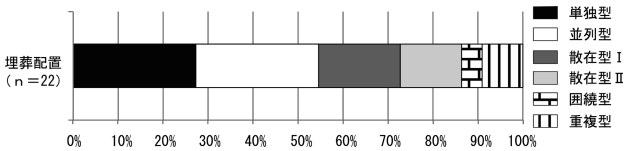
墓壙規模と埋葬施設数の関わりについて分析すると以下のことが指摘できる（第52図）。単独埋葬の墓壙は長軸2.0m前後に集中し、明瞭な差異はみられない。少数埋葬のものに関してもほぼ同様で、長軸１m程度から長軸平均値＋標準偏差値内にほぼ収まっている。一方で、多数埋葬を行う墳丘墓の墓壙規模は他と様相が異なっている。単独埋葬・少数埋葬を行う墳丘墓と比較して墓壙が大型と小型に分散し、なおかつ偏差も大きいことがわかる。また、先に指摘した小児埋葬が含まれる墳墓はすべて多数埋葬を行っている。



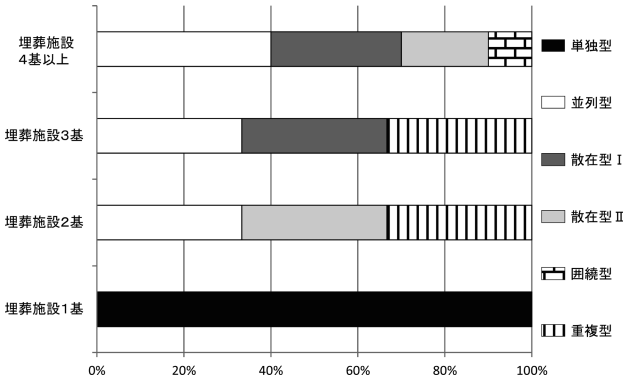
第53図　墓壙配置模式図

墓壙配置　墓壙配置は墓壙規模や階層性といった埋葬原理との密接な関連が指摘されている（野島・野々口1999・2000、野島2000、池淵2007など）。ここでは池淵の分類案を参考にし、空間占有のあり方や中心埋葬の有無から「単独型」、「並列型」、「囲繞型」、「重複型」、「散在型」の５つに大別した（第53図）。散在型のうち中心墓壙や意図的な墓壙配置がみられるものは散在型Ⅱ[31]とした。また、墓壙の大半が重複しているものを重複型とし、一部のみ墓壙が重複するものは除いた。これらの分類をさらに、墳丘長軸に対して直交するか、あるいは平行するかに基づき細分した。墳丘が正方形を呈し、墳丘主軸が認識できないものは正方形とした。

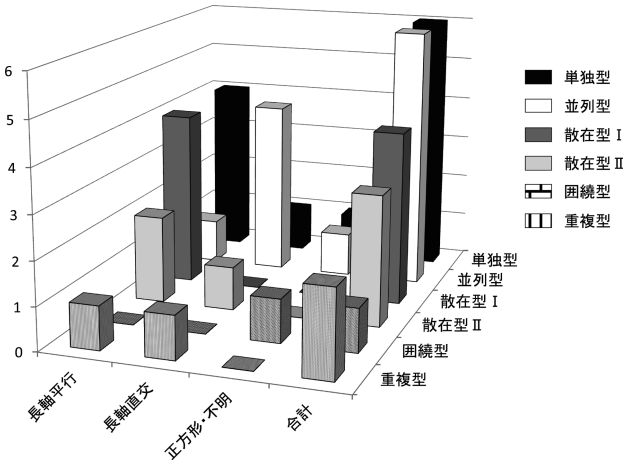
墳丘主軸を考慮せずに墓壙配置のみで分析すると、並列型と単独型が多くみられ、散在型Ⅰがそれに次ぐ（第54図）。これと埋葬施設数の関わりを検討すると、多数埋葬では並列型の割合が比較的高いものの、散在型Ⅰ・Ⅱや囲繞型もみられ、墓壙配置が多様であることがわかる（第55図）。少数埋葬を行う墳丘墓でも並列型、散在型、重複型と多様な墓壙配置が認められるが、重複型は少数埋葬でのみ確認できる点は注目される。墓壙配置と墳丘長軸の関係については、基本的に長軸に平行するものが大半を占めており、とくに単独型と散在型Ⅰはその傾向が強い（第56図）。しかし、並列型のみ長軸に直交する配置が主流となり、他



第54図　中期後半の墓壙配置



第55図　中期後半の墓壙配置と埋葬施設数



第56図　中期後半の墳丘主軸と墓壙配置

の墓壙配置とは様相が異なっている。また、散在型Ⅰはすべて墳丘長軸に平行する点も特徴的である。

墳丘構築方法　和田晴吾の分類（和田2003）を援用し、「墳丘後行型」、「同時進行型」、「墳丘先行型」の３つに分類した（第47図）。不明としたものも多いが、墳丘構築方法が確認できた墳丘墓14例のうち、墳丘後行型５例、同時進行型９例となり、墳丘先行型は確認できなかった（第57図）。このことから、少なくとも墳丘構築方法が把握できる墳丘墓を見る限り、中期後半には墳丘後行型と同時進行型の２種類が墳丘構築方法として採用されていた可能性が高い。

最後に墓壙配置と墳丘構築方法の関わりを検討した（第58図）。単独型、散在型Ⅰ・Ⅱでは墳丘後行型の割合が高いものの同時進行型もみられ、明瞭な相関性が見出せない。一方で、並列型、重複型、囲繞型の墓壙配置については、同時進行型の墳丘構築方法を志向していることがわかる。

d．小　結

中国地方における中期後半の弥生墳丘墓は、墓壙規模からみて基本的には成人埋葬を中心としたものであったと考えることができた。多数埋葬を行う同一墳丘墓内の墓壙間に規模の差は基本的に認められず、同時期の土壙墓などと比較しても同様に差異はほとんどなかった。隔絶した規模をもつ中心的墓壙を見出せないことから、等質的な集団墓の範疇にあると捉えることができた。一方で、少数ながら墓壙規模平均値＋標準偏差値を超える墓壙がみられる場合もあり、単独・少数埋葬を行う墳丘墓とも異なった様相を呈していた。このことから、多数埋葬を行う墳丘墓において差異化が先行して発達している可能性が想定できた。

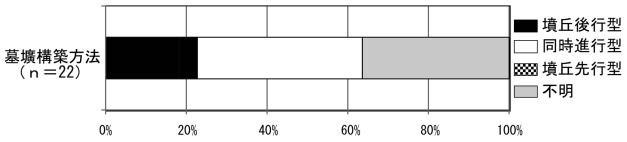
墓壙配置については、単独・多数埋葬を除くと並列型と散在型Ⅰが多数を占める様相が認められ、埋葬施設数に関係なく多様な墓壙配置が行われていることがわかった。多数埋葬を行う墳丘墓では並列型の割合が高く、重複型は少数埋葬を行う墳丘墓でのみ確認できた。全

体として中心埋葬が墳頂平坦部を占有する墓壙配置ではなく、並列型や散在型が大半を占めることから、中期後半の墳丘墓では、埋葬間の差異化がない等質的な墓壙配置が行われていたと捉えることができた。

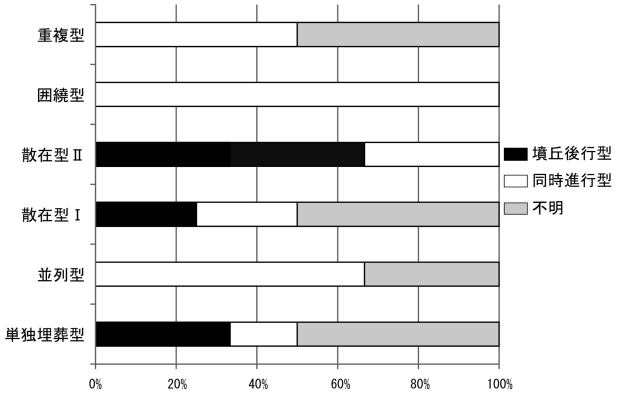
墳丘構築方法について確認できたものでは、墳丘後行型もしくは同時進行型のいずれかが採用されていた。この墳丘構築方法は墓壙配置と相関関係をもつ可能性が高く、とくに同時進行型の墳丘構築方法と、墓壙の位置関係に一定の秩序が認められる並列型、囲繞型、重複型といった墓壙配置の間に強い相関を窺うことができた。佐田峠３号墓でもみられたように、先行して設けられた墓壙の封土に一部重複させるように墓壙を掘り込んでいる状況を想定できるものが多いため、埋葬と墓壙配置が密接かつ有機的に関連しながら墳丘構築が行われていたことが要因であったと考えられよう（第59図）。

(3) 中期墳丘墓の性格

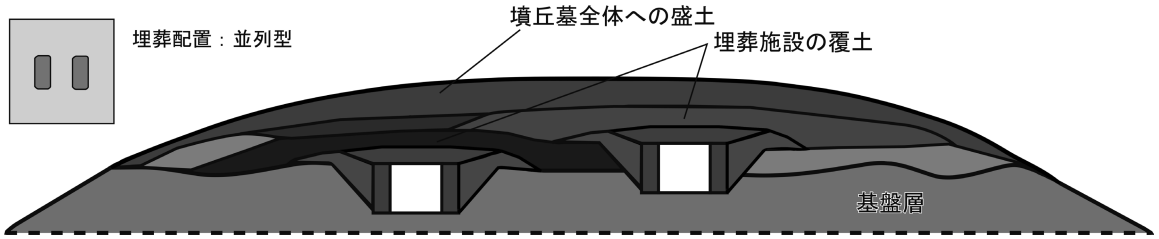
中国地方における中期段階の墳丘墓では、墓壙規模の差異が明瞭には存在せず、規模からみて成人埋葬が多かった。墓壙配置には多様性が認められたが、中心的な大型墓壙が墳頂平坦部を占有する様相はみられず、並列型を主体として基本的には埋葬間に著しい差異がみられない等質的な墓壙配置が行われていた。墳丘構築方法は同時進行型か墳丘後行型を採用していたが、とくに同時進行型の墳丘墓には、規模や配置からみて前代の集団墓と近似する性格を捉えうる墓壙が多かった。池淵が指摘するように、成人を中心とする選択的代表者層のための墓でありながらも埋葬小群を強調するあり方といえ、前代の集団墓的性格からは脱却していないものであったと考えられる（池淵2007）。



第57図　中期後半の墳丘構築方法



第58図　中期後半の墳丘構築方法と墓壙配置



第59図　中期後半の並列型墓壙配置の墳丘構築

第３節　備後北部地域における弥生時代後期前半の墳丘墓

(1) 後期前半の墳丘墓とその特徴

ａ．分析方法

前節で中国地方における中期後半の墳丘墓の性格を明らかにした。これを受けて本節では、備後北部地域における後期前半の墳丘墓を対象に、①埋葬施設数、②墓壙規模、③墓壙配置、④墳丘構築方法（墓壙の掘削・埋葬段階）を着眼点として分析を行い、佐田谷・佐田峠墳墓群の評価を試みたい。

ｂ．対象資料の紹介

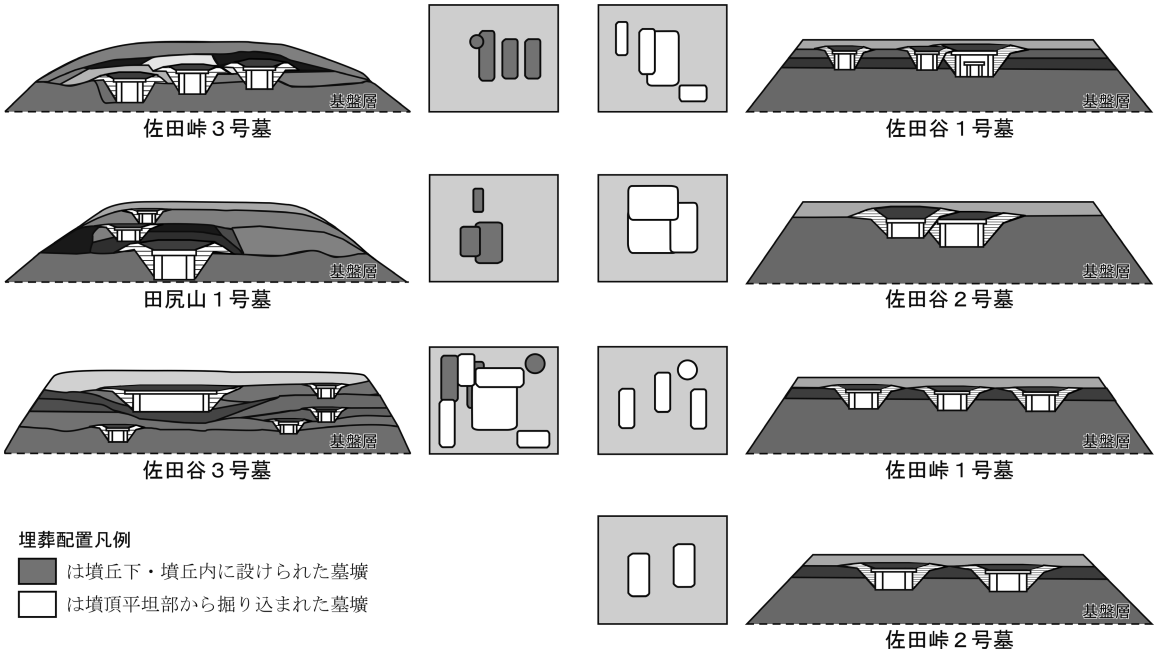
備後北部地域の後期前半の資料については７基の調査事例（第60図）がある。当該時期の中国地方における調査例は少なく、７基のうち６基が佐田谷・佐田峠墳墓群内のものとなっている。以下、各墳丘墓の概要を紹介する。なお、各墳丘墓の具体的内容は第９表と付表でも示しているのでそちらも参考にしていただきたい。

佐田峠３号墓（野島ほか2009、野島・矢部2010、野島編2016）　中期末葉から後期初頭に築造された初期四隅突出型墳丘墓である。墳丘規模は長辺約15m、短辺約７mである。小児埋葬の可能性を含む５基の埋葬施設が確認されており、初葬は墓壙 ST02であったことが明らかとなっている。その墓壙規模はやや大型ではあるものの、他の墓壙に比べて隔絶しているとまではいえない。墓壙は墳丘長軸に直交して並列に配置されており、長軸直交並列型である。旧表土に一部盛土を施した整地面からやや大型の墓壙が掘り込まれ、その封土に一部重複するように次の墓壙を掘り込むという過程が復元されている。このことから、同時進行型の墳丘構築方法を採用していることがわかる。

佐田谷３号墓（妹尾編1987、野島ほか2013、今西・辻村編2017）　現状の墳丘規模が長辺約24m、短辺約11mの方形台状墓である。林道による削平を受けているが、本来はより大型であったと考えられる。北側に隣接する佐田谷１号墓と周溝を共有しており、３号墓周溝が埋没した後に１号墓の周溝が再掘削されたことがわかっている。１号墓に先行する墳丘墓であり、周溝最下層出土土器から築造開始時期は中期末葉頃と考えられる。これまでの調査成果から同時進行型の墳丘構築方法を採用していることがわかっている。ただし、墳頂平坦部直下からも複数の墓壙が検出されており、墳丘先行型的な様相も同時に認められた。第Ⅱ章第

第９表　分析に用いた墳丘墓一覧

遺跡名	墳丘形態	墳丘規模			墳丘構築方法	墓壙配置	墓壙数	土器出土位置	時　期	文　献
		長辺	短辺	墳丘高						
佐田峠３号墓	四隅突出墓	15.0	7.0	1.3	同時進行型	長軸直交並列型	５基	墓壙	中期末葉～後期初頭	野島編2016
佐田谷３号墓	方形台状墓	－	－	1.8	同時進行型＋墳丘先行型	不明（囲繞型Ⅱ）	６基以上	周溝＋墓壙	中期末葉・後期前葉	今西・辻村編2017
田尻山１号墓	四隅突出墓	10.9	9.6	1.0	同時進行型	長軸直交散在型Ⅱ	２基	墳裾	後期初頭	向田1978
佐田谷１号墓	四隅突出墓	19.0	14.0	1.5	墳丘先行型	長軸直交囲繞型Ⅱ	４基	墓壙	後期初頭	妹尾編1987
佐田谷２号墓	四隅突出墓か	17.0	13.0	0.5～1.0	墳丘先行型	長軸平行囲繞型Ⅱ	３基以上	墓壙	後期前葉	妹尾編1987
佐田峠１号墓	方形台状墓	17.0	13.0	1.4～1.7	墳丘先行型	長軸直交並列型	４基	墓壙	後期初頭	野島編2016
佐田峠２号墓	方形台状墓	15.0	14.4	0.2～0.4	墳丘先行型	長軸直交並列型	２基	墓壙	後期前葉	野島編2016



第60図　備後北部地域における後期前半の墳丘墓

１節で示したように中期末葉の墳丘墓を後期前葉段階に再利用した可能性もある。埋葬施設は６基以上あるものと考えられ、墳頂平坦部の墓壙配置は囲繞型Ⅱとなる。

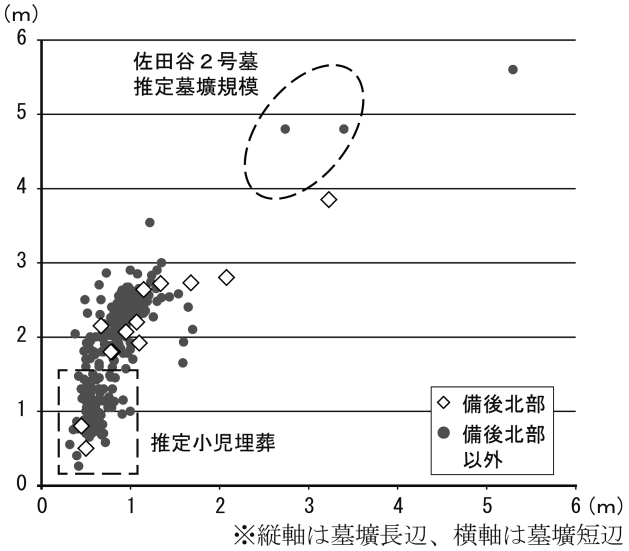
田尻山１号方形墓（向田1978）　隅部の貼石の状況から初期四隅突出型墳丘墓であることが明らかとなっている。墳丘規模は長辺約11m、短辺約10mである。第Ⅳ章註25でも述べたように、同時進行型の墳丘構築状況を示すものと想定できる。墓壙が墳丘主軸に直交して配置されており、長軸直交散在型Ⅱであると判断できる。築造時期は出土土器から後期初頭頃である。

佐田谷１号墓（妹尾編1987）　佐田谷１号墓は後期初頭に築造された石列・貼石をともなう四隅突出型墳丘墓であることが判明している。墳丘規模は長辺約19m、短辺約14mである。埋葬施設は４基検出されており、すべて墳頂平坦部上面から掘り込まれていることが確認されている。中心墓壙は長軸3.85mと他の墓壙に比べ大型であるとともに、木槨木棺の二重構造が認められ、中心埋葬が隔絶する。また、墓壙配置についても墳丘主軸に直交する中心墓壙の周囲にその他の墓壙を掘り込むとともに、中心墓壙に一部重複するものも認められる。これらのことから、墳丘構築方法は墳丘先行型であり、墓壙配置は長軸直交囲繞型Ⅱである。

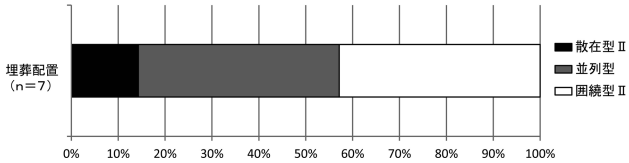
佐田峠１号墓（脇山ほか2012、野島ほか2013、野島編2016）　後述の佐田峠２号墓と隣接して築造された方形台状墓である。墳丘規模は長辺約17m、短辺約13mである。埋葬施設は可能性があるものも含め４基検出されており、墳頂平坦部から墓壙を掘り込み、最終的に墳丘全体へ盛土をしている。墳丘構築方法は墳丘先行型であり[32]、墓壙配置は長軸直交並列型である。築造時期は出土土器から後期初頭頃である。

佐田峠２号墓（脇山ほか2012、野島ほか2013、今西・辻村編2017）　佐田峠１号墓と周溝を共有して隣接している。周溝の埋没状況から１号墓が先行し、それほど時期を隔てることな

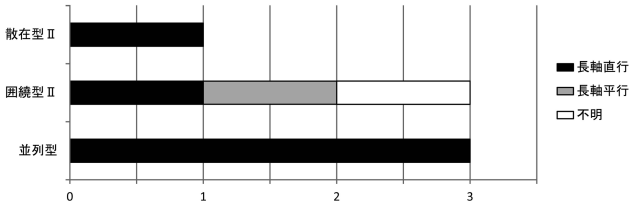
く築造されたものと考えられている。墳丘規模は長辺約15m、短辺約14mであり、外表施設が明瞭に確認できなかったことから方形台状墓と想定されている。墳頂平坦部から墓壙が掘り込まれており、確認した範囲では２基存在する。墓壙は墳頂平坦部の主軸に直交して並列的に配置されている。墳丘構築方法は墳丘先行型であり、墓壙配置は長軸直交並列型である。築造時期は出土土器から後期前葉頃に位置付けられる。



第61図　後期前半の墓壙規模分布図



第62図　後期前半の墓壙配置



第63図　後期前半の墳丘主軸と墓壙配置

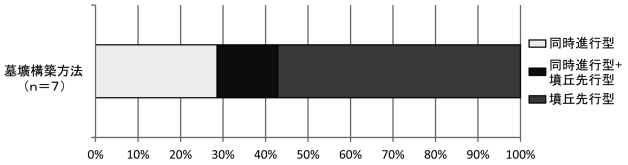
佐田谷２号墓（妹尾編1987、野島ほか2013、野島編2016）　佐田谷１号墓東側に隣接する方形台状墓である。墳丘規模は長辺約17m、短辺約13mであり、外表施設は石列が確認されていることから、四隅突出型墳丘墓の可能性も想定できる。墓壙は３基以上検出され、墳頂平坦部直下から掘り込まれたことが明らかとなっている。詳細な規模は不明であるが、墳頂平坦部中央付近に位置する墓壙は確認できる範囲でも長辺３m以上の大型のものである。また、周辺墓壙についても長辺３m以上であることがわかっている。このような様相は、中国地方全体で比較しても当該時期において最大級であり、佐田谷２号墓の特異性が窺える。墓壙配置は墳丘主軸と平行するが、佐田谷１号墓と同様に周辺墓壙が中心墓壙に重複しつつ囲繞する。以上のことから、墳丘構築方法は墳丘先行型であり、墓壙配置は長軸平行囲繞型Ⅱであることが指摘できる。

c．分　析

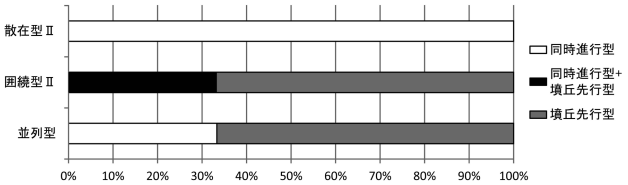
墓壙規模　備後北部地域以外の中国地方で確認されている墳丘墓との比較を行った（第61図）。結果として、基本的には他地域でみられる様相と同様であることが指摘でき、備後北部地域でみられるような墓壙規模および小児埋葬は他地域でも認められることがわかった。ただし、大型墓壙の出現は備後北部地域と因幡地域にしか認められない。また、隔絶した中心墓壙をもつ墳丘墓においては周辺墓壙も大型となる傾向が指摘できる。とくに、佐田谷２号墓や岩美郡新井三嶋谷１号墳丘墓ではその様相が顕著で、地域を超えた類似性が指摘できる。

墓壙配置　墓壙配置については並列型、囲繞型Ⅱ、散在型Ⅱが認められる（第62図）。前二

者が大半を占め、配置に明確な意図を見出せない散在型は少数である。囲繞型Ⅱからわかるように、墓壙の大型化に対応して中心埋葬が顕在化する。中心墓壙の周囲に一部重複してその他の墓壙が配置されており、両者の強い関係性が窺える。墳丘主軸に直交して配置するものが主流であり、中期に認められるような長軸平行タイプは少数となっている（第63図）。これらのことから、備後北部地域では中心埋葬が顕在化し、周辺埋葬も秩序付けられた配置をしていることが指摘できる。



第64図　後期前半の墳丘構築方法



第65図　後期前半の墳丘構築方法と墓壙配置

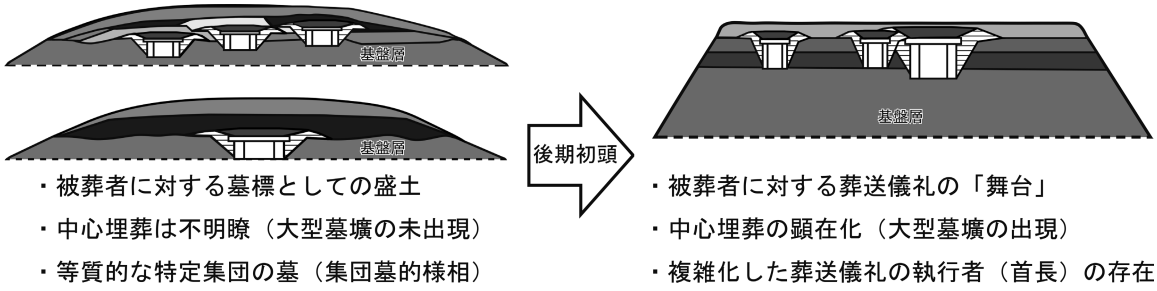
墳丘構築方法　墳丘構築方法は、同時進行型と墳丘先行型が認められる（第64図）。ただし、時期を詳細にみていくと、後期初頭以降はすべて墳丘先行型の墳丘構築が行われていることが指摘できる。中期後半に同時進行型との相関が明瞭であった並列型も、後期初頭以降には墳丘先行型で墳丘構築を行う状況が看取できる（第65図）。墳丘先行型墳丘墓の墓壙配置においては、中心埋葬が顕在化したものとそうでないものに二極化するが、いずれも同一墳丘墓上の他の埋葬を意識したものであることが指摘できる。このことより、中期の墳丘墓に採用されていた埋葬秩序とは明らかに異なる様相が想定できる。

d．小　結

備後北部地域では後期初頭以降、全体的に墓壙規模が大型化しながら、さらに隔絶した墓壙も出現する。また、墳頂平坦部に小児埋葬と考えられるものも普遍的に認められるようになる。墓壙配置もこの状況を示すかのように、中心埋葬が明瞭化する囲繞型Ⅱが出現する。このような配置は特定個人や特定集団へと権力が集中すると同時に、その従属性・系譜関係が意識される段階に移行しつつある様相を示すと考えられる。また、中期後半段階に採用されていた墳丘後行型あるいは同時進行型の墳丘構築方法はほとんど認められず、ほぼすべて墳丘先行型による墳丘構築を行うという画期が指摘でき、現状では佐田谷１号墓を嚆矢としている状況が認められる。

(2) 墳丘墓にみる機能の変容

備後北部地域の後期前半の墳丘墓では、全体的な埋葬施設の大型化、隔絶した規模をもつ中心埋葬の出現、すなわち囲繞型Ⅱ（「中心埋葬占有型」（池淵2007））の墓壙配置の採用、小児埋葬の普遍化など中期後半に比べ大きな変化が窺える。また、墳丘構築方法が後期初頭を画期として墳丘先行型に変化し、これまで同時進行で埋葬と墳丘構築が行われていた並列型の配置であっても墳丘構築後に埋葬を行うという全く異なる埋葬秩序が備後北部地域で採用されたことがわかった。



第66図　弥生墳丘墓の変遷模式図

墳丘先行型は墳丘を形成後、墳頂平坦部の同一面から墓壙を掘削している。これは墳丘墓上の祭祀空間が完成した後に埋葬が行われたということであり、墳丘完成以前に埋葬される被葬者数、墓壙配置が決定されるといった社会的序列や規範があったと推測できる。換言すれば、それらが組み込まれた埋葬手順が作り出されたと想像することができる。

このうち、佐田谷墳墓群で確認できる囲繞型Ⅱは後期後葉の大首長墓に採用される墓壙配置であり、当該時期には備後北部地域と丹後地域にしか認められないタイプである点からも当該地域の特異性が指摘できる。墳丘先行型と囲繞配置は後期後半以降の出雲地域、吉備地域、丹後地域などにおいて出現する巨大化した墳丘墓の遡源となる可能性をもつ要素であり、当該地域の社会的様相が先駆的な発達状況を示すものと考えることができる。ただし、中期後半の様相を残す並列型の墓壙配置も普遍的に認められ、囲繞配置の墳丘墓と共存する。両配置型の墳丘墓にみえる相違が階層構造の萌芽を示しつつも、それがいまだ達成されていない過渡期的な社会の様相を反映しているといえよう。

最後に、佐田谷３号墓の墳頂平坦部では囲繞配置が行われたことが確認されたとともに柱穴が検出された（今西・辻村編2017）。このことは、墳丘墓が特定の集団を示す墓標的な性質から、葬送儀礼を行う「舞台」としての性質を帯び始めた証左であると考える。つまり、当該地域の墳丘墓は後期初頭から前葉を境にして墳丘墓の機能そのものが大きく変容したと指摘できる（第66図）。墳丘墓という「舞台」を利用する葬送儀礼を行う造墓集団には、被葬者の選択、配置、「舞台」としての墳丘墓の計画的な構築といった、より複雑化した埋葬原理を牽引する執行者が必要不可欠であったと想定できよう。

Ⅵ. 総　　括

第１節　佐田谷・佐田峠墳墓群の様相

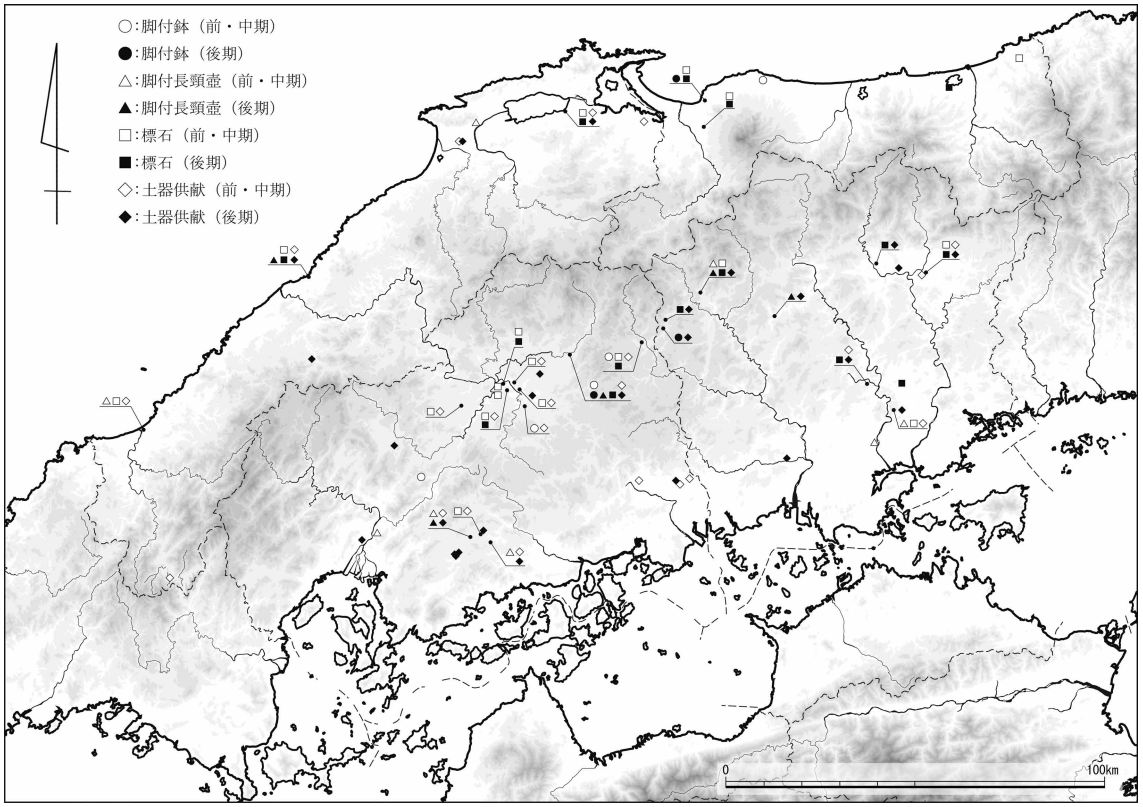
(1) 各墳丘墓の様相

佐田谷・佐田峠墳墓群は弥生時代中期後葉から後期前葉まで造営された。佐田谷３号墓は中期末葉頃までに墳丘が形成された。また、佐田峠４・５号墓もほぼ同じ時期に築造され始めた。４号墓は初期の四隅突出型墳丘墓であったものの、すぐに方形貼石墓へと改変された。佐田峠３号墓の墳丘構築は中期末葉から後期初頭まで継続した。後期初頭までには佐田谷１号墓、佐田峠１号墓が相次いで造営された。後期前葉になると佐田峠２号墓の築造、佐田谷３号墓の最終埋葬、そして佐田谷２号墓の築造が行われた。両墳墓群ともに中期末葉までにその造営が開始されたものの、後期前葉には終焉をむかえた。佐田谷墳墓群では四隅突出型墳丘墓から方形台状墓へとその墳丘形態を変化させた。また、佐田峠墳墓群でも、墳丘をもたない埋葬施設と方形周溝墓、それに四隅突出型墳丘墓が造営されていたが、後期初頭以降、方形台状墓へと変化した。両墳墓群においては四隅突出型墳丘墓と方形台状墓が併存しつつも、方形台状墓に収斂していく造墓状況を想定することができた。

また、同形態の墳丘をもつと思われていた墳丘墓でも、墳丘構築方法が異なることがわかった。佐田峠３号墓は埋葬をくり返しつつ全体の墳丘を構築する同時進行型の初期四隅突出型墳丘墓であることが判明した。墳丘を構築した後に墓壙を穿ち、埋葬を行う墳丘先行型の四隅突出型墳丘墓である佐田谷１号墓とは異なるものであった。初期四隅突出型墳丘墓が成立しつつも、急速に墳丘の構築方法や葬送儀礼が変容していく過程と捉えることができ、それが両墳墓群の造営のなかで継起していたといえる。つまり、両墳墓群では中期末葉に同時進行型の墳丘構築方法を採用していたが、後期初頭から前葉になると、墳丘先行型の構築方法へと変化していった。ここに墳丘墓発展の画期をみることができる。この墳丘構築の構造的変化は四隅突出型墳丘墓においても方形台状墓においても共時的に起こったようであり、墳墓形態の差異やその変化とはそれほど相関がみられなかった点も新たな知見であったといえる。両墳墓群では、三次地域で構築され始めた四隅突出型の墳丘を継承したが、佐田峠３号墓の墳丘構築や、佐田峠４号墓の改変といった調査事例、方形台状墓への変化からわかる通り、それを積極的に発展させていった状況を見出すことは難しい。

(2) 土器からみた特殊性

佐田谷・佐田峠墳墓群の属する備後北部地域は、弥生時代中期までに江の川流域の文化圏としてさまざまな生活基盤を共有し、中期後葉段階になると塩町式土器分布域として特殊な地域性をみせる。塩町式土器に特徴的な大型装飾土器として、注口付脚付鉢が中期後葉に出現し、中期末葉から後期初頭の佐田峠３号墓や後期初頭もしくは前葉の佐田谷１・３号墓か

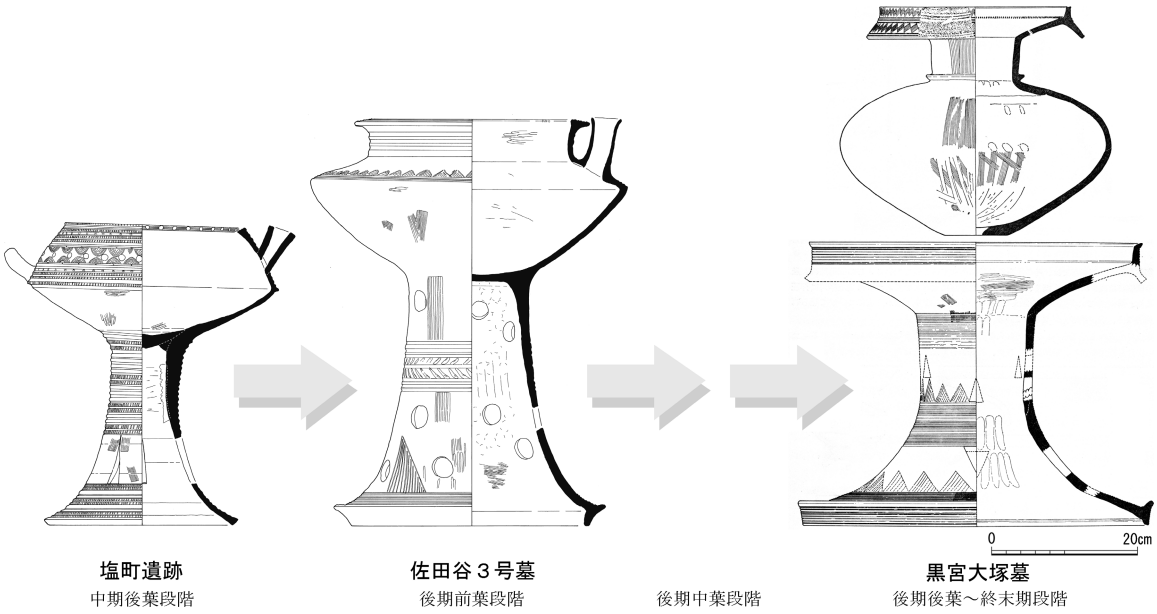


第67図　中国地方の弥生墳墓にみられる遺構・遺物の時期別分布

らも出土した。脚付鉢は時期を経るにつれ、塩町式土器の範疇では捉えられなくなる。中期末葉から後期前葉には脚台に乗る鉢形の上部形態（B類）を壺形（D類）へと変化させ、吉備南部地域と共通の加飾意匠を採用していく。中期末葉以降、墓壙上の葬送儀礼に利用され、祭祀専用土器として製作され始めたことも判明した。吉備南部地域に先行して起こった葬送に関する先駆的変革であったということができる。しかし、この大型装飾土器は佐田谷１号墓では破砕供献、佐田谷３号墓では完形供献という違いもみられた。墓壙上の葬送にともなう儀礼行為がいまだ定型化せず萌芽的なもので、試行錯誤があったとみたい。最後に築造された佐田谷２号墓では吉備系の装飾をもつ器台が出土することから、両墳墓群の葬送祭祀が器台を大型化させ、祭祀専用土器として採用する次代の葬送儀礼への足掛かりとなっていったと類推することも許されよう。

この注口付脚付鉢の広がりからは、佐田谷・佐田峠墳墓群を含む備後北部地域が、伯耆地域など周辺諸地域との交流を活発化させていった社会変容をも窺い知ることができた。使用方法はそれぞれ異なるものの一様に祭祀色の強い出土状況を示しており、器面に赤色顔料を施すといった様相は、中国地方全体における脚付鉢の分布の中では備後北部地域のほか、備中地域や伯耆西部地域などに特徴的である。他地域系土器と共伴することが多いことも考慮すれば、注口付脚付鉢の使用を通して、何らかの葬送に関わる思想の共有もしくは葬儀に際しての接触が比較的頻繁に行われていたと考えられよう。

加えて、佐田峠２号墓から出土した脚付長頸壺は備中地域からの、そして三次市塩町遺跡



第68図　祭祀用土器の変化

から出土した脚付長頸壺は石見地域からの搬入品と考えることができた。中国地方では系統の異なる脚付長頸壺が展開していたが、備後北部地域では山陰系・吉備系の両者が確認できたことになる。このことは庄原地域と三次地域でそれぞれ独自の交流網を築きながらも、総体として山陰地方と山陽地方の結節点として中核的交流を行っていた状況を如実に示していた（第67図）。

(3) 墓壙上の葬送儀礼へ

中期後葉に属する初期四隅突出型墳丘墓では、山陰地方と土器意匠が比較的類似する塩町式土器が墳丘周辺に供献されたが、佐田谷・佐田峠墳墓群では吉備地域との接触とともに、墓壙上で土器を使用する祭祀を受容した。とくに佐田谷墳墓群では墳丘構築方法が墳丘先行型に変化し、墳丘とともに墳丘の中心的な埋葬施設自体が大型化した後期初頭には、墓壙上における丹塗り大型装飾土器（注口付脚付鉢）と多くの供膳具を含んだ土器の供献がみられた。おそらくは被葬者の埋葬後、他地域の参列者と飲食を行う、あるいはそれを演じる葬儀がより盛大となり、特別な葬送儀礼が行われ始めたことを窺い知ることができる（第68図）。中国地方山間部において交流が活発化するなか、佐田谷・佐田峠墳墓群を造営した人々は吉備地域などからの外来的要素を積極的に取り込み、墳墓祭祀を革新して厚葬化を促していったものと想像できよう。

第２節　墳丘墓の画期と社会変容

(1) 墳丘墓の画期

中国地方における中期後半の墳丘墓には、大型墓壙や墳丘先行型の墳丘構築がみられなかった。佐田峠３号墓でみられたように、並列型の埋葬が繰り返され、同時進行型の墳丘構築が行われていた。しかし、後期初頭以降には並列型であっても墳丘先行型で墳丘構築を行う状況が看取できた。墓壙配置は類似しているものの、前段階の墳丘墓に窺えた埋葬秩序とは異なるものであった。それだけでなく佐田谷１号墓のように、墳丘先行型の墳丘構築方法が採用され、中心埋葬を強く意識する囲繞型の墓壙配置を行う埋葬手順が実現した。

つまり、それは墳頂平坦部という葬送のための空間が設定された後に計画的に埋葬が行われたということであり、被葬者や墓壙配置については墳丘構築以前に計画されていたとみることができる。これにより、墳頂平坦部は墓壙配置によって被葬者の社会的地位を表象する舞台装置として機能し始めた。両墳墓群では、四隅突出型の墳丘をもつ佐田谷１号墓、方形台状の墳丘をもつ佐田谷３号墓がともに中心埋葬を大型化させ、被葬者を顕彰して葬送儀礼を発達させた。この葬送儀礼は山陰地方だけでなく、吉備地域や丹後地域などへと広く影響を与えることとなった。

(2) 葬送儀礼創出の意義

被葬者の死が当時の人々にはどのように捉えられたのか、弥生墳丘墓の発展過程を把握するために避けては通れない観点である。中国地方における弥生時代の墳丘構造の変化は、被葬者がある集団に帰属することを示すものが、その死に際して様々な儀礼的措置を加えざるをえなくなった状況へと変容していく過程でもあったと言い換えることができる。その結果、墳頂平坦部がまさに葬送儀礼を執り行う舞台として認識され始めた。佐田谷３号墓の中心埋葬施設にある柱穴や丹塗りの大型装飾土器はそのような葬送儀礼の執行に必要な演出上の装置であった。

これまで述べてきたように、両墳墓群では大型墓壙をもつ中心埋葬、墓壙上面での柱穴の検出、丹塗りの大型装飾土器や多量の供膳具の供献、円礫の集積・散布、さらには木棺を覆う木槨構造などがみられた。後期後半以降、出雲・伯耆地域や吉備地域、丹後地域において巨大化する弥生墳丘墓にみられる諸要素の遡源とみなすことができる。佐田谷・佐田峠墳墓群はまさに先駆的な舞台装置を作り、入念な葬送儀礼を創出した経緯を示すものであり、弥生時代の墳丘墓の発展を如実に示していた。弥生時代の墳墓遺跡のなかでも唯一無二の遺跡であると理解することができる。

Ⅶ. 庄原市教育委員会による保存・活用方針

第１節　調査研究の経緯と周辺の歴史環境

(1) これまでの経緯

昭和61年の広島県埋蔵文化財調査センターの発掘調査において、佐田谷１号墓が四隅突出型墳丘墓であると同時に長大な木槨をもつ重要遺跡であることがわかったため、国道183号線を設計変更し現地保存することとなった。その後、三次から江府までの道路建設が計画され、庄原市宮内付近の文化財協議が始まったことから、平成９年度に広島県教育委員会（以下、県教委）と高(たか)道路建設にともなう試掘調査を実施する機会があり、さらに数基の墳丘墓を確認することができた。庄原市教育委員会（以下、市教委）は佐田谷１号墓の発掘調査が終了してからシートで覆うなど土砂流出を防ぐとともに草刈りを実施してきた。しかし、シートや土嚢が劣化し、保存に支障をきたしてきたため、新たな保存処置として真砂土で盛土工事を行うなど、保存管理に取り組んできた。

重要遺跡との認識から、発見当時は史跡になりうるであろうとの見解もなされていたが、諸事情により指定されないまま現在にいたっている。県教委と市教委でこれまでの経緯を鑑みて、今後の保存活用策について協議を重ねた結果、改めて史跡指定を目指すこととなった。そこで、帝釈峡遺跡群等、県内の学術調査に実績がある広島大学大学院文学研究科考古学研究室（以下、広島大学）に依頼し、市教委との共同研究という形で保存目的の発掘調査を実施することとなった。

これまで三次市陣山墳墓群など、多くの四隅突出型墳丘墓が史跡指定となっていることもあったため、当初、佐田谷1号墓単独では指定が困難とみられた。そのため、佐田谷墳墓群に加えて、試掘調査によって確認していた佐田峠墳墓群も含めて調査し、両墳墓群の総合的な位置付けを行うことで史跡指定を目指すこととした。

既刊報告書や本報告書〈研究編〉で纏められたように、弥生時代後期初頭から後期前葉に埋葬形態の大きな変化がみられること、多様な墳墓と埋葬施設をもつことなどから、墳丘墓がどのように変遷するのかが明らかとなり、当該時期の墓制を考える上で貴重な遺跡であることがわかった。

(2) 佐田谷・佐田峠墳墓群周辺の主要遺跡

この佐田谷・佐田峠墳墓群のある宮内地区周辺は、古墳時代の矢崎古墳、広政古墳群、山根古墳群、鐘鋳原古墳群などがあり、古墳密集地である（第10表、図版第１）。また、西城川を挟んで北側には、大型の横穴式石室を有する古墳時代後期の唐櫃古墳、宮内地区西部には、白鳳期の瓦が出土した伝神福寺跡が存在しており、弥生時代、古墳時代、歴史時代の著名な遺跡が知られている。さらには南西2.5㎞に拠点集落遺跡となる和田原遺跡群がある。

第10表　佐田谷・佐田峠墳墓群周辺の主要前方後円墳

古墳名	所在地	全　長（m）	後円径（m）	備　考
矢崎古墳	庄原市小用町	56.0	33.0	埴輪
広政２号古墳	庄原市小用町	48.0	35.0	埴輪、須恵器
鐘鋳原８号古墳	庄原市小用町	42.0	30.0	向田1978
鐘鋳原７号古墳	庄原市小用町	40.0	20.0	野島編2016
唐櫃古墳	庄原市川西町	41.4	28.8	石室全長13.1m、馬具

弥生時代中期後葉の塩町式土器や銅鐸形土製品、分銅形土製品などが出土しており、同時代となる佐田谷・佐田峠墳墓群との関連が考えられる。

第２節　　佐田谷・佐田峠墳墓群の保存・活用について

(1) 周辺遺跡群との連携活用

先に説明した周辺遺跡について、現時点で整備している遺跡は唐櫃古墳だけである。唐櫃古墳は県内でも最大級の石室を有することで、県史跡となった。平成５年度に確認調査を行い、平成12年度から本格的な整備工事を開始した。平成15年度からは、駐車場整備や階段をつけるなど、見学しやすい環境づくりを整えた。唐櫃古墳の整備後、報告書・パンフレット等をとおして周知を図ったため、毎年市内の小学校が見学に訪れるようになった。庄原市の歴史を考える上で、貴重な遺跡となっている。また、整備後の維持管理については、地域住民が行っており、官民一体となって遺跡の管理・活用を行っている。

しかしながら、唐櫃古墳単体では見学者数、見学時間のどちらにおいても限界がある。史跡周辺の主要遺跡との総合的な連携活用が今後の重要な課題であると考えられる。このため、唐櫃古墳に加えて佐田谷・佐田峠墳墓群を中心とした遺跡整備を目指したい。両墳墓群を中心とし、西側には古代寺院である伝神福寺（廃寺）跡、南側には大型の前方後円墳、北側には唐櫃古墳など、数多くの遺跡が集中しており、弥生時代から歴史時代までの遺跡を網羅して見学できる（第69図）。地域の歴史教育に寄与するために、高（たか）・宮内地区の遺跡群に地域住民や観光客の遺跡見学コースを設置して一体的に整備することが重要である。

(2) 周辺遺跡群の史跡整備方針

昭和61年に佐田谷1号墓が発掘調査されて以来、約30年の歳月が経過した。今回、広島大学の協力を得て、佐田谷・佐田峠墳墓群の総合的な位置付けを行うことができた。今後は、史跡指定に向けて、その後の活用方針についてもより具体的に検討していかなくてはならない。すでに調査を実施した佐田谷･佐田峠墳墓群以外の遺跡については調査が未実施のため、これらの遺跡群の学術的な性格や歴史的意義を詳細に把握できていないのが現状である。

この佐田谷・佐田峠墳墓群の保存活用策を進めると同時に、矢崎古墳など大型前方後円墳の測量図の作成、周辺古墳群の位置図の作成、伝神福寺跡の寺域・伽藍配置の確認などを併行して行う必要がある。これらの遺跡群の総合的な保存活用を図ることが、佐田谷・佐田峠

第69図　佐田谷・佐田峠墳墓群と周辺遺跡の史跡整備構想
（広島県撮影の航空レーザー測量データ（2017年撮影）を着色立体図化）

墳墓群の活用を推進する重要な要素のため、市教委では文化庁・県教委・広島大学と協議を行いながら、事業を進めていきたい。

註

1．以下では「脚付鉢」と呼称する。なお、とくに注口が付くものを指す場合は「注口付脚付鉢」、小型で注口が付かないものを指す場合は「小型脚付鉢」と呼称する。

2．墳墓群の位置する備後北部地域は、地縁的には山陰地方とのつながりが強く、同じ吉備地域でも土器の意匠が他地域とは全く異なっている。したがって、以降「吉備系」と表現している場合には「備後北部地域を除く吉備地域に系譜をもつ」という意味で使用する。

3．墓壙 SK14上出土の土器群は佐田谷１号墓の築造よりも古い時期の所産で、埋葬祭祀の時期は後期初頭と報告されているが（今西・辻村編2017）、高杯口縁部の短縮化や端部の拡張度合、脚部凹線文の退化傾向からみて後期前葉に降るものと判断できる。加えて、注口付脚付鉢の口縁端部・脚端部の拡張度合、内面ヘラケズリが盛んに施される点、鋸歯文の盛行などからみても、佐田谷１号墓出土の個体に比べると新しい様相を示していると捉えることができる。また、佐田谷３号墓の注口付脚付鉢の脚柱部に施された凹線文を古く、佐田谷１号墓の注口付脚付鉢の櫛描文を新しく捉え、先後関係を判断する根拠としているが（今西・辻村編2017）、凹線文自体は後期前葉に至っても一般的にみられる文様である。以上のことから、佐田谷３号墓の墓壙 SK14上で行われた埋葬祭祀の時期が佐田谷１号墓の築造・埋葬祭祀よりも遡るとは考え難い。

4．平成９年度の試掘調査時に、詳細な位置は不明ながら佐田峠１・２号墓ではそれぞれの周溝から、土器片が出土している（野島編2016、13頁）。しかし、試掘調査では遺構検出面で重機による掘削を停止していることから、土器は周溝底面において原位置を保った状態で出土していないことがわかる。同時に、出土土器が細片化し、かつ少量で接合しなかったことからも、土器は墳頂平坦部から転落してきた可能性が高いと考えられる。平成23年の第５次調査において周溝を部分的に完掘した際も、土器は出土しなかった。

5．土器の実測図は、佐田谷１・２号墓北西周溝、佐田谷３号墓北側周溝・崖面（妹尾編1987）、佐田谷２号墓墳頂（野島ほか2013）、佐田谷３号墓墳頂（今西・辻村編2017）、佐田峠墳墓群（野島編2016）から引用し、一部改変した。

6．なお、第Ⅳ・Ⅴ章で後述する墳丘構築方法については和田晴吾の墓壙構築方法の分類を援用した。和田は古墳の掘り込み墓壙に関して「掘込墓壙ａ類」、「掘込墓壙ｂ類」、「掘込墓壙ｃ類」に分類しているが（和田1989）、弥生墳丘墓の墓壙の構築方法についても検討しており、基本的には「掘込墓壙ａ類」は「墳丘先行型」、「掘込墓壙ｂ類」は「同時進行型」、「掘込墓壙ｃ類」は「墳丘後行型」に対応するとしている（和田2003）。

7．本節中に示した遺跡の引用文献は第２表に掲載した。当該地域には図示したもの以外にも脚付鉢の可能性がある小破片が出土している。器形の断定ができないため本論では扱っていないが、以下に列挙しておく。新見市山根屋遺跡（竹田・岡本1977）：注口、新見市野田畝遺跡（高畑・福田1977、写真図版第12（2）・(3)）：胴部・脚柱部、日野郡丸山大洞遺跡（柱本・長谷部編1990）：注口、東伯郡梅田萱峯遺跡（湯村・濱本編2009）：注口、佐田谷１号墓（妹尾編1987）：注口・胴部・脚柱部・脚部、佐田谷３号墓（今西・辻村編2017）：口縁部・注口、佐田峠１号墓（野島編2016）：脚柱部・脚部。

8．第７図には各類型の模式図と各部名称を挙げたが、Ｃ類は１例しか確認できていないため割愛した。

9．佐田峠１号墓から出土した脚付鉢の脚柱部内面（野島編2016、144頁、写真図版第43（1））にも黒色有機物が付着しており、佐田谷３号墓出土例の黒色有機物と類似したものとして考えることができる。

10．実測図の注口部下側の延長線と屈曲部の稜線が交わる角度を測定した。

11．神辺平野周辺では、茜ヶ峠遺跡（三枝・妹尾1985）、手坊谷遺跡（松村ほか1976）で、出雲平野周辺・出雲山間部では、中野西遺跡（坂本編2002）、中野美保遺跡（藤永編2005）、矢野遺跡（坂本編2010）、古志本郷遺跡（守岡編2003）、山持遺跡（原田編2009）、垣ノ内遺跡（増田編2003）で確認した。一部の遺跡では塩町甕も出土しており、備後北部地域とのつながりが認められる。

12．注口が付かない脚付壺は、西伯郡名和飛田遺跡（北・三木編2005）、米子市石州府第１遺跡（小原編1983）、日野郡長山馬籠遺跡（益田・中川・瀧川編1989）、倉吉市後中尾遺跡（森下1996）、東伯郡笠見第

３遺跡（牧本編2004、高尾・大川編2007）で確認した。ほぼすべてに赤色顔料が塗布され、吉備南部系の器台と共伴する例もあり、祭祀性の強い出土状況を示す。

13. 弥生時代中期中葉から後期前葉にかけて、広島県・岡山県・島根県・鳥取県・山口県・香川県・徳島県において34遺跡49個体の脚付鉢を確認した（真木2017）。今回取り扱った地域以外では、住居跡や溝など様々な遺構から出土しており、専ら墳丘墓から出土する備後北部地域の特殊性が目立つ。
14. 特殊壺・特殊器台を用いた共飲共食儀礼の存否については否定的な意見もある（丸山2010ほか）。しかし、総社市立坂弥生墳丘墓（近藤1996）で注口をもつ特殊壺が１点出土しており、実際に液体が入れられていた可能性も考えられる。出土数の少なさ、時期の乖離などの問題はあるが、注口付脚付鉢とのつながりが想定できる重要な例といえよう。
15. 佐田峠２号墓出土例との比較を重視するため、その周辺時期・地域に限って収集を行った。本節中に示した遺跡の引用文献は第３表に掲載した。なお、転載した実測図は一部改変したものがある。また、第３表に記した各出土例の時期については、基本的には文献に従い、一部は村田が判断した。
16. 岡山市南方遺跡出土例（第17図25）や、江津市波来浜遺跡出土例（第19図64）のように、周辺に埋葬関連の遺構しか検出されていないものは、遺構外であっても墓に供献された、あるいはその予定であったものと捉えた。
17. 今回の佐田谷・佐田峠墳墓群の発掘調査では、墓壙掘形の上面確認のみに留めており、遺構内部の掘削は行ってはいない。
18. 本節中に示した遺跡の引用文献は第４表にも掲載した。なお、邑智郡沖丈遺跡（牧田編2001）などで検出された縄文時代からの系譜をもつ弥生時代の配石墓については、本分類には含めていない。
19. 堀部第１遺跡では、標石の分類がなされており（徳永2005）、そのなかのＡ・Ｂ・Ｃ・Ｅ類を全面被覆型、Ｄ類を周囲・側辺型、Ｆ類を四隅・両端型、Ｇ類を一部集中型の一例とする。今回の分類は佐田谷・佐田峠墳墓群で検出した標石遺構の考察に主眼を置いており、標石の初現期に関する細分類を捨象した。
20. 縦断面では小口板の痕跡が第３層以下にしか確認されておらず、墓壙を埋め戻した後に配石された可能性も捨てきれない。
21. 佐田谷１号墓墓壙 SK3の南東にある標石は SK3にともなうものではなく、中心墓壙 SK2の埋め戻しの際に再配置されたものとするが（妹尾編1987、20頁）、その根拠は明確ではない。
22. 本節中に示した遺跡の引用文献は第５～７表に掲載した。なお、土器棺墓、土器蓋土壙墓も土器を使用する墓であるが、供献行為とは異なると考え、今回は除外した。
23. これまでの概要報告・報告書〈調査編〉ほか（野島ほか2009、今福2012、野島2015、野島編2016）に示してきたように、また、本章以降で明らかにするように、中期末葉から築造を開始した佐田峠３号墓は埋葬と封土・盛土を交互に行う同時進行型の墳丘構築方法を採用していたため、渡邊貞幸のいう四隅突出型墳丘墓の定義（渡邊・坂本編2015、251頁、註（1））に合致しない可能性がある。渡邊は「四隅突出型」の墳丘墓は「隅角稜線上に筆者の言う「踏石状石列」（ステッピング・ストーン）を備え墓道を表現しているもの」としている。佐田峠３号墓は墳丘が完成し、貼石が施される以前に埋葬が完了している構造上、被葬者の埋葬と葬送における参列のための墓道を墳丘隅角のどこかに想定することが困難である。また、実際に検出した南東墳丘隅角には踏石状石列がみられなかった。

　坂本豊治も、墳丘構築過程からみた四隅突出型墳丘墓の突出部の機能について論じている（坂本2013）。坂本は佐田峠３号墓を含むいくつかの事例を挙げ、突出部は死者を埋葬する段階にはまだ構築されておらず、墳丘装飾あるいは墳丘構築完了後における葬送儀礼の参列者の通路として機能した可能性があるとしたが、貼石や踏石状石列の完成と葬送儀礼の先後関係が不明であり、証明は難しいとする。

　備後北部地域の事例を参照すると、中期後葉から末葉の宗祐池西１号墓（尾本原編2000）や佐田峠４号墓（野島編2016）は明らかに墳丘隅角が突出していたが、供献土器は周溝から出土した。また、陣山墳墓群（落田編1996）では墳丘隅角が突出するだけでなく、稜線上に踏石状石列を配するものさえあるが、供献土器は周溝や犬走状平坦面などから出土した。これらの事例については、墳丘構築完了後に突出部を

通って墳頂平坦部で葬送祭祀が行われたことを積極的に認めることが難しい。しかし一方で、中期後葉の殿山38号墓（道上1987）では、もともと墳頂平坦部にあった土器が転落したと推測されており、この場合は墳丘構築完了後の墓上祭祀が想定可能であることから、踏石状石列のある突出部を墓道と捉えることもできる。また、後期初頭の佐田谷１号墓（妹尾編1987）では、後述する墳丘先行型の墳丘構築方法とともに、墳頂平坦部墓壙上から祭祀土器群が出土していることから、墳丘構築完了後に墳頂平坦部で祭祀が行われたことが明確であり、突出部が墓道として機能したと考えることは十分可能である。

このように、少なくとも備後北部地域でみられる中期後葉から後期初頭までに築造された四隅突出型墳丘墓の突出部については、稜線上への配石の有無に関わらず、墓道としての機能を果たしたと捉えうるものとそうでないものの両方が存在している。時期の古い類例が集中して分布する現状から、四隅突出型墳丘墓の発生地である可能性が高い備後北部地域でこのような状況が窺えることを考慮すると、突出部の墓道としての機能は、その出現当初からすべての四隅突出型墳丘墓に意図されていたわけではないようである。墓道としての認識は、おそらくは墳丘先行型の墳丘墓への変化にともなう墳頂平坦部での祭祀、墳丘の巨大化とも関連しながら、突出部の出現後、一定期間を経た段階で定着したものと理解しておきたい。

本報告書〈研究編〉では、これまでの概要報告・報告書〈調査編〉と同じく、佐田峠３号墓を四隅突出型墳丘墓とした。しかし、渡邊の定義（渡邊・坂本編2015）に合致した墳丘構造をもたないことから、今のところ、「初期」四隅突出型墳丘墓として弁別しておく。

24. 池淵俊一は、波来浜遺跡Ａ調査区の墳墓群は全体の被葬者頭位の方向が一致することから、九州北部にみられる列状墓の埋葬原理が踏襲されたものとした（池淵2007）。また、方形に区画された埋葬群を分節単位とみなし、田中良之の研究成果（田中1995）を敷衍し、サブクランのまとまりであると想定した。

25. 後期初頭においても庄原市田尻山１号方形墓では同時進行型の墳丘構築方法を想定することができる。田尻山１号方形墓の調査報告（向田1978）では、墳丘最下層に穿たれた隅丸方形の中心墓壙の上位に粘土を貼り込んだ木棺痕跡をもつ墓壙がみられるが、これは田尻山16号古墳とされている。しかし、またその上位、墳頂平坦部にある箱式石棺は弥生時代に属すると考えられているようだが、同時進行型の墳丘構築状況を示すものと想定した方が調査成果を理解しやすい。広島県立歴史民俗資料館において、当時の発掘調査実測図および整理段階の記録と撮影写真を確認した結果、同時進行型の墳丘構築状況を示す可能性があると判断した。1970～1980年代前後の発掘調査では、墳丘先行型による墳丘構築と墓壙形成が一般的な認識であり、当然墳頂平坦部から墓壙が掘り込まれたものと理解されていたのであろう。そのため、墳頂平坦部において中心墓壙の輪郭が検出できず、「主体部不明」とされた調査例も少なくない。とくに中期の墳丘墓は小規模なものも多く、中心埋葬が盛土の下層、あるいは地山や基盤整地層から掘削されていた可能性も考慮しなければならない。また、丘陵上にある台状墓などでは、墳丘が流出、表土化しており、埋葬と封土・盛土の先後関係が不明なものが多い。

これまで弥生時代の墳丘墓・区画墓の調査研究では、墳丘規模や平面的形態、墓壙配置に関する考察が先行し、埋葬と墳丘構築の先後関係に注意を払ったものではなかった。発掘調査報告書に関しても、墳丘断面図や盛土の構築方法、墓壙の堀込方法、標石の出土レベルなど基礎的なデータの一部が示されていない場合も少なくなかったことから、具体的な墳丘の構築方法が明らかにはなっていない場合がある。墳丘後行型・同時進行型の墳丘構築方法を採用した小型墳丘墓は、墓壙の平面的検出だけでは墳丘先行型と混同されてしまう危険性がある。過去の調査事例の検証も必要となろう。

26. 四拾貫小原調査団は松崎壽和を調査団長とし、調査員市岡軍二、鵜殿治雄、金井亀喜、川越哲志、河瀬正利、潮見浩、滝谷章、服部宜昭、福井万千、藤村耕市、三浦亮の12名によって編成された。

27. 報告（潮見編1969）では石群とされた。表土直下にあり、１号墳寄りで直線状に並び、東端のものは扁平な石を立て並べている状況が指摘されている。石群は標石として機能していたとしながら、周辺の溝から土器が出土していることを踏まえ、供献土器類を据えた場所と理解し、一種の祭祀の場所としている。また、土壙墓上部の石群についても標石と判断され、いずれも地表面に露出していたものとされている。

28. なお、波来浜遺跡Ａ区２号墓においては、墳丘盛土堆積状況から同時進行型による墳丘構築方法を採用し

ている。ただし、追葬毎に、新たに盛土と貼石を施すことによって各埋葬を連結させている。墳丘後行型の埋葬空間としても認識できる状況となっている。墳丘後行型から同時進行型へ墳丘構築方法が移行する過度期の様相を示すものと位置付けたい。

29. 墓壙上面での長軸・短軸を数値として用いるが、大幅な削平が考えられるものは分析対象から除外した。
30. 報告（東山編2008）では、墳丘墓にともなう埋葬施設は４基とされているが、東溝や第１主体によって掘削される SX04も墳丘墓にともなう可能性が考えられ、同時進行型の墳丘構築方法が想定できる。
31. 例えば、友田遺跡Ｂ区２号墓（第49図６）のような近接した墓壙配置は囲繞型とも捉えられるが、囲繞型は中心墓壙の短辺側にも直交して配置されているものと定義し、ここでは散在型Ⅱに分類した。
32. 佐田峠１号墓、佐田谷２号墓では墳頂平坦部の調査で掘削を停止しており、墳丘内部に墓壙がある可能性も考えられる。しかし、検出された墓壙はすべて同一面から掘り込まれており、これは佐田谷１号墓、佐田峠２号墓でもみられた状況である。先述の２基では墳丘内部から墓壙が検出されていないことから、佐田峠１号墓、佐田谷２号墓も同様に墳丘先行型の墳丘構築方法を採用していると考える。

挿図出典

第Ⅰ章　はじめに

第１・２図　野島作成。

第Ⅱ章　佐田谷・佐田峠墳墓群出土土器の様相

第１節　第３・４図　妹尾編1987・野島ほか2013・野島編2016・今西・辻村編2017より村田作成。第５図　村田作成。

第２節　第６図　庄原市教育委員会提供。第７・８・13図　真木作成。第９図１．竹田・岡本1977より一部改変、２．阿部編1984より一部改変、３～５．真木実測、６．潮見1974より一部改変、７．道上1987より一部改変。第10図８．曽根編2013より一部改変、９．新東・田仲1973より一部改変、10．松村1979、11・12．真木実測、13．田中・石田2000より一部改変、14．湯村・濱本編2009より一部改変。第11図15．妹尾編1987より一部改変、16・17．今西・辻村編2017より一部改変、18．岡田ほか1978より一部改変、19．正岡・田仲・二宮1977より一部改変、20．岩田・岩田・植野編2000、21．間壁1999より一部改変。第12図　宗祐池西遺跡．尾本原編2000、四拾貫小原遺跡．今福2016b、新迫南遺跡．加藤1979。

第３節　第14図　野島ほか2013。第15・21図　村田作成。第16図１．野島ほか2013、２．松崎1955、３．椙木編2011、４．石田編1983、５．佐々木・山田編1992、６．植田編2008、７・８．金井編1976、９．下澤・友成1977、10～12．正岡・田仲・二宮1977、13．高畑ほか1976、14．平井1996、15．岡田編1997、16．谷山・高田1987、17．平井編1996、18．武田編2003。第17図19．水田編2008、20．水田編2009、21．小林編2001、22．伊藤ほか1974、23．伊藤・山磨編1977、24．浅倉編1993、25．出宮編1971、26～28．平井・弘田・柴田編1999、29．柳瀬編1977、30．岡田ほか2004、31～33．大橋・澤山・中野編1995、34～37．亀山編1996。第18図38．亀山編1996、39・40．亀山・大橋編1997、41・42．伊藤・岡田・二宮1998、43～46．吉留・山本編1988、47．草原編2005、48～51．高田編2007、52．正岡編1984、53．正岡ほか1972、54．神原編1973、55．神原編1977、56～59．下澤編2004。第19図60．村上1979、61．仁木2005、62．岡本・石田2008、63・64．門脇編1973、65．藤田・柳瀬1987、66．東山編2008、67．今岡・平石・松尾編2006、68．佐伯・林・瀬古編1992、69．船越ほか編1976、70・71．伊達編1984、72．北浦編2000、73．久保1990。第20図12．正岡・田仲・二宮1977、14．平井1996、15．岡田編1997、16．谷山・高田1987、17．平井編1996、40．亀山・大橋編1997より村田作成。

第Ⅲ章　中国地方の弥生墳丘墓における標石と土器供献

第１節　第22図　野島作成。第23図１・２．赤澤ほか編2005、３．岡崎1983、４．潮見・川越・河瀬1971b、５．梅本編1994。第24図６．岡崎1983、７．青山・沢元編1990、８・９．妹尾編1987。第25図10・11・12．野島編2016、13．今西・辻村編2017、14．野島ほか2013。第26図15．野島編2016。第27図16．谷口編2012、17．中野・松本・中島編2001。

第２節　第28・29図　村田作成。

第Ⅳ章　佐田谷・佐田峠墳墓群からみた埋葬施設の構造変化

第１節　第30図上．野島ほか2009、下．妹尾編 1987。

第２節　第31・32・34図　野島作成。第33図１・２．門脇編1973、３．潮見編1969、４．潮見・川越・河瀬1971b、５．尾本原編2000。第35図左．庄原市教育委員会から提供、右．今田編1998。

第Ⅴ章　中国地方の弥生墳丘墓の構築方法とその展開

第１節　第36・39～44図　潮見編1969より一部改変、今福作成。第37図　潮見編1969。第38図　広島大学考古学研究室から提供。

第２節　第45～47図　今福作成。第48図　尾本原編2000。第49図４～６．岡崎1983、７．東山編2008、８．湯村・濱本編2009。第50～59図　今福作成。

第３節　第60～66図　今福作成。

第Ⅵ章　総　括

　第１節　第67図　挿図８・15・22・28より真木・村田作成。第68図　野島作成。

第Ⅶ章　庄原市教育委員会による保存・活用方針

　第２節　第69図　広島県土木建築局砂防課から提供の原図をもとに真木作成。

挿表・付表出典

第Ⅱ章　佐田谷・佐田峠墳墓群出土土器の様相

　第１節　第１表　妹尾編1987・野島ほか2013・野島編2016・今西・辻村編2017より村田作成。

　第２節　第２表　真木作成。

　第３節　第３表　村田作成。

第Ⅲ章　中国地方の弥生墳丘墓における標石と土器供献

　第１節　第４表　野島作成。

　第２節　第５～７表　村田作成。

第Ⅴ章　中国地方の弥生墳丘墓の構築方法とその展開

　第２・３節　第８・９表、付表１～５　今福作成。

第Ⅶ章　庄原市教育委員会による保存・活用方針

　第１節　第10表　今西作成。

(第２～９表は表内に出典を記載。)

写真図版出典

　図版第１　広島県土木建築局砂防課から提供の原図をもとに村田作成。

　図版第２～５・６（２）・７（１）・８（１）・10～12　真木撮影。

　図版第６（１）村田撮影。

　図版第７（２）・８（２）　野島撮影。

　図版第９　庄原市教育委員会提供。

引用・参考文献

会見町教育委員会　1981 「浅井字土居敷遺跡発掘調査現地説明会」会見町教育委員会。

青山　透・沢元史代編　1990 『東広島ニュータウン遺跡群』I、広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第83集、広島県埋蔵文化財調査センター。

赤澤秀則ほか編　2005 『堀部第１遺跡』鹿島町福祉ゾーン整備事業に伴う調査１、鹿島町教育委員会。

吾郷信一・小原貴樹・藤原裕子編　1992 『日下古墳群発掘調査報告書』米子市教育委員会・日下古墳群調査団。

浅倉秀昭編　1993 『山陽自動車道建設に伴う発掘調査』６、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告82、日本道路公団広島建設局岡山工事事務所・岡山県教育委員会。

阿字雄徹ほか編　1988 『坂ノ上遺跡、植松古墳群 昭和62年度県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告』山口県埋蔵文化財調査報告第113集、山口県教育財団・山口県教育委員会。

熱田貴保ほか編　2007 『原田遺跡（３）－５～７区の調査－』尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書10、国土交通省中国地方整備局・島根県教育委員会。

阿部　滋編　1984 『佐久良遺跡発掘調査報告』広島市の文化財第27集、広島市教育委員会。

池田満雄・東森市良　1968 「三成古墳群」『山陰本線玉造温泉・来待間線増工事に伴う埋蔵文化財調査報告』日本国有鉄道大阪工事局、37～54頁。

池淵俊一　2007 「山陰における方形区画墓の埋葬論理と集団関係」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター、117～143頁。

石井隆博　1996 「南東区の遺構と遺物」『西東子遺跡発掘調査報告書』文化財センター調査報告書第７冊、東広島市教育文化振興事業団文化財センター、17～32頁。

石井龍彦編　2007 『田ノ浦遺跡 －平成17・18年度調査－』山口県埋蔵文化財センター調査報告第59集、山口県埋蔵文化財センター。

石垣敏之・吉田由弥編　2014 『乃美１～４号遺跡発掘調査報告書』東広島市教育委員会文化財調査報告書第46集、東広島市教育委員会。

石川日出志ほか　2005 「西日本弥生時代墓遺構集成Ｉ －島根県・広島県・兵庫県－」『古代学研究所紀要』第２号、明治大学古代学研究所、13～137頁。

石崎善久・岡林峰夫　2001 『赤坂今井墳丘墓第３次発掘調査概要報告』京都府遺跡調査概報第100冊、京都府埋蔵文化財調査研究センター。

石田彰紀編　1983 『弘住遺跡発掘調査報告』広島市の文化財第25集、広島市教育委員会。

石田爲成　2008 「中国地方における弥生時代の地域間関係について －塩町式土器を中心にして－」考古学研究会岡山例会配布資料、考古学研究会岡山例会。

石貫弘泰・斉藤　礼　2008 「佐田峠墳墓群（第１次）調査」『広島大学大学院文学研究科 帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』XXII、広島大学大学院文学研究科帝釈峡遺跡群発掘調査室、34～36頁。

伊藤　晃・岡田　博・二宮治夫　1998 「田益田中遺跡」『大岩遺跡・田益田中遺跡・白壁奥遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告128、岡山県教育委員会、47～94頁。

伊藤　晃ほか　1974 「上東遺跡の調査」『山陽新幹線建設に伴う調査II（岡山以西）』埋蔵文化財発掘調査報告第２集、岡山県文化財保護協会、97～236頁。

伊藤　晃・山磨康平編　1977 『倉敷市（児島）城遺跡発掘調査報告 県立児島高校移転用地造成に伴う発掘調査』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告19、岡山県教育委員会。

伊藤照雄編　2000 『伊倉遺跡』山口県下関市伊倉本町17番地内伊倉遺跡（岡地区）発掘調査報告書、下関市埋蔵文化財調査報告書48、下関市教育委員会。

伊藤　実　1992 「備後地域」『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編、木耳社、156～195頁。

伊藤　実　2001 「安芸の弥生土器Ｉ －西条盆地の弥生後期土器編年試案－」『広島県立歴史民俗資料館研究紀要』第３集、広島県立歴史民俗資料館、72～93頁。

伊藤　実　2004 「四拾貫小原遺跡」『三次市史』II、三次市史編集委員会、44・45頁。

伊藤　実　2005 「四隅突出型墳丘墓と塩町式土器 －四隅突出の思想とその背景－」『考古論集 －川越哲志先生退官記念論文集－』川越哲志先生退官記念事業会、375～398頁。
稲坂恒宏編　2001 『成岡Ｂ地点遺跡』広島市文化財団発掘調査報告書第８集、広島市文化財団。
今井　尭・安川豊史　1984 「８号弥生墳丘墓」『竹田墳墓群』竹田遺跡発掘調査報告第１集、鏡野町教育委員会、44～85頁。
今岡一三・平石　充・松尾充晶編　2006 『青木遺跡 II（弥生～平安時代編）』国道431号道路改築事業（東林木バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書３、島根県教育委員会。
今田昇一編　1998 『三坂神社墳墓群・三坂神社裏古墳群・有明古墳群・有明横穴群』京都府大宮町文化財調査報告書第14集、大宮町教育委員会。
今西隆行・辻村哲農編　2017 『佐田谷・佐田峠墳墓群発掘調査報告』調査編（２）、庄原市発掘調査報告書29、庄原市教育委員会。
今福拓哉　2012 「弥生墳丘墓の埋葬施設と墳丘構築に関する研究」『広島大学大学院文学研究科 考古学研究室紀要』第４号、広島大学大学院文学研究科考古学研究室、83～100頁。
今福拓哉　2016a 「備後北部の弥生墳丘墓 －弥生時代後期前半を中心として－」『考古学研究室50周年記念論文集・文集』広島大学考古学研究室50周年記念論文集・文集刊行会、259～272頁。
今福拓哉　2016b 「四拾貫小原弥生墳墓の再評価と課題」2016年度広島史学研究会考古学部会発表資料。
今福拓哉　2017 「四拾貫小原弥生墳丘墓の再評価」『広島大学大学院文学研究科 考古学研究室紀要』第９号、広島大学大学院文学研究科考古学研究室、43～68頁。
岩田文章・岩田珠美・植野浩三編　2000 『妻木晩田遺跡 洞ノ原地区・晩田山古墳群発掘調査報告書』淀江町埋蔵文化財調査報告書第50集、淀江町教育委員会。
岩田文章・山根武男・笹尾千恵子編　1999 『百塚遺跡群』VIII、淀江町埋蔵文化財調査報告書第46集、淀江町教育委員会。
岩田文章ほか編　1995 『百塚遺跡群』IV、淀江町埋蔵文化財調査報告書第36集、淀江町教育委員会。
岩永省三　2010 「弥生時代における首長層の成長と墳丘墓の発達」『九州大学総合研究博物館研究報告』第８号、九州大学総合研究博物館、17～42頁。
植田千佳穂　1983 「狐ケ城跡」『西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(I)、広島県教育委員会・広島県埋蔵文化財調査センター、9～64頁。
植田　広編　2008 『高屋東２号・３号遺跡発掘調査報告書 一般国道375号（東広島道路）道路改良事業に係る発掘調査』文化財センター調査報告書第60冊、東広島市教育文化振興事業団文化財センター。
植田　広編　2015 『陣が平西２号遺跡発掘調査報告書』東広島市教育委員会文化財調査報告書第51集、東広島市教育委員会。
宇垣匡雅　1992 「特殊器台・特殊壺」『吉備の考古学的研究』（上）、山陽新聞社、279～298頁。
宇垣匡雅　1999 「吉備の墓制」『季刊考古学』第67号、雄山閣、61～70頁。
宇垣匡雅　2000 「鋸歯文をもつ土器 －吉備の農耕儀礼と葬送儀礼－」『考古学研究』第47巻第２号、考古学研究会、105～124頁。
宇垣匡雅ほか　1994 「甫崎天神山遺跡」『山陽自動車道に建設に伴う発掘調査』８、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告89、日本道路公団広島建設局岡山工事事務所・岡山県教育委員会、591～946頁。
宇垣匡雅編　1994 『百間川原尾島遺跡３ 旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査』IV、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告88、岡山県教育委員会。
内田律雄ほか　1980 「前立山遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』島根県教育委員会、5～75頁。
梅木謙一　2003 「中国・四国地方の土器」『考古資料大観』第１巻、小学館、169～180頁。
梅本健治編　1994 『中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(IV)、広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第132集、広島県埋蔵文化財調査センター。

梅本健治編　2009 『金井原遺跡発掘調査報告書』広島県教育事業団発掘調査報告書第28集、広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室。
会下和宏　2000 「西日本における弥生墳墓副葬品の様相とその背景」『島根考古学会誌』第17集、島根考古学会、49～72頁。
会下和宏　2002 「弥生墳墓の墓壙規模について －西日本～関東地域の木棺・木槨墓等を中心に－」『島根考古学会誌』第19集、島根考古学会、33～63頁。
江見正己編　1980 『百間川原尾島遺跡１ 旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査』I、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告39、岡山県教育委員会。
エルツ、R.（吉田禎吾・内藤莞爾ほか訳） 1980 「死の宗教社会学」『右手の優越』垣内出版、30～128頁。
太田史代編　1988 『槇ケ坪３号遺跡（Ｂ地区)』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第72集、広島県埋蔵文化財調査センター。
大橋雅也・澤山孝之・中野雅美編　1995 『津寺遺跡』２、山陽自動車道建設に伴う発掘調10、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98、岡山県古代吉備文化財センター。
大本琢寿編　1952 『吉備考古』第85号、吉備考古学会。
岡崎雄二郎　1983 「友田遺跡」『松江圏都市計画事業乃木土地区画整理事業区域内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』松江市教育委員会、99～173頁。
岡田　博ほか　1978 「横田遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査』13、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告23、岡山県教育委員会、369～508頁。
岡田　博ほか　2004 「中撫川遺跡」『新邸遺跡・郷ノ溝遺跡・仏生田遺跡・掛無堂遺跡・川入遺跡・中撫川遺跡 一般県道吉備津松島線道路改築に伴う発掘調査』I、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告182、岡山県教育委員会、127～328頁。
岡田　博編　1997 『窪木遺跡１ 岡山県立大学建設に伴う発掘調査』III、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告120、岡山県教育委員会。
岡田善治　1992 「会見町・浅井土居敷遺跡の陶磁器」『松江考古』第８号、松江考古学会、33～40頁。
岡本寛久編　1998 『大田茶屋遺跡２・大田障子遺跡・大田松山久保遺跡・大田大正開遺跡・大田西奥田遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告129、岡山県教育委員会。
岡本寛久編　1999 『立田遺跡２・高松原古才遺跡２・加茂政所遺跡２・津寺遺跡６』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告143、岡山県教育委員会。
岡本泰典・石田爲成　2008 「中町Ｂ遺跡」『八幡山遺跡 八幡山南遺跡 八幡山円明寺跡 尾崎遺跡 中町Ｂ遺跡 穴が迨遺跡 穴が迨古墳 今岡Ｄ遺跡 今岡中山遺跡 今岡古墳群 高岡遺跡 中国横断自動車道姫路鳥取線（鳥取自動車道）建設に伴う発掘調査』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告213、国土交通省岡山国道事務所・岡山県教育委員会、227～268頁。
小口英一郎編　2007 『鳥取県東伯郡琴浦町梅田萱峯遺跡』III、一般国道９号（東伯中山道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 XXI、鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書19、鳥取県埋蔵文化財センター・国土交通省倉吉河川国道事務所。
小郷利幸編　1993 『三毛ケ池遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第48集、津山市教育委員会。
小田村宏編　1983 『丸山遺跡』山口市埋蔵文化財調査報告第17集、山口市教育委員会。
落田正弘編　1996 『陣山遺跡』三次市教育委員会。
落田正弘編　2000 『大仙大平山第21・22号墳』三次市文化財調査報告書第１集、三次市教育委員会。
小野悟朗編　1998 『山の神遺跡群・池ノ迫遺跡群』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第165集、広島県埋蔵文化財調査センター。
小原貴樹編　1983 『米子市石州府遺跡群発掘調査報告書』I、米子市教育委員会。
尾本原勇人　1996 「宗祐池西遺跡について」『芸備』第25集、芸備友の会、51～54頁。
尾本原勇人編　2000 『宗祐池西遺跡発掘調査報告書』三次市教育委員会。

角田徳幸　1992　「やつおもて古墳群」『中国横断自動車道広島浜田線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅳ、本文編第２分冊、島根県教育委員会、191～247頁。
加藤　謙・桑原隆博・山田繁樹　1985　「備後北部地域」『広島県の弥生土器』広島県立歴史民俗資料館、6～10頁。
加藤光臣　1979　「新迫南弥生時代墳墓関係遺構群」『中国縦貫自動車道に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(２)、広島県教育委員会、257～281頁。
加藤光臣　1987　「芸備地方における弥生墓制の動態（上)」『芸備地方史研究』第162号、芸備地方史研究会、16～23頁。
加藤光臣　1988　「芸備地方における弥生墓制の動態（中)」『芸備地方史研究』第163・164号、芸備地方史研究会、26～42頁。
加藤光臣　1989　「芸備地方における弥生墓制の動態（下)」『芸備地方史研究』第169・170号、芸備地方史研究会、1～37頁。
門脇俊彦編　1973　『波来浜遺跡発掘調査報告書 第１・２次緊急調査概報』島根県江津市。
金井亀喜編　1976　『西本遺跡群 －Ａ・Ｂ・Ｃ地点－』広島県教育委員会。
株式会社藤田組編　1970　『倉吉・福庭遺跡』鳥取県倉吉市福庭長谷鳥取女子短大校地造成工事々前調査概要。
亀山行雄編　1996　『津寺遺跡』３、山陽自動車道建設に伴う発掘調査12、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告104、岡山県古代吉備文化財センター。
亀山行雄・大橋雅也編　1997　『津寺遺跡』４、山陽自動車道建設に伴う発掘調査14、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告116、岡山県古代吉備文化財センター。
河合　忍　2003　「弥生土器の空間的境界を考える」『越境する土器 －土器による空間分析－』中部弥生時代研究会、17～28頁。
河合　忍　2004　「備前・備中地域」『弥生中期土器の併行関係 発表要旨集』埋蔵文化財研究会、103～114頁。
河合　忍　2015　「中国・四国」『考古調査ハンドブック』12、ニューサイエンス社、160～208頁。
川上洋一　1995　「弥生時代の墓地における土器出土状況の分析」『考古学研究』第42巻第２号、考古学研究会、68～87頁。
神原英朗編　1973　『四辻土壙墓遺跡・四辻古墳群』岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報第３集、山陽町教育委員会。
神原英朗編　1977　『用木山遺跡 他 惣図遺跡第２地点・新宅山遺跡』岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報（４)、岡山県山陽町教育委員会。
岸本道昭　1998　「播磨弥生後期前半土器の実態と編年」『小神辻の堂遺跡』龍野市文化財調査報告20、龍野市教育委員会、67～84頁。
北　浩明・三木雅子編　2005　『名和飛田遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書104、鳥取県教育文化財団。
北浦弘人編　2000　『鳥取県気高郡青谷町 青谷上寺地遺跡２ 一般国道９号（青谷・羽合道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅵ、鳥取県教育文化財団調査報告書68、鳥取県教育文化財団。
北浦弘人編　2001　『青谷上寺地遺跡』３、一般国道９号改築工事（青谷・羽合道路）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 Ⅶ、鳥取県教育文化財団調査報告書72、鳥取県教育文化財団。
草原孝典編　2005　『赤田東遺跡 吉備中枢部における集落遺跡の発掘調査報告』岡山市教育委員会文化財課。
椙木敬太編　2011　『トンガ坊城遺跡・坊主山遺跡・柳遺跡・琴平遺跡 一般国道54号（可部バイパス）建設に伴う発掘調査』広島市未来都市創造財団発掘調査報告書第１集、広島市未来都市創造財団。
久保穰二朗　1990　「弥生時代の集落立地について －鳥取平野とその周辺の場合－」『鳥取県立博物館研究報告』27号、鳥取県立博物館、7～18頁。
久保穰二朗　2011　「鳥取県内の砂丘遺跡について」『青谷上寺地遺跡発掘調査研究年報』2010、鳥取県埋蔵文化財センター、25～49頁。
久保脇美朗　1994　「北原～大法寺遺跡」『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』６、徳島県

埋蔵文化財センター調査報告書第６集、徳島県教育委員会・徳島県埋蔵文化財センター・日本道路公団、7～114頁。
栗野克己　1977 「下道山遺跡調査概要」『下道山遺跡緊急発掘調査概報』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告17、岡山県教育委員会、7～57頁。
小嶋善邦編　2004 『百間川原尾島遺跡６ 旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査』XV、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告179、岡山県教育委員会。
小林利晴編　2001 『上東遺跡 主要地方道箕島高松線改良工事に伴う発掘調査』３、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告158、岡山県古代吉備文化財センター。
小林行雄・佐原　真編　1964 『紫雲出』香川県三豊郡詫間町文化財保護委員会。
小南裕一編　2002 『武久浜墳墓群』山口県埋蔵文化財センター調査報告第32集、山口県埋蔵文化財センター。
小南裕一編　2007 『下村遺跡』山口県埋蔵文化財センター調査報告第60集、山口県埋蔵文化財センター。
是光吉基・加藤光臣　1979 「大久保遺跡群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（２）広島県教育委員会、105～152頁。
近藤義郎　1992 「埋葬祭祀」『楯築弥生墳丘墓の研究』楯築刊行会、154～157頁。
近藤　玲・谷川真基編　2006 『矢野遺跡』(III)、徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第63集、徳島県教育委員会・徳島県埋蔵文化財センター・国土交通省四国地方整備局。
佐伯純也　2016 「日南町出土土器の整理 －三吉密ケ埆（みよしみつがざこ）遺跡の弥生式土器群－」『米子市埋蔵文化財センターたより』第22号、米子市埋蔵文化財センター、3頁。
佐伯善治・林　健亮・瀬古諒子編　1992 『朝酌川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書』IV、島根県土木部河川課・島根県教育委員会。
三枝健二・妹尾周三　1985 「茜ケ峠遺跡」『石鎚権現遺跡群・茜ケ峠遺跡発掘調査報告 －県営農地開発事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査－』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第39集、広島県埋蔵文化財調査センター、37～106頁。
坂本豊治　2013 「山陰における弥生後期の墓制 －特に四隅突出型墳丘墓を中心に－」『吉備弥生社会の新実像・吉備弥生時代のマツリ・弥生墓が語る吉備』考古学研究会例会シンポジウム記録９、考古学研究会、217～240頁。
坂本豊治編　2002 『中野西遺跡』出雲市・出雲市教育委員会。
坂本豊治編　2010 『矢野遺跡 自然河道・包含層編』(第２分冊)、出雲市の文化財報告10、島根県出雲県土整備事務所・出雲市教育委員会。
狭川真一編　2001 『旧練兵場遺跡』善通寺市。
佐々木直彦編　1986 『歳ノ神遺跡群・中出勝負峠遺跡群』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第49集、広島県埋蔵文化財調査センター。
佐々木直彦・山田繁樹編　1992 『東広島ニュータウン遺跡群』II、図版編、広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第97集、広島県埋蔵文化財調査センター。
真田廣幸・森下哲哉編　1981 『上米積遺跡群発掘調査報告 II －阿弥大寺地区－』倉吉市教育委員会。
潮見　浩　1958 「広島県庄原市鍬寄遺跡の調査」『私たちの考古学』第５巻第１号、考古学研究会、１～12頁。
潮見　浩　1964 「山陽地方 I」『弥生式土器集成』本編 I、東京堂、44～46頁。
潮見　浩　1974 「シカの絵のある弥生式土器」『考古学雑誌』第60巻第２号、日本考古学会、73～81頁。
潮見　浩・川越哲志・河瀬正利　1971a 「広島県賀茂郡八本松町藤が迫遺跡群発掘調査報告」『広島県文化財調査報告』第９集、広島県教育委員会、61～102頁。
潮見　浩・川越哲志・河瀬正利　1971b 「広島県三次市高平遺跡群発掘調査報告」『広島県文化財調査報告』第９集、広島県教育委員会、103～151頁。
潮見　浩編　1969 『四拾貫小原』四拾貫小原発掘調査団。
潮見　浩編　1973 『陣床山遺跡群の発掘調査』陣床山遺跡群発掘調査団。

重松辰治　2005 「弥生時代後半期における墓域出土土器の性格」『待兼山考古学論集 －都出比呂志先生退任記念－』大阪大学考古学研究室、339～352頁。
重松辰治　2007 「山陰地方における墳丘墓出土土器の検討」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター、67～88頁。
篠原芳秀ほか編　1997 『西本６号遺跡』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第143集、広島県埋蔵文化財調査センター。
柴田英樹編　2006 『国司尾遺跡 坂田遺跡 坂田墳墓群 宮ノ上遺跡 宮ノ上古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告197、岡山県教育委員会。
島崎　東・光永真一ほか編　1995 『足守川河川改修工事に伴う発掘調査 足守川加茂Ａ遺跡 足守川加茂Ｂ遺跡 足守川矢部南向遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告94、岡山県教育委員会。
清水真一　1992 「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編、木耳社、355～412頁。
清水慎也編　2016 『垣外遺跡発掘調査報告』１、周南市都市計画事業久米中央土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告１、周南市埋蔵文化財調査報告第１集、周南市教育委員会。
下澤公明・友成誠司　1977 「横見墳墓群と横見古墳群の調査」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査』９、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告15、岡山県教育委員会、9～182頁。
下澤公明編　2004 『八ケ奥遺跡・八ケ奥製鉄遺跡・岡遺跡・小坂古墳群・才地古墳群・才地遺跡 主要地方道佐伯長船線（美作岡山道路）道路改築に伴う発掘調査』２、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告178、岡山県教育委員会。
下澤公明・大橋雅也編　1996 『斎富遺跡』山陽自動車道建設に伴う発掘調査13、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告105・岡山県古代吉備文化財センター。
白石　純編　1995 『津島東３丁目第１地点 清水谷遺跡』加計学園関連施設建設に伴う発掘調査Ⅰ、加計学園埋蔵文化財調査室。
新祖隆太郎編　2003 『杉谷遺跡群』広島県三良坂町文化財調査報告書第６集、三良坂町教育委員会。
新東晃一・田仲満雄　1973 「下市瀬遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査』１、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告３、岡山県教育委員会、81～146頁。
菅　宏司編　1997 『杉谷Ａ地点遺跡 －灰塚ダム生活再建地（現のぞみが丘）建設に伴う埋蔵文化財調査概報－』三良坂町教育委員会。
妹尾周三　1986 「江ノ川中・上流域における墓制からみた弥生時代中・後期の社会 －佐田谷１号墓の調査とその意義を中心として－」『芸備』第17集、芸備友の会、17～33頁。
妹尾周三　1992a 「注口付きの脚台付鉢形土器について」『古代吉備』第14集、古代吉備研究会、95～115頁。
妹尾周三　1992b 「安芸地域」『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編、木耳社、239～318頁。
妹尾周三　1996 「佐田谷墳墓群の調査」『芸備』第25集、芸備友の会、10～19頁。
妹尾周三編　1987 『佐田谷墳墓群』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第63集、広島県埋蔵文化財調査センター。
曽根　猛編　2013 『国道313号道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（２）、広島県教育事業団。
園　俊朗・中原　斉・山枡雅美編　1985 『鳥取県米子市東宗像遺跡』一般国道９号改築予定地内遺跡調査報告書、鳥取県教育文化財団調査報告書16、鳥取県教育文化財団。
高尾浩司・淺田康行編　2006 『鳥取県東伯郡琴浦町梅田萱峯遺跡』１、一般国道９号（東伯中山道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 XV、鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書11、鳥取県埋蔵文化財センター。
高尾浩司・大川泰広編　2007 『笠見第３遺跡』II、一般国道９号（東伯中山道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 XVIII、鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書14、鳥取県埋蔵文化財センター。
高倉浩一編　1981 『石鎚山古墳群』広島県埋蔵文化財調査センター。
高倉洋彰　1973 「墳墓からみた弥生社会の発展過程」『考古学研究』第20巻第２号、考古学研究会、7～24頁。

高田恭一郎編　2007 『百間川兼基遺跡４ 百間川沢田遺跡５ 旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査』XVI、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告208、国土交通省岡山河川事務所・岡山県教育委員会。
高畑知功・福田正継　1977 「野田畝遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査』11、岡山県教育委員会、61～408頁。
高畑知功ほか　1976 「谷尻遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査』６、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告11、岡山県教育委員会、105～340頁。
高畑知功編　1982 『百間川兼基遺跡１ 百間川今谷遺跡１』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告51、建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会。
高畑知功・中野雅美編　1998 『津寺遺跡５ 山陽自動車道建設に伴う発掘調査』15、 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告127、岡山県古代吉備文化財センター。
竹田　勝・岡本寛久　1977 「山根屋遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査』12、岡山県教育委員会、13～150頁。
武田恭彰編　1999 『奥坂遺跡群 鬼ノ城ゴルフ倶楽部造成に伴う発掘調査』総社市埋蔵文化財発掘調査報告15、総社市教育委員会。
武田恭彰編　2003 『三須河原遺跡 三須畠田遺跡 三須美濃田遺跡』総社市埋蔵文化財発掘調査報告16、総社市教育委員会。
伊達宗泰編　1984 『丸山遺跡発掘調査報告書 鳥取県東伯郡三朝町大字本泉』鳥取県三朝町教育員会。
田中義昭　1999 「尾高浅山遺跡」『新修 米子市史』第７巻、原始・古代・中世、米子市、247～249頁。
田中義昭・石田爲成　2000 「島根県横田町国竹遺跡出土の鉄斧について」『島根考古学会誌』第17集、島根考古学会、131～143頁。
田中義昭・渡邊貞幸編　1992 『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』島根大学法文学部考古学研究室。
田中良之　1995 『古墳時代親族構造の研究』柏書房。
谷口恭子編　2012 『松原１号墓』県道鳥取鹿野倉吉線道路改良事業にかかる発掘調査報告書、鳥取市文化財団。
谷山雅彦・高田明人　1987 「塩田遺跡」『総社市史』考古資料編、総社市、104～107頁。
團　正雄編　2010 『小池谷遺跡・小池谷古墳群』勝央町文化財調査報告10、勝央町教育委員会。
都出比呂志　1982 「畿内第五様式における土器の変革」『考古学論考 －小林行雄博士古稀記念論文集－』平凡社、215～243頁。
都出比呂志　1984 「農耕社会の形成」『講座日本歴史』１、東京大学出版会、117～158頁。
常松幹雄　2006 『最古の王墓 吉武高木遺跡』シリーズ遺跡を学ぶ024、新泉社。
椿　真治編　1993 『みそのお遺跡 県営御津工業団地造成工事に伴う発掘調査』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告87、岡山県古代吉備文化財センター。
出宮徳尚編　1971 『南方遺跡発掘調査概報』岡山市遺跡調査団。
出宮徳尚編　1975 『幡多廃寺発掘調査報告』岡山市教育委員会。
出宮徳尚編　1981 『三手（庄内幼稚園）遺跡発掘調査報告』岡山市遺跡調査団・岡山市教育委員会。
土井　勉編　1993 『明地遺跡 －平成４年度県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告－』山口県埋蔵文化財調査報告第162集、山口県教育財団・山口県教育委員会。
徳永　隆　2005 「結語」『堀部第１遺跡』鹿島町福祉ゾーン整備事業に伴う調査１、鹿島町教育委員会、170～177頁。
内藤善史編　1998 『高下遺跡 浅川古墳群ほか 楢原古墳群 根岸古墳』一般国道２号改築工事（岡山バイパス）に伴う発掘調査、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告123、岡山県古代吉備文化財センター。
内藤善史編　2003 『前内池遺跡 前内池古墳群 佐古遺跡 主要地方道路佐伯長船線（美作岡山道路）道路改築に伴う発掘調査』１、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告174、岡山県古代吉備文化財センター。
中野知照・松本美佐子・中島伸二編　2001 『新井三嶋谷墳丘墓発掘調査報告書』岩美町文化財調査報告書第

22集、岩美町教育委員会。
中野雅美・上栫　武編　2005 『夏栗遺跡』苫田ダム建設に伴う発掘調査５、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告194、岡山県古代吉備文化財センター。
中原　斉編　1992 『越敷山遺跡群』グリーンパーク大山ゴルフ倶楽部建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（第１分冊)、会見町教育委員会・岸本町教育委員会。
中原　斉編　1994 『越敷山遺跡群』グリーンパーク大山ゴルフ倶楽部建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（第２・３分冊)、会見町教育委員会・岸本町教育委員会。
中村芳昭・向田裕始編　1979 『史跡 花園遺跡 ―調査と整備―』三次市文化財協会。
中村芳昭・向田裕始編　1980 『史跡 花園遺跡 ―第２次調査と整備―』三次市文化財協会。
中山俊紀編　1981 『沼Ｅ遺跡』II、津山市埋蔵文化財発掘調査報告第８集、津山市教育委員会。
中山俊紀編　1982 『京免・竹ノ下遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第11集、津山市教育委員会。
中山　学編　1996 『西本６号遺跡発掘調査報告書』１、文化財センター調査報告書第９冊、東広島市教育文化振興事業団文化財センター。
名越　勉・甲斐忠彦　1973 「スタンプ施文土器の新例」『考古学雑誌』第58巻第４号、日本考古学会、58～67頁。
仁木　聡　2007 「四隅突出型墳丘墓の「配石構造」の系譜と展開」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター、21～31頁。
仁木　聡・岩橋孝典・重松辰治　2007 『順庵原１号墓の研究』島根県古代文化センター研究調査報告書37、島根県教育庁古代文化センター・埋蔵文化財調査センター。
仁木　聡編　2004 『中野美保遺跡』一般国道９号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財文化財発掘調査報告書４、国土交通省中国地方整備局・島根県教育委員会。
仁木康治　2005 「曾根田遺跡」『曾根田遺跡 半太遺跡 稗田遺跡 久保田遺跡 経営体育成基盤整備事業倭文東地区に伴う発掘調査』１、久米町埋蔵文化財発掘調査報告、久米町教育員会、25～51頁。
西尾克己・田根裕美子編　1987 『島根県埋蔵文化財調査報告書』第13集、島根県教育委員会。
西谷　彰　1999 「弥生時代における土器の製作技術交流」『待兼山論叢』第33号、大阪大学大学院文学研究科、1～23頁。
野島　永　1991 「京都府北部の貼り石方形墳丘墓について」『京都府埋蔵文化財論集』第２集、京都府埋蔵文化財調査研究センター、31～38頁。
野島　永　2000 「弥生時代の対外交易と流通」広瀬和雄編『丹後の弥生王墓と巨大古墳』季刊考古学、別冊10、雄山閣出版、29～38頁。
野島　永　2001 「王の時間」『京都府埋蔵文化財論集』第４集、京都府埋蔵文化財調査研究センター、167～176頁。
野島　永　2002 「丹後地域における弥生時代の鉄をめぐって」『青いガラスの燦き』大阪府立弥生文化博物館図録24、大阪府立弥生文化博物館、88～93頁。
野島　永　2015 「広島県北部における弥生墳丘墓の成立と展開 －佐田谷・佐田峠墳墓群の発掘調査を通して－」『広島大学大学院文学研究科 考古学研究室紀要』第７号、広島大学大学院文学研究科考古学研究室、1～12頁。
野島　永・稲垣寿彦　2014 「佐田谷・佐田峠墳墓群の発掘調査をめぐって」『広島県文化財ニュース』広島県文化財協会、4～11頁。
野島　永・野々口陽子　1999 「近畿地方北部における古墳成立期の墳墓（１)」『京都府埋蔵文化財情報』第74号、㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター、19～32頁。
野島　永・野々口陽子　2000 「近畿地方北部における古墳成立期の墳墓（２)」『京都府埋蔵文化財情報』第76号、京都府埋蔵文化財調査研究センター、24～34頁。
野島　永・矢部俊一　2010 「佐田峠墳墓群（第３次）調査」『広島大学大学院文学研究科 帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』XXIV、広島大学大学院文学研究科帝釈峡遺跡群発掘調査室・考古学研究室、23～

39、46～53頁。
野島　永ほか　2009 「佐田峠墳墓群（第２次）調査」『広島大学大学院文学研究科 帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』XXIII、広島大学大学院文学研究科帝釈峡遺跡群発掘調査室・考古学研究室、23～52頁。
野島　永ほか　2011 「佐田峠墳墓群（第４次）調査」『広島大学大学院文学研究科 帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』XXV、広島大学大学院文学研究科帝釈峡遺跡群発掘調査室・考古学研究室、23～38、44～51頁。
野島　永ほか　2013 「佐田谷・佐田峠墳墓群（第６次）調査」『広島大学大学院文学研究科 帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』XXVII、広島大学大学院文学研究科帝釈峡遺跡群発掘調査室・考古学研究室、27～48、55～64頁。
野島　永編　2016 『佐田谷・佐田峠墳墓群発掘調査報告』調査編（１）広島大学大学院文学研究科考古学研究室報告書第３冊・庄原市発掘調査報告書28、広島大学考古学研究室。
乗安和二三編　1983 『土井ヶ浜遺跡第７次調査』豊北町埋蔵文化財調査報告 第２集、豊北町教育委員会。
乗安和二三編　1984 『土井ヶ浜遺跡第８次調査』豊北町埋蔵文化財調査報告 第８集、豊北町教育委員会。
乗安和二三編　1989 『土井ケ浜遺跡：発掘調査概報 第11次調査』山口県埋蔵文化財調査報告第123集、山口県教育委員会。
橋本惣司　1979 「法事坊遺跡」『稼山遺跡群』I、久米開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（１）、久米開発事業に伴う文化財調査委員会、101～204頁。
橋本義和編　1984 『末光遺跡発掘調査報告』広島市の文化財第28集、広島市教育委員会。
柱本　舜・長谷部昇編　1990 『丸山大洞遺跡発掘調査報告書』日南町教育委員会文化財報告書５、鳥取県日野郡日南町教育委員会。
長谷川一英編　1998 『鍛冶屋谷遺跡』御津町埋蔵文化財発掘調査報告９、岡山県御津町教育委員会。
畑　信次　2000 「土壙群」『加茂倉田遺跡発掘調査報告書』福山市教育委員会、29～86頁。
原田敏照編　2009 『山持遺跡 Vol. 5 （６区）』国道431号道路改築事業（東林木バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書７、島根県教育委員会。
原田雅弘編　1996 「宮内第１遺跡」『宮内第１遺跡・宮内第４遺跡・宮内第５遺跡・宮内２、63～65号墳』一般県道東郷羽合線地方特定道路整備事業に伴う発掘調査報告書、鳥取県教育文化財団調査報告書48、鳥取県教育文化財団・鳥取県埋蔵文化財センター、9～144頁。
原田光朗編　1999 『下右田遺跡 第９・10・13・14・15・17次発掘調査概報 －市道開出塚原線改良事業に伴う発掘調査概報－』防府市埋蔵文化財調査概報9902、防府市教育委員会。
桧垣栄次　1984 「長う子遺跡」『広島経済大学構内遺跡群発掘調査報告』広島市の文化財第30集、広島市教育委員会、5～28頁。
東山信治編　2008 『沖手遺跡 専光寺脇遺跡 中世の大規模集落遺跡と弥生時代の墳丘墓』一般国道９号（益田道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書５、国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所・島根県教育委員会。
久富正登・入江剛弘・東　貴之編　2011 『上野遺跡Ⅰ 奈免羅・西の前遺跡 III』八頭町文化財調査報告書６、八頭町教育委員会・安西工業株式会社。
平井典子　1992 「弥生土器からみた備前・備中南部とその周辺」『吉備の考古学的研究』（上）、山陽新聞社、137～182頁。
平井典子　1996 「共同住宅建設に伴う確認調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』６、総社市教育委員会、11～22頁。
平井典子　2017 「吉備南部における弥生後期土器の実相」『古代吉備』第28集、古代吉備研究会、15～34頁。
平井　勝編　1996 『百間川兼基遺跡２ 百間川今谷遺跡２』旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査12、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告114、建設省岡山河川工事事務所・岡山県古代吉備文化財センター。

平井泰男　2002 「備中南部における弥生時代中期後葉から後期前葉の土器編年」『環瀬戸内海の考古学 －平井勝氏追悼論集－』上巻、古代吉備研究会、389～410頁。
平井泰男編　1996 『南溝手遺跡２ 岡山県立大学建設に伴う発掘調査』II、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告107、岡山県教育委員会。
平井泰男・弘田和司・柴田英樹編　1999 『加茂政所遺跡 高松原古才遺跡 立田遺跡 山陽自動車道建設に伴う発掘調査』17、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告138、岡山県古代吉備文化財センター。
平方幸雄・森下哲哉・真田広幸　1978 「天神川の流域」『さんいん古代史の周辺』〈上〉、山陰中央新報社、198～204頁。
平林　工　2004 「池之坊墳墓群第１次調査」『神辺町内遺跡発掘調査概要』2002年度、神辺町教育委員会、11～18頁。
弘田和司編　2005 『久田堀之内遺跡』苫田ダム建設に伴う発掘調査３、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告192、国土交通省苫田ダム工事事務所・岡山県教育委員会。
深田　浩編　2005 『古代出雲における玉作の研究』II、島根県古代文化センター調査研究報告書28、島根県古代文化センター。
福永伸哉　1985 「弥生時代の木棺墓と社会」『考古学研究』第32巻第１号、考古学研究会、81～106頁。
福永伸哉　1999 「古墳の出現と中央政権の儀礼管理」『考古学研究』第46巻第２号、考古学研究会、53～72頁。
藤田憲司　2010 『山陰弥生墳丘墓の研究』日本出版ネットワーク。
藤田憲司・柳瀬昭彦　1987 「弥生時代」『岡山県の考古学』吉川弘文館、107～197頁。
藤永照隆編　2005 『中野美保遺跡 上塩冶横穴墓群第39支群 保知石遺跡』出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書第15集、出雲市教育委員会。
藤野次史編　2003 『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書』I、広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室。
船越元四郎ほか編　1976 『鳥取県米子市 青木遺跡発掘調査報告書』I、Ｆ・Ｊ地区、青木遺跡発掘調査団。
船越元四郎ほか編　1977 『青木遺跡発掘調査報告書』II、Ｃ・Ｄ地区、青木遺跡発掘調査団。
古屋紀之　2007 『古墳の成立と葬送祭祀』雄山閣。
本間元樹　2005 「弥生時代の墓標」『考古論集』川越哲志先生退官記念論文集、広島大学考古学研究室、417～434頁。
間壁忠彦　1968 「岡山県矢掛町白江遺跡」『倉敷考古館研究集報』第５号、倉敷考古館、1～19頁。
間壁忠彦・間壁葭子・藤田憲司　1977 「岡山県真備町黒宮大塚古墳」『倉敷考古館研究集報』第13号、倉敷考古館、1～55頁。
間壁葭子　1999 『古代出雲の医薬と鳥人』学生社。
真木大空　2017 「弥生時代中四国地方における注口付きの脚台付鉢形土器」『広島大学大学院文学研究科 考古学研究室紀要』第９号、広島大学大学院文学研究科考古学研究室、1～24頁。
牧田公平ほか編　2001 『沖丈遺跡 主要地方道川本波多線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』島根県邑智町教育委員会。
牧本哲雄編　2004 『笠見第３遺跡』一般国道９号（東伯中山道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書II、本文編、鳥取県教育文化財団調査報告書86、鳥取県教育文化財団・国土交通省倉吉河川国道事務所。
正岡睦夫・柴田英樹・澤山孝之　1994 「黒住・雲山遺跡」『山陽自動車道に建設に伴う発掘調査』８、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告89、日本道路公団広島建設局岡山工事事務所・岡山県教育委員会、448～589頁。
正岡睦夫・田仲満雄・二宮治夫　1977 「西江遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査』10、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告20、岡山県教育委員会、173～462頁。
正岡睦夫ほか　1972 「雄町遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告（１） 山陽新幹線建設に伴う調査』岡山県教育

委員会、67～128頁。
正岡睦夫編　1984 『百間川原尾島遺跡』２、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56、建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会。
正岡睦夫・松本岩雄編　1992 『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編、木耳社。
益田　晃・中原　斉・瀧川友子編　1989 『長山馬籠遺跡』溝口町埋蔵文化財調査報告書第５集、鳥取県日野郡溝口町教育委員会。
増田浩太編　2003 『家の後Ⅰ遺跡 垣ノ内遺跡』尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書２、国土交通省中国地方整備局・島根県教育委員会。
松井和幸編　1999 『和田原Ｄ地点遺跡発掘調査報告書』広島県埋蔵文化財センター調査報告書第186集、簡易保険福祉事業財団・庄原市教育委員会・広島県埋蔵文化財調査センター。
松井　潔　1997 「東の土器、南の土器 －山陰東部における弥生時代中期後葉～古墳時代初頭の非在地系土器の動態－」『古代吉備』第19集、古代吉備研究会、40～67頁。
松崎壽和　1955 「古代農村の復元 －広島県三次盆地を中心として－」『大学人会研究論集 廣島の農村』第２集、平和と学問を守る大学人の会、13～24頁。
松村昌彦　1979 「戸宇大仙山遺跡群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（２）、広島県教育委員会、41～90頁。
松村昌彦・向田裕始・新谷武夫　1976 「手坊谷遺跡群」『県営駅家住宅団地造成地内埋蔵文化財調査報告』広島県教育委員会、66～119頁。
松本岩雄　1992 「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編、木耳社、413頁～482頁。
松本和男編　2005 『持坂20号墳 －県道清音真金線建設に伴う発掘調査－』県道清音真金線建設に伴う文化財調査委員会。
松本　哲編　2000a 『妻木晩田遺跡発掘調査報告 III〈妻木新山・仙谷地区〉－大仙スイス村リゾート開発事業に伴う発掘調査報告』大山町埋蔵文化財調査報告書第17集、大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・大山町教育委員会。
松本　哲編　2000b 『妻木晩田遺跡発掘調査報告 IV〈洞ノ原・松尾城地区〉－大仙スイス村リゾート開発事業に伴う発掘調査報告』大山町埋蔵文化財調査報告書第17集、大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・大山町教育委員会。
水田貴士編　2008 『森山遺跡 鴨方駅南土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査』浅口市埋蔵文化財発掘調査報告１、浅口市教育委員会。
水田貴士編　2009 『竹林寺天文台遺跡　国立天文台新観測所建設に伴う発掘調査』浅口市埋蔵文化財発掘調査報告２、浅口市教育委員会。
溝口孝司　1999 「弥生時代中期北部九州地域の区画墓の性格 －浦江遺跡第５次調査区画墓の意義を中心に－」『九州と東アジアの考古学 －九州大学考古学研究室50周年記念論文集－』九州大学考古学研究室50周年記念論文集刊行会、157～178頁。
道上康仁　1987 「殿山墳墓群の調査」『大判・上定・殿山 －三次市大田幸町所在遺跡群の発掘調査－』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第57集、広島県埋蔵文化財調査センター、54～66頁。
光永真一編　2003 『田井たれをず遺跡・田井ちご池遺跡・岡東高塚遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告171、岡山県教育委員会。
宮本正保・山尾一郎編　1993 『埋蔵文化財発掘調査報告書 IV（越峠遺跡・宮内遺跡）』建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会。
向田裕始　1978 「田尻山古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（１）、広島県教育委員会、187～215頁。
村上幸雄　1979 「釜田遺跡」『稼山遺跡群』I、久米開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（１）、久米開発事業に伴う文化財調査委員会、205～246頁。

村田亜紀夫編　1999 『大町七九谷遺跡群』広島市文化財団発掘調査報告書第４集、広島市文化財団。
村田　晋　2016 「弥生時代中国地方における脚付長頸壺形土器について」『広島大学大学院文学研究科 考古学研究室紀要』第８号、広島大学大学院文学研究科考古学研究室、33～46頁。
メトカーフ、P.・ハンティントン、R.（池上良正・池上冨美子訳） 1991 『死の儀礼』第２版、ケンブリッジ大学出版、未来社。
守岡利栄　2007 「山陰における弥生時代前期から中期の墓地遺跡の展開」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター、13～20頁。
守岡利栄編　2003 『古志本郷遺跡 VI －Ｋ区の調査－』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 XVII、国土交通省中国地方整備局出雲工事事務所・島根県教育委員会。
森岡秀人　1982 「東六甲の高地性集落（中）」『古代学研究』第97号、古代学研究会、1～12頁。
森下哲哉　1996 「後中尾式土器」『日本土器事典』雄山閣、432頁。
八峠　興編　1997 『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書』VII、鳥取県教育文化財団・鳥取県埋蔵文化財センター。
八峠　興編　2002 『鳥取県西伯郡名和町茶畑六反田遺跡・押平弘法堂遺跡、鳥取県西伯郡大山町富岡播磨洞遺跡・安原溝尻遺跡』一般国道９号（名和淀江道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 II、鳥取県教育文化財団調査報告書77、鳥取県教育文化財団・鳥取県埋蔵文化財センター。
柳瀬昭彦編　1977 『川入・上東 都市計画道路（富本町・三田線）に伴う埋蔵文化財発掘調査』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16、岡山県教育委員会。
山岡　渉・江草由梨　2015 「溝下遺跡第７次調査」『福山市内遺跡発掘調査概要』IX、福山市埋蔵文化財調査報告第33集、福山市教育委員会、89～92頁。
山口県教育委員会文化課編　1978 『朝田墳墓群』III、山口県埋蔵文化財調査報告書第37集、建設省山口工事事務所・山口県教育委員会。
山口県教育委員会文化課編　1986 『朝田墳墓群』VII、山口県埋蔵文化財調査報告書第89集、山口県教育委員会。
山田康弘　2000 「山陰地方における列状配置墓域の展開」『島根考古学会誌』第17集、島根考古学会、15～38頁。
山田康弘編　1998 『土井ヶ浜遺跡第16次調査報告書』豊北町埋蔵文化財調査報告第14集、豊北町教育委員会 土井ケ浜遺跡・人類学ミュージアム。
山磨康平編　2004 『山ノ奥遺跡、池東・峪田遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告180、岡山県教育委員会。
行田裕実編　1985 『西吉田遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第17集、津山市教育委員会。
湯村　功　2017a 「三吉密ケ埆山遺跡」『新鳥取県史』鳥取県、812～815頁。
湯村　功　2017b 「浅井土居敷遺跡」『新鳥取県史』鳥取県、790～791頁。
湯村　功編　2002 『青谷上寺地遺跡』４、一般県道青谷停車場井出線地方特定道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 II、鳥取県教育文化財団調査報告書74、鳥取県教育文化財団。
湯村　功・濱本利幸編　2009 『鳥取県東伯郡琴浦町・西伯郡大山町 梅田萱峯遺跡 V 一般国道９号（東伯中山道路）の改築に伴う埋蔵分文化財発掘調査報告書』XXIV、鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書28、鳥取県埋蔵文化財センター。
吉川　正　1998 「四隅突出型墳丘墓の成立と展開」『島根考古学会誌』第15集、島根考古学会、1～20頁。
吉留秀敏・山本悦世編　1988 『鹿田遺跡Ⅰ －医学部附属病院外来診療棟改築および NMR － CT 室新築に伴う発掘調査－』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第３冊、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター。
米田美江子・三原一将編　1997 『白枝荒神遺跡』出雲市教育委員会。
脇山佳奈ほか　2012 「佐田峠墳墓群（第５次）の調査」『広島大学大学院文学研究科 帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』XXVI、広島大学大学院文学研究科帝釈峡遺跡群発掘調査室・考古学研究室、21～37、42～46頁。
和田晴吾　1989 「葬制の変遷」『古代史復元』第６巻、講談社、105～109頁。

和田晴吾　2003　「弥生墳丘墓の再検討」『古代日韓交流の考古学的研究　－葬制の比較研究－』平成11年度～平成13年度科学研究費補助金（基盤研究（Ｂ）（１））研究成果報告書 課題番号11410108、3～29頁。
渡邊貞幸　2003　「四隅突出型弥生墳丘墓の「突出部」」『新世紀の考古学　－大塚初重先生喜寿記念論文集－』大塚初重先生喜寿記念論文集刊行会、219～234頁。
渡邊貞幸　2007　「まとめにかえて　－四隅突出型墳丘墓概説－」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター、199～205頁。
渡邊貞幸・坂本豊治編　2015　『西谷３号墓発掘調査報告書』島根大学考古学研究室調査報告第14集、出雲弥生の森博物館研究紀要第５集、島根大学考古学研究室・出雲弥生の森博物館。

英文要旨

The Satadani-Satadao group of graves with burial mound, where the excavations were carried out, is located at the urban area on the east side of Shōbara city in the northern part of Hiroshima Prefecture. The group was built between the end of the last third of the Middle Yayoi period (1st century BC) and the first third of the Late Yayoi period (1st century AD).

A series of excavations yielded the following results: Satadani grave No. 1 and 2, Satadao grave No. 3 are graves with rectangular burial mound and four corner projections (*yosumi tosshutsugata funkyū bo*); Satadao grave No. 4 has also a rectangular burial mound with four corner projections, but it has subsequently been modified and altered into a square-shaped burial mound; Satadani grave No. 3, Satadao grave No. 1 and 2 are square-shaped ditch-enclosed slightly elevated burial precincts (*hōkei shūkō bo*); Satadao grave No. 5 is a square-shaped ditch-enclosed slightly elevated burial precinct (*hōkei shūkō bo*), where on the inside of the ditch-enclosed space a grave pit was confirmed.

One important result of this investigation was the discovery of variations in Yayoi burial mound construction techniques. Towards the end of the last third of the Middle Yayoi period after repeated burials of several individuals, the burial mound of the Satadao No. 3 grave was completed. In other words, it became clear, that at the grave No. 3 with rectangular burial mound with four corner projections, grave pits were first excavated before the burial mound was finally taking shape. Then the deceased persons were buried within and thereafter the grave pits were backfilled with the soil of the pit excavation. The so repeated iterations of grave pit excavation, burial and backfilling gradually produced the mound. However, on the other hand at Satadani grave No. 1, Satadao grave No.1 and 2 the burials took place after the earthworks of the mound were nearly completed.

According to the results of the surveys, within the same group of graves one could confirm that the construction methods of the burial mounds changed: from the type, where the mound and the burial facilities are simultaneously constructed (**"concurrent progression" type**) of the end of the last third of the Middle Yayoi period to the type, where burial mound construction proceeds first (**"mound first" type**) of the first third of the Late Yayoi period. It became clear that this is a rather rare group of graves with burial mound.

Due to our research it became clear that from the San'in region to the Chūgoku mountain range, a type of burial – termed here, the "mound last" type – can be found, wherein an earth mound was constructed only after digging the grave and completing the burial. The "concurrent progressive" types, referred to previously, were common in the Middle Yayoi period stage. The "mound-first" type noted at Satadani grave No. 1 appeared in the Late Yayoi period. These elements were adopted in large or huge burial mounds in other regions. This empirical evidence demonstrates that changes in burial mound construction methods were a catalyst for the changes in burial rites – concerning their scale and magnificence on the occasion of burials of chiefs.

In Satadani burial mound No. 3, small grave pits are distributed at the lower level of the mounding, revealing that burials were continually taking place there while the mound was being formed. Furthermore, a large grave pit over 6m in length, which constitutes the principal burial chamber, was detected in the upper mounding along with shafts and other burial facilities, and part of this pit was revealed to be overlapping with another grave pit which constitutes a peripheral burial chamber. It is therefore plausible that this burial mound can be classified as an "eclectic" style that mixes together the "concurrent progressive" and "mound-first" styles. Moreover, two pieces of earthenware were unearthed: vermilion-lacquered vessels with spout and large attached pedestal foot. These were products of the technology of the southern part of Okayama Prefecture. Interestingly, they have holes knocked into them. This feature conjures up an image of the subsequent ceremonial vessel stand (*tokushu kidai*), which later evolved into the cylindrical clay figures (*entō haniwa*) of the Kofun period).

The Satadani burial mound group is the place where funeral rituals first started to involve a combination of elements such as the following: A wooden chamber (*mokkaku*) housing a wooden coffin is interred within the burial pit and then large red-colored pottery (like vessels with attached pedestal foot, *chūkō kyaku tsuki bachi*) are offered at the surface of the grave pit; round pebbles or stone slabs are distributed around the grave to serve as markers, which were become used with offering pottery in the Late Yayoi period; and the graves are arranged in such a way that a large grave pit constituting the main burial is surrounded by other smaller burials in its vicinity at the top of the mound. These elements of ritual (facilities, implements and process of the burial, etc.) are the origin of the elements of the funerary ritual observed in the large and giant Yayoi burial mounds that developed from the last third of the Late Yayoi period onward in the eastern part of Shimane Prefecture, the southern part of Okayama Prefecture, and the northern part of Kyōto Prefecture.

The results of the research have provided further confirmation of the Satadani burial mound group's forerunner-status in the development of Yayoi burial mounds. The site vividly displayed the transformation in Yayoi burial mounds that occurred from the Middle Yayoi period to the Late Yayoi period.

Thus, we identify the Satadani-Satadao burial mound group as an extremely important archaeological site for studying the development, in terms of appearance and increase in size, of the Yayoi-period burial mounds. This group is not only constructed during a relatively early stage of Yayoi period graves with burial mound, but also it became obvious that this a very important site, if one is taking into consideration the development of burial mounds of Yayoi period graves.

In addition, this study incorporates the interrelation of burial mound construction methods and funeral rites, thus making it a fundamental investigation from a comparative archaeological perspective regarding the research of burial mounds not only in Japan, but also overseas.

付表１　中期後半から後期前半の墓壙一覧（広島県）

遺跡名	所在地	遺構名	遺構形態	墓壙規模（m）		時　期	文　献
				幅	長さ		
佐田峠墳墓群４号墓	庄原市	ST08	四隅突出墓	－	－	中期末葉	野島編2016
佐田峠墳墓群３号墓	庄原市	ST02	四隅突出墓	1.15	2.64	中期末葉～後期初頭	野島編2016
佐田峠墳墓群３号墓	庄原市	ST03	四隅突出墓	0.80	1.80	中期末葉～後期初頭	野島編2016
佐田峠墳墓群３号墓	庄原市	ST05	四隅突出墓	0.67	2.15	中期末葉～後期初頭	野島編2016
佐田峠墳墓群３号墓	庄原市	SX04	四隅突出墓	0.50	0.50	中期末葉～後期初頭	野島編2016
佐田峠墳墓群３号墓	庄原市	ST07	四隅突出墓	－	－	中期末葉～後期初頭	野島編2016
佐田峠墳墓群５号墓	庄原市	ST01	方形周溝墓	1.10	1.70+	中期末葉	野島編2016
佐田峠墳墓群５号墓	庄原市	ST02	方形周溝墓	0.40+	1.50+	中期末葉	野島編2016
佐田谷墳墓群１号墓	庄原市	SK1	木棺墓（四隅）	1.34	2.72	後期初頭	妹尾編1987
佐田谷墳墓群１号墓	庄原市	SK2	木槨・木棺墓（四隅）	3.23	3.85	後期初頭	妹尾編1987
佐田谷墳墓群１号墓	庄原市	SK3	木棺墓（四隅）	2.08	2.80	後期初頭	妹尾編1987
佐田谷墳墓群１号墓	庄原市	SK4	木棺墓（四隅）	1.10	1.92	後期初頭	妹尾編1987
佐田谷墳墓群３号墓	庄原市	SK14	方形台状墓	5.06	5.80	後期前葉	今西・辻村編2017
佐田谷墳墓群３号墓	庄原市	SK15	方形台状墓	2.65	1.25	後期前葉	今西・辻村編2017
和田原Ｄ地点遺跡	庄原市	SK11	土壙墓	－	－	中期後半か	松井編1999
和田原Ｄ地点遺跡	庄原市	SK12	土壙墓	－	－	中期後半か	松井編1999
和田原Ｄ地点遺跡	庄原市	SK13	石蓋土壙墓	－	－	中期後半か	松井編1999
戸宇大仙山遺跡	庄原市	C-2	配石木棺墓	0.75	1.45	中期末葉～後期初頭	松村1979
戸宇大仙山遺跡	庄原市	C-4	配石木棺墓	0.60	1.00+	中期末葉～後期初頭	松村1979
戸宇大仙山遺跡	庄原市	C-5	木棺墓	0.85	0.60+	中期末葉～後期初頭	松村1979
戸宇大仙山遺跡	庄原市	C-6	木棺墓	0.87	1.65	中期末葉～後期初頭	松村1979
戸宇大仙山遺跡	庄原市	C-7	木棺墓	0.86	1.57	中期末葉～後期初頭	松村1979
戸宇大仙山遺跡	庄原市	C-8	土壙墓	0.93	0.47+	中期末葉～後期初頭	松村1979
戸宇大仙山遺跡	庄原市	C-9	配石木棺墓	0.60	1.61	中期末葉～後期初頭	松村1979
戸宇大仙山遺跡	庄原市	C-10	木棺墓	0.91	1.75	中期末葉～後期初頭	松村1979
戸宇大仙山遺跡	庄原市	C-11	土壙墓	1.05	1.70	中期末葉～後期初頭	松村1979
戸宇大仙山遺跡	庄原市	C-12	配石木棺墓	0.83	1.40+	中期末葉～後期初頭	松村1979
戸宇大仙山遺跡	庄原市	C-13	配石木棺墓	0.63	0.85+	中期末葉～後期初頭	松村1979
戸宇大仙山遺跡	庄原市	C-14	配石木棺墓	0.88	1.34	中期末葉～後期初頭	松村1979
戸宇大仙山遺跡	庄原市	C-15	土壙墓	0.71	1.23+	中期末葉～後期初頭	松村1979
戸宇大仙山遺跡	庄原市	C-16	土壙墓	0.71	1.22+	中期末葉～後期初頭	松村1979
戸宇大仙山遺跡	庄原市	C-17	木棺墓	0.93	1.55	中期末葉～後期初頭	松村1979
戸宇大仙山遺跡	庄原市	C-18	配石木棺墓	0.80	1.33	中期末葉～後期初頭	松村1979
戸宇大仙山遺跡	庄原市	D-1	土壙墓	0.61	1.03	中期末葉～後期初頭	松村1979
戸宇大仙山遺跡	庄原市	D-2	土壙墓	0.50	1.00	中期末葉～後期初頭	松村1979
戸宇大仙山遺跡	庄原市	D-3	土壙墓	0.60	0.80	中期末葉～後期初頭	松村1979
戸宇大仙山遺跡	庄原市	D-4	土壙墓	1.08	1.20	中期末葉～後期初頭	松村1979
戸宇大仙山遺跡	庄原市	D-5	土壙墓	0.54	1.33	中期末葉～後期初頭	松村1979
戸宇大仙山遺跡	庄原市	D-6	木棺墓	1.02	1.93	中期末葉～後期初頭	松村1979
戸宇大仙山遺跡	庄原市	D-7	土壙墓	0.85	1.40	中期末葉～後期初頭	松村1979
田尻山墳丘墓１号墓	庄原市	内部主体	木棺墓か(四隅)	1.68	2.73	後期初頭	向田1978
田尻山墳丘墓１号墓	庄原市	第１号箱形石棺	１号墓外縁域	0.62	1.12	後期初頭	向田1978
田尻山墳丘墓１号墓	庄原市	第２号箱形石棺	四隅突出墓	0.45	0.80	後期初頭	向田1978
宗祐池西遺跡１号墓	三次市	第１主体部	土壙墓か(四隅)	1.10	2.30	中期後葉	尾本原編2000
宗祐池西遺跡１号墓	三次市	第２主体部	土壙墓か(四隅)	0.77	1.90	中期後葉	尾本原編2000
宗祐池西遺跡１号墓	三次市	第３主体部	土壙墓か(四隅)	0.66	1.53	中期後葉	尾本原編2000
宗祐池西遺跡２号墓	三次市	第１主体部	土壙墓	0.54	1.60	中期後葉	尾本原編2000
宗祐池西遺跡２号墓	三次市	第２主体部	木棺墓	0.98	2.50	中期後葉	尾本原編2000
宗祐池西遺跡２号墓	三次市	第３主体部	木棺墓	0.55	1.70	中期後葉	尾本原編2000
陣山遺跡１号墓	三次市	第１主体部	四隅突出墓	0.56	1.22	中期後葉	落田編1996
陣山遺跡１号墓	三次市	第２主体部	四隅突出墓	0.70	0.92	中期後葉	落田編1996
陣山遺跡２号墓	三次市	第１主体部	木棺墓（四隅）	0.90	1.60	中期後葉	落田編1996
陣山遺跡２号墓	三次市	第２主体部	木棺墓（四隅）	0.90	1.75	中期後葉	落田編1996
陣山遺跡２号墓	三次市	第３主体部	四隅突出墓	0.80	2.20	中期後葉	落田編1996
陣山遺跡３号墓	三次市	第１主体部	四隅突出墓	0.50	1.70	中期後葉	落田編1996
陣山遺跡３号墓	三次市	第２主体部	四隅突出墓	1.20	2.10	中期後葉	落田編1996
陣山遺跡４号墓	三次市	第１主体部	四隅突出墓	0.50	1.35	中期後葉	落田編1996
陣山遺跡４号墓	三次市	第２主体部	四隅突出墓	0.50	1.90	中期後葉	落田編1996
陣山遺跡４号墓	三次市	第３主体部	四隅突出墓	0.55	1.75	中期後葉	落田編1996
陣山遺跡５号墓	三次市	第１主体部	四隅突出墓	0.75	2.00	中期後葉	落田編1996
四拾貫小原墳墓	三次市	第１号墓	方形貼石墓か	1.42	2.25	後期以降	潮見編1969
四拾貫小原墳墓	三次市	第２号墓	方形貼石墓か	0.88	1.55	中期後葉	潮見編1969
四拾貫小原墳墓	三次市	第３号墓	方形貼石墓か	0.80	1.00	中期後葉	潮見編1969
四拾貫小原墳墓	三次市	第４号墓	方形貼石墓か	1.14	2.81	中期後葉	潮見編1969

四拾貫小原墳墓	三次市	第５号墓	方形貼石墓か	0.50	1.75	中期後葉	潮見編1969
四拾貫小原墳墓	三次市	第６号墓	方形貼石墓か	0.95	1.55	中期後葉	潮見編1969
殿山38号墓	三次市	埋葬施設	木棺墓か(四隅)	0.80+	1.30+	中期後葉	道上1987
花園遺跡１号方形墓	三次市	第１号箱形石棺	石棺墓	1.15	2.38	後期前半	中村・向田編1979
花園遺跡１号方形墓	三次市	第３号箱形石棺	石棺墓	0.56	1.02	後期前半	中村・向田編1979
花園遺跡１号方形墓	三次市	第４号箱形石棺	石棺墓	0.65	0.98	後期前半	中村・向田編1979
花園遺跡１号方形墓	三次市	第１号石蓋土壙	石蓋土壙墓	0.50	1.00	後期前半	中村・向田編1979
花園遺跡１号方形墓	三次市	第２号石蓋土壙	石蓋土壙墓	0.42	1.47	後期前半	中村・向田編1979
花園遺跡１号方形墓	三次市	第１号土壙	土壙墓	0.66	1.15	後期前半	中村・向田編1979
花園遺跡１号方形墓	三次市	第２号土壙	土壙墓	0.79	1.05	後期前半	中村・向田編1979
花園遺跡１号方形墓	三次市	第３号土壙	土壙墓	0.82	1.13	後期前半	中村・向田編1979
花園遺跡１号方形墓	三次市	第４号土壙	土壙墓	0.63	0.73	後期前半	中村・向田編1979
花園遺跡１号方形墓	三次市	第５号土壙	土壙墓	0.57	0.92	後期前半	中村・向田編1979
花園遺跡１号方形墓	三次市	第６号土壙	土壙墓	0.92	1.78	後期前半	中村・向田編1979
花園遺跡１号方形墓	三次市	第７号土壙	土壙墓	0.65	1.60	後期前半	中村・向田編1979
花園遺跡１号方形墓	三次市	第８号土壙	土壙墓	0.86	1.99	後期前半	中村・向田編1979
花園遺跡１号方形墓	三次市	第９号土壙	土壙墓	1.35	2.53	後期前半	中村・向田編1979
花園遺跡１号方形墓	三次市	第10号土壙	土壙墓	0.98	2.67	後期前半	中村・向田編1979
花園遺跡１号方形墓	三次市	第11号土壙	土壙墓	1.23	2.74	後期前半	中村・向田編1979
花園遺跡１号方形墓	三次市	第12号土壙	土壙墓	0.61	2.00	後期前半	中村・向田編1979
花園遺跡１号方形墓	三次市	第13号土壙	土壙墓	0.80	1.88	後期前半	中村・向田編1979
杉谷Ａ遺跡	三次市	SK1	木棺墓	1.15	2.95	後期中葉以前	菅編1997・新祖編2003
杉谷Ａ遺跡	三次市	SK2	木棺墓	0.88	2.47	後期中葉以前	菅編1997・新祖編2003
杉谷Ａ遺跡	三次市	SK3	木棺墓	1.26	2.63	後期中葉以前	菅編1997・新祖編2003
杉谷Ａ遺跡	三次市	SK4	石棺墓	0.58	0.97	後期中葉以前	菅編1997・新祖編2003
杉谷Ａ遺跡	三次市	SK13	石棺墓	0.82	0.97	後期中葉以前	菅編1997・新祖編2003
杉谷Ａ遺跡	三次市	SK5	土壙墓	0.70	2.14	後期中葉以前	菅編1997・新祖編2003
杉谷Ａ遺跡	三次市	SK6	土壙墓	1.03	2.25	後期中葉以前	菅編1997・新祖編2003
杉谷Ａ遺跡	三次市	SK9	土壙墓	0.70	2.04	後期中葉以前	菅編1997・新祖編2003
杉谷Ａ遺跡	三次市	SK10	土壙墓	1.04	2.42	後期中葉以前	菅編1997・新祖編2003
杉谷Ａ遺跡	三次市	SK11	土壙墓	0.55	2.10	後期中葉以前	菅編1997・新祖編2003
杉谷Ａ遺跡	三次市	SK15	土壙墓	0.59	1.57	後期中葉以前	菅編1997・新祖編2003
杉谷Ａ遺跡	三次市	SK8	石蓋土壙墓	0.41	0.79	後期中葉以前	菅編1997・新祖編2003
杉谷Ａ遺跡	三次市	SK12	石蓋土壙墓	0.86	1.58	後期中葉以前	菅編1997・新祖編2003
杉谷Ａ遺跡	三次市	SK14	石蓋土壙墓	0.41	1.04	後期中葉以前	菅編1997・新祖編2003
杉谷Ａ遺跡	三次市	SK7	小口配石墓	1.18	2.50	後期中葉以前	菅編1997・新祖編2003
歳ノ神遺跡群３号墓	北広島町	SK3-1	箱形石棺墓(四隅突出墓)	0.87	2.35	後期前葉～中葉	佐々木編1986
歳ノ神遺跡群３号墓	北広島町	SK3-2	箱形石棺墓(四隅突出墓)	0.87	2.20	後期前葉～中葉	佐々木編1986
歳ノ神遺跡群４号墓	北広島町	SK4-1	箱形石棺墓(四隅突出墓)	1.03	2.34	後期前葉～中葉	佐々木編1986
歳ノ神遺跡群４号墓	北広島町	SK4-2	箱形石棺墓(四隅突出墓)	1.70	2.10	後期前葉～中葉	佐々木編1986
歳ノ神遺跡群４号墓	北広島町	SK4-3	箱形石棺墓(四隅突出墓)	0.95	2.14	後期前葉～中葉	佐々木編1986
歳ノ神遺跡群４号墓	北広島町	SK4-4	箱形石棺墓(四隅突出墓)	0.78	2.06	後期前葉～中葉	佐々木編1986
歳ノ神遺跡群４号墓	北広島町	SK4-5	箱形石棺墓(四隅突出墓)	0.92	2.12	後期前葉～中葉	佐々木編1986
歳ノ神遺跡群４号墓	北広島町	SK4-6	箱形石棺墓(四隅突出墓)	0.90	2.60	後期前葉～中葉	佐々木編1986
中出勝負峠３号墓	北広島町	SK3-1	箱形石棺墓(方形台状墓)	1.30	2.48	後期前半	佐々木編1986
新迫南遺跡	安芸高田市	SK-1	箱形石棺墓	0.72	1.23	中期後葉	加藤1979
新迫南遺跡	安芸高田市	ID-1	石蓋土壙墓	0.67	1.45	中期後葉	加藤1979
新迫南遺跡	安芸高田市	DK-5	土壙墓	0.94	2.32	中期後葉	加藤1979
新迫南遺跡	安芸高田市	DK-7	土壙墓	0.75	2.20	中期後葉	加藤1979
新迫南遺跡	安芸高田市	DK-8	土壙墓	0.85	2.00	中期後葉	加藤1979
新迫南遺跡	安芸高田市	DK-9	木棺墓	1.00	1.70	中期後葉	加藤1979
新迫南遺跡	安芸高田市	DK-10	土壙墓	0.52	0.96	中期後葉	加藤1979
新迫南遺跡	安芸高田市	DK-11	土壙墓	0.64	0.90	中期後葉	加藤1979
金井原遺跡	世羅郡世羅町	SK1	木棺墓	0.43	0.75	中期前葉～中葉	梅本2009
金井原遺跡	世羅郡世羅町	SK2	木棺墓	0.61	1.27	中期前葉～中葉	梅本2009
金井原遺跡	世羅郡世羅町	SK3	土壙墓	0.73	1.40	中期前葉～中葉	梅本2009
金井原遺跡	世羅郡世羅町	SK4	木棺墓	0.57	1.69	中期前葉～中葉	梅本2009
金井原遺跡	世羅郡世羅町	SK5	木棺墓	1.31	1.63	中期前葉～中葉	梅本2009
金井原遺跡	世羅郡世羅町	SK6	木棺墓	1.31	1.55	中期前葉～中葉	梅本2009
金井原遺跡	世羅郡世羅町	SK7	木棺墓	0.57	1.40	中期前葉～中葉	梅本2009
金井原遺跡	世羅郡世羅町	SK8	木棺墓	0.67	1.38	中期前葉～中葉	梅本2009
金井原遺跡	世羅郡世羅町	SK9	木棺墓	0.48	0.72	中期前葉～中葉	梅本2009

金井原遺跡	世羅郡世羅町	SK10	木棺墓	0.48	0.80	中期前葉～中葉	梅本2009
山の神墳墓群	府中市	SK15	土器棺墓	0.80	1.00	中期後葉	小野編1998
山の神墳墓群	府中市	SK16	木棺墓	0.69	1.54	中期後葉	小野編1998
山の神墳墓群	府中市	SK17	木棺墓	0.67	1.24	中期後葉	小野編1998
山の神墳墓群	府中市	SK18	木棺墓	0.87	2.00	中期後葉	小野編1998
山の神墳墓群	府中市	SK19	木棺墓	1.00	2.11	中期後葉	小野編1998
山の神墳墓群	府中市	SK20	土壙墓	1.17	2.38	中期後葉	小野編1998
山の神墳墓群	府中市	SK21	土壙墓	1.06	2.36	中期後葉	小野編1998
山の神墳墓群	府中市	SK22	木棺墓	0.55	1.51	中期後葉	小野編1998
山の神墳墓群	府中市	SK25	木棺墓	0.71	1.22	中期後葉	小野編1998
池之坊墳墓群２号墓	福山市	第１主体部	土壙墓	0.50	1.00	中期後半	平林2004
池之坊墳墓群２号墓	福山市	第２主体部	土壙墓	0.55	2.00+	中期後半	平林2004
池之坊墳墓群２号墓	福山市	第３主体部	土壙墓	0.60	0.80+	中期後半	平林2004
池之坊墳墓群２号墓	福山市	第４主体部	土壙墓	0.66	1.35+	中期後半	平林2004
池之坊墳墓群２号墓	福山市	第５主体部	土壙墓	1.60	1.40+	中期後半	平林2004
池之坊墳墓群２号墓	福山市	第６主体部	土壙墓	0.80+	2.60	中期後半	平林2004
池之坊墳墓群２号墓	福山市	第７主体部	土壙墓	1.10	1.40+	中期後半	平林2004
池之坊墳墓群２号墓	福山市	第８主体部	土壙墓	1.36	1.30+	中期後半	平林2004
池之坊墳墓群２号墓	福山市	第９主体部	土壙墓	1.25	1.50+	中期後半	平林2004
池之坊墳墓群２号墓	福山市	第10主体部	土壙墓	1.50	1.50+	中期後半	平林2004
池之坊墳墓群２号墓	福山市	第11主体部	土壙墓	0.70	1.30	中期後半	平林2004
池之坊墳墓群２号墓	福山市	第12主体部	土壙墓	0.60+	1.40+	中期後半	平林2004
池之坊墳墓群２号墓	福山市	第13主体部	土壙墓	1.00+	0.90	中期後半	平林2004
池之坊墳墓群２号墓	福山市	第14主体部	土壙墓	1.10+	0.80	中期後半	平林2004
池之坊墳墓群２号墓	福山市	第15主体部	土壙墓	0.80	1.25	中期後半	平林2004
槇ヶ坪３号遺跡Ａ地区	東広島市	SK4	木棺墓	0.77	1.16	中期後葉～末葉	青山・沢元編1990
槇ヶ坪３号遺跡Ａ地区	東広島市	SK5	木棺墓	0.81	2.12	中期後葉～末葉	青山・沢元編1990
槇ヶ坪３号遺跡Ａ地区	東広島市	SK6	木棺墓	0.61	1.69	中期後葉～末葉	青山・沢元編1990
槇ヶ坪３号遺跡Ｂ地区	東広島市	SK1	木棺墓	0.51	1.20	中期後葉	太田編1988
槇ヶ坪３号遺跡Ｂ地区	東広島市	SK2	土壙墓	0.55	2.00	中期後葉	太田編1988
槇ヶ坪３号遺跡Ｂ地区	東広島市	SK3	木棺墓	0.40	0.80	中期後葉	太田編1988
槇ヶ坪３号遺跡Ｂ地区	東広島市	SK4	木棺墓か	0.40	0.90	中期後葉	太田編1988
槇ヶ坪３号遺跡Ｂ地区	東広島市	SK5	木棺墓か	0.50	0.70	中期後葉	太田編1988
槇ヶ坪３号遺跡Ｂ地区	東広島市	SK6	木棺墓	0.62	1.65	中期後葉	太田編1988
高屋東２号遺跡	東広島市	SK2	木棺墓	0.54	1.34	中期後半	植田編2008
高屋東２号遺跡	東広島市	SK3	土壙墓	0.57	1.25	中期後半	植田編2008
高屋東２号遺跡	東広島市	SK11	土壙墓	0.56	1.41	中期後半	植田編2008
高屋東２号遺跡	東広島市	SK12	土壙墓	0.68	1.49	中期後半	植田編2008
高屋東２号遺跡	東広島市	SK13	木棺配石墓	0.51	1.15	中期後半	植田編2008
高屋東２号遺跡	東広島市	SK14	土壙墓	0.49	1.44	中期後半	植田編2008
高屋東２号遺跡	東広島市	SK15	土壙墓	0.60	1.47	中期後半	植田編2008
高屋東２号遺跡	東広島市	SK16	土壙墓	0.50	1.08	中期後半	植田編2008
高屋東２号遺跡	東広島市	SK17	木棺配石墓	0.46	1.38	中期後半	植田編2008
高屋東２号遺跡	東広島市	SK18	土壙墓	0.74	1.70	中期後半	植田編2008
高屋東２号遺跡	東広島市	SK19	土壙墓	0.53	1.09	中期後半	植田編2008
高屋東２号遺跡	東広島市	SK20	木棺墓	0.55	1.50	中期後半	植田編2008
高屋東２号遺跡	東広島市	SK21	土壙墓	0.51	1.09	中期後半	植田編2008
高屋東２号遺跡	東広島市	SK22	土壙墓	0.52	1.28	中期後半	植田編2008
高屋東２号遺跡	東広島市	SK23	土壙墓	0.45	1.12	中期後半	植田編2008
高屋東２号遺跡	東広島市	SK24	土壙墓	0.34	0.73	中期後半	植田編2008
高屋東２号遺跡	東広島市	SK25	土壙墓	0.35	0.73	中期後半	植田編2008
高屋東２号遺跡	東広島市	SK26	土壙墓	0.34	0.56	中期後半	植田編2008
高屋東２号遺跡	東広島市	SK27	土壙墓	0.55	1.49	中期後半	植田編2008
高屋東２号遺跡	東広島市	SK28	土壙墓	0.56	1.52	中期後半	植田編2008
高屋東２号遺跡	東広島市	SK29	土壙墓	0.75	1.51	中期後半	植田編2008
高屋東２号遺跡	東広島市	SK30	土壙墓	0.34	0.94	中期後半	植田編2008
高屋東２号遺跡	東広島市	SK31	土壙墓	0.55	1.32	中期後半	植田編2008
高屋東２号遺跡	東広島市	SK32	土壙墓	0.70	1.55	中期後半	植田編2008
高屋東２号遺跡	東広島市	SK33	土壙墓	0.45	1.17	中期後半	植田編2008
高屋東２号遺跡	東広島市	SK34	土壙墓	0.78	1.68	中期後半	植田編2008
高屋東２号遺跡	東広島市	SK35	土壙墓	0.46	0.90	中期後半	植田編2008
高屋東２号遺跡	東広島市	SK36	土壙墓	0.44	0.90	中期後半	植田編2008
高屋東２号遺跡	東広島市	SK37	土壙墓	0.54	1.26	中期後半	植田編2008
高屋東２号遺跡	東広島市	SK38	土壙墓	0.66	1.41	中期後半	植田編2008
高屋東２号遺跡	東広島市	SK39	木棺配石墓	0.49	1.24	中期後半	植田編2008
高屋東２号遺跡	東広島市	SK40	木棺配石墓	0.64	1.35	中期後半	植田編2008
高屋東２号遺跡	東広島市	SK41	土壙墓	0.57	1.70	中期後半	植田編2008
高屋東２号遺跡	東広島市	SK42	土壙墓	0.50	0.83	中期後半	植田編2008
高屋東２号遺跡	東広島市	SK43	土壙墓	0.80	1.10+	中期後半	植田編2008

高屋東２号遺跡	東広島市	SK45	土壙墓	0.63	1.47	中期後半	植田編2008
高屋東２号遺跡	東広島市	SK46	土壙墓	0.52	0.93	中期後半	植田編2008
高屋東２号遺跡	東広島市	SK47	土壙墓	0.64	1.54	中期後半	植田編2008
高屋東２号遺跡	東広島市	SK48	土壙墓	0.64	0.84+	中期後半	植田編2008
高屋東２号遺跡	東広島市	SK49	土壙墓	0.59	1.21	中期後半	植田編2008
高屋東２号遺跡	東広島市	SK50	土壙墓	1.14	2.08	中期後半	植田編2008
高屋東２号遺跡	東広島市	SK51	土壙墓	0.34	0.63	中期後半	植田編2008
高屋東２号遺跡	東広島市	SK52	石蓋土壙墓	0.30	1.20	中期後半	植田編2008
高屋東２号遺跡	東広島市	SK53	石蓋土壙墓	0.30	1.08	中期後半	植田編2008
高屋東２号遺跡	東広島市	SK54	土壙墓	0.50	1.65	中期後半	植田編2008
高屋東２号遺跡	東広島市	SK55	土壙墓	0.65	0.98	中期後半	植田編2008
高屋東２号遺跡	東広島市	SK56	土壙墓	0.61	0.82	中期後半	植田編2008
高屋東２号遺跡	東広島市	SK57	土壙墓	0.34	0.59	中期後半	植田編2008
高屋東２号遺跡	東広島市	SK58	土壙墓	0.42	0.82	中期後半	植田編2008
高屋東２号遺跡	東広島市	SK59	土壙墓	0.98	1.30	中期後半	植田編2008
高屋東２号遺跡	東広島市	SK60	土壙墓	0.49	1.08	中期後半	植田編2008
高屋東３号遺跡	東広島市	SK9	土壙墓か	0.50	1.00	中期後半～末葉	植田編2008
高屋東３号遺跡	東広島市	SK10	木棺墓	0.80	1.50	中期後半～末葉	植田編2008
高屋東３号遺跡	東広島市	SK11	土壙墓	0.70	1.90	中期後半～末葉	植田編2008
狐ケ城跡遺跡	東広島市	SK01	石蓋土壙墓	0.90	2.80	中期後半～後期中葉	植田編1983
狐ケ城跡遺跡	東広島市	SK02	石棺墓	0.46	0.84	中期後半～後期中葉	植田編1983
狐ケ城跡遺跡	東広島市	SK03	石蓋土壙墓	0.75	1.50	中期後半～後期中葉	植田編1983
狐ケ城跡遺跡	東広島市	SK04	石蓋土壙墓	0.62	1.00	中期後半～後期中葉	植田1983
狐ケ城跡遺跡	東広島市	SK05	石棺墓	0.58	2.06	中期後半～後期中葉	植田1983
狐ケ城跡遺跡	東広島市	SK06	土壙墓	0.80	2.12	中期後半～後期中葉	植田1983
狐ケ城跡遺跡	東広島市	SK07	土壙墓	0.56	2.43	中期後半～後期中葉	植田1983
狐ケ城跡遺跡	東広島市	SK08	土壙墓	1.05	2.47	中期後半～後期中葉	植田1983
狐ケ城跡遺跡	東広島市	SK09	土壙墓	1.17	2.65	中期後半～後期中葉	植田1983
狐ケ城跡遺跡	東広島市	SK10	土壙墓	0.95	1.90	中期後半～後期中葉	植田1983
狐ケ城跡遺跡	東広島市	SK11	土壙墓	0.90	2.08	中期後半～後期中葉	植田1983
狐ケ城跡遺跡	東広島市	SK13	土壙墓	0.80	2.40	中期後半～後期中葉	植田1983
狐ケ城跡遺跡	東広島市	SK14	土壙墓	0.85	2.15	中期後半～後期中葉	植田1983
狐ケ城跡遺跡	東広島市	SK15	土壙墓	0.86	2.05	中期後半～後期中葉	植田1983
狐ケ城跡遺跡	東広島市	SK16	土壙墓	0.96	2.12	中期後半～後期中葉	植田1983
狐ケ城跡遺跡	東広島市	SK17	土壙墓	1.25	2.28	中期後半～後期中葉	植田1983
狐ケ城跡遺跡	東広島市	SK18	土壙墓	0.98	1.92	中期後半～後期中葉	植田1983
狐ケ城跡遺跡	東広島市	SK19	土壙墓	0.81	1.80	中期後半～後期中葉	植田1983
狐ケ城跡遺跡	東広島市	SK20	石蓋土壙墓	0.90	2.35	中期後半～後期中葉	植田1983
狐ケ城跡遺跡	東広島市	SK21	石蓋土壙墓	0.68	1.00	中期後半～後期中葉	植田1983
狐ケ城跡遺跡	東広島市	SK22	石蓋土壙墓	0.60	0.90	中期後半～後期中葉	植田1983
狐ケ城跡遺跡	東広島市	SK23	土器棺	0.35	0.45	中期後半～後期中葉	植田1983
狐ケ城跡遺跡	東広島市	SK24	石蓋土壙墓	0.36	0.62	中期後半～後期中葉	植田1983
狐ケ城跡遺跡	東広島市	SK26	土壙墓	1.02	2.00	中期後半～後期中葉	植田1983
狐ケ城跡遺跡	東広島市	SK27	土壙墓	0.80	2.16	中期後半～後期中葉	植田1983
狐ケ城跡遺跡	東広島市	SK28	石蓋土壙墓	1.02	2.82	中期後半～後期中葉	植田1983
西本第１遺跡Ａ地点	東広島市	SK01	土壙墓(周溝墓)	0.70	1.20	中期後葉	金井編1976
西本第１遺跡Ａ地点	東広島市	SK02	土壙墓(周溝墓)	1.00	1.90	中期後葉	金井編1976
西本第１遺跡Ａ地点	東広島市	SK03	土壙墓(周溝墓)	0.40	0.70	中期後葉	金井編1976
西本第１遺跡Ａ地点	東広島市	SK04	土壙墓(周溝墓)	0.60	2.00	中期後葉	金井編1976
西本第１遺跡Ａ地点	東広島市	SK05	土壙墓(周溝墓)	0.90	1.50	中期後葉	金井編1976
西本第１遺跡Ａ地点	東広島市	SK06	土壙墓(周溝墓)	0.75	1.00	中期後葉	金井編1976
西本第１遺跡Ａ地点	東広島市	SK07	土壙墓(周溝墓)	0.60	1.70	中期後葉	金井編1976
西本第１遺跡Ａ地点	東広島市	SK08	土壙墓(周溝墓)	0.40	0.65	中期後葉	金井編1976
藤が迫弥生墳丘墓	東広島市	第１号墓	木棺墓	0.80	1.66	中期後半～末葉	潮見ほか1971a
藤が迫弥生墳丘墓	東広島市	第２号墓	土壙墓	0.70	1.40	中期後半～末葉	潮見ほか1971a
藤が迫弥生墳丘墓	東広島市	第３号墓	木棺墓か	0.60	1.40	中期後半～末葉	潮見ほか1971a
藤が迫弥生墳丘墓	東広島市	第４号墓	木棺墓	0.95	1.25	中期後半～末葉	潮見ほか1971a
藤が迫弥生墳丘墓	東広島市	第５号墓	木棺墓	0.53	1.45	中期後半～末葉	潮見ほか1971a
末光遺跡	広島市	土壙11	土器蓋土壙墓	0.63	0.76	後期初頭	橋本編1984
成岡Ｂ地点遺跡	広島市	SP1	土器棺墓	0.77	1.00	中期後葉～末葉	稲坂編2001
大町七九谷Ｃ地点	広島市	ST1	木棺墓	0.75	2.30	中期末葉	村田編1999
大町七九谷Ｃ地点	広島市	ST2	木棺墓	0.70	1.88	中期末葉	村田編1999
大町七九谷Ｃ地点	広島市	ST3	木棺墓	0.80	2.20	中期末葉	村田編1999
大町七九谷Ｃ地点	広島市	ST4	木棺墓	0.80	2.36	中期末葉	村田編1999
大町七九谷Ｃ地点	広島市	ST5	木棺墓	0.70	2.36	中期末葉	村田編1999
大町七九谷Ｃ地点	広島市	ST6	木棺墓	0.75	2.05	中期末葉	村田編1999
大町七九谷Ｃ地点	広島市	ST7	木棺墓	0.85	－	中期末葉	村田編1999
大町七九谷Ｃ地点	広島市	ST8	木棺墓	0.85	0.60	中期末葉	村田編1999
大町七九谷Ｃ地点	広島市	ST9	木棺墓	－	2.28	中期末葉	村田編1999

大町七九谷Ｃ地点	広島市	ST10	木棺墓	0.65	2.15	中期末葉	村田編1999
大町七九谷Ｃ地点	広島市	ST11	木棺墓	0.70	2.02	中期末葉	村田編1999
大町七九谷Ｃ地点	広島市	ST12	木棺墓	0.60	2.05	中期末葉	村田編1999
大町七九谷Ｃ地点	広島市	SS1	石棺墓	0.53	0.94	中期末葉	村田編1999
大町七九谷Ｃ地点	広島市	SS2	石棺墓	－	－	中期末葉	村田編1999
大町七九谷Ｃ地点	広島市	SS3	石棺墓	－	－	中期末葉	村田編1999

付表２　中期後半から後期前半の墓壙一覧（岡山県）

遺跡名	所在地	遺構名	遺構形態	墓壙規模（m）		時　期	文　献
				幅	長さ		
夏栗遺跡	苫田郡鏡野町	土壙墓１	木棺墓	0.65	1.78	中期後葉	中野・上栫編2005
大田茶屋遺跡	津山市	墓11	土壙墓	0.85	2.03	中期後葉	岡本編1998
大田茶屋遺跡	津山市	墓12	土壙墓	0.75	－	中期後葉	岡本編1998
大田茶屋遺跡	津山市	墓13	木棺墓	－	－	中期後葉～後期前葉	岡本編1998
大田茶屋遺跡	津山市	墓14	木棺墓	－	－	中期後葉～後期前葉	岡本編1998
大田茶屋遺跡	津山市	墓15	木棺墓	－	－	中期後葉～後期前葉	岡本編1998
大田茶屋遺跡	津山市	墓16	木棺墓	－	－	中期後葉～後期前葉	岡本編1998
大田茶屋遺跡	津山市	墓17	木棺墓	－	－	中期後葉～後期前葉	岡本編1998
大田茶屋遺跡	津山市	墓18	木棺墓	－	－	中期後葉～後期前葉	岡本編1998
大田茶屋遺跡	津山市	墓19	木棺墓	0.65	1.08	中期後葉～後期前葉	岡本編1998
大田茶屋遺跡	津山市	墓20	木棺墓	－	－	中期後葉～後期前葉	岡本編1998
大田茶屋遺跡	津山市	墓21	木棺墓	－	－	中期後葉～後期前葉	岡本編1998
大田茶屋遺跡	津山市	墓22	木棺墓	0.85	1.50	中期後葉～後期前葉	岡本編1998
大田茶屋遺跡	津山市	墓23	木棺墓	－	－	中期後葉～後期前葉	岡本編1998
大田茶屋遺跡	津山市	墓24	木棺墓	－	－	中期後葉～後期前葉	岡本編1998
大田茶屋遺跡	津山市	墓25	木棺墓	－	－	中期後葉～後期前葉	岡本編1998
大田茶屋遺跡	津山市	墓26	木棺墓	－	－	中期後葉～後期前葉	岡本編1998
大田茶屋遺跡	津山市	墓27	木棺墓	－	－	中期後葉～後期前葉	岡本編1998
大田茶屋遺跡	津山市	墓10	土壙墓	0.85	1.41	中期後葉	岡本編1998
西吉田遺跡	津山市	土壙墓４	木棺墓	0.60	1.30	中期後半	行田編1985
竹ノ下遺跡	津山市	SG2	木棺墓	0.50	0.75	中期後半	中山編1982
竹ノ下遺跡	津山市	SG3	木棺墓	0.80	1.80	中期後半	中山編1982
竹ノ下遺跡	津山市	SG4	木棺墓	0.65	1.35	中期後半	中山編1982
竹ノ下遺跡	津山市	SG5	木棺墓	－	－	中期後半	中山編1982
竹ノ下遺跡	津山市	SG6	木棺墓	0.90	1.00+	中期後半	中山編1982
竹ノ下遺跡	津山市	SG7	木棺墓	0.40	0.60	中期後半	中山編1982
竹ノ下遺跡	津山市	SG8	木棺墓	－	－	中期後半	中山編1982
竹ノ下遺跡	津山市	SG9	木棺墓	0.50	1.00	中期後半	中山編1982
竹ノ下遺跡	津山市	SG10	木棺墓	0.75	2.00	中期後半	中山編1982
竹ノ下遺跡	津山市	SG11	木棺墓	1.00	1.65	中期後半	中山編1982
竹ノ下遺跡	津山市	SG12	木棺墓	0.70	1.90	中期後半	中山編1982
竹ノ下遺跡	津山市	SG13	木棺墓	0.60	0.90	中期後半	中山編1982
竹ノ下遺跡	津山市	SG14	木棺墓	0.70	1.80	中期後半	中山編1982
竹ノ下遺跡	津山市	SG15	木棺墓	0.65	1.30	中期後半	中山編1982
竹ノ下遺跡	津山市	SG23	木棺墓	0.65	1.30	中期後半	中山編1982
沼Ｅ遺跡	津山市	土器棺墓１	土器棺墓	0.60	0.60	中期後半	中山編1981
山ノ奥遺跡	津山市	墓１	木棺墓	0.75	1.38	中期後半	山磨編2004
山ノ奥遺跡	津山市	墓２	木棺墓	0.80	1.41	中期後半	山磨編2004
山ノ奥遺跡	津山市	墓３	木棺墓	0.44	0.75	中期後半	山磨編2004
山ノ奥遺跡	津山市	墓４	木棺墓	1.23	2.34	中期後半	山磨編2004
山ノ奥遺跡	津山市	墓５	木棺墓	0.50	1.08	中期後半	山磨編2004
山ノ奥遺跡	津山市	墓６	木棺墓	0.92	1.89	中期後半	山磨編2004
山ノ奥遺跡	津山市	墓７	木棺墓	0.70	1.50	中期後半	山磨編2004
山ノ奥遺跡	津山市	墓８	木棺墓	0.54	1.53	中期後半	山磨編2004
山ノ奥遺跡	津山市	墓９	木棺墓	0.85	1.89	中期後半	山磨編2004
田井たれをず遺跡	津山市	土壙墓１	木棺墓	0.80	1.60	中期後半	光永編2003
小池谷遺跡	津山市	土壙墓 -1	木棺墓	1.20	2.00	中期中葉	團編2010
小池谷遺跡	津山市	土壙墓 -2	木棺墓	1.00	1.90	中期中葉	團編2010
小池谷遺跡	津山市	土壙墓 -3	木棺墓	0.90	2.00	中期中葉	團編2010
小池谷遺跡	津山市	土壙墓 -4	木棺墓	1.20	2.00	中期中葉	團編2010
小池谷遺跡	津山市	土壙墓 -5	木棺墓	0.80	2.20	中期中葉	團編2010
小池谷遺跡	津山市	土壙墓 -6	土壙墓	0.60	1.10	中期中葉	團編2010
小池谷遺跡	津山市	土壙墓 -7	土壙墓	0.70	0.90	中期中葉	團編2010
小池谷遺跡	津山市	土壙墓 -8	土壙墓	0.70	1.50	中期中葉	團編2010
坂田墳墓群	津山市	土壙墓27	土壙墓	0.68	1.56	中期中葉～後期	柴田編2006
前内池遺跡砂田区	赤磐市	土壙墓２	木棺墓	0.90	2.47	後期前葉	内藤編2003

前内池遺跡砂田区	赤磐市	土壙墓６	木棺墓	1.15	2.35	後期前葉	内藤編2003
前内池遺跡砂田区	赤磐市	土壙墓１	木棺墓	0.93	2.17	後期前葉	内藤編2003
前内池遺跡砂田区	赤磐市	土壙墓３	土壙墓	1.15	2.34	後期前葉	内藤編2003
前内池遺跡砂田区	赤磐市	土壙墓４	木棺墓	1.20	2.40	後期前葉	内藤編2003
前内池遺跡砂田区	赤磐市	土壙墓７	木棺墓	1.12	2.35	後期前葉	内藤編2003
前内池遺跡砂田区	赤磐市	土壙墓８	土壙墓	1.01	2.06	後期前葉	内藤編2003
前内池遺跡砂田区	赤磐市	土壙墓９	土壙墓	1.40	2.00	後期前葉	内藤編2003
前内池遺跡砂田区	赤磐市	土器棺墓１	土器棺墓	0.64	0.64	後期前葉	内藤編2003
前内池遺跡シダガ鼻中央区	赤磐市	土壙墓75	木棺墓か	1.00	2.67	後期前葉	内藤編2003
前内池遺跡シダガ鼻中央区	赤磐市	土壙墓62	木棺墓	1.45	3.20	後期前半	内藤編2003
前内池遺跡砂田区	赤磐市	土壙墓17	木棺墓	0.80	1.30	後期前半	内藤編2003
前内池遺跡砂田区	赤磐市	土壙墓18	木棺墓	1.10	1.25	後期前半	内藤編2003
前内池遺跡シダガ鼻中央区	赤磐市	土壙墓101	土壙墓	0.92	1.67	後期前半～中葉	内藤編2003
前内池遺跡シダガ鼻北区	赤磐市	土壙墓115	土壙墓	1.04	2.56	後期前葉～中葉	内藤編2003
前内池遺跡シダガ鼻北区	赤磐市	土壙墓129	木棺墓	0.80	1.76	後期前葉～中葉か	内藤編2003
前内池遺跡シダガ鼻北区	赤磐市	土壙墓130	土壙墓	0.88	2.15	後期前葉～中葉か	内藤編2003
前内池遺跡シダガ鼻北区	赤磐市	土壙墓131	土壙墓	0.80	1.62	後期前葉～中葉か	内藤編2003
前内池遺跡シダガ鼻北区	赤磐市	土壙墓132	土壙墓	0.85	2.56	後期前葉～中葉か	内藤編2003
前内池遺跡シダガ鼻北区	赤磐市	土壙墓135	土壙墓	0.58	1.68	後期前葉～中葉か	内藤編2003
前内池遺跡シダガ鼻南区	赤磐市	土壙墓45	土壙墓	0.75	1.90+	後期中葉か	内藤編2003
前内池遺跡シダガ鼻北区	赤磐市	土壙墓133	土壙墓	0.50	1.05+	後期前葉～中葉か	内藤編2003
前内池遺跡シダガ鼻北区	赤磐市	土壙墓134	土壙墓	－	1.17	後期前葉～中葉か	内藤編2003
前内池遺跡シダガ鼻北区	赤磐市	土器棺墓48	土器棺墓			後期前葉～中葉	内藤編2003
佐古遺跡南区	赤磐市	土壙墓３	木棺墓	0.72	2.20	後期前葉	内藤編2003
佐古遺跡南区	赤磐市	土器棺墓２	土器棺墓	0.72	0.82	後期前葉	内藤編2003
佐古遺跡南区	赤磐市	土壙墓１	木棺墓	0.72	1.84	後期前半	内藤編2003
佐古遺跡南区	赤磐市	土壙墓２	木棺墓	0.92	2.30	後期前半	内藤編2003
佐古遺跡南区	赤磐市	土器棺墓１	土器棺墓	0.64	0.78	後期前半	内藤編2003
四辻峠台状墓	赤磐市	第１土壙	台状墓	0.69	1.55	中期後半～後期初頭	神原編1973
四辻峠台状墓	赤磐市	第２土壙	台状墓	0.92	2.17	中期後半～後期初頭	神原編1973
四辻峠台状墓	赤磐市	第３土壙	台状墓	0.89	2.38	中期後半～後期初頭	神原編1973
四辻峠台状墓	赤磐市	第４土壙	台状墓	1.01	2.22	中期後半～後期初頭	神原編1973
四辻峠台状墓	赤磐市	第５土壙	台状墓	0.92	1.87	中期後半～後期初頭	神原編1973
四辻峠台状墓	赤磐市	第６土壙	台状墓	1.02	2.02	中期後半～後期初頭	神原編1973
四辻峠台状墓	赤磐市	第７土壙	台状墓	0.78	1.85	中期後半～後期初頭	神原編1973
四辻土壙墓群	赤磐市	土壙墓２	土壙墓	0.81	2.28	中期後葉～後期初頭	神原編1973
四辻土壙墓群	赤磐市	土壙墓18	台状墓	0.54	0.70	中期後葉～後期初頭	神原編1973
四辻土壙墓群	赤磐市	土壙墓19	台状墓	0.84	1.95	中期後葉～後期初頭	神原編1973
四辻土壙墓群	赤磐市	土壙墓20	台状墓	0.75	2.10	中期後葉～後期初頭	神原編1973
四辻土壙墓群	赤磐市	土壙墓21	台状墓	0.80	1.50	中期後葉～後期初頭	神原編1973
四辻土壙墓群	赤磐市	土壙墓22	台状墓	0.77	2.25	中期後葉～後期初頭	神原編1973
四辻土壙墓群	赤磐市	土壙墓23	台状墓	0.65	1.15	中期後葉～後期初頭	神原編1973
四辻土壙墓群	赤磐市	土壙墓24	台状墓	0.97	1.98	中期後葉～後期初頭	神原編1973
四辻土壙墓群	赤磐市	土壙墓25	台状墓	0.75	1.55	中期後葉～後期初頭	神原編1973
四辻土壙墓群	赤磐市	土壙墓26	台状墓	0.90	2.17	中期後葉～後期初頭	神原編1973
四辻土壙墓群	赤磐市	土壙墓27	台状墓	1.40	1.57	中期後葉～後期初頭	神原編1973
四辻土壙墓群	赤磐市	土壙墓28	台状墓	1.00	2.44	中期後葉～後期初頭	神原編1973
四辻土壙墓群	赤磐市	土壙墓29	台状墓	0.70	1.69	中期後葉～後期初頭	神原編1973
四辻土壙墓群	赤磐市	土壙墓30	台状墓	1.65	2.60	中期後葉～後期初頭	神原編1973
四辻土壙墓群	赤磐市	土壙墓31	台状墓	0.65	1.10	中期後葉～後期初頭	神原編1973
四辻土壙墓群	赤磐市	土壙墓32	台状墓	0.95	1.60	中期後葉～後期初頭	神原編1973
四辻土壙墓群	赤磐市	土壙墓33	台状墓	1.25	2.65	中期後葉～後期初頭	神原編1973
四辻土壙墓群	赤磐市	土壙墓34	台状墓	1.33	2.60	中期後葉～後期初頭	神原編1973
四辻土壙墓群	赤磐市	土壙墓35	台状墓	1.02	2.17	中期後葉～後期初頭	神原編1973
四辻土壙墓群	赤磐市	土壙墓36	台状墓	0.97	2.15	中期後葉～後期初頭	神原編1973
四辻土壙墓群	赤磐市	土壙墓37	台状墓	0.90	2.15	中期後葉～後期初頭	神原編1973
四辻土壙墓群	赤磐市	土壙墓38	台状墓	1.05	2.02	中期後葉～後期初頭	神原編1973
四辻土壙墓群	赤磐市	土壙墓39	台状墓	0.75	1.65	中期後葉～後期初頭	神原編1973
四辻土壙墓群	赤磐市	土壙墓40	台状墓	0.75	2.00	中期後葉～後期初頭	神原編1973
四辻土壙墓群	赤磐市	土壙墓52	土壙墓	0.64	1.80	中期後葉（古段階）	神原編1973
四辻土壙墓群	赤磐市	土壙墓54	土壙墓	0.78	1.93	中期後葉（古段階）	神原編1973
四辻土壙墓群	赤磐市	土壙墓57	土壙墓	0.82	2.13	中期後葉（古段階）	神原編1973
四辻土壙墓群	赤磐市	土壙墓47	土壙墓	0.76	1.75	中期後葉（古段階）	神原編1973
四辻土壙墓群	赤磐市	Ａ地区第13土壙	木棺墓	0.81	1.91	中期末葉～後期初頭	神原編1973
四辻土壙墓群	赤磐市	Ａ地区第14土壙	木棺墓	0.92	1.19	中期末葉～後期初頭	神原編1973
四辻土壙墓群	赤磐市	Ａ地区第15土壙	木棺墓	0.84	1.80	中期末葉～後期初頭	神原編1973
四辻土壙墓群	赤磐市	Ａ地区第17土壙	木棺墓	0.53	1.30	中期末葉～後期初頭	神原編1973
四辻土壙墓群	赤磐市	Ｂ地区第24土壙	木棺墓（台状墓）	0.97	1.98	中期末葉～後期初頭	神原編1973
四辻土壙墓群	赤磐市	Ｂ地区第28土壙	木棺墓（台状墓）	1.00	2.44	中期末葉～後期初頭	神原編1973

四辻土壙墓群	赤磐市	Ｂ地区第30土壙	木棺墓（台状墓）	1.65	2.60	中期末葉～後期初頭	神原編1973
四辻土壙墓群	赤磐市	Ｂ地区第32土壙	木棺墓（台状墓）	0.95	1.60	中期末葉～後期初頭	神原編1973
四辻土壙墓群	赤磐市	Ｂ地区第33土壙	木棺墓（台状墓）	1.25	2.65	中期末葉～後期初頭	神原編1973
四辻土壙墓群	赤磐市	Ｂ地区第37土壙	木棺墓（台状墓）	0.90	2.15	中期末葉～後期初頭	神原編1973
四辻土壙墓群	赤磐市	Ｃ地区第57土壙	木棺墓	0.82	2.13	中期末葉～後期初頭	神原編1973
四辻土壙墓群	赤磐市	Ｂ地区第18-K1	土器棺墓	0.54	0.70	後期初頭	神原編1973
四辻土壙墓群	赤磐市	Ａ地区第７土壙	木棺墓	－	2.61	中期末葉～後期初頭	神原編1973
四辻土壙墓群	赤磐市	土器棺 K2	木棺墓	－	－	後期前葉	神原編1973
四辻土壙墓群	赤磐市	土器棺 K3	木棺墓	－	－	後期前葉	神原編1973
宮山方形台状墓	赤磐市	第１土壙	方形台状墓	0.76	1.16	後期初頭	神原編1973
宮山方形台状墓	赤磐市	第２土壙	方形台状墓	0.61	1.14	後期初頭	神原編1973
宮山方形台状墓	赤磐市	第３土壙	方形台状墓	0.68	0.68	後期初頭	神原編1973
宮山方形台状墓	赤磐市	第４土壙	方形台状墓	0.66	1.25	後期初頭	神原編1973
宮山方形台状墓	赤磐市	第５土壙	方形台状墓	0.53	1.12	後期初頭	神原編1973
宮山方形台状墓	赤磐市	第６土壙	方形台状墓	0.59	0.81	後期初頭	神原編1973
宮山方形台状墓	赤磐市	第７土壙	方形台状墓	0.41	0.76	後期初頭	神原編1973
斎富遺跡	赤磐市	墓３	土器棺墓	0.39	0.45	後期中葉	下澤・大橋編1996
清水谷遺跡	岡山市	１号木棺墓	木棺墓	0.80	1.50	中期後葉～後期初頭	白石編1995
清水谷遺跡	岡山市	２号木棺墓	木棺墓	0.72	1.75	中期後葉～後期初頭	白石編1995
清水谷遺跡	岡山市	３号木棺墓	木棺墓	0.80	1.90	中期後葉～後期初頭	白石編1995
清水谷遺跡	岡山市	４号木棺墓	木棺墓	0.65	1.50	中期後葉～後期初頭	白石編1995
清水谷遺跡	岡山市	６号木棺墓	木棺墓	1.05	2.55	中期後葉～後期初頭	白石編1995
清水谷遺跡	岡山市	５号木棺墓	木棺墓	0.60	1.00	中期後葉～後期初頭	白石編1995
甫崎天神山土壙墓群	岡山市	土壙墓 -1	木棺墓	0.84	1.83	後期初頭～前半	宇垣ほか1994
甫崎天神山土壙墓群	岡山市	土壙墓 -4	木棺墓	0.73	2.10	後期初頭～前半	宇垣ほか1994
甫崎天神山土壙墓群	岡山市	土壙墓 -14	木棺墓	0.45	1.80	後期初頭～前半	宇垣ほか1994
甫崎天神山土壙墓群	岡山市	土壙墓 -21	木棺墓	0.76	2.20	後期初頭～前半	宇垣ほか1994
甫崎天神山土壙墓群	岡山市	土器棺墓 -A	土器棺墓	0.68	0.83	後期前葉	宇垣ほか1994
甫崎天神山土壙墓群	岡山市	土器棺墓 -B	土器棺墓	0.67	0.78	後期前葉	宇垣ほか1994
甫崎天神山土壙墓群	岡山市	土器棺墓 -C	土器棺墓	0.80	1.01	後期前葉	宇垣ほか1994
甫崎天神山土壙墓群	岡山市	土器棺墓 -D	土器棺墓	0.58	0.73	後期前葉	宇垣ほか1994
甫崎天神山土壙墓群	岡山市	土器棺墓 -E	土器棺墓	0.49	0.61	後期前葉	宇垣ほか1994
甫崎天神山土壙墓群	岡山市	土器棺墓 -F	土器棺墓	0.43	0.51	後期前葉	宇垣ほか1994
甫崎天神山土壙墓群	岡山市	土器棺墓 -H	土器棺墓	0.64	0.77	後期前葉	宇垣ほか1994
甫崎天神山土壙墓群	岡山市	土器棺墓 -J	土器棺墓	0.66	0.85	後期前葉	宇垣ほか1994
甫崎天神山土壙墓群	岡山市	土器棺墓 -K	土器棺墓	0.96	1.24	後期前葉	宇垣ほか1994
甫崎天神山土壙墓群	岡山市	土器棺墓 -L	土器棺墓	0.72	0.84	後期前葉	宇垣ほか1994
甫崎天神山土壙墓群	岡山市	土器棺墓 -O	土器棺墓	0.63	0.73	後期前葉	宇垣ほか1994
甫崎天神山土壙墓群	岡山市	土壙墓 -2	木棺墓	0.82	1.76	後期初頭～前半	宇垣ほか1994
甫崎天神山土壙墓群	岡山市	土壙墓 -3	木棺墓	0.84	1.97	後期初頭～前半	宇垣ほか1994
甫崎天神山土壙墓群	岡山市	土壙墓 -5	土壙墓	0.72	1.64	後期初頭～前半	宇垣ほか1994
甫崎天神山土壙墓群	岡山市	土壙墓 -6	土壙墓	0.90	1.88	後期初頭～前半	宇垣ほか1994
甫崎天神山土壙墓群	岡山市	土壙墓 -7	木棺墓	1.01	1.94	後期初頭～前半	宇垣ほか1994
甫崎天神山土壙墓群	岡山市	土壙墓 -8	土壙墓	0.65	1.34	後期初頭～前半	宇垣ほか1994
甫崎天神山土壙墓群	岡山市	土壙墓 -9	土壙墓	0.76	2.59	後期初頭～前半	宇垣ほか1994
甫崎天神山土壙墓群	岡山市	土壙墓 -11	土壙墓	0.80	2.14	後期初頭～前半	宇垣ほか1994
甫崎天神山土壙墓群	岡山市	土壙墓 -12	土壙墓	0.64	0.96	後期初頭～前半	宇垣ほか1994
甫崎天神山土壙墓群	岡山市	土壙墓 -13	木棺墓	0.50	1.10	後期初頭～前半	宇垣ほか1994
甫崎天神山土壙墓群	岡山市	土壙墓 -15	土壙墓	0.42	1.05	後期初頭～前半	宇垣ほか1994
甫崎天神山土壙墓群	岡山市	土壙墓 -16	木棺墓	0.85	2.23	後期初頭～前半	宇垣ほか1994
甫崎天神山土壙墓群	岡山市	土壙墓 -17	木棺墓	1.01	2.41	後期初頭～前半	宇垣ほか1994
甫崎天神山土壙墓群	岡山市	土壙墓 -18	土壙墓	1.04	2.40	後期初頭～前半	宇垣ほか1994
甫崎天神山土壙墓群	岡山市	土壙墓 -20	木棺墓	0.88	1.84	後期初頭～前半	宇垣ほか1994
甫崎天神山土壙墓群	岡山市	土壙墓 -22	木棺墓	1.09	2.86	後期初頭～前半	宇垣ほか1994
甫崎天神山土壙墓群	岡山市	土壙墓 -23	木棺墓	1.02	2.25	後期初頭～前半	宇垣ほか1994
甫崎天神山土壙墓群	岡山市	土壙墓 -24	木棺墓	1.17	2.30	後期初頭～前半	宇垣ほか1994
甫崎天神山土壙墓群	岡山市	土壙墓 -25	木棺墓	0.68	1.30	後期初頭～前半	宇垣ほか1994
甫崎天神山土壙墓群	岡山市	土壙墓 -26	木棺墓	0.80	2.11	後期初頭～前半	宇垣ほか1994
甫崎天神山土壙墓群	岡山市	土壙墓 -28	木棺墓	1.13	2.30	後期初頭～前半	宇垣ほか1994
甫崎天神山土壙墓群	岡山市	土壙墓 -30	木棺墓	0.85	1.86	後期初頭～前半	宇垣ほか1994
甫崎天神山土壙墓群	岡山市	土壙墓 -31	土壙墓	0.52	1.30	後期初頭～前半	宇垣ほか1994
甫崎天神山土壙墓群	岡山市	土壙墓 -32	土壙墓	0.25	0.55	後期初頭～前半	宇垣ほか1994
甫崎天神山土壙墓群	岡山市	土壙墓 -33	木棺墓	0.78	2.23	後期初頭～前半	宇垣ほか1994
甫崎天神山土壙墓群	岡山市	土壙墓 -34	土壙墓	1.18	2.40	後期初頭～前半	宇垣ほか1994
甫崎天神山土壙墓群	岡山市	土壙墓 -36	土壙墓	1.26	1.90	後期初頭～前半	宇垣ほか1994
甫崎天神山土壙墓群	岡山市	土壙墓 -37	土壙墓	0.87	1.48	後期初頭～前半	宇垣ほか1994
甫崎天神山土壙墓群	岡山市	土壙墓 -38	土壙墓	0.55	1.68	後期初頭～前半	宇垣ほか1994
甫崎天神山土壙墓群	岡山市	土壙墓 -39	木棺墓	1.06	2.47	後期初頭～前半	宇垣ほか1994
甫崎天神山土壙墓群	岡山市	土壙墓 -40	木棺墓	1.06	1.41	後期初頭～前半	宇垣ほか1994

甫崎天神山土壙墓群	岡山市	土壙墓 -41	木棺墓	0.76	1.90	後期初頭～前半	宇垣ほか1994
甫崎天神山土壙墓群	岡山市	土壙墓 -42	木棺墓	0.76	2.42	後期初頭～前半	宇垣ほか1994
甫崎天神山土壙墓群	岡山市	土壙墓 -19	木棺墓	－	0.74	後期初頭～前半	宇垣ほか1994
甫崎天神山土壙墓群	岡山市	土壙墓 -10	木棺墓	－	－	後期初頭～前半	宇垣ほか1994
百間川原尾島遺跡	岡山市	壺棺Ⅰ	壺棺墓	0.75	0.90	後期中葉頃	江見編1980
百間川原尾島遺跡	岡山市	壺棺Ⅱ	壺棺墓	0.74	0.76	後期中葉頃	江見編1980
百間川原尾島遺跡	岡山市	壺棺Ⅲ	壺棺墓	0.53	0.57	後期中葉頃	江見編1980
百間川原尾島遺跡	岡山市	土器棺墓２	土器棺墓	0.63	0.63	後期中葉頃	宇垣編1994
百間川原尾島遺跡	岡山市	土器棺墓８	土器棺墓	0.80	0.80	後期中葉頃	宇垣編1994
百間川原尾島遺跡	岡山市	土器棺墓９	土器棺墓	0.45	0.55	後期中葉頃	宇垣編1994
百間川原尾島遺跡	岡山市	土器棺墓１	土器棺墓	－	－	後期中葉頃	宇垣編1994
百間川原尾島遺跡	岡山市	土器棺墓３	土器棺墓	－	－	後期中葉頃	宇垣編1994
百間川原尾島遺跡	岡山市	土器棺墓４	土器棺墓	－	－	後期中葉頃	宇垣編1994
百間川原尾島遺跡	岡山市	土器棺墓５	土器棺墓	－	－	後期中葉頃	宇垣編1994
百間川原尾島遺跡	岡山市	土器棺墓６	土器棺墓	－	－	後期中葉頃	宇垣編1994
百間川原尾島遺跡	岡山市	土器棺墓７	土器棺墓	－	－	後期中葉頃	宇垣編1994
百間川原尾島遺跡	岡山市	土器棺墓１	土器棺墓	－	－	後期中葉頃	小嶋編2004
百間川原尾島遺跡	岡山市	土器棺墓２	土器棺墓	－	－	後期中葉頃	小嶋編2004
百間川原尾島遺跡	岡山市	土器棺墓３	土器棺墓	－	－	後期中葉頃	小嶋編2004
百間川兼基遺跡	岡山市	土器棺１	土器棺墓	0.80	0.95	後期中葉頃	平井編1996
三手遺跡	岡山市	Ⅲ区土壙５	土壙墓	0.57	1.30	後期前葉	出宮編1981
栖原古墳群	岡山市	土器棺 -1	土器棺墓	－	0.60	後期前葉	内藤編1998
幡多廃寺	岡山市	土器棺墓１	土器棺墓	0.45	0.63	中期後葉	出宮編1975
南方遺跡	岡山市		土壙墓	－	－	前期～中期後葉頃	出宮編1971
加茂政所遺跡２	岡山市	墓１	土壙墓	0.50	－	中期中葉	岡本編1999
加茂政所遺跡１	岡山市	土壙墓１	土壙墓	0.54	1.87	中期中葉～後葉	平井・弘田・柴田編1999
加茂政所遺跡１	岡山市	土壙墓２	土壙墓	0.55	1.22	中期中葉～後葉	平井・弘田・柴田編1999
加茂政所遺跡１	岡山市	土壙墓３	土壙墓	0.33	1.10+	中期中葉～後葉	平井・弘田・柴田編1999
加茂政所遺跡１	岡山市	土壙墓４	土壙墓	0.40	1.37	中期中葉～後葉	平井・弘田・柴田編1999
加茂政所遺跡	岡山市	土器棺墓２	土器棺墓	0.70	0.80	後期前半	平井・弘田・柴田編1999
加茂政所遺跡	岡山市	土器棺墓３	土器棺墓	0.80	1.00	後期前半	平井・弘田・柴田編1999
加茂政所遺跡	岡山市	土器棺墓５	土器棺墓	0.90	0.90	後期前半	平井・弘田・柴田編1999
加茂政所遺跡	岡山市	土器棺墓４	土器棺墓	0.46	0.50	後期前葉	平井・弘田・柴田編1999
加茂政所遺跡	岡山市	土器棺墓６	土器棺墓	0.55	0.55	後期中葉	平井・弘田・柴田編1999
加茂政所遺跡	岡山市	土器棺墓７	土器棺墓	0.60	0.78	後期中葉	平井・弘田・柴田編1999
加茂政所遺跡	岡山市	土器棺墓８	土器棺墓	0.60	0.68	後期中葉	平井・弘田・柴田編1999
加茂政所遺跡	岡山市	土器棺墓11	土器棺墓	0.85	1.07	後期中葉	平井・弘田・柴田編1999
足守川加茂Ａ遺跡	岡山市	土壙２	土壙墓	1.20	2.10	後期前半	島崎・光永ほか編1995
足守川加茂Ｂ遺跡	岡山市	土器棺１	土壙墓	0.63	0.79	後期前半	島崎・光永ほか編1995
足守川加茂Ｂ遺跡	岡山市	土壙墓１	土壙墓	0.50	0.90	後期前半	島崎・光永ほか編1995
足守川加茂Ｂ遺跡	岡山市	土壙墓２	土壙墓	0.89	1.18	後期前半	島崎・光永ほか編1995
津寺遺跡中屋区	岡山市	土器棺墓９	土器棺墓	0.43	0.65	中期後葉	亀山・大橋編1997
津寺遺跡中屋区	岡山市	土器棺墓10	土器棺墓	0.57	0.68	中期後葉	亀山・大橋編1997
津寺遺跡西川区	岡山市	土壙墓 -1	土壙墓	1.35	3.50	後期前葉	大橋・澤山・中野編1995
津寺遺跡中屋区	岡山市	土壙墓 -2	土壙墓	0.68	1.73	後期前葉	亀山編1996
津寺遺跡中屋区	岡山市	土壙墓 -3	土壙墓	1.23	1.94	中期後葉	亀山編1996
津寺遺跡	岡山市	土器棺墓15	土器棺墓	0.53	0.60	後期前葉	高畑・中野編1998
津寺遺跡	岡山市	土器棺墓11	土器棺墓	－	－	後期前葉	高畑・中野編1998
津寺遺跡	岡山市	土器棺墓12	土器棺墓	－	－	後期前葉	高畑・中野編1998
津寺遺跡	岡山市	土器棺墓13	土器棺墓	－	－	後期前葉	高畑・中野編1998
津寺遺跡	岡山市	土器棺墓14	土器棺墓	－	－	後期前葉	高畑・中野編1998
津寺遺跡西川区	岡山市	土器棺墓 -1	土器棺墓	0.57	－	後期中葉	大橋・澤山・中野編1995
津寺遺跡中屋区	岡山市	土器棺墓 -1	土器棺墓	0.63	0.74	後期前半	大橋・澤山・中野編1995
津寺遺跡中屋区	岡山市	土器棺墓 -2	土器棺墓	0.46	0.63	後期前半	大橋・澤山・中野編1995
津寺遺跡中屋区	岡山市	土器棺墓 -3	土器棺墓	0.41	0.49	後期前半	大橋・澤山・中野編1995

津寺遺跡中屋区	岡山市	土器棺墓 -4	土器棺墓	0.60	0.69	後期前半	大橋・澤山・中野編1995
津寺遺跡中屋区	岡山市	土器棺墓 -5	土器棺墓	－	－	後期前半	大橋・澤山・中野編1995
鹿田遺跡	岡山市	土器棺 -1	土器棺墓	0.34	0.34	後期中葉	吉留・山本編1988
鹿田遺跡	岡山市	土器棺 -4	土器棺墓	0.65	0.80	後期中葉	吉留・山本編1988
鹿田遺跡	岡山市	SK231	木棺墓	0.75	3.05	後期中葉	吉留・山本編1988
みそのお遺跡	岡山市	第１主体部	６号墳墓木棺墓	1.05	2.35	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第11主体部	６号墳墓	0.65	1.64	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第６主体部	６号墳墓木棺墓	0.65	0.87	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第７主体部	６号墳墓木棺墓	0.63	1.15	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第８主体部	６号墳墓木棺墓	0.60	0.85	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第９主体部	６号墳墓	0.69	1.14	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第10主体部	６号墳墓木棺墓	0.80	1.75	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第12主体部	６号墳墓	0.50	0.84	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第２主体部	６号墳墓 拡張部木棺墓	0.92	2.52	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第３主体部	６号墳墓 拡張部木棺墓	0.95	2.25	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第４主体部	６号墳墓 拡張部木棺墓	0.95	2.43	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第１主体部	７号墳墓木棺墓	0.75	2.07	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第２主体部	７号墳墓木棺墓	0.84	1.95	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第３主体部	７号墳墓木棺墓	0.82	1.83	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第４主体部	７号墳墓木棺墓	0.89	1.85	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第５主体部	７号墳墓木棺墓	1.03	1.70	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第６主体部	７号墳墓土壙墓	0.40	0.86	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第２主体部	８号墳墓木棺墓	0.66	2.30	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第３主体部	８号墳墓木棺墓	0.79	2.40	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第４主体部	８号墳墓木棺墓	0.79	2.20	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第１主体部	８号墳墓木棺墓	1.01	2.27	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第３主体部	９号墳墓木棺墓	1.00	1.83	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第４主体部	９号墳墓木棺墓	0.76	1.19	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第５主体部	９号墳墓土壙墓	0.91	0.96	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第６主体部	９号墳墓土壙墓	0.55	1.83	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第７主体部	９号墳墓木棺墓	1.26	2.27	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第８主体部	９号墳墓木棺墓	0.79	2.23	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第９主体部	９号墳墓土壙墓	0.81	1.70	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第10主体部	９号墳墓木棺墓	0.80	1.59	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第１主体部	10号墳墓木棺墓	1.16	2.55	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第２主体部	10号墳墓木棺墓	1.06	2.45	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第３主体部	10号墳墓木棺墓	0.85	2.45	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第４主体部	10号墳墓外木棺墓	0.60	0.90	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第５主体部	10号墳墓外土壙墓	0.67	0.95	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第６主体部	10号墳墓木棺墓	0.61	1.07	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第７主体部	10号墳墓土壙墓	0.51	0.99	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第８主体部	10号墳墓土壙墓	0.52	1.22	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第９主体部	10号墳墓土壙墓	0.58	0.87	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第10主体部	10号墳墓土壙墓	0.51	1.05	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第11主体部	10号墳墓木棺墓	0.55	1.21	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第12主体部	10号墳墓木棺墓	0.55	1.15	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第14主体部	10号墳墓土壙墓	0.62	1.42	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第１主体部	11号墳墓木棺墓	1.04	2.37	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第２主体部	11号墳墓土壙墓	1.19	2.48	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第４主体部	11号墳墓土壙墓	0.82	1.68	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第５主体部	11号墳墓土壙墓	0.61	1.78	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第６主体部	11号墳墓木棺墓	1.00	2.58	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第８主体部	11号墳墓木棺墓	0.92	2.34	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第９主体部	11号墳墓木棺墓	0.92	2.53	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第10主体部	11号墳墓木棺墓	0.66	2.01	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第11主体部	11号墳墓土壙墓	0.47	0.86	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第12主体部	11号墳墓木棺墓	0.77	2.02	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第13主体部	11号墳墓土壙墓	0.72	2.04	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第14主体部	11号墳墓木棺墓	1.02	2.22	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第４主体部	12号墳墓土壙墓	1.15	2.40	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第８主体部	12号墳墓土壙墓	0.67	2.50	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第１主体部	12号墳墓木棺墓	1.21	2.56	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第２主体部	12号墳墓木棺墓	1.35	3.00	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第５主体部	12号墳墓木棺墓	1.11	2.57	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第６主体部	12号墳墓木棺墓	1.09	2.51	後期初頭	椿編1993

みそのお遺跡	岡山市	第７主体部	12号墳墓木棺墓	0.90	2.10	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第12主体部	18号墳墓木棺墓	1.15	2.32	後期前葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第１主体部	18号墳墓木棺墓	0.95	2.58	後期前葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第２主体部	18号墳墓木棺墓	0.95	2.36	後期前葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第３主体部	18号墳墓木棺墓	0.58	1.50	後期前葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第４主体部	18号墳墓木棺墓	0.87	2.55	後期前葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第５主体部	18号墳墓木棺墓	0.50	1.14	後期前葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第６主体部	18号墳墓木棺墓	1.15	2.46	後期前葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第７主体部	18号墳墓土壙墓	0.77	1.48	後期前葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第８主体部	18号墳墓土壙墓	0.95	2.00	後期前葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第９主体部	18号墳墓土壙墓	0.39	0.78	後期前葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第10主体部	18号墳墓木棺墓	0.85	2.22	後期前葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第11主体部	18号墳墓木棺墓	1.02	2.62	後期前葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第13主体部	18号墳墓木棺墓	1.00	2.43	後期前葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第14主体部	18号墳墓木棺墓	1.10	2.65	後期前葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第15主体部	18号墳墓木棺墓	1.08	2.85	後期前葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第16主体部	18号墳墓木棺墓	0.92	1.15	後期前葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第17主体部	18号墳墓木棺墓	1.12	2.65	後期前葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第18主体部	18号墳墓木棺墓	0.93	2.32	後期前葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第19主体部	18号墳墓木棺墓	0.97	2.47	後期前葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第20主体部	18号墳墓木棺墓	1.03	1.91	後期前葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第21主体部	18号墳墓木棺墓	0.50	1.15	後期前葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第22主体部	18号墳墓木棺墓	0.83	2.03	後期前葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第23主体部	18号墳墓土壙墓	0.57	1.31	後期前葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第24主体部	18号墳墓木棺墓	0.95	2.22	後期前葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第25主体部	18号墳墓木棺墓	0.86	2.40	後期前葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第26主体部	18号墳墓木棺墓	1.15	2.39	後期前葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第27主体部	18号墳墓木棺墓	0.47	0.86	後期前葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第１主体部	16号墳墓木棺墓	0.73	2.86	後期中葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第５主体部	16号墳墓 石列外木棺墓	0.59	1.80	後期中葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第６主体部	16号墳墓土器棺墓	0.55	0.85	後期中葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第７主体部	16号墳墓土器棺墓	0.57	0.70	後期中葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第８主体部	16号墳墓土器棺墓	0.40	0.40	後期中葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第９主体部	16号墳墓土器棺墓	0.70	0.70	後期中葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第10主体部	16号墳墓土器棺墓	0.65	0.75	後期中葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第11主体部	16号墳墓土器棺墓	0.69	0.82	後期中葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第１主体部	17号墳墓木棺墓	1.17	2.35	後期中葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第２主体部	17号墳墓木棺墓	1.29	2.65	後期中葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第３主体部	17号墳墓木棺墓	0.96	2.67	後期中葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第４主体部	17号墳墓木棺墓	1.03	2.37	後期中葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第５主体部	17号墳墓木棺墓	0.79	2.27	後期中葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第６主体部	17号墳墓木棺墓	0.53	1.15	後期中葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第７主体部	17号墳墓木棺墓	0.95	1.57	後期中葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第８主体部	17号墳墓木棺墓	1.07	2.31	後期中葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第９主体部	17号墳墓木棺墓	0.51	1.31	後期中葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第10主体部	17号墳墓木棺墓	0.46	1.17	後期中葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第11主体部	17号墳墓木棺墓	1.10	2.57	後期中葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第12主体部	17号墳墓木棺墓	1.15	2.36	後期中葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第13主体部	17号墳墓木棺墓	0.70	2.18	後期中葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第14主体部	17号墳墓木棺墓	0.51	1.92	後期中葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第１主体部	17号墳墓 周辺木棺墓	0.99	2.34	後期中葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第２主体部	17号墳墓 周辺木棺墓	0.58	1.29	後期中葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第３主体部	17号墳墓 周辺木棺墓	0.60	1.07	後期中葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第４主体部	17号墳墓 周辺木棺墓	1.09	2.57	後期中葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第５主体部	17号墳墓 周辺土器棺墓	0.32	0.55	後期中葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第３主体部	16号墳墓木棺墓	0.83	1.45	後期中葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第１主体部	９号墳墓木棺墓	1.21	－	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第２主体部	９号墳墓木棺墓	0.85	－	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第13主体部	10号墳墓木棺墓	－	－	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第３主体部	11号墳墓土壙墓	－	0.87	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第７主体部	11号墳墓木棺墓	－	1.06	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第３主体部	12号墳墓土壙墓	0.79	－	後期初頭	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第２主体部	16号墳墓木棺墓	0.65	－	後期中葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第４主体部	16号墳墓木棺墓	0.51	－	後期中葉	椿編1993

みそのお遺跡	岡山市	第12主体部	16号墳墓土器棺墓	－	－	後期中葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第13主体部	16号墳墓土器棺墓	－	－	後期中葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第６主体部	17号墳墓 周辺土器棺墓	－	－	後期中葉	椿編1993
みそのお遺跡	岡山市	第７主体部	17号墳墓 周辺土器棺墓	－	－	後期中葉	椿編1993
鍛冶屋谷遺跡	岡山市	SK10	土器棺墓	1.10	1.70	後期前葉	長谷川編1998
鍛冶屋谷遺跡	岡山市	SK37	土壙墓	0.90	－	後期前葉	長谷川編1998
林崎遺跡	総社市	SK02	土器棺墓	0.80	0.95	後期初頭	武田編1999
南溝手遺跡	総社市	土壙墓１	木棺墓	0.77	2.34	中期中葉～後葉	平井編1996
窪木遺跡１	総社市	土壙墓１	土壙墓	0.80	2.15	中期～後期	岡田編1997
窪木遺跡１	総社市	土壙墓２	土壙墓	0.50	1.54	後期前葉	岡田編1997
窪木遺跡１	総社市	土壙墓３	土壙墓	0.63	1.06	後期前葉	岡田編1997
持坂20号古墳	総社市	土壙墓１	木棺墓	0.75	2.05	中期後葉	松本編2005
持坂20号古墳	総社市	土壙墓２	木棺墓	0.47	2.04	中期後葉	松本編2005
持坂20号古墳	総社市	土壙墓３	木棺墓	0.85	2.04	中期後葉	松本編2005
持坂20号古墳	総社市	土壙墓４	木棺墓	0.51	1.65	中期後葉	松本編2005
持坂20号古墳	総社市	土壙墓５	木棺墓	0.82	2.16	中期後葉	松本編2005
持坂20号古墳	総社市	土壙墓６	木棺墓	0.70	1.15+	中期後葉	松本編2005
黒宮大塚墳丘墓	倉敷市	第１土壙	土壙墓	0.65	2.00	後期前葉	間壁・間壁・藤田1977
黒宮大塚墳丘墓	倉敷市	第２土壙	土壙墓	1.00	2.80	後期前葉	間壁・間壁・藤田1977
黒宮大塚墳丘墓	倉敷市	第３土壙	土壙墓	0.75	2.30	後期前葉	間壁・間壁・藤田1977
黒宮大塚墳丘墓	倉敷市	第４土壙	土壙墓	0.75	－	後期前葉	間壁・間壁・藤田1977
上東遺跡	倉敷市	土器棺墓１	土器棺墓	0.70	0.80	後期前葉	小林編2001
上東遺跡	倉敷市	土器棺墓２	土器棺墓	0.74	0.74	後期中葉	小林編2001
上東遺跡	倉敷市	土壙26	土壙墓	－	0.45	後期前葉	小林編2001

付表３　中期後半から後期前半の墓壙一覧（島根県）

遺跡名	所在地	遺構名	遺構形態	墓壙規模（m）		時　期	文　献
				幅	長さ		
友田遺跡Ｂ区	松江市	SK1-01	１号墳丘墓	0.78	2.16	中期後半	岡崎1983
友田遺跡Ｂ区	松江市	SK1-02	１号墳丘墓	0.58	2.34	中期後半	岡崎1983
友田遺跡Ｂ区	松江市	SK1-03	１号墳丘墓	0.56	1.74	中期後半	岡崎1983
友田遺跡Ｂ区	松江市	SK1-04	１号墳丘墓	0.60	1.00	中期後半	岡崎1983
友田遺跡Ｂ区	松江市	SK1-05	１号墳丘墓	0.44	1.40	中期後半	岡崎1983
友田遺跡Ｂ区	松江市	SK1-06	１号墳丘墓	0.68	2.16	中期後半	岡崎1983
友田遺跡Ｂ区	松江市	SK1-07	１号墳丘墓	0.70	2.02	中期後半	岡崎1983
友田遺跡Ｂ区	松江市	SK2-01	２号墳丘墓	1.30	2.51	中期後半	岡崎1983
友田遺跡Ｂ区	松江市	SK2-02	２号墳丘墓	1.75	3.30	中期後半	岡崎1983
友田遺跡Ｂ区	松江市	SK2-03	２号墳丘墓	0.48	1.61	中期後半	岡崎1983
友田遺跡Ｂ区	松江市	SK2-04	２号墳丘墓	0.53	1.40	中期後半	岡崎1983
友田遺跡Ｂ区	松江市	SK2-05	２号墳丘墓	0.64	1.83	中期後半	岡崎1983
友田遺跡Ｂ区	松江市	SK2-06	２号墳丘墓	0.50	1.75	中期後半	岡崎1983
友田遺跡Ｂ区	松江市	SK2-07	２号墳丘墓	0.76	2.25	中期後半	岡崎1983
友田遺跡Ｂ区	松江市	SK2-08	２号墳丘墓	－	－	中期後半	岡崎1983
友田遺跡Ｂ区	松江市	SK3-01	３号墳丘墓	0.97	1.80	中期後半	岡崎1983
友田遺跡Ｂ区	松江市		４号墳丘墓	－	－	不明	岡崎1983
友田遺跡Ｂ区	松江市	SK5-01	５号墳丘墓	0.54	1.90	中期後半	岡崎1983
友田遺跡Ｂ区	松江市	SK6-01	６号墳丘墓	0.80	2.10	中期後半	岡崎1983
友田遺跡Ｂ区	松江市	SK6-02	６号墳丘墓	0.68	1.80	中期後半	岡崎1983
友田遺跡Ｂ区	松江市	SK6-03	６号墳丘墓	0.78	2.00	中期後半	岡崎1983
友田遺跡Ｂ区	松江市	SK6-04	６号墳丘墓	0.56	1.46	中期後半	岡崎1983
友田遺跡Ｂ区	松江市	SK6-05	６号墳丘墓	0.48	1.30	中期後半	岡崎1983
友田遺跡Ｂ区	松江市	SK6-06	６号墳丘墓	0.92	2.50	中期後半	岡崎1983
友田遺跡Ｂ区	松江市	SK6-07	６号墳丘墓	0.82	2.34	中期後半	岡崎1983
友田遺跡Ｂ区	松江市	SK27		2.80	3.85	中期後半	岡崎1983
友田遺跡Ｂ区	松江市	SK28		1.15	2.00	中期後半	岡崎1983
友田遺跡Ｂ区	松江市	SK31		0.68	0.75	中期後半	岡崎1983
原田遺跡	仁多郡奥出雲町	７区 SK02	土壙墓	0.70	1.12	中期後半	熱田ほか編2007
原田遺跡	仁多郡奥出雲町	７区 SK03	木棺墓	0.76	1.08	中期後半	熱田ほか編2007
原田遺跡	仁多郡奥出雲町	７区 SK04	木棺墓	0.80	1.20	中期後半	熱田ほか編2007
原田遺跡	仁多郡奥出雲町	７区 SK05	木棺墓	0.74	1.36	中期後半	熱田ほか編2007
原田遺跡	仁多郡奥出雲町	７区 SK06	木棺墓	0.62	1.08	中期後半	熱田ほか編2007
原田遺跡	仁多郡奥出雲町	７区 SK07	木棺墓	0.70	1.28	中期後半	熱田ほか編2007
原田遺跡	仁多郡奥出雲町	７区 SK21	木棺墓	0.74	1.24	中期後半	熱田ほか編2007
原田遺跡	仁多郡奥出雲町	７区 SK22	木棺墓	0.77	0.96	中期後半	熱田ほか編2007
原田遺跡	仁多郡奥出雲町	７区 SK23	木棺墓	0.69	0.92	中期後半	熱田ほか編2007
原田遺跡	仁多郡奥出雲町	７区 SK24	木棺墓	0.60	0.82	中期後半	熱田ほか編2007

原田遺跡	仁多郡奥出雲町	３区 SK20	土壙墓	0.80	1.02	中期後半	熱田ほか編2007
青木遺跡	出雲市		４号墓（四隅突出墓か）	－	－	中期後葉	今岡・平石・松尾編2006
青木遺跡	出雲市		６号墓	－	－	中期後葉～後期中葉	今岡・平石・松尾編2006
青木遺跡	出雲市		10号墓	－	－	中期後葉～後期初頭	今岡・平石・松尾編2006
中野美保遺跡	出雲市		２号墓（方形貼石墓）	－	－	中期中葉	仁木・岩橋・重松2007
順庵原１号墓	邑智郡邑南町	第１主体部	石棺墓（四隅突出墓）	1.65	2.40	後期前葉～中葉	仁木・岩橋・重松2007
順庵原１号墓	邑智郡邑南町	第２主体部	石棺墓（四隅突出墓）	1.54	2.58	後期前葉～中葉	仁木・岩橋・重松2007
順庵原１号墓	邑智郡邑南町	第３主体部	木棺墓（四隅突出墓）	1.00	2.30	後期前葉～中葉	仁木・岩橋・重松2007
波来浜遺跡	江津市	第１墓壙	１号墓Ｂ区列石墓	0.55	2.00	後期前半	門脇編1973
波来浜遺跡	江津市	第２墓壙	１号墓Ｂ区列石墓	0.71	1.90	後期前半	門脇編1973
波来浜遺跡	江津市	第３墓壙	１号墓Ｂ区列石墓	0.61	1.45	後期前半	門脇編1973
波来浜遺跡	江津市	第４墓壙	１号墓Ｂ区列石墓	0.55	1.71	後期前半	門脇編1973
波来浜遺跡	江津市	第５墓壙	１号墓Ｂ区列石墓	0.78	1.46	後期前半	門脇編1973
波来浜遺跡	江津市	第６墓壙	１号墓Ｂ区列石墓	0.60	1.76	後期前半	門脇編1973
波来浜遺跡	江津市	第７墓壙	１号墓Ｂ区列石墓	0.55	1.94	後期前半	門脇編1973
波来浜遺跡	江津市	第８墓壙	１号墓Ｂ区列石墓	0.76	2.05	後期前半	門脇編1973
波来浜遺跡	江津市	第９墓壙	１号墓Ｂ区列石墓	0.48	1.43	後期前半	門脇編1973
波来浜遺跡	江津市	第１主体	２号墓Ｂ区列石墓	0.65	1.40	後期前半	門脇編1973
波来浜遺跡	江津市	第３主体	２号墓Ｂ区列石墓	0.91	2.63	後期前半	門脇編1973
波来浜遺跡	江津市	第４主体	２号墓Ｂ区列石墓	1.02	2.27	後期前半	門脇編1973
波来浜遺跡	江津市	第５主体	２号墓Ｂ区列石墓	0.48	1.81	後期前半	門脇編1973
波来浜遺跡	江津市	第２主体	２号墓Ｂ区列石墓	－	－	後期前半	門脇編1973
波来浜遺跡	江津市	第１主体部	Ａ区２号墓	0.37	1.60	中期中葉	門脇編1973
波来浜遺跡	江津市	第２主体部	Ａ区２号墓	0.65	1.80	中期中葉	門脇編1973
波来浜遺跡	江津市	第３主体部	Ａ区２号墓	0.70	2.00	中期中葉	門脇編1973
専光寺脇遺跡	益田市	主体部	土壙墓か（１号貼石墓）	0.65	1.50+	中期中葉	東山編2008
専光寺脇遺跡	益田市	第１主体部	２号方形貼石墓	1.38	2.46	中期後半	東山編2008
専光寺脇遺跡	益田市	第２主体部	２号方形貼石墓	0.96	2.19	中期後半	東山編2008
専光寺脇遺跡	益田市	第３主体部	２号方形貼石墓	1.07	2.31	中期後半	東山編2008
専光寺脇遺跡	益田市	第４主体部	木棺墓（２号貼石墓）	1.48	2.57	中期後半	東山編2008
専光寺脇遺跡	益田市	SX04	２号貼石墓（区画溝）	1.36	2.76	中期後半以前か	東山編2008
専光寺脇遺跡	益田市	SK11	土壙墓	0.72	1.30	中期後半	東山編2008
専光寺脇遺跡	益田市	SK12	木棺墓	0.54	1.29	中期後半	東山編2008
専光寺脇遺跡	益田市	SK13	木棺墓	0.86	1.96	中期後半	東山編2008
専光寺脇遺跡	益田市	SK15	土壙墓	0.68	1.63	中期後半	東山編2008
専光寺脇遺跡	益田市	P9	土器棺墓	－	－	中期後半	東山編2008
前立山遺跡	鹿足郡吉賀町	SX03	土壙墓	2.00	2.70	中期中葉～後葉頃	東山編2008
前立山遺跡	鹿足郡吉賀町	SX04	土壙墓	0.40	0.50	中期中葉～後葉頃	東山編2008
前立山遺跡	鹿足郡吉賀町	SX05	土壙墓	0.80	1.50	中期中葉～後葉頃	東山編2008
前立山遺跡	鹿足郡吉賀町	SX06	木棺墓	2.50	3.00	中期中葉～後葉頃	東山編2008
前立山遺跡	鹿足郡吉賀町	SX07	土壙墓	0.90	1.20	中期中葉～後葉頃	東山編2008
前立山遺跡	鹿足郡吉賀町	SX08	土器棺墓か	0.90	0.90	中期中葉～後葉頃	東山編2008

付表４　中期後半から後期前半の墓壙一覧（鳥取県）

遺跡名	所在地	遺構名	遺構形態	墓壙規模（m）		時　期	文　献
				幅	長さ		
百塚遺跡群４区	米子市	１号埋葬施設	木棺墓	0.75	1.40	中期後葉	岩田ほか編1995
百塚第７遺跡	米子市	13号土坑	木棺墓	1.50	2.20	中期後葉	岩田・山根・笹尾編1999
百塚第７遺跡	米子市	28号土坑	土壙墓	0.70	1.20	中期中葉	岩田・山根・笹尾編1999
青木遺跡Ｄ地区	米子市	DSX01	土壙墓（区画溝）	0.80	4.60	中期後葉	船越ほか編1977
青木遺跡Ｄ地区	米子市	DSX01	土壙墓（区画溝）	0.30	2.00	中期後葉	船越ほか編1977
青木遺跡Ｄ地区	米子市	DSX02	土壙墓	0.60	1.70	中期後葉	船越ほか編1977
青木遺跡Ｄ地区	米子市	DSX03	土壙墓	0.40	1.15	中期後葉か	船越ほか編1977
青木遺跡Ｄ地区	米子市	DSX05	土壙墓	0.40	1.65	中期後葉か	船越ほか編1977
青木遺跡Ｄ地区	米子市	DSX06	土壙墓	0.50	1.65	中期後葉か	船越ほか編1977
青木遺跡Ｄ地区	米子市	DSX07	土壙墓	0.45	1.55	不明	船越ほか編1977
青木遺跡Ｄ地区	米子市	DSX09	土壙墓	0.65	2.25	不明	船越ほか編1977
青木遺跡Ｄ地区	米子市	DSX10	土壙墓	0.80	0.50	中期後葉以前	船越ほか編1977
東宗像遺跡	米子市	第１号石蓋土壙墓	石蓋土壙墓	0.63	2.17	中期後葉	園・中原・山枡編1985
東宗像遺跡	米子市	第１号土器棺墓	土器棺墓	0.39	0.53	中期後葉	園・中原・山枡編1985
妻木晩田遺跡洞ノ原地区	西伯郡大山町他	DH2号墓	方形貼石墓	－	－	中期後葉～後期初頭	岩田・岩田・植野編2000
妻木晩田遺跡洞ノ原地区	西伯郡大山町他	DH6号墓	方形貼石墓	－	－	中期後葉	岩田・岩田・植野編2000

妻木晩田遺跡洞ノ原地区	西伯郡大山町他	DH12号墓	方形貼石墓	－	－	中期後葉～後期初頭	岩田・岩田・植野編2000
妻木晩田遺跡洞ノ原地区	西伯郡大山町他	DH15号墓	方形貼石墓	－	－	不明	岩田・岩田・植野編2000
妻木晩田遺跡洞ノ原地区	西伯郡大山町他	DH17号墓	方形貼石墓	0.40	0.85	中期後葉～後期初頭か	岩田・岩田・植野編2000
押平弘法堂遺跡	西伯郡大山町	SK28	土壙墓（木棺墓）	0.60	1.24	中期後葉	八峠編2002
押平弘法堂遺跡	西伯郡大山町	SK29	土壙墓	0.58	1.08	中期後葉	八峠編2002
押平弘法堂遺跡	西伯郡大山町	SK30	土壙墓（木棺墓）	0.90	2.18	中期後葉	八峠編2002
押平弘法堂遺跡	西伯郡大山町	SK31	土壙墓（木棺墓）	0.86	2.32	中期後葉	八峠編2002
押平弘法堂遺跡	西伯郡大山町	SK32	土壙墓	1.10	1.78	中期後葉	八峠編2002
押平弘法堂遺跡	西伯郡大山町	SK33	土壙墓	0.74	1.84	中期後葉	八峠編2002
押平弘法堂遺跡	西伯郡大山町	SK34	土壙墓（木棺墓）	0.64	2.34	中期後葉	八峠編2002
押平弘法堂遺跡	西伯郡大山町	SK35	土壙墓（木棺墓）	0.86	2.38	中期後葉	八峠編2002
押平弘法堂遺跡	西伯郡大山町	SK36	土壙墓（木棺墓）	1.00	2.04	中期後葉	八峠編2002
日下古墳群	西伯郡大山町	SX-14	木棺墓	0.45	1.05	中期後葉	吾郷・小原・藤原編1992
日下古墳群	西伯郡大山町	SX-15	木棺墓	0.60	1.10	中期後葉	吾郷・小原・藤原編1992
日下古墳群	西伯郡大山町	SX-16	木棺墓	0.80	2.90	中期後葉	吾郷・小原・藤原編1992
日下古墳群	西伯郡大山町	SX-17	木棺墓	1.20	2.35	中期後葉	吾郷・小原・藤原編1992
日下古墳群	西伯郡大山町	SX-18	木棺墓	0.70	2.70	中期後葉	吾郷・小原・藤原編1992
日下古墳群	西伯郡大山町	SX-19	木棺墓	0.72	1.57	中期後葉	吾郷・小原・藤原編1992
日下古墳群	西伯郡大山町	SX-20	木棺墓	0.45	1.15	中期後葉	吾郷・小原・藤原編1992
日下古墳群	西伯郡大山町	SX-21	木棺墓	0.95	2.40	中期後葉	吾郷・小原・藤原編1992
日下古墳群	西伯郡大山町	SX-22	木棺墓	1.10	2.50	中期後葉	吾郷・小原・藤原編1992
日下古墳群	西伯郡大山町	SX-23	木棺墓	0.40	0.70	中期後葉	吾郷・小原・藤原編1992
日下古墳群	西伯郡大山町	SX-24	木棺墓	0.80	1.95	中期後葉	吾郷・小原・藤原編1992
日下古墳群	西伯郡大山町	SX-25	木棺墓	1.00	2.45	中期後葉	吾郷・小原・藤原編1992
日下古墳群	西伯郡大山町	SX-26	木棺墓	1.40	3.05	中期後葉	吾郷・小原・藤原編1992
日下古墳群	西伯郡大山町	SX-27	木棺墓	1.00	2.45	中期後葉	吾郷・小原・藤原編1992
日下古墳群	西伯郡大山町	SX-28	木棺墓	0.70	1.22	中期後葉	吾郷・小原・藤原編1992
日下古墳群	西伯郡大山町	SX-29	木棺墓	1.30	2.15	中期後葉	吾郷・小原・藤原編1992
日下古墳群	西伯郡大山町	SX-30	木棺墓	1.05	2.49	中期後葉	吾郷・小原・藤原編1992
日下古墳群	西伯郡大山町	SX-31	木棺墓	0.75	1.12	中期後葉	吾郷・小原・藤原編1992
日下古墳群	西伯郡大山町	SX-32	木棺墓	1.20	2.30	中期後葉	吾郷・小原・藤原編1992
日下古墳群	西伯郡大山町	SX-33	木棺墓	0.90	2.40	中期後葉	吾郷・小原・藤原編1992
日下古墳群	西伯郡大山町	SX-34	木棺墓	0.80	1.18	中期後葉	吾郷・小原・藤原編1992
日下古墳群	西伯郡大山町	SX-35	木棺墓	0.70	2.25	中期後葉	吾郷・小原・藤原編1992
日下古墳群	西伯郡大山町	SX-36	木棺墓	0.60	1.55	中期後葉	吾郷・小原・藤原編1992
日下古墳群	西伯郡大山町	SX-37	木棺墓	1.25	2.32	中期後葉	吾郷・小原・藤原編1992
日下古墳群	西伯郡大山町	SX-38	木棺墓	0.85	1.97	中期後葉	吾郷・小原・藤原編1992
日下古墳群	西伯郡大山町	SX-39	木棺墓	1.20	2.35	中期後葉	吾郷・小原・藤原編1992
日下古墳群	西伯郡大山町	SX-40	木棺墓	0.80	1.50	中期後葉	吾郷・小原・藤原編1992
日下古墳群	西伯郡大山町	SX-41	木棺墓	1.15	2.00	中期後葉	吾郷・小原・藤原編1992
日下古墳群	西伯郡大山町	SX-42	木棺墓	0.54	0.90	中期後葉	吾郷・小原・藤原編1992
日下古墳群	西伯郡大山町	SX-43	木棺墓	0.90	2.23	中期後葉	吾郷・小原・藤原編1992

日下古墳群	西伯郡大山町	SX-44	木棺墓	0.95	2.60	中期後葉	吾郷・小原・藤原編1992
越敷山遺跡群Ⅰ第３地区	西伯郡南部町	3A・SK-02	木棺墓	0.98	2.83	中期中葉か	中原編1994
越敷山遺跡群Ⅰ第３地区	西伯郡南部町	3C・SK-02	土壙墓	0.70	1.85	中期後葉	中原編1994
越敷山遺跡群Ⅳ第19地区	西伯郡南部町	19B・SK-03	土壙墓	0.67	1.55	中期後葉	中原編1994
越敷山遺跡群Ⅳ第19地区	西伯郡南部町	19B・SK-08	土壙墓	0.50	0.90	中期後葉	中原編1994
越敷山遺跡群Ⅳ第19地区	西伯郡南部町	19B・SK-09	土壙墓	0.80	2.00	中期後葉	中原編1994
越敷山遺跡群Ⅳ第19地区	西伯郡南部町	19B・SK-10	土壙墓	1.10	1.26	中期後葉	中原編1994
越敷山遺跡群Ⅳ第19地区	西伯郡南部町	19B・SK-11	土壙墓	0.90	1.40	中期後葉	中原編1994
越敷山遺跡群Ⅳ第19地区	西伯郡南部町	19B・SK-14	土壙墓	0.54	0.77	中期後葉	中原編1994
笠見第３遺跡	東伯郡琴浦町	SX1	木棺墓	0.88	1.35	中期後葉	牧本編2004
梅田萱峯遺跡２区	東伯郡琴浦町	SX16	土器蓋墓	0.90	1.04	中期後葉	小口編2007
梅田萱峯遺跡１区	東伯郡琴浦町	SX1	木棺墓	1.20	2.90	中期後葉	高尾・淺田編2006
梅田萱峯遺跡１区	東伯郡琴浦町	SX2	木棺墓	0.94	2.50	中期後葉	高尾・淺田編2006
梅田萱峯遺跡１区	東伯郡琴浦町	SX3	木棺墓	1.10	1.80	中期後葉	高尾・淺田編2006
梅田萱峯遺跡１区	東伯郡琴浦町	SX4	木棺墓	0.50	1.30	中期後葉	高尾・淺田編2006
梅田萱峯遺跡１区	東伯郡琴浦町	SX5	土壙墓	0.80	1.10	中期後葉	高尾・淺田編2006
梅田萱峯遺跡１区	東伯郡琴浦町	SX6	木棺墓か	0.70+	3.90+	中期後葉	高尾・淺田編2006
梅田萱峯遺跡１区	東伯郡琴浦町	SX7	木棺墓	1.40	2.50	中期後葉	高尾・淺田編2006
梅田萱峯遺跡１区	東伯郡琴浦町	SX8	木棺墓か	1.60	3.50	中期後葉	高尾・淺田編2006
梅田萱峯遺跡１区	東伯郡琴浦町	SX9	木棺墓か	1.20+	3.90+	中期後葉	高尾・淺田編2006
梅田萱峯遺跡１区	東伯郡琴浦町	SX10	木棺墓	0.80	2.00	中期後葉	高尾・淺田編2006
梅田萱峯遺跡１区	東伯郡琴浦町	SX11	木棺墓	0.90	2.40	中期後葉	高尾・淺田編2006
梅田萱峯遺跡１区	東伯郡琴浦町	SX12	木棺墓	1.10	2.50	中期後葉	高尾・淺田編2006
梅田萱峯遺跡１区	東伯郡琴浦町	SX13	木棺墓	0.80	1.10	中期後葉	高尾・淺田編2006
梅田萱峯遺跡１区	東伯郡琴浦町	SX14	土壙墓	1.56	1.98	中期後葉	高尾・淺田編2006
梅田萱峯遺跡１区	東伯郡琴浦町	SX15	木棺墓	1.80	1.80	中期後葉	高尾・淺田編2006
梅田萱峯遺跡４区	東伯郡琴浦町	第１主体部	木棺墓（貼石墓）	2.54	2.62	中期後葉	湯村・濱本編2009
梅田萱峯遺跡４区	東伯郡琴浦町	第２主体部	土壙墓（貼石墓）	1.20	1.90	中期後葉	湯村・濱本編2009
長瀬高浜遺跡Ａ区	東伯郡湯梨浜町	SXY50	土壙墓	－	2.14	中期中葉	八峠編1997
長瀬高浜遺跡Ａ区	東伯郡湯梨浜町	SXY51	土壙墓	－	1.60	中期中葉	八峠編1997
長瀬高浜遺跡Ａ区	東伯郡湯梨浜町	SXY52	土壙墓	0.83	1.53	中期中葉	八峠編1997
長瀬高浜遺跡Ａ区	東伯郡湯梨浜町	SXY53	土壙墓	1.32	2.31	中期中葉	八峠編1997
長瀬高浜遺跡Ａ区	東伯郡湯梨浜町	SXY54	土壙墓	1.23	2.15+	中期中葉	八峠編1997
長瀬高浜遺跡Ａ区	東伯郡湯梨浜町	SXY55	木棺墓	1.85+	2.35+	中期中葉	八峠編1997
長瀬高浜遺跡Ａ区	東伯郡湯梨浜町	SXY56	土壙墓	1.48	1.40+	中期中葉	八峠編1997
長瀬高浜遺跡Ａ区	東伯郡湯梨浜町	SXY57	土壙墓	1.65	2.40+	中期中葉	八峠編1997
長瀬高浜遺跡Ａ区	東伯郡湯梨浜町	SXY58	標石墓	1.42	2.77	中期中葉	八峠編1997
長瀬高浜遺跡Ａ区	東伯郡湯梨浜町	SXY59	標石墓	1.85+	3.40+	中期中葉	八峠編1997
長瀬高浜遺跡Ａ区	東伯郡湯梨浜町	SXY60	土壙墓	1.50	2.20+	中期中葉	八峠編1997
長瀬高浜遺跡Ａ区	東伯郡湯梨浜町	SXY61	土壙墓	1.30	2.00	中期中葉	八峠編1997
長瀬高浜遺跡Ａ区	東伯郡湯梨浜町	SXY62	土壙墓	1.70+	3.20+	中期中葉	八峠編1997
長瀬高浜遺跡Ａ区	東伯郡湯梨浜町	SXY63	土壙墓	2.03	3.20	中期中葉	八峠編1997
長瀬高浜遺跡Ａ区	東伯郡湯梨浜町	SXY64	土壙墓	1.15	1.12+	中期中葉	八峠編1997
長瀬高浜遺跡Ａ区	東伯郡湯梨浜町	SXY65	土壙墓	1.99	2.74	中期中葉	八峠編1997
長瀬高浜遺跡Ａ区	東伯郡湯梨浜町	SXY66	土壙墓	1.81	2.61	中期中葉	八峠編1997
長瀬高浜遺跡Ａ区	東伯郡湯梨浜町	SXY67	標石墓	1.31	2.44	中期中葉	八峠編1997
長瀬高浜遺跡Ａ区	東伯郡湯梨浜町	SXY68	土壙墓	1.35	2.40	中期中葉	八峠編1997
長瀬高浜遺跡Ａ区	東伯郡湯梨浜町	SXY69	土壙墓	1.40	1.90+	中期中葉	八峠編1997
長瀬高浜遺跡Ａ区	東伯郡湯梨浜町	SXY70	土壙墓	1.23	2.55	中期中葉	八峠編1997
長瀬高浜遺跡Ａ区	東伯郡湯梨浜町	SXY71	土壙墓	1.61	2.37	中期中葉	八峠編1997
長瀬高浜遺跡Ａ区	東伯郡湯梨浜町	SXY72	標石墓	1.58	2.57	中期中葉	八峠編1997
長瀬高浜遺跡Ａ区	東伯郡湯梨浜町	SXY73	土壙墓	1.62	2.36	中期中葉	八峠編1997
長瀬高浜遺跡Ａ区	東伯郡湯梨浜町	SXY74	土壙墓	1.44	2.71	中期中葉	八峠編1997
長瀬高浜遺跡Ａ区	東伯郡湯梨浜町	SXY75	木棺墓	1.70+	3.00+	中期中葉	八峠編1997
長瀬高浜遺跡Ａ区	東伯郡湯梨浜町	SXY76	石蓋土壙墓	2.17	3.20	中期中葉	八峠編1997
長瀬高浜遺跡Ａ区	東伯郡湯梨浜町	SXY77	土壙墓	0.95	1.70	中期中葉	八峠編1997
長瀬高浜遺跡Ａ区	東伯郡湯梨浜町	SXY78	標石墓	1.50	2.77	中期中葉	八峠編1997
長瀬高浜遺跡Ａ区	東伯郡湯梨浜町	SXY79	土壙墓	1.18	1.45	中期中葉	八峠編1997
長瀬高浜遺跡Ａ区	東伯郡湯梨浜町	SXY80	土壙墓	0.98	1.22	中期中葉	八峠編1997
長瀬高浜遺跡Ａ区	東伯郡湯梨浜町	SXY81	土壙墓	1.60	2.30	中期中葉	八峠編1997
長瀬高浜遺跡Ａ区	東伯郡湯梨浜町	SXY82	土壙墓	1.11	1.39	中期中葉	八峠編1997
長瀬高浜遺跡Ａ区	東伯郡湯梨浜町	SXY83	土壙墓	1.35	1.97	中期中葉	八峠編1997
長瀬高浜遺跡Ａ区	東伯郡湯梨浜町	SXY84	土壙墓	1.43	2.69	中期中葉	八峠編1997
長瀬高浜遺跡Ａ区	東伯郡湯梨浜町	SXY85	土壙墓	1.38	1.85	中期中葉	八峠編1997
長瀬高浜遺跡Ａ区	東伯郡湯梨浜町	SXY86	石棺墓	0.93	0.85+	中期中葉	八峠編1997
長瀬高浜遺跡Ａ区	東伯郡湯梨浜町	SXY87	土壙墓	1.55	2.60	中期中葉	八峠編1997
長瀬高浜遺跡Ａ区	東伯郡湯梨浜町	SXY88	土壙墓	1.61	2.20	中期中葉	八峠編1997
長瀬高浜遺跡Ａ区	東伯郡湯梨浜町	SXY89	土壙墓	1.40	2.00	中期中葉	八峠編1997

長瀬高浜遺跡Ａ区	東伯郡湯梨浜町	SXY90	標石墓	1.42	2.14	中期中葉	八峠編1997
長瀬高浜遺跡Ａ区	東伯郡湯梨浜町	SXY91	土壙墓	1.40	2.28	中期中葉	八峠編1997
長瀬高浜遺跡Ａ区	東伯郡湯梨浜町	SXY92	土壙墓	0.84	1.08	中期中葉	八峠編1997
長瀬高浜遺跡Ａ区	東伯郡湯梨浜町	SXY93	土壙墓	1.41	2.00	中期中葉	八峠編1997
長瀬高浜遺跡Ａ区	東伯郡湯梨浜町	SXY94	土壙墓	1.21	1.77	中期中葉	八峠編1997
長瀬高浜遺跡Ａ区	東伯郡湯梨浜町	SXY95	土壙墓	0.70+	2.20+	中期中葉	八峠編1997
長瀬高浜遺跡Ａ区	東伯郡湯梨浜町	SXY96	土壙墓	1.37	2.03	中期中葉	八峠編1997
宮内第１遺跡	東伯郡東郷町	第１主体部	土壙墓か （２号墳丘墓）	1.25	4.30	後期前半前後	原田編1996
宮内第１遺跡	東伯郡東郷町	第２主体部	土壙墓か （２号墳丘墓）	1.80	2.40+	後期前半前後	原田編1996
倉吉・福庭遺跡	倉吉市	第１号土壙	土壙墓	1.50	1.50	後期前半	藤田組編1970
倉吉・福庭遺跡	倉吉市	第３号土壙	土壙墓	1.40	1.40	後期前半	藤田組編1970
倉吉・福庭遺跡	倉吉市	箱形棺	箱形石棺墓	－	－	後期前半か	藤田組編1970
上米積遺跡群	倉吉市	２号主体部	１号墳丘墓周辺	0.90	2.50	後期前葉～ 中葉	真田・森下編1981
上米積遺跡群	倉吉市	第３号土壙墓	１号墳丘墓周辺	0.83	1.45	後期前葉～ 中葉	真田・森下編1981
上米積遺跡群	倉吉市	第４号土壙墓	１号墳丘墓周辺	0.43	0.93	後期前葉～ 中葉	真田・森下編1981
上米積遺跡群	倉吉市	第５号土壙墓	１号墳丘墓周辺	0.40	1.02	後期前葉～ 中葉	真田・森下編1981
上米積遺跡群	倉吉市	第６号土壙木棺墓	１号墳丘墓周辺	0.35	0.72	後期前葉～ 中葉	真田・森下編1981
上米積遺跡群	倉吉市	第７号土壙木棺墓	１号墳丘墓周辺	0.40	0.95	後期前葉～ 中葉	真田・森下編1981
上米積遺跡群	倉吉市	第８号土壙木棺墓	１号墳丘墓周辺	0.70	1.39	後期前葉～ 中葉	真田・森下編1981
上米積遺跡群	倉吉市	第９号土壙木棺墓	１号墳丘墓周辺	0.49	0.92	後期前葉～ 中葉	真田・森下編1981
上米積遺跡群	倉吉市	第10号土壙木棺墓	１号墳丘墓周辺	1.03	1.03	後期前葉～ 中葉	真田・森下編1981
上米積遺跡群	倉吉市	第11号土壙墓	１号墳丘墓周辺	0.43	0.80	後期前葉～ 中葉	真田・森下編1981
上米積遺跡群	倉吉市	第12号土壙木棺墓	１号墳丘墓周辺	0.49	0.90	後期前葉～ 中葉	真田・森下編1981
上米積遺跡群	倉吉市	第13号土壙墓	１号墳丘墓周辺	0.36	0.90	後期前葉～ 中葉	真田・森下編1981
上米積遺跡群	倉吉市	第14号土壙木棺墓	１号墳丘墓周辺	0.35	0.70	後期前葉～ 中葉	真田・森下編1981
上米積遺跡群	倉吉市	第４号土壙木棺墓	土壙木棺墓	0.53	1.16	後期前葉～ 中葉	真田・森下編1981
上米積遺跡群	倉吉市	第５号土壙墓	土壙墓	0.64	1.41	後期前葉～ 中葉	真田・森下編1981
上米積遺跡群	倉吉市	第６号土壙墓	土壙墓	0.43	0.90	後期前葉～ 中葉	真田・森下編1981
上米積遺跡群	倉吉市	第７号土壙墓	土壙墓	1.30	2.00	後期前葉～ 中葉	真田・森下編1981
上米積遺跡群	倉吉市	第８号土壙木棺墓	土壙木棺墓	0.90	2.11	後期前葉～ 中葉	真田・森下編1981
上米積遺跡群	倉吉市	第９号土壙墓	土壙墓	0.86	1.50	後期前葉～ 中葉	真田・森下編1981
上米積遺跡群	倉吉市	第12号土壙墓	土壙墓	0.75	2.18	後期前葉～ 中葉	真田・森下編1981
上米積遺跡群	倉吉市	第13号土壙木棺墓	土壙木棺墓	0.90	2.22	後期前葉～ 中葉	真田・森下編1981
上米積遺跡群	倉吉市	第14号土壙木棺墓	土壙木棺墓	0.39	1.03	後期前葉～ 中葉	真田・森下編1981
上米積遺跡群	倉吉市	第15号土壙墓	土壙墓	0.65	1.87	後期前葉～ 中葉	真田・森下編1981
上米積遺跡群	倉吉市	１号主体部木棺墓	１号墳丘墓周辺 (四隅突出墓)	1.70	3.70+	後期前葉～ 中葉	真田・森下編1981
上米積遺跡群	倉吉市	第１号土壙墓	土壙墓群	－	－	後期前葉～ 中葉	真田・森下編1981
上米積遺跡群	倉吉市	第２号土壙墓	土壙墓群	－	－	後期前葉～ 中葉	真田・森下編1981
上米積遺跡群	倉吉市	第３号土壙墓	土壙墓群	－	－	後期前葉～ 中葉	真田・森下編1981
上米積遺跡群	倉吉市	第10号土壙墓	土壙墓群	－	0.82	後期前葉～ 中葉	真田・森下編1981

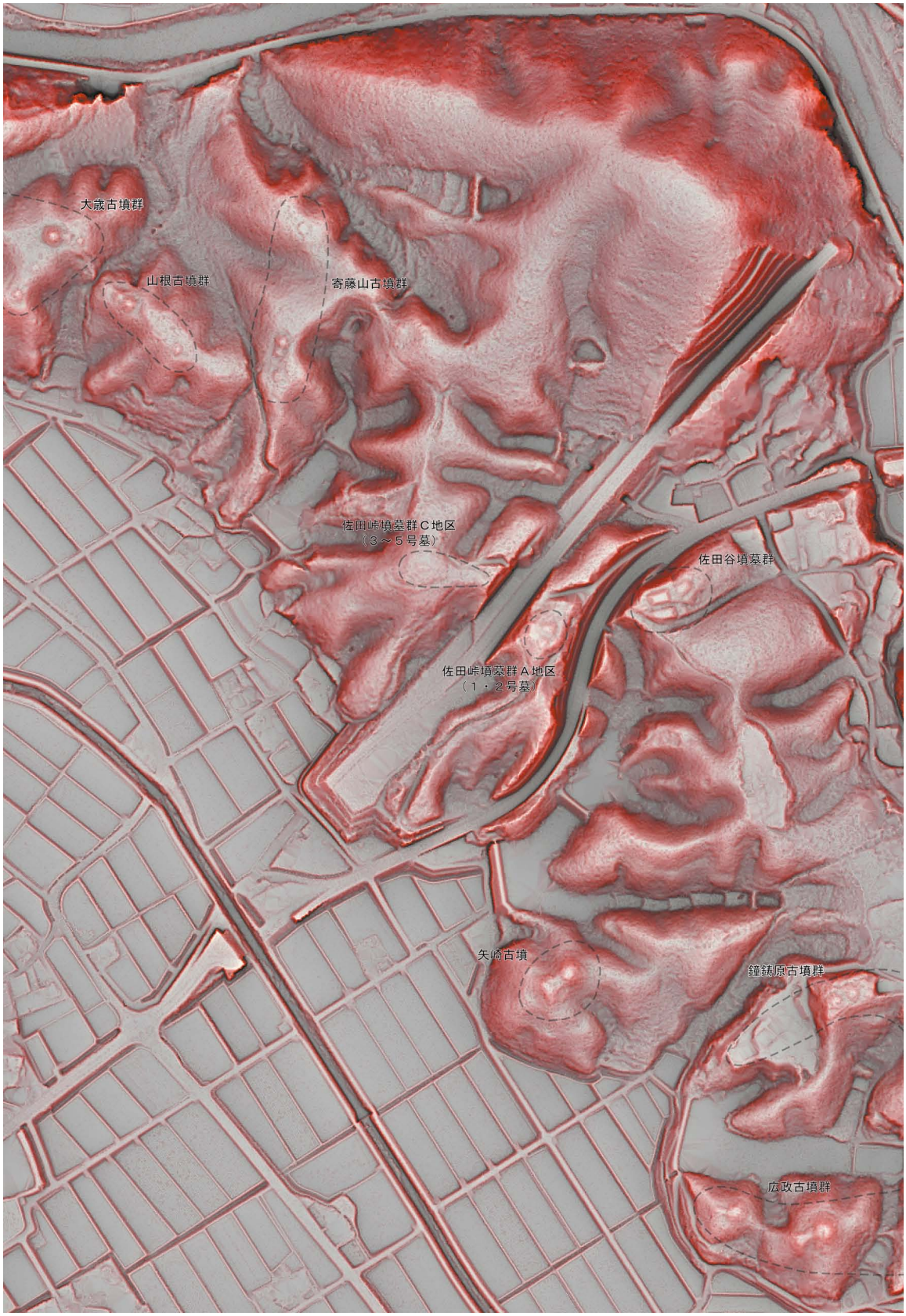
付表５　中期後半から後期前半の墓壙一覧（山口県）

遺跡名	所在地	遺構名	遺構形態	墓壙規模（m）		時　期	文　献
				幅	長さ		
田ノ浦遺跡	熊毛郡 上関町	ST01	石棺墓	－	－	中期初頭か	石井編2007
明地遺跡	熊毛郡 田布施町	ST07	石蓋土壙墓か	1.29	2.67	中期か	土井編1993
明地遺跡	熊毛郡 田布施町	ST10	土壙墓か	1.10	2.10	中期か	土井編1993
明地遺跡	熊毛郡 田布施町	ST08	石蓋土壙墓か	1.00	2.16	中期か	土井編1993
明地遺跡	熊毛郡 田布施町	ST09	石棺墓	0.69	1.26	中期か	土井編1993
明地遺跡	熊毛郡 田布施町	ST12	石棺墓か	1.30	－	中期か	土井編1993
明地遺跡	熊毛郡 田布施町	SK14	土壙墓か	－	－	中期か	土井編1993
明地遺跡	熊毛郡 田布施町	SK16	土壙墓か	－	－	中期か	土井編1993
丸山遺跡	山口市	Ａ地区 第１号壺棺墓	土器棺墓	0.75	1.50	中期後半	小田編1983
丸山遺跡	山口市	Ｂ地区 第１号箱形石棺墓	石棺墓	0.60	1.21	中期後半	小田編1983
丸山遺跡	山口市	Ｂ地区 第２号箱形石棺墓	石棺墓	0.77	2.10	中期後半	小田編1983
丸山遺跡	山口市	Ｂ地区 第３号箱形石棺墓	石棺墓	1.02	2.65	中期後半	小田編1983
丸山遺跡	山口市	Ｂ地区 第４号箱形石棺墓	石棺墓	0.56	1.97	中期後半	小田編1983
丸山遺跡	山口市	Ｂ地区 第５号箱形石棺墓	石棺墓	0.95	2.10	中期後半	小田編1983
丸山遺跡	山口市	第１号土坑	木棺墓	0.70	1.40	中期後半	小田編1983
朝田墳墓群第Ⅳ区	山口市	第６号箱形石棺墓	石棺墓	0.43	1.13	後期前半か	山口県文化課編1978
朝田墳墓群第Ⅳ区	山口市	第８号箱形石棺墓	石棺墓	0.86	2.24	後期前半か	山口県文化課編1978
朝田墳墓群第Ⅳ区	山口市	第９号箱形石棺墓	石棺墓	0.84	1.78	後期前半か	山口県文化課編1978
朝田墳墓群第Ⅳ区	山口市	第11号箱形石棺墓	石棺墓	0.53	1.87	後期前半か	山口県文化課編1978
朝田墳墓群第Ⅳ区	山口市	第12号箱形石棺墓	石棺墓	0.75	1.35	後期前半か	山口県文化課編1978
朝田墳墓群第Ⅳ区	山口市	第13号箱形石棺墓	石棺墓	0.68	1.90	後期前半か	山口県文化課編1978
朝田墳墓群第Ⅳ区	山口市	第18号箱形石棺墓	石棺墓	0.72	2.22	後期前半か	山口県文化課編1978
朝田墳墓群第Ⅳ区	山口市	第23号箱形石棺墓	石棺墓	0.72	2.06	後期前半か	山口県文化課編1978
朝田墳墓群第Ⅳ区	山口市	第20号箱形石棺墓	石棺墓	－	－	後期前半か	山口県文化課編1978
朝田墳墓群第Ⅳ区	山口市	第24号箱形石棺墓	石棺墓	0.65	－	後期前半か	山口県文化課編1978
朝田墳墓群第Ⅴ区	山口市	第１号箱形石棺墓	石棺墓	0.79	2.25	中期中葉～後半	山口県文化課編1986
朝田墳墓群第Ⅴ区	山口市	第２号箱形石棺墓	石棺墓	0.85	2.07	中期後半か	山口県文化課編1986
朝田墳墓群第Ⅴ区	山口市	第３号箱形石棺墓	石棺墓	－	－	中期中葉～後半	山口県文化課編1986
朝田墳墓群第Ⅴ区	山口市	第４号箱形石棺墓	石棺墓	0.65	－	中期中葉～後半	山口県文化課編1986
朝田墳墓群第Ⅴ区	山口市	第５号箱形石棺墓	石棺墓	0.79	1.90+	中期中葉～後半	山口県文化課編1986
朝田墳墓群第Ⅴ区	山口市	第６号箱形石棺墓	石棺墓	0.79	1.95+	中期中葉～後半	山口県文化課編1986
朝田墳墓群第Ⅴ区	山口市	第７号箱形石棺墓	石棺墓	0.90	1.96	中期中葉～後半	山口県文化課編1986
朝田墳墓群第Ⅴ区	山口市	第８号箱形石棺墓	石棺墓	－	2.22	中期中葉～後半	山口県文化課編1986
朝田墳墓群第Ⅴ区	山口市	第９号箱形石棺墓	石棺墓	－	1.84	中期中葉～後半	山口県文化課編1986
朝田墳墓群第Ⅴ区	山口市	第10号箱形石棺墓	石棺墓	0.57	0.90	中期中葉～後半	山口県文化課編1986
朝田墳墓群第Ⅴ区	山口市	第11号箱形石棺墓	石棺墓	0.48	0.98	中期中葉～後半	山口県文化課編1986
朝田墳墓群第Ⅴ区	山口市	第12号箱形石棺墓	石棺墓	0.91	2.14	中期中葉～後半	山口県文化課編1986
朝田墳墓群第Ⅴ区	山口市	第13号箱形石棺墓	石棺墓	0.52	1.81	中期中葉～後半	山口県文化課編1986
朝田墳墓群第Ⅴ区	山口市	第14号箱形石棺墓	石棺墓	0.58	1.14	中期中葉～後半	山口県文化課編1986
朝田墳墓群第Ⅴ区	山口市	第15号箱形石棺墓	石棺墓	0.52	0.85	中期中葉～後半	山口県文化課編1986
朝田墳墓群第Ⅴ区	山口市	第16号箱形石棺墓	石棺墓	0.62	2.06	中期中葉～後半	山口県文化課編1986
朝田墳墓群第Ⅴ区	山口市	第17号箱形石棺墓	石棺墓	0.82	2.22	中期中葉～後半	山口県文化課編1986
朝田墳墓群第Ⅴ区	山口市	第18号箱形石棺墓	石棺墓	0.73	2.26	中期中葉～後半	山口県文化課編1986
朝田墳墓群第Ⅴ区	山口市	第19号箱形石棺墓	石棺墓	－	－	中期中葉～後半	山口県文化課編1986
朝田墳墓群第Ⅴ区	山口市	第20号箱形石棺墓	石棺墓	0.55	1.61	中期中葉～後半	山口県文化課編1986
朝田墳墓群第Ⅴ区	山口市	第21号箱形石棺墓	石棺墓	0.63	－	中期中葉～後半	山口県文化課編1986
朝田墳墓群第Ⅴ区	山口市	第22号箱形石棺墓	石棺墓	0.92	－	中期中葉～後半	山口県文化課編1986
朝田墳墓群第Ⅴ区	山口市	第23号箱形石棺墓	石棺墓	1.05	1.55	中期中葉～後半	山口県文化課編1986
朝田墳墓群第Ⅴ区	山口市	第24号箱形石棺墓	石棺墓	0.47	1.28	中期中葉～後半	山口県文化課編1986
朝田墳墓群第Ⅴ区	山口市	第25号箱形石棺墓	石棺墓	0.62	2.07	中期中葉～後半	山口県文化課編1986
朝田墳墓群第Ⅴ区	山口市	第26号箱形石棺墓	石棺墓	1.17	－	中期中葉～後半	山口県文化課編1986
朝田墳墓群第Ⅴ区	山口市	第27号箱形石棺墓	石棺墓	0.34	0.99	中期中葉～後半	山口県文化課編1986
朝田墳墓群第Ⅴ区	山口市	第28号箱形石棺墓	石棺墓	0.63	－	中期中葉～後半	山口県文化課編1986
朝田墳墓群第Ⅴ区	山口市	第29号箱形石棺墓	石棺墓	0.64	1.26+	中期中葉～後半	山口県文化課編1986

朝田墳墓群第Ⅴ区	山口市	第30号箱形石棺墓	石棺墓	0.58	1.06	中期中葉～後半	山口県文化課編1986
朝田墳墓群第Ⅴ区	山口市	第31号箱形石棺墓	石棺墓	0.91	2.48	中期中葉～後半	山口県文化課編1986
朝田墳墓群第Ⅴ区	山口市	第32号箱形石棺墓	石棺墓	0.75	1.05	中期中葉～後半	山口県文化課編1986
朝田墳墓群第Ⅴ区	山口市	第33号箱形石棺墓	石棺墓	－	2.33	中期中葉～後半	山口県文化課編1986
朝田墳墓群第Ⅴ区	山口市	第34号箱形石棺墓	石棺墓	－	2.22	中期中葉～後半	山口県文化課編1986
朝田墳墓群第Ⅴ区	山口市	第35号箱形石棺墓	石棺墓	0.81	－	中期中葉～後半	山口県文化課編1986
朝田墳墓群第Ⅴ区	山口市	第36号箱形石棺墓	石棺墓	1.05	2.30	中期中葉～後半	山口県文化課編1986
朝田墳墓群第Ⅴ区	山口市	第37号箱形石棺墓	石棺墓	－	2.04	中期中葉～後半	山口県文化課編1986
朝田墳墓群第Ⅴ区	山口市	第38号箱形石棺墓	石棺墓	－	－	中期中葉～後半	山口県文化課編1986
朝田墳墓群第Ⅴ区	山口市	第39号箱形石棺墓	石棺墓	0.94	2.10	中期中葉～後半	山口県文化課編1986
朝田墳墓群第Ⅴ区	山口市	第40号箱形石棺墓	石棺墓	0.87	2.04	中期中葉～後半	山口県文化課編1986
朝田墳墓群第Ⅴ区	山口市	第41号箱形石棺墓	石棺墓	0.74	2.44+	中期中葉～後半	山口県文化課編1986
朝田墳墓群第Ⅴ区	山口市	第42号箱形石棺墓	石棺墓	－	－	中期中葉～後半	山口県文化課編1986
朝田墳墓群第Ⅴ区	山口市	第43号箱形石棺墓	石棺墓	0.97	2.04	中期中葉～後半	山口県文化課編1986
朝田墳墓群第Ⅴ区	山口市	第44号箱形石棺墓	石棺墓	0.60	2.29	中期中葉～後半	山口県文化課編1986
朝田墳墓群第Ⅴ区	山口市	第45号箱形石棺墓	石棺墓	0.90	2.47	中期中葉～後半	山口県文化課編1986
朝田墳墓群第Ⅴ区	山口市	第46号石蓋土壙墓	石蓋土壙墓	0.28	0.99	中期中葉～後半	山口県文化課編1986
朝田墳墓群第Ⅴ区	山口市	第47号石蓋土壙墓	石蓋土壙墓	0.32	1.39	中期中葉～後半	山口県文化課編1986
朝田墳墓群第Ⅴ区	山口市	第48号石蓋土壙墓	石蓋土壙墓	0.45	0.84	中期中葉～後半	山口県文化課編1986
朝田墳墓群第Ⅴ区	山口市	第49号石蓋土壙墓	石蓋土壙墓	0.97	－	中期中葉～後半	山口県文化課編1986
下村遺跡Ａ地区	美祢市	ST01	木棺墓	1.00	2.27	中期初頭	小南編2007
下右田遺跡	防府市	ST701	土器蓋土壙墓	0.80	1.10	中期末葉～後期初頭	原田編1999
坂ノ上遺跡	下関市		箱形石棺墓	－	－	不明	阿字雄ほか編1988
伊倉遺跡	下関市	LG001	合蓋壺棺墓	0.77	1.10	前期末葉～中期初頭	伊藤編2000
伊倉遺跡	下関市	LG002	石蓋土壙墓	0.75	1.20	前期末葉～中期初頭	伊藤編2000
伊倉遺跡	下関市	LG003	石棺墓	－	－	中期	伊藤編2000
伊倉遺跡	下関市	LG004	石棺墓	－	－	中期	伊藤編2000
武久浜墳墓群	下関市	ST-1	箱形石棺墓	－	－	中期後半	小南編2002
武久浜墳墓群	下関市	ST-2	箱形石棺墓	－	－	中期後半	小南編2002
武久浜墳墓群	下関市	ST-3	箱形石棺墓	－	－	中期後半	小南編2002
武久浜墳墓群	下関市	ST-4	箱形石棺墓	－	－	中期後半	小南編2002
武久浜墳墓群	下関市	ST-5	箱形石棺墓	－	－	中期後半	小南編2002
武久浜墳墓群	下関市	ST-6	箱形石棺墓	－	－	中期後半	小南編2002
武久浜墳墓群	下関市	ST-7	箱形石棺墓	－	－	中期後半	小南編2002
武久浜墳墓群	下関市	ST-8	土壙墓	1.00	1.80	中期後半	小南編2002
武久浜墳墓群	下関市	ST-9	箱形石棺墓	－	－	中期後半	小南編2002
武久浜墳墓群	下関市	ST-10	石囲い墓	－	－	中期後半	小南編2002
武久浜墳墓群	下関市	ST-11	土壙墓	0.40	1.45	中期後半	小南編2002
武久浜墳墓群	下関市	ST-12	箱形石棺墓	－	－	中期後半	小南編2002
武久浜墳墓群	下関市	ST-13	石蓋土壙墓	0.55	1.00	中期後半	小南編2002
武久浜墳墓群	下関市	ST-14	箱形石棺墓	－	－	中期後半	小南編2002
武久浜墳墓群	下関市	ST-15	箱形石棺墓	－	－	中期後半	小南編2002
武久浜墳墓群	下関市	ST-16	土壙墓	0.90	2.05	中期後半	小南編2002
武久浜墳墓群	下関市	ST-17	土壙墓	0.60	0.70	中期後半	小南編2002
土井ヶ浜遺跡	下関市	ST805	標石墓	1.05	2.03	中期中葉～後半	乗安編1984
土井ヶ浜遺跡	下関市	ST802	標石墓	－	－	中期中葉～後半	乗安編1984
土井ヶ浜遺跡	下関市	ST807	標石墓	0.63	1.06	中期中葉～後半	乗安編1984
土井ヶ浜遺跡	下関市	ST801	土壙墓	0.95+	1.15+	中期中葉～後半	乗安編1984
土井ヶ浜遺跡	下関市	ST806A	土壙墓	1.50+	1.50+	中期中葉～後半	乗安編1984
土井ヶ浜遺跡	下関市	ST704	土壙墓	0.95	1.95	中期中葉～後半	乗安編1983
土井ヶ浜遺跡	下関市	ST1108	土壙墓	1.10	2.60	中期中葉～後半	乗安編1989
土井ヶ浜遺跡	下関市	ST1110	土壙墓	0.75	1.45+	中期中葉～後半	乗安編1989
土井ヶ浜遺跡	下関市	ST1111	土壙墓	1.32	2.11	中期中葉～後半	乗安編1989
土井ヶ浜遺跡	下関市	ST1113	土壙墓	1.03	0.66+	中期中葉～後半	乗安編1989
土井ヶ浜遺跡	下関市	ST1114	土壙墓	0.87	1.03+	中期中葉～後半	乗安編1989
土井ヶ浜遺跡	下関市	ST1115	土壙墓	1.10	1.82+	中期中葉～後半	乗安編1989
土井ヶ浜遺跡	下関市	ST1116	土壙墓	1.30	2.35	中期中葉～後半	乗安編1989
土井ヶ浜遺跡	下関市	ST1118	土壙墓	0.98	1.95+	中期中葉～後半	乗安編1989
土井ヶ浜遺跡	下関市	ST1119	土壙墓	0.78	1.44	中期中葉～後半	乗安編1989
土井ヶ浜遺跡	下関市	ST1120	土壙墓	1.55	1.55+	中期中葉～後半	乗安編1989
土井ヶ浜遺跡	下関市	ST1604	土壙墓	0.90	1.80	中期後半	山田編1998

写 真 図 版

図版第１



佐田谷・佐田峠墳墓群周辺の地図
（広島県撮影の航空レーザー測量データ（2017年撮影）を着色立体図化）

図版第２

(1) 山根屋遺跡出土脚付鉢

(2) 佐久良遺跡出土脚付鉢

(1) 西東子遺跡出土脚付鉢

(2) 塩町遺跡出土脚付鉢

図版第４

(1) 塩町遺跡出土脚付鉢

(2) 矢原遺跡出土脚付鉢

(1) 殿山38号墓出土脚付鉢

(2) 御領遺跡出土脚付鉢

図版第６

(1) 戸宇大仙山遺跡出土脚付鉢

(2) 佐田峠３号墓出土脚付鉢

(1) 三吉密ケ埆山遺跡出土脚付鉢

(2) 国竹遺跡出土脚付鉢

図版第８

(1) 梅田萱峯遺跡出土脚付鉢

(2) 佐田谷１号墓出土脚付鉢

(1) 佐田谷３号墓出土脚付鉢

(2) 佐田谷３号墓出土脚付鉢

図版第10

(1) 横田遺跡出土脚付鉢

(2) 西江遺跡出土脚付鉢

(1) 御領遺跡出土脚付鉢文様細部

(2) 佐田峠３号墓出土脚付鉢文様細部

(3) 佐田峠３号墓出土脚付鉢文様細部

図版第12

(1) 三吉密ケ垰山遺跡出土脚付鉢文様細部

(2) 野田畝遺跡出土脚付鉢文様細部

(3) 野田畝遺跡出土脚付鉢文様細部

報　告　書　抄　録

ふりがな	さただに さただおふんぼぐん はっくつちょうさほうこくしょ
書名	佐田谷・佐田峠墳墓群発掘調査報告書
巻次	研究編
シリーズ名	広島大学大学院文学研究科考古学研究室報告書第４冊
シリーズ名	庄原市教育委員会発掘調査報告書30
編集者名	野島　永・村田　晋
執筆者名	野島　永・村田　晋・今福拓哉・真木大空・今西隆行
編集機関	広島大学大学院文学研究科 考古学研究室
所在地	〒739-8522　広島県東広島市鏡山一丁目２番３号　TEL (082)424-6663 広島大学大学院文学研究科
発行年月日	西暦2018年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
さただに・さた 佐田谷・佐田 だおふんぼぐん 峠墳墓群	ひろしまけんしょうばらし 広島県庄原市 みやうちちょうさただお 宮内町佐田峠ほか	34210	489 ～ 491	34°51′47″	133°02′26″	20080804 ～ 20120917	287	保存目的 学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
佐田谷・佐田 峠墳墓群	墳墓	弥生	墳墓・埋葬施設	弥生土器・鉄鏃ほか	初期四隅突出型墳丘墓 方形台状墓 方形周溝墓

2018年３月31日発行

佐田谷・佐田峠墳墓群発掘調査報告書 研究編

広島大学大学院文学研究科考古学研究室報告書　第４冊
庄原市教育委員会発掘調査報告書　　30

編　　集　広島大学大学院文学研究科考古学研究室
野島　永・村田　晋
〒739-8522　広島県東広島市鏡山一丁目２番３号
TEL・FAX (082)424-6663

発　　行　庄原市教育委員会
〒727-8501　広島県庄原市中本町一丁目10番１号
TEL・FAX (0824)73-1189

印　　刷　平和印刷株式会社
〒727-0014　広島県庄原市板橋町324-7
TEL (0824)72-1145